
Wei? und schw?rzt

屋気楼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

W e i ? u n d s c h w ? r z t

【Nコード】

N 6 2 2 7 R

【作者名】

蜃気楼

【あらすじ】

名前は緋狩影。分けると光と影。この世界では神が存在し、神殺しが存在する。穢れし道化の力を所有した彼はどのような人生を送るのか？光を求めるか、それとも闇を求めるか……
内容改定終了しました。

一話 真実を知るために（前書き）

編集の理由：主人公が少し敏感すぎるので少々鈍感にしました。勝手に改訂してすみません。

一話 真実を知るために

-ギリシヤ某所-

「もう行くのか？」

銀髪の少女が問いかける。

「ええ、此処にも随分いましたし。それに、いつまでも仕事をサボっているわけにはいきませんし。お呼び出しが来ましたしね」

銀髪に近い白髪の少年はそう答える。左目は長く伸びた前髪で隠されていた。

二人は一見すると兄妹に見えなくはないが、実際の関係は大幅に異なる。

「そうか・・・できればあなたとは一生戦いたくは無いなものだ。影」

「僕もですよアテナ。幾ら僕が「神殺し」だといつてもしばらくの間寝食を共にした相手と殺し合いたくはありません」

少女はアテナと呼ばれた。偽名でもない本名。つまりその少女は闘争と智慧の女神そのものだった。

「また会えるか？」

アテナは少し寂しそうに問いかける。少年は薄く笑い。

「ええ、きっと。次は敵では無いことを願ってますよ」

少年はアテナに背を向け歩き出した。行く先は二つ。

白髪の少年の名は緋狩影^{ひかりえい}。その正体は「神殺し」つまり『魔王』カ
ンピオーネである。

「神殺し」つまり、カンピオーネとは神々の権能を篡奪した者の総称である。その恐ろしい力から、魔術師たちからは『王』と呼ばれ、畏怖される。

それほど、人間が神殺しを成功するなどありえないことなのだ。魔術師でさえ、『まつろわぬ神』を殺せる可能性は皆無に近い。

が、最近七人目の『王』となった少年は恐ろしく、普通な少年だった。

魔術師でもないし、魔術と関わったこともない。そんな普通の人間が何故、神殺しに成功したのか？

『番号無し』の神殺しである、影もその場にいたが戦闘はすでに終了していたため、よくはわかっていない。

その場には自分と、その少年と、知り合いの魔術師がいた。

知り合いの魔術師は、確かに天才とまで言われたほど強いが、『まつろわぬ神』を殺せるほどの実力は有していない。だとしたら

「あの人が何かを貸し与えたのか？」

知り合いである魔女の姿を思い浮かべた。その少年が、神殺しとなった日にはその魔女のところへいたのだが、彼らとあの人が何を話していたかなどは全くわからなかった。興味もなかった。

「はあっ、しかたない。もう一度、あの人のところへ行きますか？」

…」

本当はローマへ行かなければいけないが、まだ時間はあったので、

あの人が住む島。サルデーニャへと向かった。

?
?
?
?

不思議なもので国が違えば空の色合いも微妙に変わる。

そう思う少年。草薙護堂が空港の窓から見上げる空は曖昧な奥深さを持つ日本の青空では無い。もっと突きぬけるように高い、呆れるほど青々としたラテンの国の空だ。

目の前に視線を向けてみれば、国籍、人種共に様々な人が行きかっている。日本ではあまりお目にかかれない光景だった

　　フィウミチーノ空港。別名レオナルド・ダ・ヴィンチ空港ともいう。イタリアの首都ローマにある国際空港だった。修学旅行で来ているわけではないので、この場に居る日本の高校生はおそらく護堂一人だけだろう。

「あと半年は絶対に、来ないつもりだったのになあ……」

せわしなく人が行き来するターミナルで護堂は遠い目をしながら呟いた。十二時間以上飛行機に揺られていたため凄くだるそうだった。

「いつものことだけど、あいつは本当に人の都合を考えないよな」

護堂は人混みの中から知人の顔を探す。目当ての人物はとにかく目立つ。なぜか王冠のように思えてしまう鮮やかな金髪。護堂が知る限りどんな女性よりも華麗に映える美貌。周囲の注目を集めるのが当然だと言わんばかりの横柄さ

しかし、彼女 エリカ・ブランデリッツは一向に現れない。

「はあ、こんなときに影^{えい}さんが居てくれたら……」

不安になった語堂はある人物を思い浮かべた。名前は緋^{ひかりえい}狩影。

知り合ったのは最近だが、同じ学校の先輩であり、噂は知り合う前から知っていた。彼は頭がいいのだ。それも世界に誇れるほど。本気を出せば高校のテスト問題なんて余裕だろうし、学年一位なんて簡単すぎるにもほどがあるだろう。しかし、自らの放浪癖のせいで単位はギリギリ。一年浪人しているため、今も二年生だ。不良ではないが不良生徒と言われてもおかしくない。

そんな男だが、異国に一人で心細い語堂には最も居てほしい存在だ。

そもそもこんな異国に一人でいる原因は一通の電話だった

『聞いて。いま、護堂がわたしのところに来てくれると、凄く都合がいいの。ということだから明日の朝の便でこっちへ来なさい。迎えに行つてあげる』

開口一番、この電話をかけてきた、エリカ・ブランデリツは言い草

である。

五月も終りに近い、週末の午後

携帯電話の着信時間は金曜の午後四時過ぎだった

「そこで、なぜということだから」なんて接続詞が出てくる？お前の都合に合わせてやる義理は、俺にはないぞ。他を当たってくれ」

いきなり何を言うか、この女は……。

ちよつと高校の帰り支度をしていた護堂は、邪険にあしらった。

「わたしがあなたに会いたくなつたんだから、それに答えるのは当然でしょ？護堂だって、わたしが恋しくてたまらないはずだし、いいプランじゃない？それに影は絶対に応えてくれるわよ」

「べつに恋しくなんてない。それに俺の感情を捏造するのはやめろ。それに、影さんと比べるな。大体、前に会ったのは二週間前だぞ？東京とミラノで暮らしてる二人が、こんなペースで会っているなんて少しはおかしいと思え」

なるべく淡々と訴える。

この女の傍若無人振りはぶりは恐ろしい。影はうまいことを言っただけで軽くあしらうが、語堂は未だにあちらのペースに巻き込まれないようにすることしかできない。恐るべき天才……

『大丈夫よ。ついこの間会ったけど、影もこつちへ来るから』

「ああそうですか・・・って！影さんと連絡ついたのかよ！」

影は基本的に何処へ行くかなんて言わないし、携帯電話の電源もほとんど切っているため連絡がとれる方が異常なのだ。

エリカは影と語堂に会う少し前から知り合いらしいので、直感などでわかるのだろうか……？

『まあ、影との付き合いは結構長いし、大体の感覚で繋がるかわかるよ。今回はギリシャに行ったって言ってたわ』

「ギリシャって……相変わらず規格外な人だな……」

『それよりも明日の段取りの事なんだけど』

話をいきなり変える。これもエリカにとっては当たり前だ。さすがは年齢〓唯我独尊歴の女である。こちらの話などまったく聞かない。

「やめろ、エリカ。その話はこちらまでだ。きちんと筋を通して互いの予定をすり合わせて会おうって話なら聞いてやる。そのつもりがないなら、電話を切るぞ」

『さすがは護堂ね。わたしのデートの誘いに飛びつかないのは、きっとあなたぐらいよ。……影は受けてくれるだろうけど、飛びつきはしないし』

笑みを含んだ声でエリカが言う。

恐らくこの女は分かかってやっている。これだからかなり性質が悪

い・・・まあ、この女の悪魔っぷりを知っていたとしても、血迷う男は大勢いそうだが。

『なら、改めて言うわ。草薙護堂、すぐにイタリアへ来てちょうだい。あなたと影の手を借りる必要があるの。私だけの力じゃ解決が難しい案件だから、真剣に考えて。このエリカ・ブランデッリ、我が誇りにかけて嘘は言っていないわ』

いきなり真面目な声で言ってきた。

しかも『誇り』の一言まで出た。これをかけた以上、絶対に嘘ではない。エリカ・ブランデッリにとって、誇りは何にも勝る最優先事項なのだ。

仕方ない

護堂は溜息をついた。エリカは確かにワガママだし、人の都合を無視する。勝手気ままなで性格も悪いヤツだ。だが、何度も自分の命を救ってくれた恩人でもあるのだ。こうまで言われて、断るわけにはいかない

「……………わかったよ。言う通りにしてやるから、迎えに来い」

『うれしい解答ね。あなたの騎士道精神に祝福がありますように』

「で、俺は何をすればいいんだ？わかってるとは思うけど、影さんとデートの予定やいかがわしいことの手助けなんかしないからな」

『デートのスケジュールなら自分で考えた方がマシだわ。それに別にいかがわしいことなんてしないわよ……………あなたと影は王として振る舞い、王として戦うだけでいいわ。あとは私がうまく仕切って見せるから。……………でも、切り札を使わずに済んだのは、良かったわ。』

あまり後味がいいものでもないしねー』

「切り札？」

いきなり剣呑な発言をするエリカに護堂は驚いた。

『ええ。やっぱり、護堂には私のおねだりを聞く義務があると思うの。その辺りのことどう思う？』

「どうって、バカなこと言うなよ。友達同士でおねだりとか言われ
てもだな・・・」

『くせに』

エリカが小声で呟いた。

まずい、これは人を弄ぶのが愉しくてしょうがない悪魔の囁きだ。
護堂は本能的に危険を感じ逃げだそうとした。

『わたしの純潔を奪ったくせに、酷い人。おまけに影えいにも見られて
いる前で』

「あ、あれは仕方ないことだったたる。互いの利害が一致した結果、
納得ずくで、行為に及んだだけでだな……」

『ええ、そうね。わたしは確かに納得して、あなたに純潔を捧げた
わ。でも、護堂があの後から急に冷たくなっただって影に言ったら・
・・・どうなると思う？』

この悪魔め！護堂は心の中で毒づいた。さらに護堂は頭から血がサーツと退いて行くのがわかった。

影は良くも悪くも優しすぎる性格なのだ。だから護堂が女性のアフターケアをしなかったと知られればすぐさま「ごどーちゃん。ちょっとO H A N A S H Iしようか？」と路地裏に引き摺られて「ギヤアアアアアアア」という事態になりかねない。

『さらに、わたしたちがしてきたことを、あなたの可愛い妹さんに教えてあげたら、さぞかし素晴らしいことになるのでしょーうね』

護堂は自らの敗北を悟った。

多分に誇大な表現を含んではいたが、エリカの言葉にウソはない。何かと口うるさい静花しずかには聞かせたくない話だ。かなり面倒な事態になってしまふ。

いま、海を隔てた遙か異国の地で、彼女は間違いなく微笑んでいるだろう。

華麗な美少女が会心の笑顔で勝ち誇る　その情景を、護堂はあざやかに思い描くことができた。

「おまえ、あのことや妹を強請ゆすりりのネタに使う気だったのか……」

『大丈夫。護堂がわたしに誠意を示しつつげる限り、妹さんご迷惑をお掛けするような事態にはならないし、影にあなたが殺戮される心配もないわ。我が誇りにかけて誓います』

「そんな誓いに誇りをかけるな！卑怯な脅迫は誇りに反さないのか

！それに影さんの方は俺の命に関わるんだぞ！」

こうしてイタリア行きが唐突に決まったのである。行かなければ本気で命が消える……

荷物をまとめるために帰宅した護堂は、確信を持って家のポストを開けみた。・・・やはり、エアメールが届いていた。

差出人はエリカ・ブランデッリ

中には成田発ローマ着の航空券が同封されていた。

普通に郵送されたものではない。消印が押されていないのだから断言できる。

エリカの所属する怪しげな『騎士団』の東京支部とやらがこっそり投函したか、まっとうでない手段　『魔術』とやらでミラノから送ってきたものにちがいがなかった。

語堂はため息をつきながらもイタリアへ行くための準備を始めた。

サルデーニヤ島の街外れにある、森の近くに影の目的地はあった。石造りで小さな庭があり、庭には雑草があちこちにボウボウと生い茂っている。あの人のことだから、きつと手入れをしていないだけだろう。そう思って、いかにも魔女の館のような家に足を踏み入れた。

玄関の呼び鈴を鳴らす前にドアがひとりでに開く。もちろんドアの前にも後ろにも人はいない。魔術によるものだからだ。

普通の人だったら確実に驚くが、なんの気にも留めずにドアの向こう側に入る。昔ここで暮らしていたこともあり、こんなことには慣れてる。

ドアの向こうで出迎えるのは、毛並みの美しい黒猫。影の姿を見とめると足元へ擦りよってくる。

「この間ぶりだね。元気なようで、なによりだよ」

猫の視点まで腰を落とし、頭を撫でながら、優しく囁く。

黒猫はニヤ〜と気持ちよさげに声を上げると、後ろへ向き部屋の奥へと歩き出した。影もそれに続く。

猫を追って着いた先は寝室のような部屋。

相変わらず、薬草のような匂いが充満していて、あまり好きにはなれない。

雑然とした部屋にはベッドが一つ。そこには、上体だけ起こした女性が生かすだけなく横たわっている。

「久しぶり、でもないな影。今日はなんの用で来たのだ？もしかし

て、私の温もりが恋しくなったのか？」

だらしなくネグリジエのまま、二十代中ごろに見える亜麻色の長髪の美女　　ルクレチア・ゾラは影を出迎えた。ベッドには横たわったままだ。

「変な冗談は言わないでください。そんなこと言ってますと、本当に襲われますよ？」

「別に影になら襲われても問題ないぞ？『王』の愛人となったら私もいい暮らしができるだろうしな」

影とルクレチアはお互いに冗談を言い合う。

所々冗談ではないところもあるかもしれないが、いちいち付き合っていたら確実に負ける。だから、基本的にそういう会話は流すというのが最善の策だ。

「で、本当はなんの用で来たのだ？『まつろわぬ神』関連のことが？」

鋭い。本気でそう思った。こう言うては失礼だが、伊達に歳は取っていないということなのだろう。本人の前では絶対に言わないが。

「ええ、どうして草薙護堂が……ただの人間が神殺しに成功したのですか？僕は貴女が関与していると考え、此处に来ました」

影がここへ来た理由を言い終えると聞いていたルクレチアは、はあ、と頭に手を付いてため息を吐いた。

「……お前は相変わらず、恐ろしいまでの洞察力だな。ああ、そう

だ。私が少年に『プロメテウス秘及』を与えた。と、言えばわかるだろう？」

「はあつ、貴女も随分な厄介事にあの子を巻き込んだみたいですね……貴女と関わらなければ彼は普通の人間でいられたのに……」

やれやれ、といった様子で首を横に振る。正直言つてこの魔女の行動に対して呆れていた。

神殺しになると、『まつろわぬ神』から必然的に人類を守らなくてはいけない。神を相手にするわけなので、まさに命がけの行為だ。たかが十六年間しか生きていない少年にはかなりキツイ義務となるだろう。

全く……この魔女は。

影の目の前でルクレチアはなんの悪びれもせず、さぞかし眠そうにふあく、と欠伸をかいていた。もう何も言つまい……言つたところで無駄だ。

「ふあくあ。影、すまないが私は少し眠い。悪いが眠らせてもらつ。しばらく此処へ居るといふのなら、前に使っていた部屋を使つてくれて構わない」

「いえ、僕はもう帰ります。ただ……確認したかっただけですから影はそう言つと、ルクレチアに背を向け扉へと歩き出す。もう用はない。

「影」

ドアノブに手をかけたところで、後ろからの声によって影が止まる。

「なんですか？」

「……また来るといい」

ルクレチアはそう言って、布団の中に潜り込む。影はそんな彼女を見て薄く微笑み

「ええ、近いうちに……」

と、言い残して部屋を出た。

そういえばローマへ行くのをすっかり忘れていた気がする。影は自分を呼び出した金髪の少女を思い浮かべる。

「なんで来なかったのよッ！私の誘いをすっぱかすなんていい度胸じゃない」

と、言われることが容易に想像できた。仕方ない……行くか。何か大事な要件だとも言っていたようだし。

ルクレチアの館を後にして、今度こそイタリアの首都ローマへと歩を進めた。

二話 決闘前

「……エリカのヤツ、もしかして知ってて仕組んだのか？」

アリアンナの暴走列車から降り、今にも吐きそうな護堂は邪推した。悪魔という似合いのあだ名を持つ少女の性格を思い出したのだ。他人の不幸を美酒とする魔女。そう、アリアンナの運転は、実に恐るべきものだった。それこそ自分に何の恨みがあるのか？と問いただしたいくらいに。

こうなることを承知の上で、エリカは案内役を彼女に任せたのではないだろうか？

「運転はあまり得意ではないのですけれど……」

「こつこつという車は初めてだから、ここまで乗ってくるときも苦労したんですが……」

車に乗り込み発進する前、そんなセリフがアンナの口から飛び出しても、護堂は別の事を考えていたため、鷹揚に聞き流していただけだった。

護堂はその後暴走車を途中から降り、車が走り去るのを見届けてから手近なバー（コーヒーや軽食を出す店）に入り、こてこての口ーマ弁を話すおばちゃんに護堂はエスプレッソを頼む。

「……あの人、普通に見えるのは上辺だけで、もしかしたらすごい天然なのか？もう少して死ぬところだったぞ」

あの恐怖は二度と味わいたくない。護堂は自分はもしかしたら恐るべき凶運の持ち主ではないのか？護堂はまたしても運命の悪意を感じながら、エスプレッソを飲み干した直後だった。護堂がカップをテーブルに戻した瞬間、往來を歩む一人の少女と目が合った。合ってしまった。

まずいその少女が只者ではない。そう直感できたことが、まずかった。

時差ボケで気だるいままだった体が一瞬で持ち直す。背筋をすつきりと伸ばし、四肢の隅々、指先まで力が行き渡る。

宿敵と遭遇したため、体が勝手に臨戦態勢へと近づいているのだ

「……………」

少女の方も、足を止めて護堂の顔をじっと注視していた。あちらも護堂が仇敵だと直感したのだろう

素晴らしく美しい少女だった。

十三、四歳ぐらいで、幼く、天使のように可憐な顔立ちをしている。その銀の髪は先輩である神殺しを連想させた。『彼』も同じような雰囲気をもっていたこともある。

だが、それは驚くに値しない。『彼ら』はとびきり美しいか、とびきり異形か、どちらかである場合が多いのだ。

「…この地には、騎士を自称する神殺しがいると聞いている。この世の全てを断ち切る魔性の剣を持つ男だという。……あなたがそんなのか？」

いつのまにか

少女の姿をしたものが近づいてきていた。

肩のあたりまで伸びた銀髪は、月光を溶かし込んだように淡く輝き、瞳は闇そのものごとく黒い。

「ちがう。あなたが言っている男は、少し前に怪我をした。しばらく南の島で療養しながら遊び暮らすとか、ふざけたことを言っていたよ」

その怪我を負わせたのは護堂自身なのだが、そこまで自己主張する気にはなれなかった。

「……そうか。では、あなたは異邦人なのだな。妾と同じように」

夜を凝縮したような闇色の瞳が、じつと護堂を見据える。

「どうする？今の妾には《蛇》を取り戻すという目的がある。故にあなたと戦う必然性は感じていない。だが、あなたにその意思があるのなら、妾は全力で応戦するだろう。武力と勝利は常に妾の下僕なれば」

「蛇つてのが何のことかは知らないけど、俺にその気はない。できれば、あなたがずっとそのままだといいね。あんたたちとケンカするのは、あまり楽しくない」

「諒解した。妾は疾く去るとしよう。だが神殺しよ、あなたは嘘をついている」

「ウソ？」

「然り。我らとの決戦を楽しませぬ者が神殺しになるわけがない。あの者として例外ではないのだ……あなたは嘘つきだ」

何やら意味深な言葉を残して、銀の髪の少女は護堂の前から去って行った。

ふう、と護堂は息をついた。

どうやら荒事にならずに済んだ様だ。それにしても、人を嘘つき呼ばわりとは神様のくせに失礼なヤツだ。あの者って誰だよ……

そんなことを思っていると、黒髪の女性が小走りに近づいてきた。アンナだ。

「すみません護堂さん、お待たせしました」

彼女がテーブルの前まで来るなり、護堂は即座に頼み込んだ。

「携帯貸してもらえますか？エリカと連絡を取ります」

「構いませんけど、あちらの会合が終わっていないかもしれないかもしれませんよっ」

そう断ってから、アンナは携帯電話を渡してくれた。

『何、アリアンナ？』

数回のコールのあとで、相手は出た。一日ぶりに聞くエリカの声だった。

「俺だよ。訊きたいことがある」

『来てくれたのね、護堂。影は一緒かしら？アリアンナとは上手くやれてるっ？』

「それについても、いろいろ言いたいところだが、あとにする。影さんは……いない。今回、俺たちを呼んだのは、もしかして神様の相手をさせるつもりなのか？」

『なんで影がないのよ……まあ、いいわ。そうとは決まっていな
いけど、可能性はあるわ。……もしかして、もう会ったの？』

「ああ。ついさっき、女神様にな」

『そう……なら急がないといけないわね。これからすぐに落ち合
いましょう。あなたもわたしも決闘の準備をしなくてはならないし』

「……いまなんて言った？」

聞き捨てならない言葉が飛び出したため、護堂は問いただした。

『決闘。わたしとあなたと影で。今夜。言うまでもないけど、キャ
ンセルはできないから、そのつもりでね』

「何がどうなって、そんなイベントになったんだよ……」

護堂は自分がリクエストもしていないのに、運命は新たなる局面を
揭示してくれる。そんな運命のダイスのようだが、悪い目しか出な
いことを改めて痛感したのだった。

三話 不完全な力

夜の九時を過ぎた頃

護堂とエリカは夕食時のリストランテにいた。

アンナと後で来るであろう緋狩影の姿はなく、ふたりきり。どこことなく嫌な予感をする護堂だが、食事の時に限ってそれは無いか、と割り切った。

前菜の皿が運ばれてくる。決闘とやらに備えるためか、エリカの飲みものは珍しくワインではなく、ミネラルウォーターだった。

「で、何で俺と影さんがおまえと決闘なんぞしなきゃならないんだよ」

「影には説明してあるけど、あなたたちの力を証明するためよ。いま、ローマには古き魔術を継承する騎士団の幹部が集まって、ゴルゴネイオンの扱いを討議しているわ。わたしはあれを緋狩影か草薙護堂のどちらかに預けよと提案し、他の三人は二人の力を確認できれば賛成するということになったのよ」

「……ゴルゴネイオンって、何だ？」

「二か月前、カラブリアの海岸に打ち上げられていた神代の遺物よ。ゴルゴネイオンは貶められた女神の徴。失われた地母の叡智、闇へ至る道標なの。時間もなしのことだし、簡単に説明すると」

「やっぱり、いい。説明するな。神様がらみの話になるなら聞きたくない」

滔々と始まるうとするエリカの語りを、護堂は遮った。

とある事情のため、神々にまつわるウンチク話は耳に入れないようにしている。

「でも、護堂はもう『まつろわね神』らしき女の子に出会ったのでしょう？きつと、いずれ戦う運命に違いないわ。あとで自分から教えてくれて、わたしに頼むんじゃないかしら？いくらか賭けておいてもいいぐらいだけど」

「不吉なことを言うな。それは後回しだ。とにかく、力を証明する方法がどうして決闘なんだよ？他に良い方法があるはずだろ？」

「ないわよ。わたしたち騎士にとって、決闘は最重要の儀式なの。鍛えぬいた武技で競い合って、獅子のごとき勇気を示し、勝利を持って名誉となす。その儀式を愛し合う二人と護衛対象が行うのよ。とても素敵な夜になると思わない？」

「誰が思うか。むしろ悪夢のような夜になると思うね」

「素直じゃないわね。影ならきつと素敵だ。って言うのに」

「だから、影さんと比べるなって……」

ため息を吐きながらも自分の凶運は全てエリカが運んでくる気がしている護堂であった。

夜も更け、空に星は高く

エリカは危険だと言って、アンナさんを連れて行こうとしなかった。護堂を伴って出向いた先は、名高い円形闘技場・コロッセオに近い丘の上だった。

遙か紀元前、ローマの都市が七つの丘に囲まれていた史実は有名。今では観光名所となったコロッセオの隣で、ひっそりとさびれた廃墟になっている。

一応は観光地なのだが、お隣に比べれば静かなものだ。エリカは言う。

すでに零時を過ぎているせいもあってか、たしかにローマ貴族亡霊が出てきそうな雰囲気だった。

「それにしても、一五〇〇年以上も前の建物がよく形を残しているもんだ。こういうのを見るたびに感心するよ」

なるべく昼間に来たかったが、これはこれで肝試しのようではなかなか楽しい。本当に何かが出たら誠に驚くだろうが。

街灯がひとつもない闇の中を懐中電灯もなしで進めるのは、エリカも護堂もフクロウ並みに夜目が利くおかげだった。……護堂は春先に死にかけて以来、いろいろと手に入れてしまった人間離れた体質のひとつである。

「そう？古い建物だけの建物なんて、どこにでもあるじゃない。中世の寺院や城は、日本にもあるって聞いてるわよ」

エリカの意見は、石の文化圏で育った人間のものだ。

そもそもイタリアの諸都市は、中世の城砦都市から名前も建造物もそのまま受け継いだものがほとんどである。

街や都市全体が、半ば過去の遺物と言えるのだ。

特にこのローマでは、街道も下水道も帝国時代に造られた施設をそのまま使いまわしている。簡単な補修を加える程度で、未だにちゃんと役に立つからだ。

「はあっ、それにしても……影はちゃんとくるかしら」

ため息を吐きながらエリカが言う。今日は護堂を本物と証明する日

とともに、今日来る三人のうちの二人、《老貴婦人》の総帥と『紫の騎士』に影の存在を証明する日でもあるのだ。もう一人の《雌狼》の総帥は偶然的に影の存在を知ったため現在は協力関係にある。いわばバックアップ的な存在だ。たわいもない話をしながらも歩き続けていくと、急に前が開け、広い場所へ出た。

「着いたわ。ここがわたしたちの闘技場。かつてアウグストウス帝が宮殿をかまえた場所　　その跡地よ」

宮殿だった頃は壮麗な城壁だったと思われる、中途半端に巨大で細長い壁。

一部はどうにか立っているものの、ほとんどが横倒しになっている石の円柱群。

それらに囲まれて、緑の空き地がある。そこに四人の先客が待っていた。

まず老人が二人。

おそらくエリカが言っていた《老貴婦人》と《雌狼》の総帥とやらだろう。

青年が一人。《百合の都》を束ねる『紫の騎士』にまちがいあるまい。

そして

「ちよっと！なんで影がいるのよ！」

三人の隣に立つ白髪の少年。緋狩影が平然と何の違和感もなく、ここにいることに驚愕しエリカが叫んだ。確かに何故ここに居るんだ!?

「あゝ、その、ついさっきまでサルデーニヤにいたんですよ。それで遅刻しそうになってしまいました、《雌狼》の総帥さんに迎えに来てもらったのですよ。本当にすいません」

影が隣にいる老人。《雌狼》の長に深く頭を下げる。すると、《雌狼》の長は激しく狼狽し、

「いえいえ、とんでもありません！こちらこそ影さまのお役に立てましたことを光栄に思います」

と言って逆に頭を下げる。魔術結社の長たる大魔術師の老人が、まだ十代の少年にここまで恐縮した態度をとる。そのことから影の力ンピオーネとしての実力がうかがえる。

少々妙な空気になっているところで、エリカがその空気を吹き飛ばすように高らかな声で言い放った

「さあ、役者も揃ったことだし、そろそろ始めましょう。『紫の騎士』殿、立会人をお願いできるかしら？」

「いいでしょう、『デインアウオロ・ロツン紅き悪魔』殿。長老方はお下がりでください。カ
ンピオーネと《赤銅黒十字》の大騎士が相まみえるようです。距離
を置いた方がいい」

『紫の騎士』の勧めに老人たちが頷く。

その直後二人の姿はかき消えてしまった。ほんの一瞬で、跡形もな
く。

「本当に消えた。たいしたもんだ」

「実は僕らより人外なんじゃないですか」

「あなたたちの方が確実に人外よ。それに姿をくらましただけで、
離れた所から見物してるわよ。それよりも、始めましょう。合図を」

素朴に驚く護堂と皮肉を言う影から、エリカは五メートル離れて『
紫の騎士』に呼びかける。

「では、御三方の御武運を祈ります。 始めよ！」

まったく闘志のわかない護堂だったが、仕方なくエリカに視線を向
けてかまえた。影は未だにポケットに手をつっこんだままだったが

……

この地へ赴く前に、彼女は服装を改めていた。

。華麗なドレスではなく簡素な長袖のシャツと、ほっそりとした黒いパンツを身につけ、動きやすい格好だ。その上からシヨールのような紅い布を羽織っている。

あれには黒い縞模様が入っており、バンディエラと呼ばれる。これを身につけることが、大騎士にのみ許される装束らしい。

「鋼の獅子と、その祖たる獅子心王よ

騎士エリカ・ブランデ

ツリの誓いを聞け」

さらにエリカは、愛用の武器を呼び出す為の文句を唱えだした。彼女たちが呪文や言霊と呼ぶそれは、呪力を意のままに操るための技だと言う。

「我は猛き角笛の継承者、黒き武人の裔たれば、我が心折れぬ限り、我が剣も決して折れず。獅子心王よ、闘争の精髓を今こそ我が手に顕し給え　！」

剣が現れる。

一瞬前まで空だったエリカの右手に、忽然と長剣が出現する。

「さあ決闘の時間よ、クオレ・ディ・レオーネ！」

エリカの愛刀クオレ・ディ・レオーネは刀身の細い長剣である

剛剣と呼ぶには程遠い細さで、振り回せば柳のようにしなりさえする。清冽に輝く銀色の刀身と相まって、美術品めいた優美な剣だった。だが、影と護堂はこの剣が鋼鉄すら両断する魔剣であることを知っている。

エリカがいきなり間合いを詰めてきた。

「いきなり、僕ですか！」

クレオ・ディノーレによる稲妻のような突きが、影の胸元に放たれる。

後ろへ跳躍し、それを躲す。ポケットに手をつこんだままだが。エリカは突きにいった剣を戻さず、そのまま横薙ぎに、避ける影を追いかけるように繰り出す。

これは少々きつかった……避けた後に表情が少々歪む。

「いつまでポケットに手を入れてるの？舐めているのかしら？」

「貴女が僕に『力』を使わせようとしなのではないですか！」

「だって、あなたの『力』厄介なんですもの。安心してそれに殺すつもりはないし。不慮の事故は起こるかもしれないけど」

毒花のような甘いまなざしを向け、優雅に剣を構えてエリカが言う。思わず見とれてしまいそうな妖艶さだったが、そんなことをしている暇は全くない。

エリカの猛攻を必要最低限の動きで、左、右へ避ける。当たっても死にはしないだろうが相当の苦痛が伴うだろう。正直、それはご免だ。

「……さすがね。わたしの剣をここまでかわす人間なんて前代未聞よ。ああ、影は半分人間じゃないようなものだから、不思議でもないか。でも逃げるばかりじゃ勝負にならないわよ。第一、わたしがつまらないわ」

エリカはそう言うが、命の危険を感じる影は「こんな状況を楽しめるかー！」と言いたげな顔を目の前へと向ける。

「エリカ、僕は正直あまり力を晒したくないんですよ。それに、本気を出したらここが地図から亡くなってしまうし……護堂の相手をしてあげてください」

「なんでこっちに振るんですか！俺の力だつて変なのばっかだし、手加減だつて出来ないんですよ！」

「あら？護堂のことをすっかり忘れていたわ。じゃあ剣より危険な

物で護堂を追い詰めてあげるから、護堂が危険なら影も力を使わなくちゃでしょう？負けたくなかったら本気で戦いなさい！」

ひらりと身をひるがえし、エリカは廃墟に残る帝政期の城壁に足をかけた。

「翔けよ、ヘルメスの長靴！」

短い呪文と共に、タン、タン、タンと軽快に壁を駆け上がる。ほとんど垂直の壁を坂でも登るように一番上まで登り切ってしまう。魔術で身を軽くしているからこそできる、あきらかに人間離れた身のこなした。

「クオレ・デイ・レオーネ 鋼の獅子に使命を授ける。引き裂け、穿て、噛み砕け！打倒せよ、殲滅せよ、勝利せよ！我は汝にこの戦場を委ねる」

エリカは愛刀の刀身を愛おしげに撫で、軽く口付けた。そして投じる。

影と護堂がとどまる地上の草地めがけて

「……………今度は何する気だ？」

五メートル手前に突き刺さる剣を見て、護堂はいぶかしんだ。自分を突き刺すつもりなら、この距離でエリ力が外すはずがない。

変化が起きた。

地面に突き立った剣は、変形と膨張を始めた。銀色の鋼が膨れ上がり、獅子の姿を形どった彫像へと変化していく。

変形するだけではない。巨大化までしている。

……とんでもないことに、銀色の獅子はただの彫刻ではなかった。低いうなり声を上げながら首を回し、地面を見下ろし、護堂へと視線の焦点を定める。

本物の生きた獅子さながらの動きであった。

「こいつに俺を襲わせるつもりか！」

愕然としつつ、護堂は銀の獅子の偉容を見上げる。

獅子の頭は、ビル二階当たりにも相当する高さにあった。

大型のバスかトラックならなんとか対抗できそうな、巨大な体躯であった。

その巨大な獅子が、前足を振り上げ叩きつけてきた。

護堂の頭めがけてすさまじい速さで

とっさに飛びのく護堂。

一秒前まで立っていた地面が、鋭すぎる爪と圧倒的な重量で抉られ、潰される。直撃を受けたら、頭の前からつま先までグシャグシャになることは間違いなかった。

「サーカスみたいですね」

影は「よっこらせ」という感じで地面に座り込む。疲れたので少々見学するつもりだ。危なくなったら助けに行くが……

ちよこまかと逃げる護堂を獅子は悠然たる足取りで追う。

稲妻のような前足の一撃や剣のような爪で打ちのめし、引っ掛けようつとする。時折、戯れるように体当たりをしかけ、小動物じみた標的を押しつぶそうとする。

「王はこの決闘に、あまり乗り気ではないようですね」

と、エリカの隣で評したのは『紫の騎士』だった。

彼もいつのまにか魔術を使い、城壁の上まで登ってきたようだ。

「これでは彼らの力の証明にならない。ただ逃げ回っているばかりですからね。ああ、そんな論評は想定済みだとおっしゃりたいようなお顔だ」

コメントする長身の青年へ、エリカ余裕の笑みを見せた。

「おそろく、こうなるものだと思っていました。お二人ともあまり戦いを好まれない方なのです。……もっとも、最初のうちだけですけどね」

「と、おっしゃいますと?」

「あの方々はカンピオーネ。神を相手にしてまで戦い、勝利し、至上の権能を篡奪された御方達です。口先で何と言おうとも、本心から戦いを嫌うはずありません。全てのカンピオーネがそうであるように、緋狩影、草薙護堂もまた闘争の申し子。勝者の中の勝者なのです」

「ほう……それにしても、かなりの逃げ腰ですね。もう一人に至っては地面に胡坐をかいて笑っているじゃありませんか」

懐疑的な目で『紫の騎士』は下方を見下ろしている。

方や右に左に逃げ惑う少年、もう一人は少年と獅子が決死の追いかっこをまるで猛獣ショーのように楽しんで観ていた。それを見てエリカが言う。

「もうすぐ終わりますわ。そろそろ逃げ切れなくなるころ合いですもの。草薙護堂に関する賢人議会のレポートをお読みになったことはありますか?」

「一応。もっとも、あれがどこまで正しいのか、かなり怪しく思っています」

「六割程度なら、信用しても問題ありませんわね。よく調べたもの

だと思えます」

「では、あれは事実なのですか？草薙護堂の所有する権能は、対峙する敵、おかれた状況によって変化を起こす　あらゆる障害を打ち破る力だと言っつのは？」

「ええ！ほら、ごらんなさい、『紫の騎士』殿！」

二人の眼下で、いきなり形勢が変わった。

獅子が振り下ろす前足の一撃を、護堂は初めて避けなかった。

鋭い爪で斬り裂かれないように、そこには触れないようにして前足へ飛び付くや否や、両腕で抱え込んだ。そのまま持ち上げる。

重量挙げのバーベルでも抱え上げるようにして、護堂が大型トラックにも匹敵するサイズの巨大な獅子を、高々と差し上げていく。

「あれは　！なんて力なんだ！」

「英雄ヘラクレスは天を支えるほどの剛力だったといえます。草薙護堂が倒したウルスラグナは、そのヘラクレスと強いきずなを持つ神格です。あちらに後れを取ったりしませんわ」

驚く『紫の騎士』へ、エリカは誇らしげに言った。その後「次はさらに驚きますよ」と『紫の騎士』に言った。

「護堂。そのまま抑え込んでおいてくださいね」

影がそう言った直後、何も無い空間から黒き鎖が出現し、獅子の手、足、胴、首に巻き付き拘束した。

銀の獅子が苦しみの唸り声を上げる。

その後、影は自らの『権能』を使って神具を呼び出すため、呪文を詠唱する。

「最強の戦神にして雷神の魔槌よ、大地を揺るがす轟く雷鳴とともにあらゆる万物を粉碎せよ！！」

これは不完全な神具しか呼び出せない詠唱。しかし、呼び出すものの威力は銀の獅子を壊す事など容易い。たやす

詠唱を終えると、空に暗雲が立ち込める。雨でも降りそうな空だ。稲妻も発生し、雲は渦巻いている。

「トルハンマー雷神の魔槌！！」

渦巻いている雲の中心から恐ろしいほどの雷光を纏った柄の短い大槌が放たれ、銀の獅子に直撃する。そして離れていた『紫の騎士』のもとにも隕石が衝突したようなすさまじい轟音と爆風が伝わる。

「くっ！……あれはなんだ！？」

「あれは、『ミヨルニル』……つまり、雷神トールの振るった魔槌ですね。しかし、かなり加減していらっしやいます」

エリカが『紫の騎士』に淡々と説明する

「彼は雷神トールの権能も奪ったのか！？それに、あれでかなり加減しているですと！？」

「ええ。それに、あれも悪神ロキ権能の一つです」

「……どうゆうことかね」

「……われわれは草薙護堂が所有する権能を『東方の軍神』と命名する。軍神ウルスラグナは一〇の姿に変身し、あらゆる戦場で勝利を得た。よって草薙護堂はあらゆる状況に対応し勝利をおさめる怪物なのだ。賢人会議のレポートは、たしかこうであったな。それにしても相変わらず影さまのお力はすさまじい……」

不意に老人の声が割って入った。

いつのまにか《雌狼》の長が、エリカと『紫の騎士』の傍らにやってきていた。

「あら、長老　　おひとりですのね？」

「まあな。トリノの老いばれは、この期に及んでネズミのように隠れておるよ。わしはもういい。新たなカンピオーネの権能を間近で見る機会だ。この目で直接、王の御力を拝見させていただく」

《雌狼》の総帥はローマ訛りの早口で吐き捨て、嘲笑で唇を歪めた。ローマの騎士と魔術師を統べる結社の総帥は、トリノを本拠地とする《老貴婦人》が嫌いなのだ。

「サルバトーレ卿が現れた時もお若いと思っただが、今度の王はさらに若いな！あの剛力以外にも、彼の能力は変化するのだろうか？」

「草薙護堂が怪力を使えるのは、自分を凌駕する力の持ち主に対し

でのみ 賢人会議はそう推測していましたが……」

《雌狼》の総帥と『紫の騎士』が、同時に尋ねる。

回答を求める二人の視線に、エリカは余裕に満ちた微笑でこたえた。

「尋常ならざる膂力を持つ敵と戦うとき、草薙護堂は『雄牛』のウルスラグナに献身して、無双の剛力を得ます。ウルスラグナ神の化身は全部で一〇その全てを行使できるかはまだ不明ですが、いくつかの化身はもう掌握しております」

風、雄牛、白馬、駱駝^{らくた}、猪、少年、鳳、山羊、戦士。

ウルスラグナの中でも『雄牛』と『駱駝』は大地と深く関わり、強^{こつ}力^{りき}・強壯・強精のシンボルとなる姿であった。

その能力も自然と、怪力、荒ぶる猛威にまつわるものとなる。

「しかし、草薙護堂はまだしも、緋狩影……彼の権能は謎ですね……『ミヨルニル』を召喚するなんて……エリカ嬢は何か知りませんか？」

「わたしも詳しくは知りませんが……彼曰く、『創造』だそうです」

「創造？」

「ええ、あらゆるものを創造し自在に操る能力。何を、どこまで創造できるかはよくはわかりません。……そして、発動条件さえ揃えば神具を呼び出す事も可能……ということですよ」

「エリカ嬢の少し補足をすれば、つい最近知ったのだが、影さまの権能で呼び出せる神具は、ロキがあらゆる民族を騙して造らせたものを呼び出せる。ということらしい」

北欧に伝わる悪神ロキは『狡知の神』とも呼ばれたように、とても狡賢ずるがしこいい神であった。話術にたけ、神々の窮地を救ったことも何度かあった。しかし、かなり性格の悪い神だったという。

そして、創造神オーディンの神槍グングニールや雷神トールの魔槌ミョルニルなどは自らの話術によって小人族の鍛冶を騙し、制作させた。

元々は自分で依頼し、自分のものだったためそれら呼び出せてもおかしくはない。

「お前のオモチャはぶっ壊したぞ！どうせ自分でカタをつけるつもりなんだろう？早く降りてこい！とつとと済ませてやる！」

「あはは、護堂、自分が倒したわけじゃないのに随分偉そうですね？」

「……すいません」

「シヨゲないでください」

「おお、本気でやる気になられたようですね」

儼然としたまなざしでエリカを見上げている護堂。影も早く降りて来てくれ、と言わんばかりの眼でエリカを見つめている。二人の不機嫌そうな表情を見て、『紫の騎士』は満足げにうなずいた。

「初めはいつも、平和主義者みたいなことを言っただけですよ。特に影は。いざ戦わせてみれば、容赦なく勝ちにかかるくせに……。では、我が君がお呼びですので、しばし失礼いたします」

エリカはひらりと身をひるがえし、地上へと飛び降りた。

軽やかに舞い降りてくる金髪の少女を眺めながら、影は自分の行動を後悔していた。

正直な話、もう少しギリシャにいてもよかった気がする。あそこならもっと安らげただろうな……

後悔していたのは護堂も同じだったらしく、はあ、とため息を吐いている。

「……なあ、文明人と野蛮人の差は、どれだけ文化的な体裁を取り繕えるかにあると思うんだ。お前も頼むから、刃物抜いたり喧嘩売ったりする回数を減らす努力してくれないか？付き合う方はいい迷惑なんだぞ、ほんと」

「またそれ？いいじゃない。初めは嫌がっても、すぐに本気で戦う様になるでしょ、護堂の場合。本当はこういうのが好きな癖に、あなたはもつと素直になりなさいよ」

護堂の切々とした訴えを、エリカは微笑みながら退ける。

「わたしたちは王と騎士。激しく美しき戦いを演じる義務があるわ。影！ふたりで育んできた愛にかけて、この決闘を素晴らしいものに仕上げましようね」

「いや、その……愛を育んだ覚えはないのですけど……」

影は少々戸惑いながらも、金髪の少女を観察する。

「クオレ・デイ・レオーネ　　汝は不滅の鋼なり。我が心が折れ

ぬ限り、決して折れず。獅子よ、我が手中にて健在を示せ！」

エリカは銀の残骸となったクオレ・デイ・レオーネへ手を伸ばす。
『雷神の魔槌』^{トルハンマー}を受け、バラバラになった鉄屑が結合し、元の剣へと変形し、エリカの手中へ飛んでいった。

「壊した意味がありませんでしたね……折角大技使ったのに」

（威力を最大にして、塵も残らないようにした方が良かったかな？
……いや、威力を最大にしたらローマがイタリアから消えるな……）

「護堂。『雄牛』はあとどれくらいもちますか？」

「え？あ、はい。あと、十分弱ですけど……」

不意に呼ばれたため護堂は驚きつつ答えた。声がさつきとは違い真剣になっていることに護堂は気が付いた。

「なるべく十分でカタをつけます。僕も真面目にやりますので協力頼みます」

「はい！」

「話し合いは終わったかしら？早く再開したいんだけど」

話の区切りが見ついたところでエリカが影に問う。戦いたくて仕方ないのだろう。だったら、それに答えるまでだ。

「ええ、どこからでもどうぞ」

「了解したわ。その前に」

エリカが指を鳴らす。

直後、護堂の足元に一振りの槍が突き刺さる。長さ二メートル半ほどの大槍だった。クオレ・デイ・レオーネ同様、エリカが魔術で呼び出したものだろう。

「……もしかして、使えっただのか」

「もちろん。このエリカ・ブランデッリ、武器を持たない相手に剣を使い続けるほど野暮じゃないわ。それに、影は武器なんかいくらでも創り出せるしね」

「何で、そういう方に発想が行くかね……。俺に合わせて、自分が

武器を捨てるとか考えるよ、平和的に」

ため息をつきながら、護堂は槍を掴み取った。

(武器捨たら魔術の打ち合いか殴り合いになるから、平和的じゃないと思うんですけど……)

「僕も武器を出しますか……」

頃合いだと思い、掌に力を集中させる。

二人が武器を構えている中で素手はさすがに危険だ。片刃の刀身を含め180cmほどの太刀と通常サイズの日本刀を前方に出現させ掴む。

直後、エリカがするすると踏み込んできた。

まるで影が滑るような、気配のない動き。通常であれば気付いていたが、『創造』に集中力を使っていたため反応が遅れた。

ガキイツ！

「くっ！」

影の太刀とエリカのクオレ・デイ・レオーネがぶつかり合い、金属音を発する。あと、0.1秒でも反応が遅れていたら、顔にクオレ・デイ・レオーネが突き刺さっていただろう。

「あら？今のは決まったと思っただけだ」

エリカが驚いたように言う。余裕そうな表情が若干癩に障る。しかし、完全に反応が遅れると知っていたのだろうか？

「……まさか、僕の『創造』の最中が弱点だって気付いたのですか？」

「ええ、あなたの顔を見ていればわかるわ。創造中は他に意識がないのでしょうか？」

マジですか……この戦いだけで弱点を見破られるとは……さすが『ディアボロ・ロッシン紅の悪魔』

影は改めて目の前の美少女が普通ではないと思った。

「うおおおおおおー！」

影がエリカと剣を交えているときに護堂がエリカの後ろへ回り込み
槍を突き出す。しかし

「甘いわよー！」

エリカはそれを、直線的な動きだった為軽く躲す。そして、護堂へ
剣の猛攻を浴びせる。

「素人相手にいい加減にしろってー！」

しかし、護堂はなんだかんだ言っつて、全て回避している。

「あのね護堂、今の剣を外せる時点で素人なんて言えないわよ」

「まぐれが続いているだけだ！当たれば死ぬような急所ばかり狙い
やがって！」

護堂は全て躲すと、後ろへ後退し影と視線を合わせる。

「何か企んでいる顔ね。狐のように狡猾で、獅子のように猛々しい
それでこそ、影と護堂だわ。二人とも、受けて立ってあげるから、やってみなさい！」

そう言われて、護堂は一瞬だけ、微かに微笑んだのを僕は見逃さな
かった。

(護堂、楽しんでるな……)

護堂にとっては真剣勝負は楽しいのだろう。あまり気が進まないが、
対等に打ち合える人がいるのはいいことだとは思う。自分にはその
ような人はいなかったから尚更そう思う。

52

「さて汝は契約を破り、世に悪をもたらした。主は仰せられる
咎人には裁きをくだせ。背を砕き、骨、髪、脳髓を抉り出し、
血と泥と共に踏み潰せと。我は鋭く近寄り難き者なれば、主の仰せ
により汝に破滅を与えよう」

その聖句が忽然と、言霊となって護堂の口からあふれ出てくる。

「猪は汝を粉碎する！猪は汝を蹂躪する！」

殺しの勝ち鬨である

これは、神々から奪った権能を誇示する、神

れし魔王の挑発である

これは、仇敵たる神々へ向けた、人より生ま

苛烈な意思表明である

これは、己が屠った神の力を掌握するための

れた同胞の死に怒れ

天に住まう神々よ、我が言霊を聞き、凌辱さ

みえる神殺しの暴虐を呪え

地を住く神々よ、我が言霊を聞き、いずれま

げ場のない己の悲運に哭き、嘆け

海に潜む神々よ、我が言霊を聞き、もはや逃

ある！

我は神々の怨敵である！我は神力の篡奪者で

無意識に刷り込まれた魔王の本能が、護堂にこの言霊を吐かせるの
だ。

その直後、ここら一帯を揺るがす地震が起こった。

四話 Like? or love?

「何だこの地震は!？」

「猪と言っていた以上、これもあの方の権能なのでしょうね……。ウルスラグナ第五の化身は鋭い爪の猪、全ての物を一撃で粉碎する姿だと聞いていますが……」

城壁の上で《雌狼》の長と『紫の騎士』が動揺している。

今の言霊は、破壊の権化たる神獣を呼ばわるための聖句だった。神獣が降臨する気配を感じ取って、天はおののいて暗雲を呼び、地は恐れて微弱な地震を起こしている。

「そ、そう来たか……。わたし程度が相手の決闘で『猪』を使うだなんて、思い切ったことをしてくれるわね。下手をすると、丘やコロッセオごとローマの街まで破壊されるわよ!」

珍しくエリカが狼狽する。

こんな彼女の表情は滅多に見ることができないだろう。

「お前とまともに戦っても、勝てないからな。だから、今ここで使える最強の攻撃をすることにしたんだ」

影や護堂のいる丘の上空では空間が歪み、この世ならざる異界と現世をつなぐ裂け目が穿たれ、そこから漆黒の毛皮を持つ巨大な獣が現れ出ようとしてもがいていた。

今はまだ鼻先から首の辺りまでと、鋭く大きな二本の牙しか出ていない。

しかし、間もなく全身が地上に現れ出るはずだった。

影は何度か見たことがあったが、『猪』はもはや存在だけで災害だ。咆哮すれば建物は破壊されるし、地を駆ければ小規模ながらマグニチュード5の地震を起こす。そうして目標が塵となるまで暴れまくるのだ。街一つ消えてもおかしくはない。

「やっぱり護堂も普通じゃないわね。いつもいつも口先だけ平和主義者なんだから……。エリ、エリ、レマ・サバクタニ！主よ、何故我を見捨て給う！」

エリカが剣を天にかかげ、高らかに呪文を唱える。

影も護堂も何度か耳にした、最強の秘儀を解き放つための言霊だった。

「主よ、真昼に我が呼べど御身は答え給わず。夜もまた沈黙のみ。されど御身は聖なる御方、イスラエルにて諸々の賛歌を歌われし者なり！」

絶望の言霊が大気を震わせ、世界を凍えさせる。
周囲一帯の気温が恐ろしい早さで下がっていく。

「我が骨は悉く外れ、我が心は蠟となり、身中に溶けり。御身は我を死の塵の内に捨て給う！狗どもが我を取り囲み、悪を成す者の群れが我を苛む！」

天に神はおわせど、我を庇護し給うことはなし。

孤独と絶望、困窮と呪詛。

暗き概念を込めた言霊が世界に満ち、繰り手たるエリカに負の力を集めていく。

気温は下がる一方。すでに身も凍るような寒さだった。

「我が力なる御方よ、我を助け給え、急ぎ給え！剣より我が魂魄を救い給え。獅子の牙より救い給え。野牛の角より救い給え！」

古の聖者が死に際に神への絶望と渴望を込めて詠んだ禍歌にして賛歌。

これを聞くだけで常人は視力を失い、体の弱い者は倒れてしまふ。使い手がその気になれば、そこに集まった者たちを呪い殺すことができるという。

影は空中にナイフを数十本出現させエリカの胸元に飛ばす。殺す気ならもつと出現させるべきだが、集中力を少し奪えばいい。

エリカはこれをクオレ・デイ・レオーネで叩き落としてしまった。

『主よ、何故我を見捨て給う』

エリカはこちらの意図を読めていない。だから、咄嗟に剣を使ってしまった。

「護堂！」

影は護堂に向かって叫ぶ。護堂はそれに頷く。こちらの作戦はわかっているようだ。しかし、途中までだ。最後はほぼ個人プレーになる。

影はエリカがいる方向ではなく、護堂のいる方向へ走りだした

そして、護堂の前を通り過ぎると、高く跳躍する。ここからは護堂の行動しだいで影の行動も変化する。

「いきますよ。影さん！」

護堂が叫ぶと同時に影の着地するであろう処へ突進する。

影は護堂の意図を読み取り、足の裏に大刃の剣『バスターソード』

創造。出現させ、地面に着地する前に護堂の突進を受ける。

ドオンッ！

突進を受けるとその力により、物凄い速度で影はエリカへと飛ぶ『猪』を呼び出したのはエリカを踏み潰すためではない。その突進力を生かした、ふたりの連携攻撃の為だ。

「!?!」

エリカが物凄いスピードで突っ込んでくる影を見て驚愕する。しかし、すぐさま剣を構えて返り討ちにしようとする。

「はああああああ！」

影はエリカから1mほど手前で、太刀長さを生かし峰でエリカの手首を打つ。

すると、手首を打たれた衝撃でエリカの手元からクオレ・ディ・レオーネが離れる。

いくら達人でも得物がなければこの速度の突進には対処できない。

影は勢いに任せそのままエリカを押し倒した。

「!?」

さすがのエリカも『猪』の突進力をもった。突撃には為す術がない。完全に馬乗りになり、すかさず手首を押さえた。

「「……………」」

ふたりは、しばし無言で見つめ合った。

「……………できれば、こんな恰好はベッドで一人きりの時にして欲しいんだけど」

「はい?……………わっ! すいません!」

エリカの拗ねた口ぶりに、影は慌てて飛び退いた。エリカの言動に少し疑問を感じたが、そんなことを言う暇もなくエリカが言う。

「今のはちょっと卑怯だと思う。きちんと打ち合ったわけじゃないし、全然美しくないし」

彼女の言い分はよくわかる。

エリカ好み『最強の一撃の打ち合い』と思わせておいて、その前にあっさり勝負をつけた。相撲でいうと、横綱が猫だましを使ったようなものだ。

「あはは、美しくありませんけど、なかなか頭を使った作戦ですよっ?」

「確かにね……まさか、『猪』の力をあんな風に使うなんてよく考えたわね。それに、あの峰打ち……見事だったわ。あんな速度で手首に精密な峰打ちなんて達人でもかなり難しいわよ?」

「まあ、武器のおかげもありますしね。太刀が一番使い慣れていますし」

「はあ……今回はわたしの負けね。いいわ、敗北を認めてあげる。あなたたちの作戦勝ちだわ」

エリカは少し拗ねている。しかし、急にいたずらっぽく微笑むと、笑顔で言った。

「ねえ影、よく考えたらわたしたちって、初めて抱き合っているのよね？」

「え？ええ、確かにそうですね」

影はなんとなく危険を察知したが、遅かった。もう離している両手を首に絡めてくる。

「ちょうどいいから、勝利を祝う口づけを贈るわ。初めては護堂に奪われちゃったけど、いいかしら？」

と、ささやく桜色の唇がひどくなめかしい。さすがにそれは不味い。必死に断ろうとするが

「そういうのは護堂に

！？」

言い終わる前に唇を塞がれた。不味い、凄く柔らかい感触がする。

「
！
！」

エリカを必死に離そうとするが、エリカが首に手を絡ませているた

め零距离のまま離れられない。
不味いな……凄く気持ちいいけど、なんか呼吸困難になりそう……
まあ、このままならいいかも……

影はそのまま意識を手放した。

「ふはぁ……これで2人目ね。わたしが特別な男性に送るキスは……影？ちよつと影！？」

エリカは気絶している影を揺さぶるが、反応は無い。当たり前だ、気絶しているのだから。

エリカが影を揺さぶっていると、後ろから護堂がぜえぜえ言いながら歩いてきた。

「はぁ、はぁ。エリカ、お前、影さんに何したんだよ？」「」

「何って、キスよ。もしかしたら、影ったら初めてだったのかしら？見事に気絶しちゃってるわ。よっぽどシヨックだったのかしら？」「

「いや、そうかもしれないけど、酸欠だろ」

「ほっほっほっ。若いのは良いことですな」

「しかし、もう少し場を弁わかえたほうがよろしいかと……」

いつの間にか、『紫の騎士』と《雌狼》の総帥、それにいつの間にか出てきた《老貴婦人》の総帥が近付いてきた。

「あなたたちの権能、確かに拝見させていただきました。予想以上ですよ、草薙護堂。そして、その彼も」

『紫の騎士』は最後にエリカの膝の上で眠っている影を見る。

「あのような神獣まで飼慣らしているとは、まことに『王』にふさわしき御力ですな。そちらで眠っておられる影さまもさすがにございます。お二人とも未恐ろしい」

「エリカ嬢の約定通り、我ら一同、あなたたちを真のカンピオーネと認め、引き立てさせていただきます。我が結社を代表して、誓約いたします」

「ところでお願いしたいのですが、この揺れを止めていただきますませんか？」

まだ『猪』は召喚されたままなので地震が起きている。

「早くあいつを送り返さないと大変なことになる……」

護堂は精神を集中し、もういいから早く帰れと念じる。

これで巨獣は姿を消し、あとは帰って寝るだけ……にはならなかった。

『猪』は消えなかった。

出現途中のヤツの眼が『オイオイ、わざわざ呼び付けておいて、そりゃ勝手すぎるんじゃないかねーか』と反抗的に訴えているようだ。

「帰りたくないみたいだ……」

「それはマズくないですか？あの神獣がこのままローマで暴れると
いうのは、最悪に近いシナリオだと思いますよ」

「確かに最悪じゃ。何としても避けねばならない展開じゃぞ」

『紫の騎士』と《雌狼》の総帥も、落ち着かない様子でつぶやいた。
上空では『猪』の全身がいよいよ現世に現れようとしていた。
ヤツが地上に降下すれば破壊の限りを尽くすだろう。

「ここは、あの神獣に目標とやらを撃破させて、できるだけ短時間で
追い返すべきではありませんかな？それが被害を抑える最良の手段
だと思われませんが」

《老貴婦人》の総帥が、重々しい口調で進言する。
もっともな意見である。

ただ、指定した攻撃目標というのが。それが何か、護堂の目の動きで見抜いたエリカはさすがだった。

「ねえ、護堂はわたしを標的に指定して、『猪』を呼んだわけじゃないんでしょう？あれの標的にできるほど、わたしは大きくないし」

「……まあな。確かに別のものが標的だよ、うん」

あまり突っ込まれたくないところだったので、護堂はつい逃げ腰になる。

そこへエリカは、的確に切り込んできた。

「護堂が目を付けそうな物としては、ずばりアレなんかありそうだけど。この辺では一番目立つし、大きいし。でも普段わたしに常識を持つとか言う人がやつたりしないわよね？ものすごく俗っぽい観光地だけど、れっきとした世界遺産よ」

エリカが追い込みをかける。護堂をチクチクといじめて愉しむつもりなのだ。

「アレ……とは、まさかアレのことですかね？」

震える声で《雌狼》の総帥が問い、震える指でアレを指し示した。
その指さす先には、巨大な帝国時代の闘技場　まごうことなき
コロッセオが鎮座していた。

……暴君ネロのお代には人工池があった場所に、八年の歳月をかけて建造された。

ティトウス帝治下の紀元前八十年に催された、建立を祝う闘技祭は
一〇〇日間続き、九〇〇頭の猛獣が殺されたという。

年齢二〇〇〇年を数える巨大な廃墟。

「いや、あれしか標的にできそうなのがなかったんで、つい……」

恐縮しながら護堂が認めた直後。

ついに『猪』の召喚が終わり、完全に実体化した。

オオオオオオオオオツツツ！

オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオツツツ！

この世ならざる獣が、ありうべからざる咆哮をあげる。

猛る意思にまかせて、猛然と疾走する。

無論、向かう先はコロッセオである。

神獣はあつという間に目標へ到達するや、凄まじい勢いで破壊活動を開始した。

この翌朝から三日間、世界中の各種メディアを騒然とさせた大ニユース『ローマを襲った爆破テロの恐怖！コロッセオ大破壊の謎』の真相が、これであった。

四話 Like? or Love? (後書き)

途中で出てきた『バスターソード』はFF7主人公が使っていたものと同じです。

五話 巫女の悲しみ

ゴルゴネイオン

『三位一体』の叡智を刻んだ《蛇》は、仇敵の手に渡ったようだがコロッセオの瓦礫を踏みしめながら、彼女はそれを直感したこの地に残るゴルゴネイオンと仇敵の余韻。この石造りの闘技場を破壊したのは、間違いなく神殺しの権能である

……周囲では一〇〇を超える人々が、忙しく作業している
しかし、彼女を気にする者は　　いや、気づくものは一人もいなかった

少女は惨状を見廻しながら、彼女は先日会った神殺しのことを思い出した

異邦から来た、若き魔王

やはりあの者の仕業と見るべきだろう。ヘルメスの弟子ども人間風に言えば魔術師たちは、扱いあぐねたゴルゴネイオンをあの手殺しに託したのだろう。

異邦人の手に渡ったなら、おそらく《蛇》の行先はいいだろう、と彼女は思う

《蛇》と彼女の間には、決して朽ちない絆がある。その絆が彼女を《蛇》の元へと導く。

「我が求めるはゴルゴネイオン。かつて我が楯に刻み、古を偲ぶよすがとした蛇」

自然と謡が、口をついて出る

あの《蛇》を手に入れるためなら、喜んで海を渡ろうではないか
遙かな東方へと目を向けて、足を踏み出す

「我が求めるはゴルゴネイオン。まつろわぬ身となった我に、古き権威を受ける蛇」

彼女の呼び名は多い

ゴルゴンもメドウサも、かつて所有した名前のひとつにすぎない。しかし、その行きつく意味は同じ。これらはかつて地中海に君臨した、三位一体の聖母を讃える尊称なのだ

「我が求めるはゴルゴネイオン。古き蛇よ、願わくば、まつろわぬ女王の旅路を導き給え。闇と大地と天上の叡智を、再び我に授け給え！」

まつろわぬ女神は異邦を目指す

東方へと旅路を、ゆつくりと歩み出す

芝公園と東京タワーのほど近く 高級ホテルや学校、テレビ局、ラジオ局、大使館などが建ち並ぶ界限かいわいには、妙に神社仏閣が多い。その一画に、細い小道がある。一応、大通りには面しているものの、知らなければ見落としてしまいいそうな道幅である。

この入り組んだ道を歩いていくと、いつの間にか石段の前に出る。優に二〇〇段はあり、都心の真っ只中にある石段にしてはやけに高い。七雄神社は、ここを登り切った高台の上にあつた。鎮守ちんじゅの森とまではいかないが、緑の木々に囲まれた社の中はなかなか静かで心地よい。

境内には、拜殿から少し離れた場所に平屋造りの社務所がある。

その一室で、万里谷祐理まじやゆりは身支度を整えていた。

白衣びやくえと緋袴ひばかまをまとい、鏡に向かって長い髪をくしけずる。

射干玉めぼしたまの黒髪というには、茶色味が強い。染めているわけではなく、生まれつき色が薄いのだ。祐理のひそかなコンプレックスだったが、今は重要ではない。

そう、重要なのは髪を梳とかしていた櫛が唐突に折れてしまったことだ。

「……………不吉だわ。何かよくないことでも起きなければいいけど」

いささか非科学的なことを呟く
なんとなく、凶兆を感じたのだ

……………少し調べた方がいいかもしれない

身支度を終えた祐理は、社務所を出た
拜殿へ向かう道すがら、数人の神職とすれちがう
頭を下げて挨拶する彼らに、祐理も会釈して答える。一六歳の巫女
相手にひどく丁寧な振る舞いだっただが、ちゃんと理由があった

「やあ姫巫女、お初にお目にかかります。少しお話をさせて
いただけますか」

不意に、気軽そうな声で呼び止められた
声の主はゆっくりと祐理に近づいてくる。革靴で境内を歩いてくる
のに、踏みつける玉砂利はかすかな音もたてない
見る者が見れば、即座に只者ではないと見抜ける歩き方だ

「……はじめまして。あなたは？」

「や、これは失敬。申し遅れましたが私、甘粕あまかすと申します。麗しき
姫巫女にお会いできて、光栄の至りですよ。以後お見知りおきを」

名乗りながら甘粕は、名刺を祐理の前に差し出してきた
受け取って一瞥する
甘粕あまかす冬馬とあった。だが問題は、

「正史編纂委員会の方が、私にどのような御用ですか？」

不審に思い、祐理は訊ねた
くたびれた背広をだらしなく着崩した、せいぜい二〇代後半の地味
な青年

だが、これでも日本の呪術界を統括する組織の使者なのだ。丁重に、
そして慎重に接しなくてはいけない

「いえね、我が国に未曾有の災厄となるかもしれない火種がありま
して、少々手を焼いているのです。そこで、姫巫女のお力をお貸し
いただきたく思い、ぶしつけにもお邪魔いたしました。お許し下さ
い」

「……私ごときでお手伝いできることなど、大してないと思います
が」

「また、ご謙遜を。武蔵野の姫巫女は幾人もいらつしゃいますが、
あなたほど霊視の呪力に長けた方は稀だ。ま、それ以外にも二つ理
由がありますけどね」

日本古来の呪術を継承する呪術師、霊力者たちがいる
万里谷祐理もその一人だ

武蔵野　つまり、関東一帯を霊的に守護する一団に属し、若い
ながらも姫と呼ばれる高位の巫女として責務を果たしている

「あなたには武蔵野の姫巫女として、我ら正史編纂委員会に協力す

る義務がある。おわかりですね？この際、疑問は横に置いて、話を聞いていただきましょう」

「……もちろんです。では、私に何をしろと？」

「とある日本人が二人います。彼らと会って、その正体を見極めていただきたい。草薙護堂、もう一人は写真でしかわかりません、真正銘のカンピオーネではないかと疑惑のある人物なのです」

「……カンピオーネ？」

欧州における、最大最凶の魔王を呼ぶ称号

思いがけない単語を聞かされて、祐理はひどく驚いた

炯々と輝く、虎の瞳

この呼び名はいつも、彼女に老いた魔王の邪眼をを思い出させる

「あなたを選んだ理由の一つが、もうおわかりですね？あなたは幼い頃デヤンスタール・ヴォンバンと遭遇した経験があたりだ。あなたの霊視を使えば鑑定もたやすいはずですよ」

「……ええ。カンピオーネとは、日本で言う荒ぶる鬼神の顕現、忌むべき羅刹王の化身です。ただの人間が『王』となるためには、神を殺める必要があるのですよ？　そんな奇跡を起こせる人間が、この国に二人もいたなんて！」

もう五年も前の話だが、裕理は東欧の小国でカンピオーネと間近で接したことがある

デヤンスタール・ヴォンバン

その名を聞くだけで欧州の魔術師はすくみ上がり、魔除けの祈りを唱える

暗闇で燃える猛虎の双眼じみたエメラルド色の瞳を裕理は一生忘れないだろう

この魔王は睨みつけるだけで生者を塩に変える権能の所有者だと後で聞いて、刷り込まれた恐怖は一層大きくなった

「同感です。だから私たちも、草薙護堂ともう一人が本物だと信じてこなかった。いや、信じたくなかった。しかし、さまざまな状況証拠が積み重なりまして、そうも言ってられなくなってきたのです」

と、甘粕は大げさに肩をすくめた

「グリニッジ賢人議会によれば、草薙護堂は今年の三月、ペルシアの軍神ウルスラグナを倒し、王の資格を得たそうです。その後モイタリアを四度訪れています。そのたびに彼が現れた街では大きな破壊活動が発生している。何らかの因果関係があるのは明らかです。

先週、ローマで起きた騒ぎをご存知ですか？」

「……まさか、あのコロッセオ爆破テロも？」

「あの爆発が起きた当日、草薙護堂がローマを訪れていたことが記録に残っています。もう一人は不明ですが……彼を呼び寄せたのは、魔術結社《赤銅黒十字》が生み出した若きテンプル騎士、エリカ・ブランデッリ。しかも、帰国した彼は曰くありげな神具を携帯していたそうで……」

「神具
」

その言葉が祐理の心に引つかかった

彼女の姫巫女たらしめる呪力 極めつけに強力な靈感と霊視の力が、訴えていた。これを無視してはいけない。とてつもない災厄を呼び込む物だと

「草薙護堂ともう一人について、詳しくお教え下さい。私たち同様、何らかの呪術を修めた方なのですか？それとも武芸の心得がおりとか？」

この件に全力で取り組む決意を固めて、祐理は訊ねた
もちろん、魔王は恐ろしい。できれば避けて通りたい道ではあるが、誰かがやらねば大勢に人が苦しむのだ。ならば、ここで指名されたのも何かの縁だろう

「草薙護堂は呪術や魔術に関しては、素人のはずです。武術も同じでしょう。本来なら、神と戦うどころか関わることさえない家の出

なんですがね。 これをお渡ししておきます」

甘粕が鞆から書類の束を取り出し、手渡した
草薙護堂に関する調査報告書だった。彼の個人情報、経歴、イタリ
アでの行動内容が推測まじりに記されている

「……まあ強いて言えば、野球のシニア世界大会に向けた日本代表
候補だったということが普通でないところですね。何でも、中学時
代野球部に所属していて関東屈指の四番打者だったとかぐらいで普
通の高校生と変わりません」

「シニアといいますと?」

「硬球で試合をする、中学生たちの野球リーグですよ。代表合宿中
の練習試合で肩を壊す事故に遭ってそのまま引退したそうです」

「そうですか……ところで、なぜ南イタリアでペルシアの神と戦う
ことになったのでしょうか?かなり場違いな印象を受けますけど?」

「それに関しては、アレクサンドロス大王辺りに文句を言うべきか
ましませんね。かの大王の治世でギリシア人とペルシア人の融和
が図られ、ヘレニズム文化が生まれた。欧州とオリエントの文化は、
日本人が考える以上に影響をお互いに与え合っているのですよ」

苦笑まじりに、甘粕が語る

「ウルスラグナは、インド神話におけるインドラに相当する神格だとも言いますがね。実はアレクサンドロスの時代に、かの英雄神ヘラクレスとも習合しています。アルタグネスというギリシア風の呼び名まであるくらいです」

説明を聞きながら、祐理は資料をめくる

途中に金髪の少女の写真が挟み込まれていた。……同性の祐理でもドキツとするほど美しく、印象的な顔立ちだった

「ああ、その娘がエリカ・ブランデッリ　草薙護堂の愛人と目される少女です。剣と魔術にかけては掛け値なしの天才だそうで、絵に描いたようなサラブレッドの魔術師ですな」

「愛人!？」

その背徳的な響きに、祐理は思わず絶句した

「草薙護堂の重要性にいち早く気づいた《赤銅黒十字》が、彼女をあてがったのですな。結社の切り札である天才児を使ってでも、彼との絆を深める。妥当な策と言えるでしょう」

「そ、そんな理由で愛人に!? ふ、不潔です。不道德ですつ。そんなのまちがってます! 魔王の力をいいことに、女性を自由にするなんて 許せません!」

資料に添付された草薙護堂の写真を、祐理は険しく睨みつけた。祐理は頭に血が上っているおかげで、彼女のカンピオーネへの恐怖を薄れさせた

「……そう言えば、私に事を委ねる理由が二つあるとおっしゃいましたよね。もうひとつを教えてくださいませんか?」

「ああ、もちろん。こちらは完全に偶然だったのですがね」

甘粕の答えを聞いて、祐理は奇妙な巡り合わせに目を丸くした。まさか、そんなところで草薙護堂と縁があるとは思いもしなかったのだ

「そついえばもう一人の方は?」

裕理が思い出したように甘粕に聞く。すると、甘粕は困ったような表情を浮かべ懐から写真を一枚だけ取り出した

「もう一人については、ほぼ完全に正体不明です。どのような権能を所有しているのか、名前すらも不明です。この写真は我々が、命をかけて唯一彼を写したものです。どうぞ……」

裕理はそれを丁寧に受け取る。そこに写っていたのは周囲は焦土と化し、そこに一人立っている白髪の少年だった。裕理はそれを見て驚愕する

「影兄さん!？」

甘粕も落ち着いていた裕理の変わりように驚いた

「影兄さんとは？彼はあなたのお兄さんなのですか？」

「いえ……実の兄ではありません。わたしの幼き頃からの兄替わりだった人です」

裕理は少し悲しそうに甘粕に言った

「そうですか……彼の名は？」

「……ひかりえい緋狩影です。わたしたちの学校の一つ上の先輩でもあります」

「この国のこの町に住んでいるのに我々の情報網に全く引つかからなかったとは……あなたは彼がカンピオーネだと知っていましたか？」

「……いえ、わたしも影兄さんが『王』だとは全く知りませんでした……兄さんからは力を全く感じなかったので……」

「その緋狩影という方が、この写真の彼と本当に同一人物ですか？」

甘粕は写真を突き付けて言う。信じられないのだろう。裕理はもう一度写真をじっくりと見る

「……ええ、間違いありません。この銀髪に近い白髪、それに意図的に隠した左目、服装から判断しても間違いなく影兄さんです」

「そうですね……あなたもわからなかったということとは、何か力を隠す権能を所有している可能性が高いですね……今回はどうもお邪魔しました」

甘粕は何か考える素振りを見せるとこの場から立ち去った。貴重な写真は残したままだったが……

「……影兄さん」

裕理は誰も居なくなつた空間で一人呟いた

幼い頃からずつと自分に優しくしてくれたり、ときには叱ってくれた。そして、自分をずつと守ってくれていた兄のような存在

しかし、学校での影は影で嫌われ者だ。頭はいいし、容姿もいい。運動もそこそこできる。男から嫉妬される対象には充分過ぎた。そして、一部の女子からも嫌われている

頭の良いガリベンと呼ばれる女子からは、影がいるとテストで絶対に一位をとれないのだ。だから、「テストの日もどこかへ旅に行つてしまえ」と、言う奴もいる

裕理は一度だけ周りの噂なんて考えずに、影に話しかけようとしたが……

「もう、僕に近寄らない方がいいですよ？」

と言われた。顔こそ笑顔だったが、そこには明確な拒絶の意思が入っていた

裕理は思わず涙がこぼれそうになり、その場から逃げ出し校舎裏で一人泣いた

そのときどんな事より深い悲しみを味わった

「……影兄さん……会いたいですっ……会って……ちゃんと話
がしたいですっ……」

裕理はその時を思い出し、布団に顔を埋め願望を口にしながら泣いた

六話 突然の同居と久方の会話

ローマから帰国して数日が過ぎた。

その数日間はほとんど外へ出なかつた。

緋狩影という人間は基本的にインドアなのだ。

外にいるより家の書庫をあさっていた方が時間も早く過ぎる。

影の家は護堂の家がある商店街から少し離れた処にある屋敷である。

『幽霊屋敷』

影の住む屋敷に付けられた子供たちからの呼び名だ。

この屋敷は西洋風の結構な豪邸だが、影は必要最低限外へ出ないし、庭には様々な植物が生えている。一応手入れは欠かさないが……

子供たちは影が外へ出た処を見たことがないのだ。だから、誰も住まない幽霊屋敷と呼ばれている。

「……………退屈だな」

読んでいた本をぱたんと閉じて、呟いた。書庫にある本はまだ全て読み終わってはいないが、面白い本はもう何回も読んでしまった。そのため少し退屈だった。

大書庫を出ると、ピアノが置いてある。このような大きな屋敷のピアノは夜な夜な勝手に鳴りだすとかいう都市伝説があるが、幸い家のピアノはそんなことになつたことはない。

椅子に座り、鍵盤に手をかける……そして、指を踊らせた
曲名はエリック・サティの「ピカデリー」

鍵盤を叩くと共に流れ出す幾層もの音色で、一枚の楽しげな模様を
織り上げる

それは、とても楽しげなテンポ

明るく、華やかで、それでいてどこか懐かしい。素朴な感じがする。
そんな曲調だ。

「楽しいな……」

久しぶりに弾くピアノは思いのほか楽しかった。この音を誰かが聴
いていてくれたら、と思う。
人前で演奏したことなんて大分昔だが、いつかまた、誰かに聴か
せてあげたい。

『キーン コーン！』

演奏が終わった直後、鐘のようなチャイムが鳴る。この家のチャイ
ムは滅多に鳴ったことがない。だから、正直不思議だった。

「？誰だろ……」

『キーン コーン!』

「はいはい、今開けますよ……?」

ゴゴンと大きな扉を開けた先にいたのは、金髪の美少女
エリカだった。

「さっきのピアノ聴かせて貰ったわ。とてもいい演奏だったわよ」

聴いていたのか……だから、演奏が終わった直後にチャイムを鳴ら
したのか……

「あの……どうしてエリカがここに?」

「ゴルゴネイオンのことで来たのよ。ところで入れてくれないかし
ら?」

そう言いつつエリカはズンズン屋敷へ侵入してくる。西洋風屋敷だ
から土足でも平気だが。……少々、失礼では……?」

「へえ」。外見だけでなく内装も見事ね。こんな大きな屋敷に一人で住んでるの？」

「ええ、一緒に住む人もいませんし」

「そう。なら、今日からわたし、此処に住むわ」

「へ？」

いきなりなんですか？此処に住む？

「別に……問題はありますが……どうしてですか？」

「あら？妻と夫が同居するのは不思議ではないでしょう？」

そんな関係になったつもりは全くないのですが……
そうを言いたくなかったが、断るのも悪いだろう。

「……まあ、いいでしょう。部屋は適当に空いているところを使ってくれて構いません」

「ありがとう。早速部屋を探してくるわ」

エリカはそう言うと、すぐさま階段を駆け上がり、二階へと消えた。

『ジリリリリリリリリリリリリリリリ！』

エリカが消えた直後、家の電話が鳴った。今日は忙しい日だな……旧式電話の受話器を取って電話に出る。

「はい、緋狩です」

『影兄さん？わたしです。裕理ですけど……』

電話越しに聞こえた声は、随分久しぶりに聞いた幼馴染の声。

万里谷裕理の声だった。

「裕理ですか。どうかしたんですか？」

『影兄さん。単刀直入に聞きます。あなたは『王』ですか？』

「!?!」

(何故それを知っている！？能力の隠蔽は完璧だった筈！)

「……………」

『無言、ということとは肯定なんですね……間違いであってほしかった…………』

「どこでそれを知ったのですか？あなたの能力ですか？」

『いえ、正史編纂委員会の使者の方が持っていた写真に影兄さんが写っていました。わたしが影兄さんを見間違っうわけがないでしょう？』

(クソツ！正史編纂委員会か！逃した奴に写されてたか！)

「それで？僕をどうするつもりですか？」

『別に何もしません。しかし、影兄さんと草薙護堂という方がイタリアから持ち帰ったものがあるでしょう？それをお見せください』

「……了解しました。しかし、あれは護堂が持っていますのでそれらにも連絡は入れましたか？」

『はい。あちらにも連絡は入れておきました。待ち合わせ場所は……あの神社です』

「そうですね……では、切りますよ？」

影が受話器を置くこうとすると

『あつ………待って下さい影兄さん!!』

急に大声を出した裕理に止められた。凄く必死な様子が電話越しにも伝わってくる。

「なんですか？」

『……この一件が解決したら、ちゃんとお話しませんか……?』

裕理の声は何故か泣きそうな声だ。少し前の一件から擦れ違いが続いていたためだろうか？

「……わかりました。この一件が解決したら……ですね」

『ありがとうございます。ではまた……』

電話が切れる。ゆっくりと受話器を置くと後ろからエリカに話しかけられた。

「今の誰？もしかして恋人？」

「違いますよ……妹みたいな存在です。あちらにとっても僕は兄ですよ」

「ふん。そうなんだ」

「？何か含みがありますね」

「さてね。それより、行くんでしょう？」

「はい。これから準備します」

「後でわたしも行くわ。場所は？」

「七雄神社というところですよ」

「わかったわ。先に行つてて」

「了解しました」

途中で護堂と合流し共に歩く。

影と護堂は石段を全て登り切り、ついに目的地に着した。影がここへ来るのは随分久しぶりになる。

七雄神社に到

鳥居をくぐり境内に足を踏み入れる。そこで出迎えてくれたのは巫

女装束の少女。万里谷祐理だった。

「よくいらして下さいました、草薙護堂さま、そして、影兄さん。
。カンピオーネである御身をお呼び立てした無礼、お許し下さいませ」

と、裕理は深々と頭を垂れた。

白衣と緋袴びやくえ ひばかまのコントラストが目眩しいほどに綺麗だった。

「草薙護堂様は初めましてですね。万里谷祐理と申します。昨日はいきなりお電話をおかけして、失礼いたしました」

相変わらず、裕理は可愛いというよりも綺麗という言葉が似合っていた。エリカにも負けず劣らずの美少女。そして、影にとって妹のような存在。

「なあ、君も魔術師たちの仲間でいいんだよな？ほら、ヨーロッパにいるみたいだ。日本の連中と会うのは初めてだ」

「はい。……あまり十把一絡じゅうはいちからげにくくられたくはないですが、その後認識に大きな誤りはありません。私は武蔵野を守護する巫女の一人にして、この社でお勤めをしております。ささやかですが、呪術の心得もござります」

護堂はうなずいてから、辺りを見渡した。

「……ええと、ここは万里谷さんだけ？誰か、他の人はいないの？」

「……僕はいますけどね」

「あ、いや、そういう事じゃなくて……」

「はい。今は私とあなたの方しかおりません。ですから、御身の逆鱗に触れる様な失態がありましても、罪は私一人のものとなります。どうぞ、お怒りは我が身にのみ下されるよう、ご寛恕かんじょを請いとついでございます」

「裕理、僕と護堂は人を殺すことなんて望んでいませんよ。だから、平気です」

「影兄さん……それは殺さずわたしをお騷りあそばすということでしょうか？」

「いやいやいやいやいやいやいやいやいや」

僕がカンピオーネだとわかった瞬間に態度が変わりすぎですよ……
第一兄を拷問趣味者みたいにいわないでくださいよ……

「万里谷さんはどうして、俺たちをカンピオーネだと断言できるんだ？」

「それが私の力です。私の目は、この世の神秘を読み解く霊眼なのです。……以前草薙さまの同胞たるヴォンバン候ともお会いしたことがございます。カンピオーネ　　羅刹王の化身たる方々を見誤ったりはいたしません」

静かな自信を込めて裕理は言い切った。

ヴォンバン。その人物の名が出てきたことで影の表情が少し歪む。

「そ、それでか。そいつの話は俺も聞いたことがある。……時代遅れの魔王気取りで、ワガママし放題の偏屈じいさんなんだろ？ そうゆうヤツは、カンピオーネの中でも少数派のはずだぞ。一緒にしないで欲しいんだけど」

「そうですね。あのクソジジイとは一緒にして欲しくくないですね」

アイツとサルバトーレを比べれば圧倒的にサルバトーレの方がいい。影はサルバトーレに会うたびにいじめるが、別に嫌いなわけではない。知り合い以上友達未満というような感じだ。

「ご謙遜を。あなた様がシチリアやミラノ、ローマに下されたお怒りの激しさは私も承知しております。あれほどの破壊の数々、まさに魔王の所業です。恐ろしい方……」

「……い、いや、別に腹いせで壊したわけじゃないんだけど。そうだ、それより万里谷さん、その話し方はやめてくれないか？俺と同じ一年生なんだから。タメ口でいいよ、俺もそうするからさ」

「申し訳ございません、私の口の利きように至らぬところがあつたのですね。失礼をいたしました。……ところで、タメ口とは何のことでしょう？」

「敬語は無しってことですよ。裕理」

「そんな！？……困ります。身分だって違いますし、男性を呼び捨てにしたことなんてありませんし」

「恥じらいながら裕理が言う。確かに裕理の傍には僕以外の異性がいたことがなかった気がする。」

「身分って、いつの時代の言葉だよ。俺はそんな大したヤツじゃないぞ。それに影さんには様付けしてないだろ。俺も同じように頼む」

「はあ……。努力いたします、その、草薙　　さん」

「そういえば影さんとはどんな関係なんだ？影さんって言ったけど……」

護堂が此処に来てからの疑問を裕理に言う。

「影さんは……幼い頃から兄のような存在でしたので……昔から影さんと呼ばせていただいています」

「ふーん。幼馴染ってことか、実の兄弟じゃなかったんだな」

護堂が納得したように言う。

「そんな、幼馴染だなんて／＼／＼」

裕理が顔を真っ赤にして俯く。護堂はそれをよく分からない様子で見ている。

「裕理、本題を」

僕は少しトリップしている裕理を起こすために言った。そうしない
としばらく戻ってこないからだ。

「！あ、はい。では、草薙………さんにお願ひがあります。あなたが
ローマから持ち帰ったという神具を、お見せくださいませんか？」

真面目な表情に戻って、裕理が訴えた。

「それは全然かまわないんだけど、何で万里谷はあのメダルのこと
を知っているんだ？」

「草薙さんは、ご自身を過小評価し過ぎです。カンピオーネかもし
れない人物が、魔術の本場であるヨーロッパに渡るのですよ？日本
の関係者だって、あなたが何をされるか興味を持つ　　というよ
りも心配するに決まってるじゃないですか」

「心配してもしかして、監視とか付いていたのか？」

護堂は心底驚いた。

まさかそんな連中がいるとは思っていなかったらしい。

「監視の有無までは分かりませんが、少なくとも日本の調査員がローマに派遣されたということは確かです。その結果、草薙さんがイタリアの魔術師たちから何かを託されたという情報が、私たちにもたらされたのですね」

「どこから調査員が派遣されるんだ？」

「もちろん、正史編纂委員会です。……ご存じありませんか？」

祐理が長つたらしくて覚えられないような名前を口にした。

エリカが前に説明していたようにヨーロッパとはちがって、政府直属の組織が監視・統括しているため、一般人がその存在を知ることがほとんどない。

自分のこともしつこく嗅ぎまわっている。正直、害虫のような存在だ

「正史編纂委員会。うん、名前だけなら聞いたことあるな」

「彼らは日本の呪術師、霊力者を統制し、情報操作をする秘密組織です。文部科学省や国会図書館、他にも宮内庁や神社庁、警視庁などから識者を招いて構成されています。私のような呪力をもつ巫女や神職には、彼らに協力する義務を課せられるのです」

魔術、呪術、神々　　怪力乱神の数々。

その全てが、日本では正しい史実とは認められない。そうした社会の在り方を守るための組織。だから『正史編纂』委員会なのだろう。

「私が草薙さんと影兄さんをお呼びたてしたのは、あなた方が真のカンピオーネが見極めよと委員会に指示されたからでもあります。たまたま同じ学院の生徒で、静花さんと親しかった縁もありましたし」

「万里谷さんたちも大変なんだな……」

話を聞いて、護堂は同情した。

護堂は少しでも協力しようとはバッグからゴルゴネイオンを取り出した。

黒曜石のメダル。刻まれているのは、蛇髪の妖女を描いた肖像。

それを一目見るなり、祐理はハッと息を呑んだ。

「やっぱり危ない物なのか、これ？」

「おそらくは。古い、ひどく古い神格にまつわる聖印です。蛇神、オロチの印……いえ、もっと根本的な、母なる大地と巡る螺旋の刻印

」

目を細めながら、祐理は言う。

「これは只の直感ですが、このメダルは北アフリカで出土した物か
もしれません。エジプト、アルジェリア……その辺りのことがなん
となく思い浮かびます」

「思い浮かぶ？俺の知り合いはゴルゴネイオンって呼んでいたんだ
けど、万里谷さんはこれにのことについて詳しいんじゃないのか？」

七話 嘘であってくれ

「いいえ。私は欧州やアフリカの神格については、ほとんど存じ上げません。ただ霊視と靈感を頼りに、漠然と感じたことを口にしただけです」

エリカがほめかした内容とほとんど同じだったことに護堂は素直に感心していた。

しかし、ゴルゴネイオンといえばゴルゴン。ギリシヤの神の可能性が高い。もしかしたら……いや、そうであってほしくないな……

「草薙さん、一つ質問させてください」

考え込んでいる護堂に、いきなり裕理が訊ねる。

「これはあきらかに『まつろわぬ神』の神具です。カンピオーネであるあなたが、それに気付かないはずありませんわよね？」

「ん、まあ、そうだよなア……。やっぱり神様がらみのヤバい物だよなあ……」

「あなたは、この東京に禍つ神を呼び寄せのおつもりなのですか！

？地元住民の安全を、何だとお思いですか！」

青天の霹靂。

頷いた瞬間に、雷が落ちた。

これはさすがに僕も驚いた。昔から怒ると怖かったが、ここまで迫力を感じたことは無かった。

「そ、それは俺も心配だったんだけど、大丈夫じゃないかな？これを欲しがるのって、あっちの女神さまらしいから。あの連中、たぶん日本の位置も国名も知らないはずだぞ」

「じゃないか？……で、要らぬ危険を冒さないで下さいませ。草薙さんの調査書を読んだ時から気になっていました。あなたは周囲への配慮が足らな過ぎです」

裕理の冷たい視線に射竦められ、護堂はたじろいた。
そして、護堂こちらを見ている目が「助けて！」と言っているようにも見えたので、少し助けましょうか……

「まあまあ、裕理抑えてください。護堂もわざとやったわけではな
「影兄さんは黙っててください！！兄さんもこの後お話があります
からね！」「……はい」

無理だ……今の裕理に勝てる気がしません……すいません護堂。

「大いなる力には、大いなる責任が伴うと申します。だというのに、草薙さんはあまりに無責任ではありませんか。こんな曰くありげな神具を、愛人の女性にせがまれるまま故国に持ち帰るだなんて

」

「愛人！？だ、誰のことだよ、それ！？」

「おとぼけになられても無駄です。この調査書にも書かれていますよ」

と、裕理は束になった書類を差し出してくる。

エリカ・ブランドゥリ。魔術結社《赤銅黒十字》所属。十六歳。身長一六四センチ。スリーサイズ八六・五八・八八。草薙護堂の愛人。

記述されている個人情報を見て、護堂は絶望的な気分になった。

「万里谷、これは俺についての良くないうわさを事実とまちがえて書いている。捏造だ。ガセネタなんだ。少し俺の言い分を聞いてくれないかッ！」

「ガセネタの意味は存じ上げませんが、往生際が悪いですよ。魔王の力を利用して、女性を意のままにするだなんて、恥ずべき行いだと思いませんか？」

「意のままにしてない。とゆうか、エリカは影さんのことが好きなんだッ！」

ばっ！？余計なことを！

「どうゆうことですか、影兄さん？草薙さんは自分ではなく、この方は影兄さんの愛人だと言っていますか？」

（愛人なんて言ってますんじー！）

裕理はエリカの写真を指差し、ゆっくりとこちらへ近づいてくる。後ろに夜叉が見えますよ！不味い、逃げ場がない……とりあえず、誤解だといきましょう。

「ゆ、裕理、誤解です。僕には愛人なんていません。確かにエリカには好意をもたれているかもしれないんですが、特に何かしたわけでもありません！」

「あら、影兄さんはそうやって女性の気持ちから逃げるんですか。影兄さんはそんな人じゃなかったはずですよ？」

言い知れぬプレッシャーを感じ、僕の足は無意識にジリジリと後ろに後退していた。

……そして気付いた。

軽やかな足取りでこちらに近づいてくる。やたらと見覚えのある人物に。

嗚呼………ことがさらにややこしくなりそうです………。

影は戦う相手である神にさえ祈りたくなかった。

「わたしの影をいじめるのはいいかげんにしてもらえるかしら。いい？ 緋狩影を愛するの、苛むの、オモチャにするの、この『ディアヴオロ・ロッシン紅き悪魔』にだけ許された特権なの。あなたごときが手を出していい人じゃないわ」

護堂はいるはずのない声に驚く。

視線の先には、話題の当人 エリカ・ブランデッリの姿があった。

赤みがかった金髪は長く美しく、どこか豪華な王冠めいた印象がある。

だが、それだけではここまで目立たない。

エリカを引き立てるのは、身に纏う華麗な雰囲気だろう。

衆目を集めることが当たり前と言わんばかりの不遜さと、気高いまでの誇りの高さ。両者が絶妙のバランスで釣り合う、覇気に満ちた表情が生み出すものだ。

「どうしたの、護堂？メドウサに見つかった侵入者みたいな顔してるわよ。……なんで影は悟りを開いた様な顔をしているのよ？」

蜜と黄金を溶かしたような声でエリカが言う。

だが、護堂はため息をつき、影は「終わった……」という顔をしている。

「そりゃ、会はずのしない人間と出くわしたからだ。おまえな、ここは東京だぞ。ミラノじゃないんだぞ？こんな所で油売っている理由は何だよ？」

「理由？あいかわらずバカな人ね。遠距離恋愛中の恋人が、相手の住む街にやってくるのよ。愛しい人の顔を見るために決まっているでしょう？」

エリカが傍にまでやってくる。嗚呼、終わったな……完全に誤解を解くことは不可能となってしまいました……。

「こっちへ来て、影。あなたがいるべき場所は、いつだってわたしの傍なんだからね」

と、エリカは僕の手を取り自分の方へ引き寄せる。

「な、何をなさるのですか？いきなり現れて、そんな破廉恥な……！」

「いいじゃない？わたしと影の仲は知っているんでしょう？再会した恋人たちの逢瀬を邪魔するなんて、無粋な女がすることよ」

憤る裕理へ、悪びれもせずエリカは言い切る。途端裕理の顔が悲しみと失望に染まる

「影兄さん……やっぱり兄さんの愛人だったんですね……失望しました」

「兄さんのって何よ。まるでわたしが他の人の愛人だったみたいじゃない」

裕理の言葉にエリカが反応する。

「あゝ、その……エリカ……貴女は護堂の愛人として登録されてたそうですよ……」

「……………は？」

さすがのエリカもまさかの一言に間の抜けた声を出す。

「え、ちょっと待って、何？わたしが護堂の愛人として登録された？嘘でしょ？」

「……………裕理、書類を」

「どうぞ」

裕理から拝借した護堂の調査書をエリカに見せる。エリカはそれを受け取り読みあげる。

「エリカ・ブランデッリ。魔術結社《赤銅黒十字》所属。十六歳。身長一六四センチ。スリーサイズ八六・五八・八八。草薙護堂の愛人……………」

「ね、護堂の愛人って書いてあるでしょう？」

エリカは読み終わると下を向いてぶるぶると震えている。僕は護堂に目配せして意思の疎通を図る。

(護堂、なんか言っして下さい！)

(無理ですよ！俺にどうしろっていうんですか！)

(エリカを慰めるとか、裕理を鎮めるとかいろいろできることはあるでしょう！大体、護堂の一言でこんな事態になったんですからね！)

(………すみません。けど、俺にはどうしようもありませんよ………本当にすみません！)

(はあっ………わかりました。僕が何とかしてみます)

僕は意を決し、エリカに話しかけた。

「そういえばエリカ、本当は此処へ何しに来たのですか？」

「どうでもいいわ………そんなことどうでもいいわ………今は賢人議会の奴らを皆殺しにしたい………」

「恐れーヤバい、どうするんだよこれ！こうなったら奥の手を出すか……」

「え、エリカ、だ、大丈夫です！周りの人たちがなんて言おうと、貴女は僕の大切な人ですよ！」

エリカの呪いのような言葉が止まる。言ってしまった！。もう裕理から完全に変態扱いですね……。

「本当？わたしをちゃんと愛してくれる？他の女なんか見ない？」

エリカが上目使いで言う。絶対そついう返しが来るってわかってましたよ……どうしよう、ここで、「はい、僕は貴女を愛しますよ」なんて言ったら、エリカ 一直線じゃないか。心苦しいですが断りましょう……被害は僕がすべて引き受けますし。

「エリカ、すいませんが僕はまだ貴女を妻として愛することはできません。しかし、いつかはきちんと答えを出しますので……」

そつ言つとエリカと僕はお互い黙る。護堂や裕理でさえも何も言わずに僕らを見ている。

「……ふふふ」

「「「え？」「」」

エリカの突然の笑いに僕と護堂、裕理の声が重なる。

「ふふふふふ、あははは！どう？わたしの演技は？影、少しは気付きなさいよ。わたしはあなたをからかったり、いじめるのが好きなことぐらい知っているでしょう？」

エリカはそう言って笑う。それに、怒った護堂がエリカに怒声を浴びせようとする。

「エリカ！お前、今回は性質が悪すぎるぞ！影さんはお前のことを考え「いいんですよ、護堂」影さん！！」

僕は護堂の怒りの言葉を遮る。エリカの笑った時の顔がとても無理をしているように見えたからだ。

「それよりもエリカ、本題です。まさか、『まつろわぬ神』が日本へ来たのですか？」

「えっ!?!」

護堂が驚きの声を上げる。さっきまで、奴等は日本の名前、位置すら知らないと言っていたのだから当然だろう。

裕理の顔色はどんどん蒼白になっていく。不吉な前兆を感じているのだろうか？

「鋭い。満点をあげるわ。だからわたしは今日、あなたのところへ来たの。実はわたしよりも先に来たのを追いかけて、日本まで飛んできたのよ」

「……まさか、俺が会ったヤツじゃないよな？」

護堂が恐る恐る聞く。

「特徴は護堂がローマで会った女神さまと一致するわね」

「やっぱりかよー!」

エリカが答えるのと同時に、裕理も嘆息していた。予感が当たってしまい、護堂はつくづくイヤな気分になった。

「何でローマから追いかけてこれるんだよ？俺は自分の出身地なんて話してないぞ！？」

この疑問にエリカは肩をすくめた。

結局、神々の限界を窺い知ることなど人間には不可能なことなのだ。そう感じたのだろう。

「その点に関しては、わたしたちが甘かったみたい。海を越えた程度じゃ、誤魔化せなかったのね。……まあ、来てしまったものはしょうがないし、撃退の方法を考えましょう」

「他人事みたいに言うなよ。神様を連れ込んだ罪はお前と俺、それに影さんの共犯なんだからなッ」

「僕は巻き込まれただけのようない気もしなくはありませんが……」

「そ、それで降臨した『まつろわぬ神』は、今どこに？名前は？神の御名はなんとおっしゃるのですか！？」

影の呟きは裕理によってかき消される。そして、護堂に『わかつているわよ』とエリカが頷いて、祐理の方へ向き直った。

「少し前から話を聞いてたんだけど、あなたは霊視術の使い手みたいね。ちょうどいいから、どこの神様が来たのか託宣たくせんしてちょうだい」

「託宣？そんなことできるのか？」

「多分ね。今ここにゴルゴネイオンがあり、あの女神と直接出会った護堂がいる。その娘が真の霊視術師なら可能なはずよ」

対峙する神の名を知ると知らないのでは、大きな差が付く。それによってのちに対応できるかどうかが決まってくる。

「……ということなんだけど、もし良かったらお願いできないか？いや、もちろん事の元凶は俺たちだし、頼めた義理じゃないってのは理解してるんだけど、この通り」

「僕からも頼みます。裕理、託宣してくれませんか？」

護堂はなるべく誠実そうに見えるように念じながら、僕は特に何も考えずに頭を下げた。

無論、下げた先には巫女装束の裕理がいる。

彼女は呆れ果てたと言わんばかりに、大きく溜息をついた。

「まったく。仕方ありません、やってみましょう。その石をお貸し下さい。草薙さんも、お手をお預けください。……あなたは以前に、到来した『まつろわぬ神』と遭遇されたのですね。そのとき、どのような印象を抱きましたか？」

右手にゴルゴネイオン、左手に護堂の掌を持ちながら、裕理がささやく。

目をつぶり、声もひそめる。

酷く厳粛な雰囲気、護堂の体も自然と緊張していた。

「そうだな……夜。あの女神さまがどんなヤツか知らないけど、夜の神だと感じた」

「夜……夜の瞳と、銀の髪を持つ幼き女神……いえ、幼いのではなく、その位と年齢よわいを剥奪された女神……故に小さく……故にまつろわず……」

一言も教えていない容姿を裕理が当てていく。

……ちよつと待て、銀の髪を持つ幼き女神？マジですか？

「その御名は……まつろわぬ神霊の御名は。ええっ!？」

不意に目を開いて、裕理が絶句した。

護堂とエリカが目配せし合った。影は心の中で（アイツではありま

せんように！）と祈り続ける

「視えたよね。どうだった？もしかして、あなたも知っている女神様だったとか？」

「え、ええ……。でも、何かの間違いだと思います。だって、この女神はゴルゴン　　蛇神の敵のはずです。私のような者でさえ知っているんですよ」

「日本の巫女でさえ知るほどのビクネーム。……神の名は何？」

続けてエリカが問う。

鋭い眼差しには、少し前までの甘さはかけらもない。

（アイツではありませんように！）影は心の中で祈り続ける。

「　　アテナ、です。草薙さんが遭遇し、日本に到来したという女神の御名は、おそらくアテナのはずです。信じられません……」

嘘であってくれ……

影はため息をついて頭を抱えた。

八話 嫌な再会

海神ポセイドンは、彼女の旧敵である。

少なくともギリシアの伝説では、そうなっているはずだ。

だが、だからといって海そのものを嫌ったことはない。海も大地も、彼女の奪われた本質と深く関わる、命の源なのだ。

彼女が真に嫌うのは太陽である。

輝く光、眩い天空の玉座こそが、フクロウの女王たる彼女を不快にさせる。

まあ、いい。不快なだけだ。耐え難いわけではない。

太陽もまた命の火。生と死の連環には不可欠な要素なのだ。この光を甘んじて受け入れることも、女王の務めだろう。

否

この感想は適切ではない。まだちがう。まだ彼女は『まつろわぬアテナ』ではない。まだ三位一体を成す女王の地位を取り戻してはいない。

彼女の虚ろな記憶にかるうじて遣る、母の嘆き。女王の恥辱。老婆の叡智

栄光の残滓が、父 天空の王ゼウスの配下たる太陽へ反抗させているに違いない。

もうすぐだ

古の《蛇》ゴルゴネイオンを取り戻せば、己は真のアテナとなる。

海辺の潮風を浴びながら、彼女は《蛇》の気配を探る。何処にある？どこで彼女を待っている？西か。ここよりも西の地に、あの者と共にあるのか？

彼女はかすかに微笑んだ。

ゴルゴネイオンよりも、覚えのある気配が近いことに気が付いたからだ。

やはり、《蛇》を奪って行ったのはあの者か。あの者以外の神殺しと出会ったのも、随分と久しぶりだ。最後に彼奴らと立ち合ってから、数百年、下手をすると数千年も経つのではないか。

そっういえばあの者の故郷もここより西の地だったな。

迫る仇敵の気配に、アテナの戦神たる部分が歓喜の声をあげた。思わぬ再会があるとは知らずに。

「……あ、アンナさん、ありがとうございました」

ようやく停止してくれた車の後部座席から護堂はよろよろと転がり
出た

「ふ、護堂………すみませんが、袋をくれませんか………？」

護堂は出てきた車の中から苦しそうな声を聞いた。影は車の中にい
る時もずっと考え事をしていたため、普通はアンナの暴走超特急で
も酔わないが酔っていた。

「ふ、袋ですか？………もしかして、吐き気ですか？」

護堂は恐る恐る聞く。

影は護堂の問いに対し、口を押さえながら首を縦に振る。

「ええ！どうしよう、袋なんてありませんよ！そっだ、アンナさん
あります？」

「ふ、袋ですか！ええと………ありました！お使いください、影さ
ん」

アンナはポケットから出した買い物用のエコバッグを僕に差し出す

が、影は首を横に振って拒否した。さすがに布袋はマズいだろう。吐き気を押しこみ、涼しい顔をする。護堂はその様子にやはり只者ではないと感じていた。

アテナの名が判明した直後。

護堂は慌ただしく七雄神社を飛び出した。

無論、女神に会いに行くためだろう。

しかし、ゴルゴネイオンも持っていかうとしたら、祐理に呼び止められた。

「アテナが探している物をわざわざ持参して、どうするおつもりですか！それは私がお預かりします。もう、本当に仕方のない人ですね！」

祐理が怒りながら、ゴルゴネイオンを取り上げた。

たしかに裕理の言う通りだ。

護堂はそこに思い至らなかった自分の浅はかさを情けなく、なんだかんだ協力裕理に感謝していた

影と護堂、エリカは神社を出ると、エリカは携帯電話でアンナを呼び出した。

すると、アンナは大きな四駆と共に現れた。

護堂はあの時の恐怖がフラッシュバックし青ざめていた。

「……仕方ないじゃない。わたしだって選択の余地があれば避けて通りたかったけど、一刻も早くアテナと会うには車がいちばんだし」

護堂と影だけに聞こえる声で、こっそりと言ったものだ。『ディアウオ紅き悪魔ロ・ロツン』の称号を持つ少女の表情は、珍しく苦渋に満ちていた。

「アンナさん、国際免許なんて持ってたのかよ……。あの腕で合格させえうなんて、イタリアの教習所は問題があると思うぞ！」

「言うておくけど、あの子が免許を取ったのって日本であらしいからね！」

などと、護堂とエリカは小声で責任を押し付け合っているが。僕はそれどころではない。どうやったらアイツとの戦闘が回避できるか考えていた。

そして、影と護堂、エリカは後部座席に乗り込んだ。

一時間ほど車に乗っただろう。

久しぶりにかぐ潮の香り。

千葉の習志野市内なつしのという以外は、もう正確な位置もわからない海の近くだった。

「アテナの居場所は近いわね。二人とも着いてきてアリアンナはここで待機してて」

小さな懐中電灯を先端に取り付けた鎖。

ダウジングの類らしい。

それを中指に巻きつけ、近隣の地図の上で揺らしていたエリカが言った。

探し物をするとき、彼女がよく使う魔術だった。おそらく、七雄神社にいたときもこの術で探し出したのだろう。

「かしこまりました。皆様、お気を付けて下さいね」

深々と頭を下げながら、アンナは送り出してくれた。

海沿いの道を歩き出したエリカの後に、続いて行く。

前を歩くエリカの足取りに迷いが無い、アイツの居場所はほぼ把握しているようだ。

「なあ、アンナさんの運転って、どこでもああいう感じなのか？」

アンナさんの姿が見えなくなってから、護堂が訊ねた

時刻はすでに五時を過ぎている

オレンジ色に染まった海辺の芝生を、三人の影が歩いてい

残念ながら、防波堤によって海には近付けないが、いい眺めだった

「もちろん。あのね、アリアンナが凄いののは、あの運転で事故を起こしたこともなければ人に怪我をさせたこともないところなの。あの意味で天才よね」

「それが事実なら同感だ……。アンナさんって全然そうは見えないけど、ものすごい天然だよな？あの自覚の無さはちよつとないぞ」

「あはは、自覚があつたら天然じゃありませんよ。けど、僕はアンナさんは良い女性だと思いますね」

「見る目があるわね。アリアンナは気が利くし、真面目だし、働き者だし、しかも面白いんだから、まさに完璧なの。四つほど欠点があるけど……。そんなのは些細な問題よ」

「ちなみに、その欠点とはなんですか？」

「車の運転が危険、剣と魔術の才能ゼロ、煮込み料理を作らせると子供が泣き出す味になる、大抵の仕事は器用にこなすけど三日に一度は大失敗をする　　こんなところね」

まあ、エリカの言う通り些細な問題だろう。しかし、護堂はメイドとしても、騎士としても不適正な欠点じゃないか。とっていた。身のない話をしながらも、三人は進む。

あの銀髪の少女 あるときから共に生活していたことがある
『まつろわぬ神』と再会したのは、一〇分ほど後だった。

彼女の恰好は、薄手のセーターとミニのスカート、黒いニーソックスなどを着込んでいた。銀髪の上には、青いニット帽まで乗せている。

相対しているときに失礼だが、幻想的な美しさを感じさせる。

「久しいな神殺しよ。妾^{わい}はあなたと再会できて喜ばしく思う……と
言いたいところだが、なぜ、あなたがそこにいるのだ影？」

アテナが影の名を出したことにエリカと護堂は驚いて僕を見る。

「あー、その……僕はこの国の出身だって言ってますでしたっけ
？」

「なるほど……あなたは確かに東方の国の出身だと言っていたが、
この国だったのか」

「ええ、いい国でしょう？」

「確かに。あなたが素晴らしいと言っていた理由が良く分かった。ここはいい国だ」

「それはよかったです。貴女に祖国を気に入ってもらえて」

「ちょっと、影！あなた何で『まつろわぬ神』と親しげに話してるのよ！というかどうゆう関係よ！」

影がゴルゴネイオンのことなどすっかり忘れて、アテナと話しこんでいると、エリカがついに痺れを切らしたように叫ぶ。

「えと、僕らは「しばらくの間寝食共にした仲だ」ちょっと！！」

「なっ！？影、あなた神様の愛人を作ってたの！しかも『まつろわぬ神』なのに！」

エリカはアテナの誤解されるような発言にエリカが反応する。友人ではあっても別に愛人ではないのですけど……。

「面白いことを申すな、人の子よ。妾が影の愛人だと？それは否だ」

アテナが少しはまともでよかった……。
エリカも影もその言葉にホッと息を吐く。だが

「妾は影の妻だ。影は妾のものであり、妾は影のものだ」

時間が止まった。

エリカだけでなく護堂、そして影も目を見開いてアテナを見る。

「しかし、今は関係ないだろう。東方の神殺しよ、あなたに聞きたい。これより古の《蛇》を賭けて対決する我らなれば、互いの名を知らずに済ませるわけもいくまい」

アテナのその言葉によって護堂とエリカは相手が『まつろわぬ神』だということを出す。

「俺の方にはあんたと戦う理由はひとつもないぞ」

「あなたは古き帝都よりゴルゴネイオンを持ち去った。魔術師どもに請われての行いであろう？《蛇》を妾より遠ざける者は、何者であれ妾の敵だ。影とて例外ではない」

アテナは魔術師について言及しながらも、エリカの方を全く見ない。魔術師という集団については漠然と認知しながらも、一切関心を持っていない。彼女が見据えるのは護堂と影のみであった。

「さあ聞かせてもらおうか、あなたの名を」

「……草薙護堂だ。それと、そっちに居るのはエリカ・ブランデッリ。あんまり人間を無視するな。神様だろうが何だろうが、すごく失礼だぞ」

エリカをちらりと見ながら、護堂は名乗った。

「草薙護堂。影と同じ異邦の男らしき名だな覚えておこう」

案の定、アテナはもうひとつの名など聞き流している。傍らでエリカは僕らから少しづつ距離を取っている。わずかに口元をほころばせながら。正直、その表情から読み取れるものは恐ろしいので、それを見過しし周りを見渡す。全く人がいない。恐らくアテナのせいだ。他人を巻き込みたくないのか、それとも邪魔をされたくないのか、理由はどちらかだろう。

「さて草薙護堂よ、重ねて問おう。ゴルゴネイオンは何処にある？」

「あのな……俺が大人しく教えるとおもうのか？」

「思わぬよ。が、まずは聞いておきたい。闘神としての妾の心はお主らを敵だと認め、戦えと叫んでおる。しかし、智慧の女神たる心は警告を発しておる。それに妾も夫とは戦いたくないからな」

「いや、だから……夫になった覚えはありませんって」

否定するがアテナの耳には入っていない。そして、深淵にも似たアテナの黒い瞳が、興味深そうに見開かれた。

「あなたは奇妙な神殺しだ。我が同胞から奪い取った力は、まだ少

ないはず。しかし、アテナをアテナたらしめる機知が、あなたを危険だと告げている。迂闊に手を出せば、手痛い反撃を受けそうなの…
…畏にも似た脅威を感じておるのだよ」

フクロウ。

やはり、アテナの瞳はフクロウとよく似ている。

初めて会った時も感じたがカンピオーネの直感が人の姿をした女神と夜行性の鳥類。両者の相似を告げている。

「故に、まずは問う。その返答によって対応を決めよう。妾はアテナ、闘争と智慧の女神である。和するもよし、争うもよし。さあ、あなたの答えは如何に？」

「できれば和を取りたいんだけどな、俺は……」

護堂は最善の策を模索しながら言った。

「断るよ。逆に提案するけど、ゴルゴネイオンのことは諦めて、このまま帰ってもらえないか。無益な戦いでお互いに傷つけ合うよりも、その方が賢いと思うんだけどな」

「そうか……影はどうなのだ？」

アテナの瞳が影の方向へ向く。
できるだけ戦いたくない。それは、別れた日に言った言葉。お互い本心だっただろう。今でも戦いたくはない。しかし、神具を渡すわけにもいかない、ならば

「僕は、貴女の行動によって決めます。僕は貴女がゴルゴネイオンを諦めるというのならそれがいいでしょう。しかし、貴女がアレをどうしても諦めないというならば……」

口でこそ言ったが何とか交渉できないか？と迷っていた。

……これが間違いだった。

慣れ親しんだせいもあり、歩み寄るアテナへの警戒心が緩まりすぎた。

「そうか……あなたもあくまでゴルゴネイオンを渡さないというか……」

手を伸ばせば、互いの体に届く。アテナと影の距離は、そこまで狭まっていた。

「すまぬな。影、あなたはやはり妾の夫たる男だ。神殺しとしての義務を果たしながらも和解の道を求めている。少々心苦しいが

許せ」

と言つや否や、アテナは両腕を影の首に絡める。
まさか！？と思つた瞬間に、引き寄せられてしまった。アテナはつ
ま先立ちになつて伸び上がり、桜色の唇を僕に押し付けた。

「!?」

体を必死に離そうとするが、何故か体が動かない。

「我が求むるはゴルゴネイオン。諦めてくれ、影。お前の息吹を、
あなたの命を妾は強奪する。暗き地の底、冷たき冥府の荒れ野へと
旅立つがよい」

唇を合わせながら、アテナは言霊を吐き出す。冷たい吐息と共に、
僕の体内へと流し込んでいく。

この言霊は『死』だ。

急激に体が冷え、命が燃え尽きて行くのがわかる。

僕は死ぬのか？

「本当にすまぬ、影。少しの間眠っていてくれ……」

アテナが影にしか聞こえない声で言った。

少しの間？眠る？どうということだ！？

アテナの言葉に疑問を感じたが、意識はだんだん遠ざかっていく。
不味いな……このままでは本当に死んでしまう。

迫る死の気配を濃厚に感じたとき、おぼろげなエリカの声を聞いた。

「エリ、エリ、レマ・サバクタニ！主よ、何故我を見捨て給う！？」

絶望の言霊を、最強の呪文をエリカが謡い上げている。
護堂は影を救出しようと走る。

「我が骨は悉く外れ、我が心は蠟となり、身中に溶けり。御身は我が死の塵の内に捨て給う！狗どもが我を取りこみ、悪を成す者の群れが我を苛む！」

やはり、貴女は凄いですよエリカ。

いくら魔術師でも只の人間。なのに神を相手に戦おうとしている。

「我が骨は悉く外れ、我が心は蠟となり、身中に溶けり。御身は我が死の塵の内に捨て給う！狗どもが我を取りこみ、悪を成す者の群れが我を苛む！」

エリカは元々賢い。そんな人が勝算もない神へ挑む。

その理由は間違いなく影を救うためであろう。他の理由も混じっていそうだが……しかし、アテナは間違いなくエリカを殺す。そんなことをさせては駄目だ、エリカに死んで欲しくもない、アテナに人殺しをして欲しくない。

我は最強にして、全ての勝利を掴む者なり。

立ちふさがる全ての敵を打ち破らん！あらゆる障害を打ち砕かん。

剣で斬り込むエリカとそれをあしらうアテナ。

二人の少女が争うさまを霞む目で見ながら、だんだん護堂の呼びかけも聞こえなくなり、影は意識を失った。

九話 前準備

辺りは一面、灰色でしかない。地平線の先まで、ひたすら灰色の空間がつづいている。

「久しぶりね。」

「あ、今はエイだったわね！」

目の前には一人の少女がいる。

一〇代半ば頃の整った顔立ち。体つきは細身で、エリカなどに比べると、かなりスレンダーな方だ。しかし、彼女は蠱惑的だった。

美しいと形容するより、可愛いという方が適切な童顔と体つき。金色の長い髪をふたつに分けて、白い薄地のドレスを身につけている。この人は

「母さん……」

「そんな肩つ 苦しい呼び方しなくてべつにいいのにー。気軽にママって呼んで欲しいわ」

そう、この人は魔王カンピオーネを誕生させた夫妻、不死者エピメテウスとその妻パンドラ。

彼女はもちろん後者だ。母さんと呼んでいるがこの人はカンピオーネ全員の母であり、もちろん生みの親ではない。

「僕は……死んだのですか？」

影がここへ来た疑問を言う。ここは生と不死の境界。生と死の境目に訪れる空間だ。

「うん。実を言うとエイはゴドーの『雄牛』みたいな超回復力！なんて持ってないんだけど、簡単には死ねないんだよね」

「どうしてですか？」

「おもしろい理由あるんだけど、聞きたい？」

うれしそうに、もったいぶったように言う。

本当にこの人は子供みたいだ。

「ええ、聞かせて貰えますか？何故簡単に死ねないのか」

「うん！それはね、エイが初めて奪ったロキの権能が勝手に発動するせいなの」

「ロキの権能が？どうしてですか？あれは『創造』の能力はずです

けど……」

「確かにね。けど、厳密に言えば『創造』だけじゃないの。その中には『想像』も含まれているの」

『想像』？それは初めて聞いた。

「それでね、その『想像』の方の力が死ぬ間に勝手に発動して、エイの体が周囲の物質を取り込んで自分の命の源に変えるの。『この物質は俺の命の一部だ』って勝手に想像してね」

「……デタラメな権能ですなそれ……」

正直、聞いていて「ロキの権能セコいですねー」と感じていた周囲の物質を勝手に自分の命の源に変えるなんてセコすぎる。実質、こういう何もない空間以外では死なないということではないか

「そういえば、アテナはあなたが死んでも絶対に蘇るってこと知ってたわよ」

「えっ？」

何故？知っていたのだろうか……一緒にいたときに無意識中で発動していたのか？

「アテナはね、エイと一緒に旅してたときに、死ぬほどの大怪我をしていたエイの体が地面を吸収していくとともに回復していたのを気付いていたのよ。あなたは無意識だったみたいだけど」

「……なるほど、カンピオーネの体質だと思っていたのが、権能のおかげだったということですか。僕もまだまだ使いこなせてませんね……」

影まだ自分の権能を完全掌握できていないことに少し情けなく感じた。

まだまだ、神殺しとしても未熟なところが多いのだろう。

「それにしても、アテナはエイをよく見てるわね。神さまに惚れられた息子をもったのは初めてよ」

母さんはエリカのような悪戯っ子っぽく言う。その声はどこか嬉しそうだ。

「あはは……僕もびっくりしましたよ。いきなり、夫と来ましたからね」

「そうだねー。あっ、エイの体もう回復したみたい」

母さんが不意に言う。もう、母さんとお別れということだ。ここに
来られる期間はもの凄く限られているため、少し残念に感じる。

「貴重なこと教えてくださってありがとうございます。では、エ
リカの元に戻りますよ」

「うん！あたしも久しぶりに話せてうれしかったわ。それじゃあ、
がんばってねー！」

運動会で子供を応援する親みたいなの、そんな言葉に少し笑みを浮か
べながら、影は現実へと帰還した。

目を覚ますと、最初に見えたのは自分の顔を覗き込むエリカと護堂
だった。

硬いベンチに寝そべっているらしく、下の感触は硬いが、首から上
はやわらかく、あたたかかった。

「よかったー。影さん、このまま目を覚まさなかったらどうしよう

「思ってたよ」

「あら、護堂。言っとくけど、わたしは最初から影は死ぬはずがないって信じてたわよ?」

護堂とエリカが笑いながら言い合いをしている。微笑ましい光景だ。

「エリカ、僕はどのくらい寝てましたか?」

「ざっと、二時間くらいだったわね。それにしても、土が集まってあなたに吸収されたのはびっくりしたわよ」

それは、あの空間で母さんに聞いた『想像』によるものだろう。アテナも最初に見たとき驚いたのかな?

「……すみません、エリカ、護堂。僕が油断したせいで心配かけたよじですわね」

「ほんとですよ」

「ほんとよね」

「本当に二人には感謝しています。けど

」

「はいストップ。これ以上わたしに謝らないで。わたしは好きで影に尽くしているんだから。代わりに、あなたがわたしを愛してくれさえすれば、それでいい。ね、かんたんなことでしょ？」

「いや、話の腰を折って、本当に悪いんですけど。この体制は少々、刺激が強すぎると思います！」

ようやく自分の体制に気付いた影は飛び起きようとしますが

「ダメダメ。死にかけたばかりだし、アテナにはかりかまっていたんだから、今くらい大人しくしなさい」

エリカの力で抑え込まれた。

女性に怪力と言うのは失礼だが、正直、なにこの怪力！？

「……わかりました」

拘束から逃げ出す事を諦め、エリカの膝の感触をなるべく意識しな

いよつに心を無にしようとする。

「ま、ともかく、今後の方針を決めましょうか。影はアテナのこと、どうするつもりなの？この期に及んで、のんきに話し合おうなんて考えてないんでしょう？」

エリカが真面目な声で本題に入る。

「僕は今でも、戦いたくはありません……しかし、もうそろそろ言うていられませんしね……」

「つまり、決闘するのね」

「ええ、しかし、最悪の事態になったら、護堂の『剣』が必要になります」

「……やっぱり、最悪の事態への備えは必要だよなあ」

「じゃあ、わたしに頼みごとがあるんじゃないの？ほら、早く言えば？」

エリカが澄ました顔で、勝ち誇るように言う。

本当は全部承知のくせに、あえて自分の口から言わせるつもりなのだ。嫌な性格だ、全く……

「……はあつ、わかりました。アテナについて知っていることを全部教えてください。勝つためには必要なんです」

この相棒の手助けがなければ、切り札となりうる護堂は全く役に立たない。

諦めと共に、エリカを拝み倒す。

「よく言えました。なら、私の答えは決まっているわ」

エリカと共にベンチから降りる。エリカは影の足元にひざまずいた。嬉しそうに微笑みながら、恭しく言う。

「お望みのままに、我が君。あなたは我が剣の主であり、我ら魔術師の王たる御方。御身の仰せとあらば、喜んで勝利の鍵を捧げましょう」

エリカはときどき、こんな畏まった物言いをする。
普段が普段の為、少々違和感がある。

「そういうのはいりませんよ。……僕は、いつも通りのエリカがい

「い
です」

「そう?じゃ、いつも通りにしましょうか。ほら影、ここに座って
早速始めましょう」

いきなりエリカに押しやられ、さっきのベンチに座らせられた
まさか……

「あの、エリカ?念の為聞きますけど、言葉でですよ?」

「言葉だったら、全部教えるのに何時間かかると思っているのよ?
アテナは最古の女神の直系なんだから、歴史も神話の数も半端じゃ
ないの。めんどくさいからイヤ」

そう言いながらエリカは影にすり寄ってくる。

「ちょ、待って下さい!護堂でいいじゃないですか!二度手間にな
ってしまいます!」

護堂の十の化身のひとつ『戦士』は相手となる神の知識を明らかに
することで、その言霊を光る黄金の剣に変換して攻撃する。神にと
っては最大の武器となり自分にとっては最強の楯となる。

影が権能を剥奪した神、ロキは『狡知の神』とも言われている。そ

のため影にも恐ろしいばかりの頭の回転の速さ、そして記憶能力が備わった。

本来なら影では無く護堂が『教授』されるべきなのだが、ふたりとも強く拒否するので影が『教授』させられることになる。エリカ曰く「ただの友人には二度もキスしたくない」らしい。

そして、カンピオーネには魔術が通用しない『体内』を除けば、だが。

だから、『教授』はキスされることと同じなのだ。影は『教授』でキスしたことは無いが、方法は知っていたため、なんとか説得を試みるが……無駄に終わった。すばやく唇をふさがれる。

……長くキスを続けたあとで、エリカはほんの少しだけ唇を離してつぶやく。

「ふふつ。最近、なんだかんだ構ってもらえなかったから、すごく楽しい。影ったら、わたしの前では飄々としていくせに、妹って呼んでる女の前ではたじたじになったり、アテナにキスされたりして、結構、怒ってたんだからね」

怒っているというくせに、おそろしく甘いささやきだった。

額と顔がくっつき合うほど、顔の距離が近い。

「あ、いや、裕理は久しぶりに会ったからどのように接すればいいかわかりませんでしたので……アテナは、僕のせいですけど……というか、まだ付き合ってもいない男女がこんなこと繰り返してよいのでしょうか……なんか背徳感が」

「愛する人と唇を交わすのに背徳感なんてないわ。それにもう何回かしているでしょう？今更よ」

「いや、それは僕が無理や

」

言いかけたところでまた唇をふさがれる。

おまけに舌まで入れられた。

今って、そんな色っぽい状況じゃない筈ですけど!？

護堂は護堂で目をつむって黙認してるし……

「まずアテナの誕生から教えましょう。アテナの母とは一体何者だったのか、アテナとメドウサの関係がいかなるものかを」

影の唇をついばむようにしてキスを繰り返しながら、エリカがささやく。

「ギリシア神話では、アテナの母はメティスとされているわ。ゼウスの最初の妻とされる智慧の女神。でも、この夫婦の結婚は幸せなものではなかったはずよ。メティスは蠅に化けたゼウスに強姦された結果、アテナを身ごもったという話もあるしね」

蛇。

自らの尾に食らいつき、円環を成す蛇の姿が思い浮かぶ。そして雌牛。さらに翼　　鳥のイメージが伝わってくる。

「ゼウスにとってメティスは凌辱の対象でしかなかったんでしょね。彼女を妻としたのは、ゼウスの非道を隠すために神話を書き加えた結果よ。メティスの懐妊を知ったガイアとウラノスは予言するの。生まれてくる子が男児であれば、ゼウスを越える神になるだろうと」

アテナにまつわる知識。

エリカが使う己の知識を伝える《教授》の魔術によって、かの女神が持つ歴史と性質が詳細に伝わってくる。

アテナが太陽を嫌っていた理由はそこにあっただろう。

「子の誕生を恐れたゼウスはメティスを頭から呑み込んで、その存在を葬るわ。そして、智慧の女神である彼女の叡智まで我がものとする。でも、すでにメティスが身ごもっていたアテナは、父なるゼウスの頭から誕生してしまうの」

唇から注ぎ込まれるエリカの言霊が、おそろしい量の情報を伝える。影はそれを全て記憶している。

「つまり、アテナは母メティスの消滅と同時に誕生した女神なの。これはとても重要よ。　　ギリシア語でいう　Metis　の意味は『叡智』。　Medusa　の語源となった言葉でもあるわ」

Metis と Medusa。

この二つは同じ意味を持つ言葉だ。そしてアテナと深く関わる女神の名でもある。

メティスとメドウサ、アテナの成す三位一体。

その意味を僕は唐突に理解した。

唇と舌、甘い吐息と唾液を通して伝わるエリカの知識が、アテナと言う女神の正体を次々と解き明かしていくおかげだった。

影の舌を探す、エリカの舌の動きがなまめかしい。

突き抜けるような心地よさと膨大な情報量が、頭の中を駆け巡る。

もう、このまま身を任せてしまおうか？

決闘の時と同じように目眩すら起こしそうな高揚感に、だんだん流されそうになっていた。

それを見透かしたのか、エリカはくすりと微笑んだ。

「どう？なんなら中止して、普通に講義するけど わたしはこっちの方がいいな。影はどっちがいい？このまま続けるか、つまりないやり方に変えるか……」

いつのまにか唇が離れ、拘束する力が弱まっていた。

わざとエリカが腕を緩めたのだ。

正直、ここまで来て、断るのはかなり難しい。しかし、少し問題のある行為であって

悶々と悩む影を見てエリカは愉しそうな表情をしている。

もう、いいか……ついに反抗心も薄れ、体の力を抜こうとした

そのとき

気付いてしまった。

視界の隅に、頬を赤らめ、異様に舞い上がった様子の女性がいることに

「え？アンナさん？も、もしかして、ずっと見てましたとか？」

「……そういえば。アリアンナ、いつの間に戻ってきたの？」

影とエリカは、同時に同じ方向へ目を向けた。

その先にある細い街灯に隠れるようにして、アンナさんがこちらをうかがっていた。もちろん彼女の全身が隠れ切るはずもなく、興味津々の体なのが丸わかりだった。

「あ、ええと、先に断っておきますと、のぞきではありませんよ。何て言いますか、若いおふたりがあらぬ方向へ暴走しないように、見張っていました！あ、甘々な膝枕が羨ましいなーって思ってたなら、あんなに熱烈に！わたし、すごくドキドキしてしまいました……」

顔を真っ赤にしながら、アンナはいい訳を口走っている。まさか彼女は、全てを見届けていたのか？自分の醜態全て、余すところなく、完膚無きまでに！？

「……アンナさんはいつ合流したんですか？」

「影が眠っている間。そういえば、影が目を覚ましたときは、買い物に行かせてたから姿が見えなかったのね」

迂闊だった。

よく考えればアンナさんがどうしていないんだ？くらい考えついただろうに。

影は途端に穴を掘って、その中に入りたくなった。

「え、ええと、おふたりとも宜しければ、続きをなされてはどうでしょう？わたしなら大丈夫です。い、いないものだと思っただいて

「そうね。アリアンナもああ言ってくれていることだしね。早速

「いやあああああああああああああああああ！！！！！」

影はあらん限りの声で叫んだ。

その時、護堂はこんな調子でアテナを追い払えるのか、ひどく不安になっていた。

十話 光の消えた日

夜

闇と月と星々が天を覆う夜。女神アテナがこよなく愛する時間だしかし、今の世の夜は明るい

天を見上げて星々の光は弱く、ほとんどが地上まで届かない人は闇を忌み嫌う。今に始まった話ではない

偽りの光であふれかえる町中を、アテナは悠然と歩いていく

その歩みはゆつたりしたものだ、その実、人間ではありえないほど速い

彼女が目指すのは、懐かしいゴルゴネイオンの気配

海沿いの路をアテナは進み続ける

徐々に蛇の気配が強まってきた。

復活のときは近い。アテナの頬は自然とゆるみ、唇が微笑の形を作る道中、すれちがった人々が惚けたような目つきで自分を見つめるようになって、アテナは気にしない

人々が神を注視する。当然のことだ

人々が神を崇め、帰依する。当然のことだ

人々は神にすがり、格別の加護を願う。当然のことだ

人々が地上を往く『まつろわぬ神』と邂逅かいこうし、正気を失う。狂気に陥る。錯乱する。狂乱する。全て、当然のことだ

わざわざ立ち止まり、気にかけるほどのものではない

さて、彼はもう蘇ったか？

ふとアテナは、先刻の一幕を思い出した。死の言霊で一度は打ち倒したものの、あのまま死ぬはずがない

知っているのだ。彼の権能を。緋狩影が知らない、無意識で発動しているようなものでさえだから、死ぬはずがない
しかし、彼がそんな権能を所有していなかったら、アテナは彼を殺す事は無かったかもしれない

ただの足止めだったのだ。だが、回復までどれほどの時間を要するかわからない

もう復活している可能性も高い

その折りには、今度こそ武勇を以て屈服させる。いずれにしても、神殺しを警戒する必要はもうないだろう

少し、遊んでみるか

興を覚えたアテナは、今まで注意深く隠していた本質を解き放った

ここは居心地が悪すぎる

人の手で作り出された世界は、彼女にとって不自然すぎるのだ

アテナは夜の街を、悠悠たる足取りで通り抜けていく

彼女が一步進むたびに、彼女が息を吐くことに、街から灯りが一つずつ消えた

まず夜道を照らす街灯が、光を失った

それから民家、オフィス、雑居ビル、商店、飲み屋、ネオン、自動車のヘッドライト、果ては懐中電灯や、ちっぽけな豆電球に至るまで

ありとあらゆる人工の光が消失していく

偽りの陽光が消え失せ、代わりに町を満たすのは真なる闇

たった数メートル先にあるものさえ見通せなくなる、真の深淵

道行く人は、本能がもたらす怯えに苛まれながら闇を見つめ、天を見上げた

愛車の異常に気付いた人は、困惑しながら車道へまろび出た
何処かの軒先に身を寄せた人々は、回復しそうにない照明を恋い、不安に打ちふるえた

闇への恐怖

光を恋う強き想い

朝を待つ人間どもの不安と怯え、諦めと無気力

これぞ正しき夜のあり様

人々の想念を感じ取り、アテナは満足した。興に任せて言霊を口ずさむ

「アテナの真名において命ずる。闇よ来たれ、陽の恵みを追い散らせ。プロメテウスの火をかき消すがいい。天の星々と黒き風よ、古の夜を躪わしめよ」

謡いながら、アテナは進む

まつろわぬアテナは、大地と闇に属する者

深き闇、一片の光すら差さぬ夜の世界は蘇った。あと必要なのは、むせかえるような土の匂い。豊穡の命

「我が求むるは、ゴルゴネイオン！今宵アテナは、古の《蛇》を奪還せん！」

アテナの謡う言霊が響くたび、虚空より鳥の姿が湧き出してくる
夜をもともせずに羽ばたく鳥は、フクロウであった

数十羽のフクロウが飛翔するなか、アテナはひたひたと歩み続ける。ただひたすら、ゴルゴネイオンの気配を辿^{たど}って

都市としての機能を完全に麻痺させる異常事態
大も小も問わず、全ての照明が失われた

時刻は夜の九時を少し過ぎている
人通りは昼間より少ないとはいえ、仕事帰りの人々や地元住民の姿はそれなりにある

こんな形で足止めされて、ある者は怒り、ある者は不安そうに周囲の様子をうかがっている。恐慌を期待している者もいる
怒り、動^ど？、狼狽^{ろうたい}、混乱、困惑

闇に閉ざされてはいても、周囲に集まった人々の惨状は冷静ささえ保っていれば、容易に把握できる

「……とんでもない事態になってきましたな。風雲、急を告げると
いうヤツですかね」

「甘粕さん、そのおっしゃりようは少し不謹慎です。もつと真面目
になさって下さい」

完全に動きを止めた自動車

その運転席に座る青年の眩きを、万里谷祐理は助手席から咎めた
まだ数時間ほどの付き合いだ、わかったことがある。この甘粕冬
馬という正史編纂委員、あまり謹直けんちよくな性格ではない

「ああ、すみません。ですが、真面目にしても気楽にしても、私ら
程度に解決できる事態じゃありませんからねえ。だったら悩むだけ
損じゃありませんか」

「心構えの問題ですっ！まったく……甘粕さんといひ草薙さんとい
い、いい加減な男性が多すぎて困ります！」

「おや、あなたが兄と慕う男性はいい加減ではないのですか？」

「え、影兄さんは、昔よりはだらしくなっていましたけど……それ
でも、草薙さんや甘粕さんよりはとても真面目です！」

愚痴りながらも、祐理は外の様子をうかがう

『まつろわぬ神』らしき超自然の者を、浦安・葛西の近辺で発見

その知らせを七雄神社に甘粕が持ってきたのは二〇分ほど前

現地調査を依頼されて、彼の運転する車で祐理は芝公園から月島まで移動してきた

変化は突然だった

甘粕の乗用車が急にスピードを落とし、徒歩と変わらない程度の速度になったのだ。完全に停車してしまうまで、二分とかならなかった。気づけば街中の明かりが消えていた

車道には、走行不能になった大量の車がひしめき合っている

多くのドライバーが愛車を出て、落ち着かない様子で街を見回していた

「祐理さん、車を捨てましょう。ここでじっとしていても埒があかない」

「いいのですか、置いていたりして？こんなところに放置したら、どなたかの迷惑になるんじゃない……」

盗まれるという発想は祐理には全くもって無いようだ

そんな祐理の優等生さに苦笑しながら、祐理を誘導した

「気にしても仕方ありませんよ、こんな状況じゃ。さ、早く早く」

先に外へ出た甘粕にせかされて、祐理も降車した

二人で歩道へ向かう

見渡す限り、暗闇へ向かう

光と呼べるものは、朧に輝く中空の半月と、薄暗い星座の煌めきのみ

「闇の領域……。降臨しているのは闇の神格を持つ『まつろわぬ神』
ですね。しかも、順調に勢力範囲を拡大中。参ったな、これは」

隣で甘粕がぼやいている

これほど広範囲に、しかも強力な変化を発生させるとは、流石はア
テナ　　ギリシア神話でもっとも高名な女神である

しかし、なぜアテナが闇を広げるのか？そこが祐理にはわからない

ゾクリッ！と

不意に祐理は、強烈な悪寒を感じた

彼女は七雄神社に置いてきた黒曜石のメダル　　ゴルゴネイオン
のことを思い出した

この、何かを探るような偉大な意志の波動

まちがいなく『まつろわぬ神』が、神具を求めて近づいてきている
祐理は戦慄した

これは危ない。羽虫が誘蛾灯ゆっがとうに引き寄せられるように、いずれアテ
ナもゴルゴネイオンの許に到来するだろう。その未来がたやすく予
測できる

「甘粕さん、まずはここを離れましょう。闇の領域を出て、七雄のお社に戻ります。さきほど、お話しした神具　　ゴルゴネイオンを守らなくてはいけません」

「ああ、例のメドウサの似姿とやらですか。了解です。　　でも、なかなか盛り上がってきましたねえ。あとは祐理さんも認めたまの魔王、草薙護堂氏とあなたが兄と慕う彼が登場すれば、役者も出そろうというものです」

「ですから、そういうところが不謹慎だというんです！」

頼るべき光のない闇の中を、ふたりは進む

夜目でも利くのか、先に行く甘粕の足取りは迷いも^{しゅんじゅん}途巡もない

その背中を道標にして、祐理は足元を気遣いながら歩いた。ときどき、何もないところで転びそうになる

街から明かりが無くなるだけで、ここまで不便になるとは

無明の闇がもたらす圧力はどこまでも重く、何より恐ろしかった

祐理と甘粕は、十数分ほどで闇の世界を抜け出した

間近に迫る異常に気づいていなかったタクシーを拾えた幸運もあり、どうにか芝公園の七雄神社まで戻ってくることができた

この神社の敷地内には、平屋造りの社務所がある

とりあえず祐理がゴルゴネイオンをしまったのは、ここの和室だった。彼女専用の個室としてあてがわれている部屋なので、自由に使用できるのだ

境内に甘粕を待たせて、社務所に入る

ゴルゴネイオンと共に戻ると、連れは携帯電話に向けて現状報告らしき話をしている最中だった

「それが問題の神具ですか。蛇神のメダリオンとは、また厄介そうなブツですなあ」

三分ほどで電話を切るなり、甘粕はそう言った

草薙護堂との面談、愛人だというイタリア人少女の出現、到来した女神アテナ。そして、久方である兄との会合　先刻の一幕はすでに報告してある

これだけの非常事態にも関わらず、甘粕冬馬はどこまでもマイペースだった

しかし、この男も正史編纂委員会のエージェントなのだ

ある程度の呪術を修め、なにかしらの武術を身につけ、古今東西のオカルトと神々に詳しい逸材……のはずだ。一応

「このゴルゴネイオンという神具が、私にはアフリカ辺りの出土品

だと思えてなりません。ギリシアの女神に関わる品物にしてはおかしい……ですよね、やっぱり」

あまり期待せずに祐理は質問してみた。

「ああ、いや。それはおかしくありません。プラトン曰く、ギリシアの女神アテナとリビアの女神ネイトは同一の神、ですからね」

「プラトン？」

あっさりと答える甘粕の顔を、祐理は思わず見つめ直した

やはり正史編纂委員会。何だかんだで自分などよりも、遥かに知識は豊富なようだ

「ええ、たしか『ティマイオス』でしたかね。古代ギリシアでは割と有名な話だったのでしよう。ヘロドトスも似たようなことを書いていますよ。『ほとんど全てのギリシアの神々は外の国から招来されたものである』……みたいなことをね」

この解説に、祐理は感心した

巫女として英才教育を受けてきた彼女は、同年代の少女たちよりも博識な方だが、流石にギリシアの古典まではそれんじていない

「もともとギリシア神話の神々は、古代世界のあちらこちらから引っ張ってきた連中が多いんです。出身地を辿ると、エジプト、リビア、バビロニア、シリア……いろいろですよ。さまざまな地方、民族の神様を自分たちの神話に取り込んだ結果ですな」

「そうだったのですか……。知りませんでした」

「なに、日本人の悪い癖です。ずっと島国に閉じこもっていたから、文化が異民族の影響で変質していくという感覚に疎いのですね。……そうそう、例の草薙護堂氏が倒したというウルスラグナ神なんか、元を辿っていくと聖書にも登場していますよ」

「え！？本当ですか？」

「一〇の化身を持つという古代ペルシアの神
どうして世界最大のベストセラーに現れるのか？」

「厳密には、あの神様の遠い祖先ですけどね。前にも言いましたが、ウルスラグナはヘラクレスと習合した勝利の神です。そしてヘラクレスは、各地の英雄神を統合させた神。そのもともとも古い原形のひとつは、古代カナンの神王にして嵐の神であるバルだと言います。この神様、旧約聖書では異教徒の邪神バル・ゼブブとして記述され、後に大悪魔ベルゼブブと名前を変えて新約聖書にも現れるんです」

「つまり、アフリカの女神ネイトが名前を変えてアテナになった…と。そういうことなのでしょうかね？」

この問いかけに、甘粕は曖昧に微笑んだ

「さて、どうでしょう？それに関しては、専門外である私が軽々しく言い切るべきではないと思うのですよ。……実は、それがアテナの厄介なところですね。この女神様はネイトだけでなく、メドウサとも関係が深いらしい」

「確かにメドウサを倒したペルセウスは、アテナの庇護を受けた英雄でしたね」

ギリシア神話の有名なエピソードを祐理は思い出した
数十匹の蛇を頭髮とし、一瞥するだけで人を石に変える妖女メドウサ。ペルセウスが斬り落とした彼女の首は、後にアテナへ献上された

「その神話こそが、メドウサとアテナの絆を暗示するといえますな。献上されたメドウサの首は以後、常にアテナの傍にある。ご存知ですか？古来、女神アテナの像が持つ楯には、必ずと言っていいほどメドウサの似姿が彫られていることを」

そうやって、メドウサはアテナの傍に居続ける

「ついでに言いますと、メドウサも元を辿れば、北アフリカで生まれた大地の女神です。ええ、魔物ではなくてね」

異民族の神を貶めるために、邪悪な魔物として神話に登場させる。無論、物語の最後には打ち倒される運命だ

「しかもね、メドウサ以外にもアテナと縁のありそうな女神はたくさんいるのです。とにかく、似たような奴が多いのですよ」

「似たような、とは？」

厄介そうに言う甘粕へ、祐理はまた訪ねてしまった

本筋とは全く関係の無い無駄話

そのはずなのに、この話題がひどく重要に思えてならない。好奇心ではなく、巫女としての直感がそう言っていた

「アテナと似た名前の女神が、です。南欧や北アフリカ、トルコやシリアを始めとする地中海の沿岸部には、アテナと似た名前の女神が多い。アテナ、アタナ、アトナ、アナタ……アシユラト、アセト、アト・エンナなんて神様もいましたな。ちなみに、さっき言ったバアル神の妹はアナトという戦いの女神です。これも似た名前だ」

「戦いの女神……妹……」

祐理の中で勝手に連想が進む

王たる主神の妹／娘／妻。戦いの女神／蛇の女神／命の女神

「言語学的相似、たとえば発音の似た名前はバカにできません。元は同じ名前だったものが広く伝播てんぱしたために、各地で似かよった地方名を獲得した……そう考えるのが自然ですからね」

ここで甘粕は溜息をついた

微笑を浮かべている。無駄話が過ぎたと思ったのかも知れない

「まあ、アテナはフクロウの化身だといえます。こうして闇を拡散する理由も、その辺りにあるのでしょうか。そうそう、さっきの電話で現地の調査報告を聞きました」

「現地 闇の領域ですね」

「ええ、アテナは千葉方面から都心に向かって高速で移動中。狙いは当然、そのゴルゴネイオンとやらでしょう。移動しながら闇の領域を広め、ついでにフクロウの群れを呼び寄せているそうです。…なんだか台風みたいですねえ、これは」

甘粕はまた不謹慎な冗談を言った直後

七雄神社の境内は、完全な暗闇に閉ざされてしまった

周囲に縁が多いとはいえ、都心のご真ん中なのだ

街灯もあれば、大型商店のネオンもある

夜になっても、この辺りは十分にほの明るいのが通例だった。だと

いうのに今、夜の闇はひたすら深く、どこまでも黒い

空に輝く半月が、ささやかに地を照らすだけだった

「やれやれ、もう女神の影響下に入りましたか……。こりゃいよいよ、魔王様のご出場を願わないと収まりがつかなくなってきましたな」

闇に呑み込まれた境内で、甘粕は虚ろに呟く。そして、思い出したように裕理の方へ向いた

「そういえば彼はどのような神を殺したのか聞いていますか？」

「影兄さんですか？確か……。ロキという名前の神さまだと聞きましたが」

「……彼はとんでもない大物を殺したものですね……。まさか、北欧の悪神とは」

甘粕は裕理の口から出てきた思わぬ神の名に、静かに驚いた

「その、ロキという神さまはお凄いのですか？」

「凄いも何も、悪神ロキは神でありながら神と戦争をした歴史に残る大物ですよ。主神オーディンの義兄弟にして、宿敵。それに、様々な怪物の父とされています」

「影兄さん……一体、何をやっていたのですか……」

裕理は影の人外っぷりに呆れるしかなかった。

十一話 護堂に恋の予感？

「さきほどの闇の中では光だけでなく車も止まってしまいました、あれは何なのでしょう？おかげで事故が起きずに済んでいましたけど……」

さつきから疑問だった点を、祐理は確認した

高速で走る自動車や二輪車のライトが急に消失すれば、事故が多発するはずだ

それが起きなかったのも一重にアテナが光と火を無効化したからである

光と火　つまり、車両のエンジンである火の力も止めたからである

「さすがに追突事故なんかは起きていますけどね、惨事には至っていないようです」

この闇の中では、光と闇を長時間発生させる道具　照明器具意外だとガスやガソリン、灯油などを使用する器具は使えないと甘粕は言う

そのくせ電話や無線、冷房などは普通に使えるのだとも江戸川・江東・中央区の三分の一から半分ほどが闇に吞まれ、いまや港区まで浸食が始まっている

これによって、東京の東部を走る電車の路線は通行停止に陥った

「……理屈に合っているといえは合っていますし、デタラメといえはデタラメですね」

「アテナは、人に仇なす邪神でもないですからね。傍迷惑ではあっても、大惨事になっていない理由はそこにあるのでしよう。この力なら、もっと破滅的な被害を与えることだって難しくないですよ。

……まあ、このまま続けば、時間の問題かもしれません」

甘粕の懸念も、もっともだった

これはいよいよ、早急に退散願わなくてはなるまい

だが、ある懸念がだんだん裕理の中で大きくなっていった

数時間前、緋狩影と草薙護堂は女神に会うと言って飛び出したきりだ。彼らは一向に戻ってこない。代わりにアテナの方が東京にやって来た

しかも、居場所を隠すでもなく狼藉三昧

これはあまりに無警戒過ぎる。カンピオーネが近くにいるのだからもっと慎重になってもよさそうなのに

「まさか影兄さんと草薙さん、アテナと戦って、もう負けてしまったとか？」

裕理はその可能性に気付き、不安になった

魔王の権能を持つはずなのに、なぜか頼りない どころ

か、偉大そうにも見えない、同い年の少年。そして、自分の兄替わりだった、一つ上の先輩

顔を合わせる前は緊張と恐怖。そして、兄の存在に逃げ出したくな

るほどだった

ところが実際に合ってみると、緊張どころか安心してしまい。いつの間にか叱りつけ、不心得を注意するようなことまでいってしまったそれは兄さんも同じだった。昔よりは少々だらしなくなったように感じるが、それはある意味彼の周囲を包んでいた棘がなくなったということだろう

草薙護堂。あの人にはどこか影兄さんと同じようなものを感じる性格こそ、違うが影兄さんと初めて会った時と同じように、不思議と心がほぐれ、遠慮する気持ちが薄れる

もしかしたら、

彼とわたしはある種、相性がいいのかもしれない

カンの良い祐理には、初対面の相手がどのような人物か、ある程度把握できてしまう

そこに思い至って、彼女はぶんぶんと勢いよく頭を振った

あんな優柔不断そうな人と親しいなんて思われたくない。そう、たとえ天地がひっくりかえっても、絶対に！

「あ、あの方と連絡を取ってみましょう。甘粕さん、携帯電話を貸して下さい」

「どうぞ、ご遠慮なく。もし可能であれば、草薙護堂。そして、彼にもアテナを撃退してもらえないか要請して下さい。もう、それ以外の方法では收拾がつかないからですから」

相手の返事を待たずして伸ばした祐理の手へ、長方形の電話機がのせられる

アテナの神力のせい、携帯電話の液晶画面が放つ光がいつもより弱い。しかし、電話の機能はいつも通りだと甘粕は言う

護堂の携帯電話の番号は、別れ際にメモで渡されていた
暗記済みなので、すぐに数字を打ち込む。……ややあってから、応
答があった

『もしもし?』

「万里谷です。草薙さんですね?今、どこにいるんですか!？」

聞き覚えのある声に裕理は叫んだ

『ええと……荒川の近くだから、河西の辺りなんだけど、車も電車
も止まっていて立ち往生しているんだよ。そうだ、先に報告してお
かないことがあるんだ。アテナはゴルゴネイオンを目指して移
動中のはずだ。ヤツが通り過ぎたあとは、光と火が使えなくなる。
気をつけてくれ』

「そんなこと、とっくに承知しています。あなたは一体、今まで何
をしていらしたんですか?アテナはもう港区まで到達してるのです
よ!?!」

『それについては僕のせいです裕理』

「影兄さん!?!」

急に声が変わったと思ったら、影が護堂の電話を借り話している

『……実はアテナに相手に油断したら、ちょっと死にまして……さつき蘇ったばかりです』

「死！？ちよつとつて……影兄さんお体は大丈夫なんですか？もし身動きできないようであれば、すぐに迎えに」

『だ、大丈夫です。気にしないでください。それよりも裕理にお願いがあります。嫌なら断ってくれてかまいません』

「……何でしょう？私にできることなのですか？」

『できる……というより、裕理にしか頼める人間がいません。でも、すごく危険なことなので、強くは頼みません。もし可能なら、移動しているアテナを待ち伏せてください』

「待ち伏せ!？」

アテナ

強大な『まつろわぬ神』を待ち受ける

自殺行為もいいところだ。緋狩影は一体、何をさせるつもりなのか

『アテナが近くに來たら、護堂の名前を呼んでください。そうしてくれれば、僕たちは裕理の傍まで飛んでいける　　らしいです』

「飛ぶ？……ということは、それも草薙さんの権能なんですね？」

『えっと、護堂の顔見知りか名前を呼んでくれれば、その人の傍まで飛んでいける　　って能力のはず、らしいです』

「……先ほどから『らしい』とか『はず』とか、不確かそうな言葉が続いているのは気のせいでしょうか？」

微妙な含みを感じたので、裕理は問いただした

『……あはは、実は本人にも能力の確証がないらしいです。使用者と相手が顔見知りで、相手が危機的状况にあつて、どちらも風が吹く場所にいること。大雑把にはこのような発動条件らしいです』

「ずいぶん不確かで危険な話ですね……普通協力する人間なんているわけがありませんよ」

『僕もそう思います。やはり、この話は無かったことにしましょう。』

裕理、そちらも危険でしょう？ゴルゴネイオンは置いていって構いませんから、早く逃げてください』

自分もそう思うと言っている時点で、本気の要望ではなかったのだらう

だが確かに、こんな反則的な手を使わなければ、彼らがアテナに追いつくのが難しい。その事実には裕理は気付いてしまった
誰かがやるべきことで、自分にしかできないことならば

名乗りを上げるしかないではないか

「わかりました。私はゴルゴネイオンと共にアテナを待ち受けます。……絶対に来て下さいね。私、兄さんとお話してないので、こんなところで死ねませんもの」

死ぬ……か、大げさな表現ではない

強大な『まつろわぬ神』と遭遇する以上、なにが起こっても不思議ではない。もしかしたら、目を合わせただけで、裕理は発狂するかもしれない

それほど、人間とはかけ離れた存在なのだ

『……本当にすみません。あ、護堂に代わります』もしも、万里谷？本当にいいのか？俺が提案しておいてなんだけど、早まるなよ』

「他に手はないのでしょうか？あれば、影兄さんがあんな風におっし

やるはずありませんし。それに、あなたは仕方のない人間ですけど、信用に値する方です」

『い、いや、そう言ってくれるのは嬉しいけど、俺たち今日会ったばかりだぞ？俺なんかを信用するのはどうかと思わないか？』

「私はこれでも、武蔵野の姫巫女です。そういうことは、ちゃんとわかるんですよ。今回だけは手を貸してあげますから、ちゃんと駆けつけて下さいね」

相手の返答を待たずに電話を切る

制止の声をこれ以上聞いたら、せつかくの決心が鈍りそうだった果たして、草薙護堂は今の約束を守ってくれるだろうか？裕理の霊感も、その答えを教えてはくれなかったふと顔を上げる

気が付けば、いつのまにか甘粕と神職たちが寄ってきた

「……祐理さん、いつのまに草薙護堂とそんなに親しくなったのです？」

「バカをおっしゃらないで下さい、甘粕さん。今の話のどこを聞いて『親しく』なんて、どうして思えるんです。それより、私はゴルゴネイオンを持って社を出ます」

怪訝そうな甘粕へ、祐理は淡々と告げた

「草薙さんは権能を使って、こちらへ戻るそうです。私はその手引きをします。でも、この辺りへアテナを呼び出すわけにもいきませんから、もっと人気のない場所に移動しないと。皆さん、後のことをお願いできますか？」

姫巫女の威厳を込めて命じる

丁寧な物言いではあるが、これは命令なのだ。否と言わせるともりはない

「危険です。アテナをおびき出すなら、私がしますよ」

甘粕が口を挟んだ

「駄目です。甘粕さんじゃ、あの人を呼べないみたいですから。私じゃないと駄目なんです。だから、ひとりで参ります」

相手がアテナなら、何人いても同じこと。単独行動の方が、余計な犠牲を出さずに済む

祐理は安心させるつもりで、かすかに微笑んだ

「大丈夫。草薙さんには絶対来いって、言っています。あの人は

多分、こついつときだけは約束を守るはずですよ。そんな気がするんです」

「見知らぬ神に仕える巫女よ。そなたの持つ蛇の印を渡して貰いたい」

静かな夜

異常ではあっても、静寂と沈黙に包まれた夜

その妖しい静けさを乱さぬ、夜風のように涼やかな声だった

「妾はアテナ。ゼウスの娘にして、そこを越えて行く者。そなたの手より《蛇》を強奪する者でもある。異邦の神に属する者への非礼

を、まずは詫びようか」

聖なる存在の濃厚な気配が、一步一步近づいてくる
祐理はその足音がする方を振り返る

ゆっくりと歩み寄ってくる少女がアテナだと、一目で確信できた
月明かりを浴びる処女神の姿は、か細いくせに異様な力感をみなぎ
らせていた

夜風に揺れるアテナの髪が、なぜか禍々しい
煌めく銀の神の一本一本が、祐理には蛇のように思えてならなかった

「古の《蛇》　　ようやく見つけた。これで妾はかつてのアテナ、
まつろわぬアテナへと戻れる。巫女よ、後代まで語り継ぐといい。
三位一体の女王が蘇り、再臨した一幕を」

アテナはただ、小さな掌を前へ差し出しただけだった
ただそれだけで、祐理の持つ包みはほどけ、黒曜石のメダル
ゴルゴネイオンは女神の手中へと飛んでいった

「これこそ、古の《蛇》。ついに妾は過去を取り戻した」

アテナは微笑んでいる
暗闇の中ではあったが、祐理は愉悦の気配をはっきりと感じ取った
さらに女神は天に向けて、高らかに謡い出した

「妾は謡おう、三位一体を成す女神の唄を。天と地と闇をつなぐ、輪廻の知恵を

妾は謡おう、貶められた女神の唄を。忌むべき蛇として討たれた女王の嘆きを

妾は謡おう、引き裂かれた女神の詩を。至高の父に凌辱された慈母の屈辱を

我が名はアテナ。ゼウスの娘にしてアテナイの守護者、永遠の処女

されど、かつては命育む地の大母なり！かつては闇を束ねし冥府の主なり！かつては天の叡智を知る女王なり！ここに誓う、アテナは再び古きアテナとならん！」

朗々と言霊が紡ぎ出される

歌う様に、祈るように、讃えるように

この詠唱が進むにつれて、アテナの姿が変わっていった

背が伸び、すつきりとした手足も伸び切り、可憐な少女の背格好から端麗な乙女の形へ

面差しから幼さも消えていく

外見だけ言えば、十七、八歳ほどに見える。着衣も現代の衣装から、古風な白い長衣となっていた

「まつろわぬ……アテナ　　！」

女神の姿を間近に直視して、祐理の靈感はその本質を唐突に理解した

ここにいるのは、大いなる地母の末裔

ここにいるのは、死と闇を従える暗黒の女王

ここにいるのは、天と地と闇を統べた落魄らくはくせし女王

しかし、それでも抗わなければいけない。この街は神の所有物ではなく、人の手で築かれた、人の為の都なのだ

「お戯れはおやめ下さい、アテナよ！御身にはまだ戦うべき相手が残っています！」

神への造反に震える体を無視して、祐理は力の限り叫んだ

「ほう。巫女よ、興味深いことを申すな。その者の名を告げよ。あるいは、いま妾が思い浮かべている名と同じやもしれぬ」

「神を殺める羅刹の化身、魔術師たちも王と崇める者　　緋狩影
と草薙護堂が御身と戦います！彼らに勝つまでは、かような狼藉は
おやめ下さいませ！」

むしろ面白がるアテナへ、祐理は恐怖をこらえながら言い返した
巫女として英才教育を受けてきた。それ故に、神々の恐怖に異常に
反応してしまう

それなのに、こんな口を利いてしまっている

いや

この震えは恐怖だけではない
体温が常温が下がってきていることに祐理は気づいた。ゴルゴネイオンを取り戻したアテナの間近にいたせいだ。女神が放つ冥府の冷気を浴びて、彼女の身体も死に近づいているのだ！

「ふむ……すまぬな。古き力を取り戻したはいいが、まだ上手く御せぬようだ」

笑みを含んだアテナの声が響く

そこに宿る言霊は、遭遇した時よりも比較にならないほど重厚だった

「しかし、死の息吹を浴びたのはそなただけではないぞ。先ほど、緋狩影にも吹き込んでやった。まあ、彼奴が死の淵から蘇り、また再び妾と相まみえようとする度胸があれば、そなたの願いを聞き届けてやっても構わぬが」

「ならば、決まりです。あの方は未だ死んでいません。私をええ、私を守るために、すぐに駆けつけてくるはずですよ！ご覧なさい！」

この震える足では、まともに立つことさえ難しい
それでも祐理は、膝をつくのをこらえる
さつき約束した使えるかどうか定かでない力

来るか、来ないか。信じて良かったのか、信じるべきでなかったのか
全ての迷いを振り捨てて、祐理は大音声で言った

「草薙さん！草薙護堂！早く来て！私はアテナとここに居ます！早く
あなたの手を必要とするものがいるんです。急いで！」

風が吹いた

初めは夜を渡る微風。すぐに疾風となり、やがて渦巻く強風となる
アテナが瞠目した

渦巻く風を中心に立つ二人の姿がそうさせたのだ

草薙護堂、緋狩影

風と共に忽然と現れたのは、まちがいなくその二人だった

護堂の鋭いまなざしと視線が合う

うなずきかけてくる同い歳の魔王を見た瞬間、祐理の膝は折れ、倒
れ込んでしまった

だが、自然と恐怖は消えていた。

どれだけ未熟でも、どれだけ迂闊でも、彼はきつと帳尻を合わせて
しまつのだらう

守護すべき弱き者と、盟友の危機は必ず救う。その器量なく

して、何が魔王か

草薙護堂は来るべくして、ここに来た

そう直感した祐理は、確かな安堵と信頼を込めて、彼にうなずき返
した

「僕は空気ですか!？」

主人公のはずの男は妹の恋を予感していた

十二話 まつるわぬアテナ

「とにかく、先に進まなきゃ話にならないな。アテナさん、俺たちはここで降ります。ありがとございました」

「アテナさんも早めに退避してくださいね」

礼を言いながら護堂と影は後部座席のドアを開け、車外へ出る。このまま歩いて七雄神社に向かう。正直言ってあまり時間など無いことは百も承知だ。こんなところで足踏みをするつもりはない。

「はい、ご武運をお祈りいたします。影さん、護堂さん、必ず無事でお帰り下さいね。そうしてくれたら、お祝にご馳走を作りますから！」

「そいつは楽しみです。ぜひお願いします」

「……………まあ、楽しみにしておきます」

影は少し前にエリカが言ったことが気になったので、少し言い渋った。

しかし、笑顔で見送ってくれるアテナは、やはり騎士に仕える女性だった。

こんなときでも湿っぽい雰囲気を送り出したりしない。何気なく明るく、再会を約束させる。

「……一応断っておくけど、アリアンナの手作りを食べるときは、ひとりでお願いね。わたしと影は絶対につき合わないから」

「やっぱりですか……」

当然のような顔で一緒に下車したエリカが、隣を歩きながら言う。影がそれにため息を吐くと、その真剣な口調と影の反応に護堂がたじろいだ。

「そういえば、さっき料理が下手みたいなこと言ってたな。そんなにヤバイのか？」

「いいえ、アリアンナの料理の腕は一流よ。ただね、鍋で煮込ませたら危険なの。まちがいでなく、今まで体験したことのない驚異の味をご馳走してくれるわ。お祝いの料理なんて言ったら、絶対に気合を入れて煮込むわよ」

神にも魔王にも物怖じしないエリカを、ここまで警戒させるアナン。つくづく恐ろしい人だ。実際のところそこまでの料理だったら逆に興味があるが、あまり冒険はしないほうがいいだろう。

そんなことより、今はやらなければならぬことがある。

この暗闇も苦しめない三人は、連れ立って歩きだす。

「……それにしても、アテナも好き放題始めたよな」

「影は一度殺されてるし、護堂はなんにもできなかったから、ふたりを警戒する必要は、ないって判断したんでしょ」

「……面目ない」

「すみませんでした……」

ある意味自分たちのせいでもこんな大規模災害が起きているのだ。油断したというのは言い訳にはならない。罪悪感がある。闇に吞まれた街中を、ひたひたと歩く。かなり退屈な旅程になりそうだ。

訂正

エリカがだんだん近づいてきた瞬間、影は思い出した。この女性がいて退屈なんてできるはずがない、むしろ退屈の方が大歓迎だった。

「アテナの横暴を止めるためにも、もつとしっかり『戦士』の準備をするべきだわ。ねえ、さっきの続きを早くはじめましょっよ」

「い、いや、もう『教授』はいいですから！僕の知らなかったことはほとんど覚ええましたし！そんなにキスしたいんなら、護堂としてください！」

「イヤよ」

一刀両断ですか……護堂が可哀想ですよ……
護堂の方をちらりと確認すると若干沈んでいる様子だった。

「それにしても……」

不意にエリカが言う

西葛西の駅前まで来ると、今までよりも騒然といていた

さすがに、余所よりも人が多い

電車が止まったため、足止めを食らった人々が騒ぎたてていたようだが原因不明の停電が発生したため、東西線、総武線を始めとする各路線が一時的に運行を休止中だと、駅員や警官たちがマイクを使って説明していた

その周りに帰宅途中らしき人々が集まって、不安そうに聞きいつている

「停電って、さすがに苦しい言い訳じゃない？」

「そうですね。国のお偉いさんも必死なんじゃないですか？」

「電話とかラジオとかは、普通に使えているみたいだし。ところでイタリアとかヨーロッパだと、こういうときはどんな風に説明をするんだ？」

集まる群衆を眺めながら、三人ははささやき合う

本性を顕した神が降臨した地域では、広範囲に渡って理屈に合わない現象が発生する。魔術師でない普通の人々には、災難もいいところだろう

「大体、ハリケーンとか地震とか、有害ガスが発生したから外出は控えるとかね。まあ、どう説明しても、みんななんとなく察してくれて、大人しくなるんだけど」

「察するって？」

「あの辺り、ヨーロッパ
特に南欧、北欧はイングランド
魔術師の本場。つまり、魔王様のお膝元ですね。だから『まつろわぬ神』やカンピオーネが現れたら、すぐにわかる。ということですよ」

「さすが影。伊達に世界を放浪していたわけじゃないのね」

もちろん、欧州といえどもおおつぴらに魔術師の看板を掲げているわけではない
しかし、エリカの所属する《赤銅黒十字》といった魔術師の秘密結社が、ほとんどの都市に存在するらしい。魔術に関わるものは、ほとんどそういつた秘密結社に所属する。ということに影は友人から聞いたことがあった。

「でも、東京でもこれからヨーロッパみたいになるんじゃない？何と言つても、この街にはふたりも魔王様がいるわけだし。現にこうやって『まつろわぬ神』も来たしね」

「そんなところで、東京都民に察し良くなつて欲しくないよ」

「同感です」

生返事をしながら護堂は七雄神社への早道を考えている

まともな移動手段を使えないのなら、護堂のウルスラグナの権能しかないわけだが……実際のところ影が隠している権能はいくらか不明。移動手段ならあるかもしれない。しかし、晒す筈も無いのだが。

「……やっぱり『風』の力を使うのが一番か。あれはまだ謎な部分があるから、あまり頼りたくないんだよなあ」

「『風』の化身を使うにしても、誰に呼んでもらうつもりなの？」

「裕理ですか？」

「できればそうして欲しいんだけど、そこまで迷惑かけるのも悪いし、どうしたもんかな……？」

三人で悩んでいると、護堂の携帯が鳴り出した。

「もしもし？」

『万里谷です。草薙さんですね？今、どこにいるんですか？』

タイミングのいいことに、話題の当人からかかってきた。しばらく護堂が話すと、影は自分に代わって、さっきの策に協力してくれないか？と頼んだ。

……なんとOKがでてしまった……
自分で頼んでおいて今更だが、これでもう失敗はできない。責任重大だ。

「今の電話、さっき会った女から？」

顔を引き締める護堂の横で、エリカが訊く。

「女とか言うなよ。万里谷祐理だよ。ちゃんと名前で呼べ」

「わかったわよ。……そう、困になるの引き受けてくれたんだ。意外に勇気のある娘なのね」

「勇気というよりも、責任感ですよ。裕理は昔から他人のことばかり優先させる性格でしたので……ここで裕理を無駄死にさせたら、一生の十字架ですね……護堂が」

「連帯責任じゃないんですか!？」

まあ、そのときは連帯責任ですよ。言葉には出さずに影は一人ごちた。

「ねえ、護堂。少し提案があるんだけど、聞いてくれるかしら?」

不意にエリカが言う。

こんなときになんなのだらうか? いぶかしげにエリカを護堂が見つめる。

「なんだよ?なるべく早く済ませてくれ」

「じゃ、直球に行くけど。護堂の愛人一人目はあの万里谷って娘にしておきなさい。あの娘はすごく貴重な人材よ。護堂もそろそろ愛人を作った方がいいでしょ？影にはわたしがいるし、ライバルは少ない方がいいわ。それに、護堂の権能とも相性がいいし、勇気もある。きちんと手なずけておくべきだわ。いい？」

「……………は？」

護堂はまじまじとエリカの顔を見つめ直した

しかし、金髪の悪魔は、少なくとも表情は真剣そのものだった

「あのレベルの霊視術師は滅多にいないの。…………この先、わたしが素性を知らない神と戦うときでも、あの娘に霊視させれば神の属性をある程度は解読してくれるはずよ。あなたの力がわからない以上、必要な人材だと思うけど？」

「変な冗談を言うな！万里谷とまで、あんな真似できるわけがないだろ！」

「わたしは本気よ。こんな冗談、言うわけないでしょ？」

「大体、影さんが許さないだろ！妹分を俺みたいなのヤツに渡すわけ

ないだろ！」

「僕は裕理が護堂のことを好いているのなら、問題はありませんよ。護堂は……まあ、まともということにしておきましょう」

「影さん!？」

護堂は最後の砦であったらう影にまでそう言われて、項垂れるしかなかった。

「まあ、そういうことだから。早く『風』の力を使ってちょうだい」

「はあっ、わかったよ……集中するから静かにしてくれよ」

護堂は手近なガードレールに腰を下ろした。

目をつぶり、精神を集中させる。

今護堂は神経を研ぎ澄ませ、耳。彼方より届く声を、聞き洩らさないように全神経を集中しているのだらう。

影には護堂が聞いているであろう声など一切聞こえないが、その真剣さは表情から窺える。

そして、護堂は裕理の叫びが伝わる瞬間をついに捉えた。

『草薙さん！草薙護堂！早く来て！私はアテナとここに居ます！早

く 貴方の力を必要とするものがあるんです。急いで！』

護堂がカツと目を開く。準備は整った。

後は発動させるだけ。

「いくぞ、エリカ！影さん！つかまってください！」

影とエリカをを招き寄せながら護堂は『風』の化身となった

渦巻く旋風が、足元から沸き起こる

影はエリカを抱きしめ、護堂の腕を掴む。そして、風になって飛んだ

「もう蘇っていたか。見事だぞ、緋狩影！それでこそ妾が認められた魔王よ！」

数時間ぶりに聞く、再会を祝うかのようなアテナの声。

風が散ると、いつの間にか見慣れない車道に立っていた。数メートル

先には憔悴した祐理と、鮮やかな銀髪の乙女がいる。

……まつろわぬアテナ。影が記憶に残した少女の姿はそこには存在しない。

ゴルゴネイオンを取り戻したアテナの姿だと、影と護堂は一目で理解した。

十二話 まつるわぬアテナ（後書き）

最新刊の結末が……

十三話 決戦前

夜目が利くとは言っても、昼間と全て同じように見えるわけではない。

しかし、祐理の只ならぬ様子に、護堂はすぐ気づいた。

「万里谷、大丈夫か！？一体、何をされた？」

「された、というわけではありませんが……。アテナがゴルゴネイオンを取り戻す場に立ち会ったせいで、少し影響を受けてしまいました。お気をつけて下さい、アテナはもう以前のアテナではありません……！」

祐理はゴホゴホと咳き込みました。

見るからに大丈夫そうではない。

護堂は祐理の元に駆け寄って、背中をさする。だが、一向に収まる気配がない。

心配なのは山々だが、警戒は怠れない。影はすっかり姿の変わってしまったアテナを睨む。

「ああ、教えておいてやろう。その巫女、妾の再臨に立ち会ったせいで、我が死の風を浴びた。そのまま放置すれば、死ぬぞ。先ほどの影のようにな」

どうでもよさそうに祐理を眺めていたアテナが、他人事のように言う。

この物言いに、影は少々苛立った。……ああ、やはり違う。

相手は神という存在。天の住人。

姿形は人となんら変わらにが、精神の在りようも倫理観も全く異なる存在なのだ。人間の尺度で量つてはいけない。それは十分に承知していたのだが……やはり影の知っているアテナとは違った。

「……エリカ、お前治せるか、これ？」

「無理ね、わたしはそこまで万能じゃないわよ。『剣』を使いなさい。あれならアテナの呪縛でも切り裂けるはずだから」

「それで助かるんだな!？」

背後に控えるエリカへ護堂が問うと、簡潔な答えが返ってくる。

すぐに護堂は、祐理の肩に手をかけた。細い。

エリカも華奢だが、あちらは非常識な強さを隠し持つ女騎士である。この娘は見た目通りにか細い、巫女としての力を除けば普通の少女のほずだ。こんな負担をかけた護堂は自分と、そしてアテナに腹が立って仕方なかった。

「草薙さん、何をされるおつもりですか？」

裕理は不安げに言う。

護堂はそれを安心させるように背中を撫でながら、輝く黄金の剣を思い浮かべ、聖句を唱える。

「……私は言霊の技を以て、世に義を顕す。これらの呪言は強力にして雄弁なり。強力にして勝利をもたらし、強力にして癒しをもたらす」

剣の言霊。

黄金の剣を振るい、祐理を蝕むアテナの神力を断ち切った。これでもう心配はないだろう。

「む？」「む？」

つまらなそうに顛末を眺めていたアテナが、かすかに眉をひそめた。

「アテナ、もう一度言います。僕たちは貴女が何もせず立ち去るのなら、僕たちは貴女を見逃します。しかし、このままここに留まり続けるのなら、排除します」

姿の変わった女神に言う。

今度は迷いはない。これ以上災害を起こすのなら本気で殺す覚悟がある。たとえ『かつて』の友人であろうが今は違う。敵だ。

「そのように興のないことを申すな。妾は古き三位一体を取り戻したばかりでな、少しばかり遊びたいのだよ」

アテナは拗ねた子供のように言ってみせた。

もう無理だ。

この瞬間護堂と影の肚は固まった。いいだろう、全力で潰してやろうではないか。

「おお、何故かは知らぬがあなたと草薙護堂の怒りを感じるな。どうだ、緋狩影、草薙護堂？そろそろ妾を楽しませてくれぬか？先刻は計略を以って出し抜いた。次は武で競うてみたい」

計略を以って出し抜いたか……あの時の感情は無いようですね。影はアテナと友人だった頃の感情が完全に目の前の女神から消え失せていることがわかった。

目の前にいるのは人間が死のうが生きようが関係のない冷徹な女神なのだ。

「……………草薙さん」

祐理の弱々しい声が後ろから聞こえる。その様子に護堂は拳を握り

しめていた。

元はといえば自分らのせいで裕理を傷つけてしまった。しっかりとアテナにはお返しをしなくてはなるまい。

「万里谷はもう休んでくれ。あの女神の後始末は全部やっておくから」

「はい……。申し訳ありません、私、実は草薙さんのこと見くびっていました。カンピオーネだといっても頼りない、しっかりしていない方だなんて」

「いや、まさにおっしゃる通りだから、全然見くびってかまわないぞ」

「いいえ」

裕理はしつとりとした微笑を浮かべて、首を横に振った。

「あなたは私の危機に、ちゃんと駆けつけて下さいました。まあ、ご自分で呼び込んだ神様が暴れたせいでもありますが、ちゃんと帳尻を合わせてくれる方なんだなって、少し見直しました。本当ですよ?」

「……あんまり見直してる言い方じゃないなア…その言い方は」

「そうでしたか？なら、後でもっと気の利いた誉め方を考えて差し上げます。今は存分にお力をお振るいなさいませ。そのおつもりなんでしょう？。」

やわらかく微笑む裕理に護堂はうなずいてから、立ち上がった。

「ふふふ、まるで夫婦のような会話ですね」

「そうね、これで少しは護堂も成長するかしら？」

エリカと微笑ましい光景を見ながら笑い合っ。こんな状況だが、いいものを見られた。

満足げに微笑むと、影はエリカに『王』として命じる。

「エリカ・ブランデッリ。貴女の誇りにかけて裕理を守ってあげてください」

「仰せのままに、我が君。 ようやく本気を出す気になったのね」

心得たもので、エリカは即座に答えた。
さすがは『ディアボロ・ロッシン紅き悪魔』。緋狩影と草薙護堂がチエスでいう『キング王』ならば彼女こそが縦横無尽の騎士ナイトにして女王クイーンなのだ。

「人間相手に本気は出せませんが、神様相手になら全力でいけますので。それに、アテナにはさっさと元に戻ってもらいませんと」

「やっぱり、影って幼女趣味なの？今のアテナより前の方がいいなんて……だから、わたしからのスキンシップも拒むの？」

「違います！性格的な問題です！」

「冗談よ。なら、おわびと勝利の前祝いよ」

不意に、エリカが身を寄せてきた。
影の頭を横に向かせ、唇に唇を押し付ける。短い触れるようなキス。しかし、十分に熱く、濃厚だった

流れ込むアテナの知識。

頭で少し曖昧だった点が完全になる。そして、エリカの魔術によって一時的に意識を共有している護堂にもそれが伝わり、『剣』も完全な威力を備えた。

「あなたの勝利を祈るわ。叩きのめしてきなさい、まつろわぬアテナを！」

また、唐突に大胆なことを……
だが、ありがたい。これで、護堂は最高の状態で戦えるし、影には
激励となった。なんと言っても、敵は欧州・アフリカ・オリエント
の三界で最強を誇った女神なのだ。
静かにキレた護堂と影は女神へ無造作に言い放った。

「あなたのご要望に応えてやるよ。この国から腕づくで追い出して
やる。俺に負けた後で尻尾を巻いて逃げ出すといい！」

「ちよつと調子に乗りすぎですよ？僕たちを誰だと思ってるんです
？」

「善き哉！ここで雌雄を決するか、神殺したちよ！」

アテナは快哉を叫び、腕を振り上げた。

直後、闇の奥から数十羽のフクロウが羽ばたき、飛来する。

それだけではない。さらに数十匹の蛇が群れをなして這いずつてく
る。

フクロウは猛禽さながらの鋭い爪と牙をもち、蛇どもの体長はどれ
も、五、六メートルを軽く超えている。見るからに毒蛇らしい極彩
色の鱗だった。

まず場所を変えるか。

素早く考えた護堂は、アテナと距離をとるために走り出した。護堂
の意図がわかった影も護堂に続く。

かすかに漂う潮の香り、周囲の目立つ建造物。それらのおかげで、ここがどの辺りか見当はついている。頭に思い描いた地図の中から、ちょうどよさそうな場所を見つけた護堂はそこを目指して駆ける。それを追って鳥と蛇の群れが一斉に移動を始め、女神自身もゆるゆると歩きはじめた。

「でかしたわね、万里谷祐理。あなたが体を張ってくれたおかげで、能ある鷹も爪を出してくれたわ」

残ったエリカは、うづくまる巫女装束の少女に微笑みかけた。裕理は心で「なんで日本の諺なんて知ってるだろうか？」と思った。自分の紅いカーディガンを脱いで、肩にかけてやる。もっとも、祐理の方はそれどころではないという風に険しく睨みつけていたが。

「い、今のはなんですか、一体！？あ、あんな破廉恥な……いやらしい……」

ついさっきまでの穏やかな顔とは大違いの怒りの顔だった。憤懣ふんまんやるかたない様子で、文句を言おうとしている。何が祐理の気に触ったのか理解できず、エリカは小首を傾げた。

「いやらしいって、何が？」

「だから、あれです！その……キ、いえ、影兄さんと別れ際になさっていた、公序良俗に反するような、人前ですべきではないような、アレのことです！」

「もしかして、キスのこと？ああ、もうちょっと勿体つけてからしてあげようとおもってただけど、仕方ないわね。時間もなかったし、初めて影も本気になってくれたし」

言葉の意味を勘違いしたエリカは、やや噛み合わない答えを口にした。

「観ているといいわ。ああなったふたりは、誰よりも強いんだから。勝つために全ての手練手管を駆使して、アテナを攻略しにかかるはずよ」

なぜ礼を言われているのかの呑み込めない祐理へ、エリカはやさしく微笑んだ。

結局、体を使うことには、走りが基本だと思う。

フクロウと蛇の大軍から逃げる影は、つくづく感じた。

今まで何度も危ない目に遭ってきたが、最初に神を殺した時に一番役に立ったのは自分の足だ。

戦うにしても逃げるにしても、走らなければ始まらない。

人間だった頃は絶対に神様の攻撃なんて食らえなかったし、接近するにも足の速さは必要だ。

一応、元々高かった身体能力を衰退させないためにも、家の中で筋力トレーニングは欠かさなかった。そのため、今でもかなりの身体能力を維持していられた。

とはいえ

空からせまるフクロウや稲妻めいた速さで這いずってくる蛇を完全に振り切れるほどの、走力はない。

しかも、いつのまにかフクロウと蛇の数が増えている。

一体どこから湧いて出たのか、フクロウも蛇もすでに一〇〇を越える大群に膨れ上がっていた。

「全ての邪悪なる者よ、我を恐れよ！力ある者も不義なる者も、我を討つ能わず。　　我は最強にして、あらゆる障害を打ち破る者なり！」

護堂が言霊を誦すと、黄金の輝きと太陽のような強い光が一瞬閃く。ただそれだけで、殺到する寸前だったアテナの下僕は、一斉に胴と首を切断されて塵と消えた。

影の権能は大規模に被害を及ぼすか、一体に対し有効かのどちらかなのでここでは使えない。

「ほう……。やはり、奇妙な武具を隠し持っているようだな。切り裂くもの、断ち切る何か　　剣か。剣の言霊か。なかなか凝った趣向だな！」

後方から。余裕さえ漂わせてアテナの声が追いかけてくる。

余裕を保っていられるのも今のうちだ。

すぐに『剣』と影の権能の厄介さがわかるようになる。護堂はアテナの満身に心で返答した。

「ならば、妾も少し遊ぶか。　　かような石の都では、妾の権能

もいささか振るいはないのだが、この程度の芸はできる。それ

！」

「……そんなの、あいか？」

「デタラメな……」

つい振り返ってしまった影と護堂は、背後の光景に呆れる。

アテナの足元。

固いコンクリートの路面が大きく隆起し、女神を乗せたまま鎌首をもたげた。

そう、砂と砂利をセメントで凝固させただけの冷たい物質が、見上げんばかりの高さまで盛り上がり、巨大な蛇のように鎌首をもたげたのだ。

気付けばコンクリート製の大蛇が、ほんの数秒で完成していた。全長二、三〇メートルはある。

くくく、壊しがいがあるじゃないですか……

影はそれを見て獲物を見つけた狼のように獰猛な笑いを浮かべた。

「さあ、我が牙よ。神殺しを押し潰せ！」

アテナが立つコンクリートの大蛇を生みだした後の道路は酷い有様だった。

コンクリートを根こそぎ剥がし取ったため、大河の水が日上がったよ
うな、深く長い溝ができています。

……直すのが大変そうですね。

心の中で整備する人に合掌すると、背の高い木々が鬱蒼うつそうと茂る森
都心の真っ只中のくせに、緑あふれる森が右手に見えてきた。

ここが護堂の目的地だった。

はまりきゅうおんしていえん
浜離宮恩賜庭園

なるほど、考えたな。

開演時間を過ぎていたため人はいない。それに広いため暴れても誰
かを巻き込む心配はないだろう
しかも、囲む壁が低い。

余裕でよじ登れるような高さだ。

後ろを見ると、車道に放置された二輪や四輪車、電柱や歩道のガー
ドレールを押し潰しながら、こちらへ猛追してくる。

自分の姿を十分にさらしながら、影と護堂は庭園の中へ飛び降りた。

十四話 奥の手

「ここが、あなたが選んだ戦場か。随分と貧相な森よな。人間どもはよくこんな小賢しい真似をするが、この島の民は別してそうだ。妾もさまざまな国を渡り歩いてきたが、これほど大地を石で蔽い、闇を拒む民も珍しいぞ」

石造りの大蛇に乗って、ついにアテナが追いついてきた
背の低い外壁を叩き壊し、松林を蛇体で押しつぶしながらの登場だった

「前の貴女はこの国の良さをわかってくれてたのですけどね」

「文明批判はよそでやってくれ。口ハスな生活が好みなら、とつととヨーロッパの山奥に帰るんだな。俺は夜中に本を読みたいから明かりは欲しいし、野菜を安定供給するためには適量の農薬だって必要なんだ。女神様の我儘に付き合ってもらえるか」

「それが人間どもの傲慢さなのだよ。朝が来れば起き、夜が来れば寝ればよい。大地の恵糧だけで満足し、奢侈を望まねば良い。糧が尽きれば死の連環を受け入れ、我が冥府の門をくぐればよい。それだけの話ではないか？」

「ふうっ、すっかり僕が嫌いなタイプ的女性になってしまいました

ね

「さすが女神の仲の女神だな……マリー・アントワネットより質が悪いら」

ひどい理屈に影も護堂も思わずつぶやいた
まあ、かの名言『パンがなければお菓子を食べれば』は後世の創作なんだとよく言われるが……

「さて、話はここまでだ。出会えば戦い、互いに討滅し会うのが我らの逆縁。あなたたちと妾、どちらの武が上か、はっきりさせようではないか」

優雅とさえいえる口調で、アテナは告げる

それを合図に、コンクリートの大蛇が影と護堂の小さな体に向かって這い寄ってきた！

巨体で踏み潰すつもりなのだ！

いくら神殺しでも、あの質量で潰されるのは流石に復活できなくなってしまう

護堂と影はすぐに飛びのいた

そろそろ、力の使い時だ

「蛇か。あなたの力の象徴、いや、貴方の本質そのものだな」

言霊を込めて、護堂は囁く

これこそが剣。神を切り裂く智慧の剣

「あなたは常に、蛇と関わりの深い女神だった。さらに言えば、フクロウ　鳥とも」

「ほう？草薙護堂よ、貴方は我が出自を学んだのか？」

「必要だったからだよ。今の俺は、貴方がどういう神なのか、かなり把握できてる。あなたを読み解く鍵となるのは『蛇』だ」

煌めく

護堂の周りで、黄金の小さな輝きが天の星々のように次々と煌めき出す

「蛇といえばメドウサだ。アテナとメドウサは、もともと同一の神だった。二柱の女神が異邦　北アフリカの大地からギリシアに招来される前の話だ」

アテナの駆ける大蛇が草の茂み、広場の土を挽き潰しながら迫るその蛇行する姿は、さながら地を流れる大河であった

「元を辿れば、あなたこそが蛇の魔物　いや、蛇の女神だったんだ。それだけじゃない。ギリシアの神話ではアテナの母とされる智慧の女神メティス。この女神も、元はあなただった」

護堂を押しつぶす瞬間、大蛇の前進が止まった
自ら止まったのではない

大蛇の目の前には影が赤く染まった細身の剣を握りしめて立っていた

「『クラウン・シュナイター
道化の剣』!」

影がそう叫んだ瞬間

大蛇の首はストーンという音と共に地へ落ちた
切れたところにはかなり鋭利な刃物で裂かれたように綺麗な切り口
ができていた

「剣の権能か!? こんな切り口ただの剣でできるはずがない! なんだそれは!」

アテナが信じられないように叫ぶ

影が握る剣は名工や騎士から見たらただの剣。いや、ただの剣よりも質は悪いだらう。しかし、影はロキの権能『創造』を使用して、『切り裂けない物質はない』という能力を付加した剣を造り出したのだ

一見サルバトーレ・ドニの権能『シルバーアイム・ザ・リッパ斬り裂く銀の腕』に似ているが、この剣はあくまで切り裂けない物質がないだけ。つまり、人間は切

れない。だから、性能は圧倒的に劣る。それどころか、能力を付加した武器は五分ほどで砕けてしまう

「あなたはギリシア出身の女神じゃない。北アフリカ生まれ、地中海の全域で崇拜されるようになった大地の女神だ。そして多くの別名と姿を持つ。メティス、メドウサ、ネイト、アナタ、アトナ、アシュラト　彼女たちは皆、あなたという原初のアテナ（オリジナル）から生まれた分身、姉妹と言ってもいい」

ついに護堂が『剣』を抜いた

抜きざまの一閃で、一筋の光が煌めく。閃光はアテナの乗るコンクリート製の蛇体を存分に薙ぎ、まっふたつに両断してのけた蛇の半身を形作っていた石と砂利の固まりは、轟音を立てて地面に落ちていった

軽やかな身のこなしで、アテナもひらりと地上に舞い降りる

「不快だぞ、草薙護堂！妾を暴き立て、切り刻む『剣』！忌まわしき過去を思い起こさせてくれるな！」

華麗な着地とは裏腹に、憤怒に満ちたアテナの表情

ウルスラグナの第一〇の化身『戦士』

この化身だけが使える『剣』の恐ろしさを、ようやく呑み込めてきたのだ

「あなたはエジプトのイシスやバビロニアのイシュタルと同じ祖を^{ルーツ}

持つ、古き太母神の末裔だ。そもそも大地の女神でありながら、同時に冥府を支配する闇の神でもあった。また、天上の叡智を司る智慧の女神でもあった」

護堂が囁くたびに言葉は言霊となり、言霊は黄金の光となる

この光が鋭い刃となって、女神の身体を切り裂く
怒れるアテナの表情から余裕が消え

「三つの属性を常に併せ持つ、三位一体の女神。それがアテナの特徴なんだ。戦神としての特性は、時代が下るにつれて付加されたものだろう。死をもたらす冥府神が最大の災厄である戦争と結び付き、やがて闘争の神となる。ごく自然な流れだからな」

「聞いた風な口を、よくもぺらぺらと！」

アテナの手に、長弓と矢が現れた

弦を引き絞り、矢を放つ。流石戦神だけあって、護堂の額めがけて性格に飛んでくる

しかし、影が手に持っていた『クラウン・シュナイダー道化の剣』を投降し、一直線に向かった剣は矢を切り裂く

タイムリミットが来た『クラウン・シュナイダー道化の剣』はそのまま空中で木端微塵に砕けた

「残念で〜した」

「おのれえ……………！」

影は女神を小馬鹿にしたような笑顔を作る。その姿はまるで、いかなる時も笑みを絶やさない

道化師のようだった

「そして、あなたの三位一体を生み出す鍵こそが『蛇』だ！」

「言うな！妾の過去、あなたごときに髣髴されるほど安くないぞ！」

今度は、アテナの右手に四本の矢が同時に現れる

それを全て長弓につがえ、同時に打つ

妖しくも見事な弓の妙技

が、同じく四本の剣を空中に出現させ放った影によってまたも阻まれる

「豊穡の大地を象徴する生物には『牛』や『羊』、『豚』もいる。

実際、あなたは雌牛を化身とする地母神でもある。だが、あ

なたの本質は『蛇』だ。蛇こそがアテナを古きアテナたらしめる鍵となるんだ」

今や無数の光を率いる護堂は、さらに囁いた

敵とする神の性質を真に理解したとき、『戦士』の化身を使えるよ

うになる

言霊を黄金の光に変え、神の肉体と神力を切り裂く『剣』の権能
まさに攻防一体の切り札であった

「なぜなら、あなたは大地の恵みだけを司る女神じゃないからだ。
誕生した命は、成長し、熟成し、衰え、そして死ぬ。四季もそうだ。
春に生まれ、夏に盛り、秋に実り、冬に枯れる」

業を煮やしたアテナが、手に反り身の大刀を構えて突進してきた
しかし、影が大太刀を手に出現させそれを阻んだ
そして、剣を交えながらも奥義の詠唱を開始する

「総ては玩具にして武具 総ては総軍にして無限

「!?!?させるかつ!」

アテナの強烈で、鋭い斬撃。だが、視える
余裕さえ持つてかわしながら詠唱を続ける

「 集え武器よ! 武器を執れ! 剣を突き刺せ! 求むるは
勝利 与えるは敗北

我は悪の道化にして無限の軍勢の支配者なり!」

アテナは苦渋の表情を浮かべる。しかし、武器の軍隊はひとつもアテナに当たってはいない。影がアテナを殺さないためだが、自分に降り注ぐ武器の軍隊に阻まれ前へ女神は一步も進めない進んだらそこには『死』が待っている

「護堂！早くしてください！」

影は護堂に催促する。無限といわれた武器の軍が尽きることはない。しかし、体力は確実に尽きる。そうなってしまうたら、もうアテナの足を止められない
元々、影の体力も『創造』の使い過ぎで限界に近かった

「だから『蛇』なんだ。幾度も脱皮し、冬眠と目覚めを繰り返す『蛇』は、死と再生の循環、季節の移ろいを象徴できる生き物だ。豊穡と慈愛の象徴である『雌牛』よりも、命の恵みと禍々しい死の双方をもたらず神にはふさわしい」

古代人にとって、蛇ほど妖しい、神秘に包まれた生物は稀だったはずだ

脱皮を繰り返し、抜け殻を捨て去る。冬は長い眠りにつき、春にはまた目覚める。死からの復活さながらである

冬と春の狭間を軽々と飛び越す、不死の神

冬　　すなわち死をもたらず神は、自然と冥界に属する神にもなるこれこそが、アテナと『蛇』が大地の女神でありながらも冥府神でもある理由だった

そして、古代人の想像する冥界は、おおむね暗い地底に存在する

闇に閉ざされた、冬の世界

同じように闇が支配する時間　　夜も冥界の一部として恐れられるようになる。それゆえにアテナは闇の女神にもなるのだ

そして、武器の雨がやんだ。アテナを中心とした周囲にはいくつもの武器が地面に突き刺さっていた

「我は言霊の技を以て、世に義を顕す。これらの呪言は強力にして雄弁なり。勝利を呼ぶ智慧の剣なり。　　どうだ、アテナ？これはあなたを滅ぼす剣だ。こいつを使って、俺たちは必ず勝利する」

護堂は言霊を吐きながら考える

切り札は存分に見せつけた。これでアテナはどう出る？

傾きかけた形成を一気に五分まで戻せたが、本来の力量では女神の方が圧倒的に有利なのだ。今のように激昂したままで戦ってくれれば、つけこむ余地も増えるのだが

「……………あなたを見くびっていたぞ、草薙護堂」

静かにアテナがつぶやく

さすがは智慧の女神。もう冷静さを取り戻している

やはり、女神相手に楽はできない

「あなたは緋狩影の後ろで守られているだけの臆病者かと思ったが、未熟であっても、あなたは魔王の端くれであった。我ら神々を討つ権能の篡奪者であった。　　今の言霊で、妾も理解したぞ」

アテナの鋭く、決るような視線が護堂を捉える

「ウルスラグナだ！あなたが殺めた神は、ウルスラグナだな！遙か東方のインドラ、我が同胞ヘラクレスともつながる征服神。新たな神王に仕え、その矛として古き神々を倒す『まつろわす神』！」

ゾクリと、護堂の背筋が震えた

女神が本当に舐めるのをやめたら、とてつもなく恐ろしい敵となる……だが、本当か？本当に人間風情と真剣に戦えるのか？人間が蟻に本気で勝負を出来ないように、アテナも人間相手には本気で勝負できないのではないか？

「かの軍神は、古き神々の討伐者。あなたがウルスラグナを殺めたのなら、神殺しの剣を操るのも道理よな。……だが、それだけはあるまい？」

アテナはきつい視線のまま、微笑んだ

「ウルスラグナは勝利の神にして、王権と民衆の守護者でもある。ペルシアの主神ミスラの懐刀だ。ミスラは太陽の化身であり、故にウルスラグナも太陽と結び付く」

見透かされている
智慧の女神としての神力なのか？
護堂はアテナの反則さに参っていた

「あなたがどこまでウルスラグナの権能を掌握しているのかは知らぬが、太陽に関わる神力も所有のはずだな。妾の闇を駆逐するには、太陽の光こそが望ましかろう」

アテナの双眸つばしめが、僅かに細くなる
闇そのものに見つめられた様な感覚
邪視か！

「実に穢らわしき、そして恐るべき『剣』よ。だが、あなたはそれを露骨に使い過ぎる。妾を怒らせ、隙を作りたいのだろうか？わかるのだよ、草薙護堂」

石

石。石。石。石。石。

アテナの視界に入るおぼしき物は、全て石に変じていた
踏みしめる大地、風にそよぐはずの下生えの草、可憐な花卉を持つ小さな花。それら全てが冷たい石になっていた
見る者全てを石に変えたというメドウサの邪視を、アテナは行使したのだ

「かりそめの死、石の棺かひ　これもまた、古き母の力だ。……お
お、流石は神殺し。よく持ちこたえておる。やはり、あなたたちに

は体内に言霊を吹き込まねば駄目か。厄介よな」

護堂の身体も、足元から膝までが石化していた。周囲に比べればだいぶ遅いが、石化が全身をめぐるのも時間の問題だろう

アテナはおそらく、視界内に存在する万物を石化できるのだろう。この力を使えば、東京の全てを石の都に変えることもたやすいはずだが、護堂はもう一人の存在を忘れてはいなかった

「あんたは後ろを確認したらどうなんだ？隙だらけだぞ」

「何ッ!？」

アテナは慌てて、その場から飛び退く

さっきまでアテナのいた場所には十数本の剣が突き刺る。影も足元から膝までが石化していたが、眼さえ見えれば武器を操ることは可能だからできた芸当だ

その隙に護堂は『剣』に新たな言霊を噴き込む

「邪眼を持つ『蛇』の女神メドウサは、あなたが『鳥』とも結びつくことを明確に証明する神格だ!」

乱舞する黄金の太刀筋

光が奔る^{はし}たびに、石と化していた物体は呪縛を解かれ、元の姿を取

り戻した

「メドウサを含めたゴルゴン三姉妹は、蛇を髪とするだけじゃない。その背には黄金の翼を生やしていた。次女の名前エウリュアレの意味は『遠くへ飛翔する者』。そして末妹メドウサは、翼を持つ天馬ペガサスの母でもある！」

地中海地方に伝わる古典的なメドウサの肖像がある

そこでは、この女神は両手に蛇を掴み、頭に鳥を乗せた姿で描かれる。蛇と鳥との関わりを、あからさまに明示しているのだ

「あなたが鳥と結び付くのは、大地と冥界　二つの世界を支配する神だからだ。鳥には異界と現世を往き来する飛翔能力がある。……遥かな昔、俺たちの祖先はそうやって信じてきた。死者の霊は鳥の姿となって天へ上り、あるいは鳥に導かれて冥府へ渡るものだった」

石の固まりになっていた護堂の足が、もとの柔らかさを取り戻していく
血の巡りが回復していく

「だから、地上と冥界を渡り歩くために、アテナが鳥とも一体化するのは必然なんだ。あなたの本質は『蛇』　それも『翼ある蛇』だ！」

「妾を切り刻み、辱め、冷静さを奪おうとしておるな。その手には乗らぬよ」

護堂が『剣』を使えば、アテナは邪視を強める。しかし、影も『想像』を使い石になった部分を取り込み回復していく

石となった大地を黄金の剣が元に戻せば、黒き邪眼が再び石に戻す。急速に回復していく体を再び石に戻す

睨み合いを続ける三者の周囲で、何度も世界が灰色の石となり、そして緑と土の色彩を回復していった

「原初のあなたは、翼を持つ蛇だった。まだ神々が名前を持たなかった時代に、古代人が崇めた生命と死の女神だ。翼ある蛇が時を経て洗練された姿が、まつろわぬアテナなんだ」

「黙るがいい！あなたの策に意味はない！」

「なら、ご静聴願いますよ！！」

刃を交えぬまま、戦いは熾烈さを増していく。

しかし、なかなかアテナは隙を見せない。このまま消耗戦になれば、莫大な神力を持つ女神の方が有利だ

護堂の理想はカウンターだった

自分よりも敵の方が強いことから、まず相手に攻め込ませ、疲れさせて、隙ができたところを逆襲する。とどめを刺すための切り札も

ある

それに、影は恐らくまだ何か奥の手を隠しているのだろう
だが、今はそれを見せる気配はない。それにアテナは護堂の意図に
気付いている

仕方ない。リスクを冒さなければ、勝機も見えなかった
ここで『剣』を使いきる。護堂は肚を据えた

「大地と冥界を統べ、天上の叡智まで司る蛇の女神は、まちがいな
く神々の中でも至高の存在だったはずだ。何者にも及ばない、神の
中の神。最高の権威を持つ、神々の女王だ」

攻防一体の『剣』を使える『戦士』は、神と戦える最強の化身であ
る。

だが、実は大きな制限が存在する

『剣』の言霊は、無制限に使えるわけではない。使えば使うほどキ
レ味が鈍り、なまくらになっていく

そしてウルスラグナの権能では、一つの化身を連続使用できない
丸一日は置かないと、再び同じ化身を使うことはできなかつた。こ
のルールがある以上、護堂が力押しのパワープレイは許されない

「その昔、古代世界の頂点に君臨するのは女性だった。神に仕え、
人々を統治するのは女王の役割だった。だから神々の長も女神

翼ある蛇の女神だった。だが、彼女たちが至高の座を追われる時
が来る。武力を持った男たちが謀反を起こし、女権社会が終わつた
からだ」

護堂は眩き、最強の『剣』を精錬する。

ここで全ての言霊を使い、アテナの神格に大きな瑕きずを穿うがつ。

それが足がかりに、攻略を果たす

戦いのプランなど、いくらでも狂っていく。重要なのは、臨機応変な対応力だ

「女王の時代が終わり、王の時代が始まった。同時に至高の神々も、母なる地母神から厳格な父神へと成り代わった。ゼウスを始めとする、神王の誕生だ」

いま目の前にいるのは、かつて地中海に君臨した神界の女王だ。落魄らくはくし、まつろわされた女王。

その過去を暴く言霊こそが、アテナにとって最も鋭い利剣となる

「古きアテナとその分身たちは、王である神の妻、妹、あるいは娘におとしめられ、かつての栄光を失った。神話の改竄かいざんが行われたんだ」

「……………黙れ」

静かな怒りを込めて、アテナがつぶやいた

「アテナは王の娘となった。メティスは凌辱され、智慧だけ奪われた。メドウサは魔物にまで墮とされた。それだけじゃない。ギリシ

ア神話のヘラもアルテミスもヘカテ も、全て敗北した地母神だ。
あなたと起源を同じくする、生命と死の女神たちだ！」

「黙れと言っている！その言霊、まこと穢らわしい！」

アテナが怒っている

これはいい兆候だがまだ我を忘れるほどではない。そのとき
影と意識が繋がった

（護堂、もう時間がありません。僕は切り札を切ります）

（影さん！切り札って……）

（いいですか、絶対に僕が放つ攻撃に当たらないでください。確実に死にます）

（そんな！そんなに凄い技にリスクはないんですか！？）

（リスクはありません。しかし、体力的な問題があります。もしかしたら、僕は……）

（そんな！やめてください！俺が何とかしますから）

(すいません。もうこれしか)

突然声が切れる。意識が切り離されたようだ

(影さん、影さん！)

護堂が影を呼んでいる中で影は静かに、そして確実に念を込めて言葉紡ぐ

「それは死界の門にて誕生せし災厄の業火。世界をも燃やし尽くすこの炎が総ての穢れと総ての不浄を祓い清める」

この呪文はロキが自ら作り出した最強の武器にして、九つの世界を滅ぼした災害の剣を呼び出すもの

「祓いを及ぼし、穢れを流し、溶かし解放して尊きものへ。すでに神々の黄昏は始まったゆえに。剣は汝を燃やし尽くす炎とならん！」

影の周囲に炎が巻き起こり、天まで昇る円柱を作り出す。その光はこの場所を夜とは思えないほど明るく照らしていた

護堂は遠くにいるのにもかかわらず、かなりの熱さを感じる

(これが、影さんの奥の手か！)

護堂は心の中でつぶやいた。これは確かに奥の手ともいえる。まさしく、闇夜を照らす劫火だった

「レーヴァテイン灼熱世界の最終剣!!!」

影は炎から現れた紅き刀身の大剣を掴む。そして、燃え盛る炎を纏ったまま大剣を振りかざしアテナに迫る

この剣を止めたのは、アテナが生み出した漆黒の鎌だった

あらゆる光を吸い込む、闇の刃を持つ死神の鎌

紅き炎の光を纏った刃と黒き鎌を間に挟み、影とアテナはついに正面から激突を果たした

十四話 奥の手（後書き）

レーヴァテインとはロキが自らルーン文字を唱えて作り出した武器です。なので、主人公が使うとロキが騙して作らさせたミョルニルより、遥かに威力が高くなるという設定です

十五話 魔剣

炎の大剣と闇の鎌がぶつかり合い、軋みを上げる同時にアテナの足元からは闇が広がっていく。そして、闇の拡散と共に気温まで下がっていった。影は炎の出力を上げ寒さに対抗する。

「その一太刀を受けるわけには絶対にかぬな。いかな不死な妾といえども、世界を滅ぼした炎剣で切られては確実に消滅してしまう。ならば暗き禁忌の力を以て、打ち勝ってみせよう！」

アテナは黒き鎌を握る力を強める。だが、負けるわけにはいかない。影も対抗し、大剣を握る腕に力を込め、炎をさらに燃え上がらせる。いつのまにか、影とアテナのぶつかりあっているところを境に空が割れていた。

影の側の空は赤みを帯びた金色に染まり、黄昏時のようになり、アテナの側は広がる闇が空を覆い隠し、月と星々の光さえ消え失せた。混じりけのない暗黒だった。

そして、地面さえも例外ではなかった。遠くから傍観していた護堂は目を見開き驚愕した。アテナの周囲に生える草や花が、あっという間に枯れ果てた。木々もしぼんでいく。

大樹も小枝もことごとく萎え、一瞬で実は塵となり、枝はしおれ、幹は干からびた棒きれのように細くなってしまった。そして、影の周囲も恐ろしいことになっていった。

草や花が枯れるところではない、全て灰になってしまっているのだ。

影がいるところの周囲はもはや焦土と化していた

地獄

まさに、そのようなものを見ているような光景だった。そうでなければ、世界の終末とも形容できた
今まさに互角に渡り合っているふたりは『死』と『終わり』を周囲に振り撒いているのだ！

「妾は冬を招き、死を振りまく者。冷たい冥府の支配者。刈り取り、奪い去る略奪の女王。その妾が命ずる。緋狩影よ、死せる王となり、骸をさらせ！」

鎌で炎の剣を押し返しながら、アテナが言った。ふざけるな！

「冗談じゃありませんよッ！僕は貴女のためにも、こんなところで負けるわけにはいかないんです！」

影は心にたぎる想いと渾身の力を込め剣を握る。すると、『灼熱世界ヴァテインの最終剣』から一気に炎が噴き出す。それと同時に、背中にも炎でできた巨大な翼が出現する

「何だとッ！」

アテナは炎の翼と、炎剣の出力に驚愕する。目の前を見ると黒き鎌がだんだんその形を崩していた
炎のあまりの熱と光に闇の鎌は融解し始めているのだ
そして、ついに柄が折れた

斬。

すかさず、炎剣を横薙ぎに振り、アテナを斬った
言霊と浄化の炎を纏った刃を通して、女神を構成する神格の感触が
伝わってくる

大地、闇、叡智、蛇、鳥、雌牛、女王、老婆、恐るべき女、生まれ
変わる女、不死

その全てを、影は深々と切り裂き、焼き尽くす
同時に、自らの『炎』が燃え尽きるのを感じた

どれほど意識が飛んでいたのだろうか？

数秒か？数分か？気がつけば影もアテナも地に倒れ伏せていた

四肢に力を込め立ち上がろうともがく

一応、痛み分けと言う感じだが、これでアテナを倒せたわけではない。斬った本人がそれを一番理解していた

案の定、アテナがよろよろと身を起しにかかった

傷跡は見つからない。ただ、あちこちの衣服はやぶれ肌が少し露出していた。体の芯に与えたダメージは相当なものだったと思うが

「あはははは、マジですか？僕、かなり本気出しましたよ？あれでも勝てなかつたんですか」

「バカを言つな妾は蛇の女神。あなたも知っておろう？どんな深手を負つても、蛇と女は死なぬのだ。たとえ死しても、何度でも蘇る」

脱皮し、再生する蛇。月経で大量の血を流しながら死ぬことの無い女性

どちらも不死の象徴だ

だが、自慢げなセリフとは裏腹に、アテナの顔は蒼白である

対する影も、『炎』の使い過ぎで体力の消耗が激しい。外傷はないが、魂が少し減った感じがする

結局、両者共に満身創痍で向かい合っていた

「さて、これであなたは『炎』を使い切ったな。妾にはわかっておるぞ」

嫌な事実をアテナに指摘された

全くその通りですよ……

最後の一撃のときに炎翼と『灼熱世界レ・ヴァテインの最終剣』の出力を上げたせいで、体力を全て持っていかれた

もう影に攻防一体の武器はない。いや、正確にはあるが……

「あなたにはもう無限の武器も最強の炎剣もない。さて、どうする？」

アテナが音もなくゆっくりと近づいてくる

ドクンッ！

そのとき、左目が疼いた

不味い！これは！

しかし、アテナはもう触れられるほどの距離に近づいて、鎌を構えていた

「やはり、愛するものを殺めるのは苦しいな。胸の奥が痛むぞ」

駄目です！今の僕に武器を向けないでください！

「……さらばだ、影。妾が初めて愛した男よ」

黒い鎌が振り下ろされる

ガギイイイ！

影に当たる寸前、頭に当たったとは思えないほど鈍い音を発し、鎌が弾かれた

「む？何だ、それは!？」

影の左目からは剣……のようなものが出ていた。しかし、剣の刀身は黒く、大きな眼球や鋭利な歯の生えた口まで付いている。剣と呼ぶよりは完全に化け物だった
さすがにアテナも驚き、後ろへ下がる

「があああああああああつっつ!?!?!」

空気を裂くような影の叫び声が響き渡る。そして、剣の姿をした化け物も左目から血を撒き散らし、徐々に這い出てくる

「あ、アテナっ！逃げてください！今すぐに！護堂も！」

影は必死に痛みを耐え叫んだ。しかし、護堂は腰を抜かして立ってないし、アテナはその場から立ち去る様子はなかった

「Blood! Blood! Blood! Blood! Blood!

Blood! Blood! Blood! Blood!
Blood! Blood! Blood! Blood!
Blood! Blood! Blood! Blood!
Blood! Blood! Blood! Blood!
Blood! Blood! Blood! Blood!
Blood! Blood! Blood! Blood!
Blood! Blood! Blood! Blood!
Blood! Blood! Blood! Blood!
Blood! Blood! Blood! Blood!
Blood! Blood! Blood! Blood!
Blood! Blood! Blood! Blood!

化け物は気味の悪い声でそう叫び、影の左目から、アテナに襲いかかる

早い!

「ぐっ!」

アテナは咄嗟に反応し、なんとか鎌で弾いたが、やはり、さっきのダメージが残っていたようで、すぐに倒れてしまった

怪物の口がアテナに迫る

だが、それは横から飛び出て来た者の剣によって阻まれる

「ちょっと、護堂! そんなところで腰抜かしてないで戦って!」

「おぬしは……」

「エリカ!??」

化け物の攻撃を阻んだのは金髪の美少女

エリカだった

アテナは自分にきた攻撃を敵であるはずの彼女に防がれたことに疑問を感じていた

エリカはそのまま、剣の怪物と打ち合いを始めた

「なぜ、妾を庇ったのだ！妾はおぬしらの敵であるぞ！」

剣の怪物と打ち合っている、エリカにアテナは問う

刃と刃のぶつかりあう、鈍い音を発しながらエリカは答える

「わからないわよ！なんでわたしだって『まつろわぬ神』を助けたのなんか！でもね、あなたが死ぬと影が悲しむと思ったのよ！」

「！そうか………影が………か」

アテナは納得したような表情を浮かべると、護堂に近付き言った

「草薙護堂。あなたの力を貸していただきたい。影を救うためには必要なのだ」

「？何をするんだ」

護堂はもちろん影を助けたいとは思っているが、自分は何をすればよいのかわからない
ただ、エリカと互角に打ち合っている、怪物と真正面から相対する事は自殺行為だろう

「おそらく、あの剣の化け物は悪魔と同じような存在。あなたの『馬』の力を使えば滅せるかもしれぬ」

ウルスラグナ第三の化身『白馬』

古来、『馬』は太陽神と密接に結びつく獣だった

馬車に乗り、東から西へと空を駆ける太陽神　これは、多くの文明で普遍的に見出せる伝承である

オリエント、インド、北欧、中国、バビロニア。いずれも例外ではない

ギリシア神話の太陽神アポロンもそうだ

彼と習合したペルシアの光明神ミスラも、同様の神話を持つ

ならば、ミスラに仕えるウルスラグナの化身する白馬も、太陽を運ぶのが道理

悪魔は太陽の光を嫌い、地の底に住んでいた。あの剣が悪魔と同じような存在なら、太陽は最大の弱点だ！

「けど、あれは発動条件が『民衆を苦しめる大罪人』を対象にしなければいけないんだけど……影さんは『民衆を苦しめる大罪人』じゃないよな？」

「妾を対象にすればよかるつに。案ずるな、まだ妾は力が残っておるゆえ、防ぐことくらい可能だ」

その手があつたか

確かに今回はアテナがいろいろとやりすぎたせいで、アテナを対象にすれば『白馬』が使える

護堂がイメージするのは白き雄馬。太陽の光を浴びて、真っ白に輝く悍馬の勇姿

「我が元に来たれ、勝利のために。不死の光を浴びて、我がために輝ける駿馬しゅんまを遣わし給え。駿足にして靈妙なる馬よ、汝の主たる光輪を疾く運べ！」

「いくぞアテナ！死ぬなよ」

光の箭やが、太陽神の長槍と光輝く槍が、天空から降る

咎人を灼き尽くす清めの焔だった

遙か東の空より天にかけて、超々高熱のフレアが地上に舞い降りてきたのだ

「オ、オオオオオオオオツ！」

十六話 戦闘終了後

「う、ううん……？」

影は左目に少々の痛みを感じながら、目を覚ました
その顔を、護堂、エリカ、裕理、アテナが覗きこんでいた。アテナ
は元のように体が小さくなっていたが

「やっと目を覚ましたわね」

開口一番にエリカが言った

よく見ると、皆心配そうな顔をしている。アテナでさえも

「えと、一体何がどうなったのですか？」

「アテナがあなたに鎌を向けた瞬間に、左目から変な化け物が出て
きて、わたしたちを襲ったのよ。覚えていない？」

そくだ、思い出した。確か……『炎』の使い過ぎでぶっ倒れて、そ
の後『アレ』が目を覚まし、表へ出てきたのか……
左目から感じる痛みから『アレ』の出現を現実だと認識する

「あれは一体何だったの？悪魔？怪物？それとも権能？」

「太陽光に弱いとみると、悪魔のようだが……」

エリカとアテナが思ったことを口にする

だが、『アレ』は悪魔でも、怪物でもない。そのふたつよりは権能に近いが、権能でもない

「その話は、後にしようぜ。影さん疲れてるだろうし」

護堂が影の表情から状態を察したらしく、二人に言う。すると二人は逆に僕に近寄って来た

「影、疲れてるんだったら、膝枕してあげるわよ？きっと疲れもすぐにとれるわ」

「む、影よ。妾がしてやつてもよいのだぞ？膝枕など他の者には絶対せぬのだから。感謝するといい」

二人が同時に言う

すると、二人は影の目の前で熱い火花を散らし始めた

「裕理、それは巫女の力として見極めたものですか？アテナが危険だと」

「いえ、普通に考えただけです……。そんなこと、巫女でなくともわかります」

祐理の答えを聞いて、影は安心した

不吉な予知をされても同じ結論を出したと思うが、それでも気休めくらいにはなる

「なら、この辺で手打ちにしましょう。アテナ、聞きましたよね？僕はどうしても貴女を殺したくありません。早く立ち去った方がよろしいですよ」

「何故殺さない？妾を屠れば、新たな権能を篡奪できるぞ？あなたはさらに強い神殺しになれるのだ。その好機を、何故見逃す？」

ふてくされたように言うアテナに、影は少し微笑んで言う

「もう、僕には神の権能はいりませんよ。十分強き力を持っていますね。それに、初めから貴女を殺す気はありませんでしたよ」

「何？」

「僕は力に固執した貴女を止めようとしただけです。止めようとしただけなのに、殺してはいけなんでしょう？それに……僕たちは友人ですから」

アテナが目を見開く

エリカと裕理は何か言いたげだが、視線で制しながら続ける

「間違った友人を止めるのは友人の役目です。当たり前なんですよ。貴女が僕のことを友人とってくれてくれるかどうかはわかりませんが、どうしても納得できないのなら、今から貴女と僕は友人です。古来より勝者の言うことを聞くのは敗者の義務でしょう」

だいぶ背が低くなったアテナへ、影は問いかける
女神は長い沈黙のあとで、ようやく頷いた

「……………よかろう。敗者は勝者の言い分に従うのみ。次もまた戦うのか否かは知らぬが、できれば戦いたくはないな。これは、かつて別れたときにも言ったか？」

「あはは、そうですね。前も言っていましたよ、それ」

銀の髪を揺らして、アテナはゆっくりと立ち上がった

「ふ、そうであったか。影、あなたは確かに妾の友だ。そのことをありがたく思う。さらばだ、影！近いうちにまた会おうぞー！」

影たちに背を向けると、アテナはゆっくりと歩き出した
その小さな背中が見えなくなってから、エリカがわざとらしくため息をついた

「あのね影、『まつろわぬ神』に勝っても命を奪わなければ権能は増えないのよ？」

「知っていますよ。それに、殺しても殺しても際限はありませんしね」

神々は、再生はおろか復活まで、平気でこなす。不死身の怪物ぞろいだ。まあ、殺さずに封じるといふ手もなくはないが……

「まあ、そうだけど、殺す気なんて始めから無かったんでしょう？あー、愛人が増えた。こんな調子じゃ先が思いやられるわ」

「愛人じゃありませんって……」

「あーそうだ、万里谷は平気か？だいぶ弱ってたみたいけど」

空気に耐えきれなくなった護堂が、裕理に訊ねた

「私でしたら、もう問題ありません。草薙さんに助けをいただいたおかげですね。本当にありがとうございます」

裕理の言葉はどこか冷たさを感じさせた
丁寧語のひとつひとつが刺々しい

「草薙さん、そして、影兄さん。何故周囲にもっと気を遣われないのですか！この庭園なんて、酷いなんてものじゃありませんけど、あれの後始末をどうなさるおつもりなんですか！！」

凜々しい顔で裕理が指さした先

遙か上方、夜空に浮かぶ惨状を目撃した瞬間、影と護堂は絶句した

「「げっ……」」

天高くそびえ立つ、とある高層ビルの屋上付近

このビルの屋上が、三分の二ほどごっそりと削り取られていた。ま

るでバターの山をナイフで削り取りでもしたかのように、綺麗さっぱりと消え失せていた

そして、その斜め下にある首都高の高架線

こちらも、その箇所がごっそりと消失していた。まるで氷柱をバーナーの火で溶かしてもしたかのように、綺麗さっぱり消え失せていたまちがいなく、『白馬』の焔を天から落としたときに巻き込んだものだろう

余程の高熱だったのか、消滅した高架線の周囲が、どろどろに溶解しているのが見えた。アメでもバターでも氷でもなく、鉄筋のコンクリートだというのに

「ああいうのって、溶けた部分だけ直したりできるのかしらね？」

「どうかかな。できるとしても、結構な手間になりそうだ。特に、ビルの上なんか足場組むだえでも大変そうだなぞ」

「工事をする人たちに合掌しましょうか」

影の言うとおりに三人はビルの屋上に向かって合掌した

これは、つい現実から逃避したくなってしまったので、手を合わせたくなったのだ

「私、昼間に申し上げたばかりですよ？あなたは周囲への配慮が足らな過ぎる、と。あれから一日も経たないというのに、何て失態ですか！」

「すいません……」

「ごめんなさい……」

影と護堂はすっかり小さくなり、先ほど女神と激戦を繰り広げていた『魔王』とは思えない情けのない姿だった

十六話 戦闘終了後（後書き）

次で、一章は終わりです。長かった……

終話 編入生は妹？

アテナと対決した夜の翌日は、土曜日だった

世間一般と同じように城楠学園も休日だ

普通の土曜日なら書庫で読書なのだが、今日は普通の土曜日では無かった

「影、ちよつと！今の見た！？凄い！わたしもこんな風に敵を薙ぎ倒してみたいわ」

エリカは僕の屋敷のテレビを見て子供のようにはしゃいでいた

画面からは「アタツ！」だの「ホアタ！」だの聞こえる

すっかり忘れていた……エリカ、ここに住むって言ってたっけ……

ついでに、見ているのは『ドラゴン危機一髪』というブルース・リ

ー主演のアクション映画だ

「あははははははは………」

影はただ苦笑いするしかない。テレビはあるにしても滅多に付けない。この家にはテレビのような音も不釣り合いだ

『キーン コーンー！』

不意にチャイムが鳴る。最近によくチャイムが鳴るなあ

「エリカ、僕はちょっと出てきます……って、聞いてませんか」

エリカは画面に釘付けになっており、こちらの声は届いていないようだ

まあ、いいか

階段を下り、玄関のドアを開ける

「はい、どちらさま……で？」

ドアを開けてまず見えたのは、猫耳の生えたような紺色の帽子
まさか……

視線を下におろすと、銀髪の少女の外見をした女神
アテナ
がいた

「……えと、とりあえず、上がりますか？」

「そうさせてもらおう」

かける言葉が思いつかなかったので、とりあえず家に入れることに
した

アテナはエリカが初めてここに来た時と同じように屋敷の中を見渡

している

「なかなか良い屋敷だな、影。ひとりで暮らしておるのか？」

「あゝ、つい最近まではそうだったんですけど「影」、ちょっといきなりいなくなるからびっくりしたわ……よ？」

タイミングがいいのか悪いのか、エリカが二階から降りてきたそして、目の前にいるアテナを見て驚愕する

「な、ななんぞ、あなたがここにいるのよ！」

「それは妾の台詞だ！なぜお主が影の屋敷におるのだ！」

「わたしはここで暮らしているのよ？影の妻としてね」

……いや、だから妻にした覚えは……

「ふん！戯言を。どうせ、影の性格を利用して住まわせてもらっておるのだろっ？この雌狐が」

「はあっ、了解しました。部屋は適当に使って下さい。二階にありますが」

「うむ。恩に切るぞ」

アテナは影に礼を言った後、階段をトテトテと上っていった

「ちょっと、影！本気なの？神さまと暮らすなんて」

「仕方ないでしょう？アテナも行く場所がないでしょうし、エリカを特別とするわけにはいかないですし……」

「……まあ、いいわ（早めに影を誘惑しておかないとアテナに取られてしまうかもしれないわね）」

「すみませんね」

「謝る事はないわ。あなたはこの屋敷の主。あなたが決めたことに意を唱える権利はないわ」

「ありがとうございます。今日の夕飯は少し豪華にしましょうか」

「ふふふっ、それは楽しみだわ」

「影っ！妾は影の右隣の部屋に決めたぞ！」

「それは、よかったです。って、なんで僕の部屋分かったんですか
！」

「ふ、なに神力を使えば人がいた気配など簡単にわかる」

そんなことで、神力を使わないでくださいよ……

影は少々呆れながらも、これから楽しくなりそうな生活に胸を弾ませていた

「で、それはなんですか？僕の記憶が正しければうちの学校の女子用制服ですが？」

「もちろん。今日から影と同じ学校に留学する事になったわ。護堂のクラスにね。影はひとつ年上だから学年は違うけど、休み時間には会いに行くわ。キャッ！まるで、熱々のカップルみたいね」

「……………」

何にも言えません……

しかし、影は忘れていた。エリカがこの状態なのをアテナが黙っているはずがないと

学校へ行く途中、護堂、裕理と偶然合流したが、エリカが影の腕にしがみついて離れなかったので、裕理は冷たい視線でそれを見ていた
他にも、通学路の生徒も影とエリカの様子を見て、嫉妬や憧れの視線を送っていた

「それじゃあね、影。休み時間に二年の教室へ行くわ。待っててね」

「あはは……無理に来なくてもいいですよ……」

僕が言い終わる前にエリカはさっさと職員室へ入って行ってしまった

「影さん……ファイトですー!!」

「影兄さんがすっかりしないから、エリカさんが付け上がるのですよー！」

「……面目ない」

護堂と裕理は個々の反応を影に残しながら、教室へ向かった。僕も早く行くか……

「ええー、今日は編入生を紹介する」

教室にて、担任が言う。今朝は酷い目にあつた……
教室に入るや否や、女子と男子が雪崩のように僕に突っ込んできた

「緋狩！お前、あの金髪美女は誰だ！恋人か？恋人なのか！？」

「緋狩くん！あの女は誰？緋狩くんの恋人？恋人なの！？」

といった具合に、質問攻めだ。予想はしていたが……

「編入生。入ってこい」

担任がそう言うと、教室のドアが開く

影は目を疑った。何度も目をこする。なにせ教室に入って来たのは

「緋狩アテナだ。そこにいる緋狩影の双子の妹だ。これからよろしく頼む」

アテナは影を指さした後、一礼した

なんで、アテナがいるんですかッ！

それに、僕の双子の妹って……なんでそんなことに！

影はクラス中男子の嫉妬に満ちた視線に耐えることしかできなかった

一話 最近の朝

サーシャ・デヤンスタール・ヴォバン

『ヴォンバン侯爵』と呼ばれる彼だが、決して高貴の出ではない十八世紀前半、現代で言うハンガリーの出身の近辺で誕生した彼は、生後まもなく天涯孤独の身になったという。その日のパンを得るのにも困窮し、各地を転々と放浪する生活を十数年も続けた少年は、ある日神殺しに成功しカンピオーネへと成り上がる

カンピオーネとは殺害した神の所有する『権能』を我がものとする者である。魔術師からは『王』と呼ばれ畏怖される存在であるだが、彼はまだ『侯爵』ではなかった

それから数年後、近隣を治める領主の城を襲った彼は、侯爵の地位と領土まで篡奪する。結局この身分は数年で飽きて放り出すのだが、今も続く『ヴォンバン侯爵』の由来となったのだ

尚、家名のヴォンバンは、自ら追い落とした前侯爵が『ヴォバン』なる猛犬を飼っていたと知った彼は、自らの家名をヴォバンとし、前侯爵に己の親族　　つまり、かつての飼い犬の世話係を命じたのである……

どこの国にでもありそうな、高級ホテルのスイート

豪奢で快適ではあったが、魔王の宮殿と呼ぶにはあまりに平凡な室内で、その『謁見』は行われていた

部屋の主の名はサーシャ・デヤンスタール・ヴォバン

世界中の魔術師たちから王、魔王と畏怖されるカンピオーネの一人だった

彼らは皆、『権能』と呼ばれる絶大な魔力の所有者である。それらは全て、この魔王たちが自ら殺めた神々から奪い取ったものなのだ

「君がクラニチャールの孫娘か。四年前にも会っていたはずだが、君の顔には見覚えがないな。……ああ。物覚えの悪い老いぼれだと思わないでくれ。君たちの年代は成長が早すぎるのだよ。私でなくとも、似たようなものだろうさ」

彼の声は明晰で、知的ですらある

容姿もそうだ。広い額と、深く窪んだ眼窩を持ち、顔色はひどく青白い。どこかの大学で教鞭を執っていると言われれば、誰しもが納得するだろう

銀色の髪には綺麗に撫でつけられ、ひげも丁寧に剃り上げられている

「無理もございません。あの子のわたしはまだ小さく、あの日、

侯とお会いした時間も一〇分とありませんでしたから。どうか、お気になさらぬよう

リリアナ・クラニチャールは儀礼的に返答しながら、騎士の礼を取った

膝をつき、右手を胸に当てる

ホテルのスイートで行う挨拶としては、ひどく異例だろう。しかし『王』と相對した以上、騎士たる者には相応の礼を尽くす義務がある

魔術結社《青銅黒十字》に所属するリリアナは、まだ一六歳妖精を思わせる端正な顔立ちは、可憐さよりも凜々しさの成分の方がやや強い。銀褐色の長い髪をポニーテールにしてまとめているしかし、彼女は若くとも大騎士の称号を持つ魔術師だった

世界各地から逸材の集まるミラノでも、彼女に比肩しうる才能は宿敵 赤銅黒十字 のエリカ・ブランデッリしかない

「それは結構。さて、知っているとは思いますが、私は気短な性分ですね。さっそく本題に入らせてもらおう。君をわざわざミラノから呼び寄せた理由についてだ」

エメラルド
緑柱石の色の瞳を、ヴォバンはわずかに細めた

この邪眼が輝くとき、視線の先に立つ生者は塩の固まりと化す。ケルトの魔神バロールから篡奪したとわれる権能であった

『ソドムの瞳』 『貪る群狼』 『疾風怒濤』 『死せる従僕の檻』

彼が所有するという権能の数々を、欧州の魔術師で知らぬ者はいないだろう

「四年前の儀式を忘れてはおるまい？『まつろわぬ神』を招来する大呪たいしじゆの儀 あれだ。君たちに協力してもらったあの秘儀を、もう一度試してみようと思っっているのだよ」

リリアナはまじまじと、魔王の顔を見つめ返した。

すくなからぬ犠牲を出した、あの大魔術。あれほど危険な儀式をふたたび試みようとするのはなぜか？一瞬だけ疑問に思い、すぐにリリアナは気づいた

神殺し（カンピオーネ）が神を招来する。戦うため以外に理由などあるものか

「あのときは、サルバトーレめにしてやられた。招来された神を横取りし、先に手をつける痴れ者がいるとは予想していなかった。まさか、あんな若造が世に出ていたとは思ってもいなかったからな！」

「あと三月もすれば、『まつろわぬ神』を呼び出すに足る星の配列、地脈の流れが四年ぶりに整うらしい。私はその種の知識には疎いのだが、詳しいものに確かめさせた。 そうなのだろう、カスパール？」

いきなりヴォバンが、愉しげな視線をリリアナの背後に向けた

ぞくり

背後に不気味な悪寒と、そして何者かの気配を感じてリリアナは焦った。大騎士である自分の背後を取るとは、一体何者なのだ！？慌てて振り向き、嘆息した

背後にたたずんでいたのは、黒衣をまとった老人だった。ヴォバンの問いに、老人はぎこちなく、油の切れた機械仕掛けのように頷いてみせる
蒼白色の顔に表情はない。目にも光がない。ひどく虚ろで、焦点もあっていない
死相

そうとしか言いようのない顔色の老人は、動く死体そのものだった

「（　　）これが『死せる従僕』たち！」

老王の権能のひとつを、リリアナはすぐに思い出した

自ら屠^{ほぶ}つた人間を、生ける死者^{シビンクネット}としてこの世にとどめ置き、忠実な従僕として絶対服従させる

何とむごい。リリアナはそう思わずにはいられなかった

この死体はおそらく、只人でありながら魔王に抗い、立ち向かった魔術師の一人なのだろう。並の勇気のできる真似ではない。敬意すら覚える

だが、この権能はそんな勇者の死を汚し、尊厳をおとしめる

名門クラニチャール家の血を引き、魔術結社《青銅黒十字》に所属するリリアナに、魔王への反抗は許されない。そうでなかったら、今すぐ立ち去りたいところだ

……いや

イタリアの魔術師が盟主と仰ぐサルバトーレ・ドニさえ万全の状態であれば、彼の庇護^{たの}を恃み、それもできたかもしれない。だが、今は無理だ

二か月前の負傷が癒えたばかりの彼に、カンピオーネ相手の抗争はまだ早いだろう

欲を言えばこの場には彼女が数年間ずっと思い続けている彼がいて

欲しかった

「クラニチャールよ。君は、四年前に私が集めた巫女の一人であった。今、最も優れた巫力ふりよくを持っているのは誰か、知っているか？」

神を招来するために、王の強権で集められた数十人の巫女たち。儀式を終えたあと、彼女たちの三分の二が正気を失い、心に深い傷を負ったという

リリアナは幸運にも、無事であった方の三分の一に属していた

「あのときは、量よりも質が重要だと思い知らされた。有象無象を集めるよりも、飛び抜けて優れた巫女を選びすぐり、そろえるべきだったとな」

エメラルドの邪眼が、面白げにリリアナを射抜く
まるで、彼女が抱いた本意を見抜きでもしているかのように

「……すみません。私には測りかねます」

この一瞬、リリアナはヴォバンに嘘をついた。

今最も優れた巫力ふりよくを持っている人物は、東洋人だ
たしか私とそう変わらない娘だったはずだ。そんな娘にこんな重荷を背負わせるわけにはいかない

ならば、誇りある騎士としてリリアナはヴォバンに嘘をついた

「そうかね？君は知っているかと思つていたのだがね……。まあ、いい。それならば、私のつてで調べた巫女の元に当たつてみるとしよう」

そのときリリアナは嫌な予感がした

……もしかして、その人物は

「名はマリヤ。日本人、出身は東京だったな。どうだ？名くらい聞いたことがあるだろう？」

……知られていた。ならば、私はあえてこの件に深く関わり、無用な犠牲は出さないように力を尽くす
持ち前の正義感にまかせて、リリアナは決意した

「はい、聞いたことがございます。 僭越せんえつながら、わたしにお命じただければ、彼女を探し出し、御前に連れ出してみせます」

頭を垂れながら、申し出る。だが返答は、予想外のものだった

「もっとよいアイデアがあるぞ。私がこの足で、日本に往こうと思つのだよ。ふむ、考えてみれば久しぶりだな、海を越えるのは」

「カンピオーネたる侯が、御自ら？」

「私にも、異国の空気を吸いたくなるときぐらいある。よいではないか？ 老い先短い老人が、つかの間のバカンスを楽しみたいと言っているだけだぞ」

笑えないユーモアを交えた意思表示で、魔王は女騎士の反論を封じ込んだ

「だが、供の者はいた方がたしかに便利だな。君にその役を命じよう。異論は？」

あっても口に出せるはずもない
受諾するリリアナを、ヴォバンは満足そうに眺めつつ言った

「では、一時間で準備を済ませ給え。一秒たりとも待たぬので、そのつもりでいてくれ」

「承知しました。それで……あの……」

「む？ 何か言いたいことがあるのか？ 構わん申してみよ」

何か言いたげにしているリリアナにヴォンバンは申せと促す
リリアナは少し躊躇しながら答える

「あの……シャッテンさまはお見つかりになられましたでしょうか……？」

シャッテン。その名が出てきたことにヴォバンの表情が少し歪む

「あやつか……従僕を放って探しておるが、全く見つからんよ」

「そうですか……」

彼女の思い人が、見つかっていないという返答を聞いてリリアナは
少し落胆した

「そういえば、君とあやつは数年前まで許婚だったな。まだ、あやつ
のことを思っているのか？」

彼女の思い人、名前はシャッテン。彼はヴォバン侯爵の息子であり、
彼女の許婚だった。ほぼ、生まれたときから決まっていたような関
係。彼女と彼はとても仲が良く、このまま絶対に結婚までいくだろ
うと誰もが思っただが……

状況は一変する。彼は自分の父親の屋敷から突如、失踪したのだ。彼が失踪したと聞き、彼女は真つ先に彼の部屋へ向かった。しかし、彼女がそこで見たのは幼い彼女には恐ろしすぎる地獄絵図だった。

彼の部屋は誰のともわからない、血で壁や床が染まり、まるで殺人の現場。血の量は明らかに五人以上の量があり、部屋から漏れ出すほど床にも血が流れていた。

彼女はその光景を見てから、一ヶ月ほど目を覚ますことはなかった。あの事件はある種、彼女の心に大きな傷跡を残すことになってしまった。

人々には彼が誰かを殺し、そのまま逃げた。という噂が一部に流れた。だが、そんな話には彼女は耳を貸さずに、ひたすら剣の修行に励んだ。悲しみを強さで紛らわすように。

ヴォバン侯爵の息子という、恐ろしい許婚がいなくなったことにより、彼女に言いよる男も多数いたが、全て自分の武で退けてきた。

「…………はい」

「ふむ。まあ、あやつがこちらへ戻って来た時に再度クラニチャールが君を差し出してきたらあやつと結婚させてやろう」

再度差し出してきたら

言い方は悪いがその通りだ。お爺様はヴォバン候のご機嫌取りと、自分の家に『王』の血を取り入れようと孫娘である私を許婚として決めた。

初めは絶対に嫌だった。幼く、恋という感情も知らない頃から、結婚相手というものを勝手に決められて、結婚しても絶対に夫婦仲は

悪いだろうな。と思っていた

が、彼は素晴らしい人だった。私よりひとつしか違わないのに、この世の中の美しい物や場所をいくつも教えてくれた

『王』の息子という立場を鼻に掛けず、店の手伝いをしたり、老人を助けたりと人々にも優しい男性だった

そのため、彼に好意を抱く女性は多かった。私もその中の一人なのだが……

反面、若い男にはあまり良い印象をもたれてはいなかった。蔑んだような目で彼を見る男どもは至る所にいた。本来なら、処刑されてもおかしくは無い状況だ

しかし、彼は何も言わずに通り過ぎるだけだった

彼曰く

「僕は憎まれて当然の男だからね。あの人の息子なんだから」

らしい。彼は恐らく、父親が嫌いなのだろう。父親のことを『父』と呼ぶに『あの人』と呼ぶ

私は一見『ヴォンバン候』に忠実なようだが、それは違う。彼を探すために『王』でさえも利用しているだけだ

彼が見つかり、ヴォンバン候と対立するというのはならば、私は平気でヴォンバン候を裏切ろう。もしも、彼が亡くなっていたのだとしたら、私もこの命を土に還そう

裏切ったら殺されるかもしれない。承知の上だ。それほどの覚悟がある

「クラニチャールよ、どうかしたか」

昔を思い出す彼女にヴォバンは不意に声をかける。リリアナはその一言で意識を目の前の『王』に戻した

「……いえ、なんでもありません。それより、一つ宜しいでしょうか？日本には侯の同胞たる御方がいらつしゃいます。先にお話しを通された方が良いのではございませんか？」

草薙護堂。古代ペルシアの軍神ウルスラグナを倒してカンピオーネとなった少年

かの軍神が変化したという一〇の化身を操り、リリアナのライバルである紅き騎士を愛人として侍らせているらしい
そして、最近イタリア魔術結社の内部で噂の正体不明の『王』緋狩影容姿、権能などを見たものは結社の一部総帥しか見たことがないという

しかし、噂ではかなりの美貌と武を兼ね備えていたり、武骨な武人で恐ろしいほどの力を有しているなど、と言われ、一部の魔女はその姿を妄想し、自分のイメージを言い合っている。私も聞かれたが、私には彼しか好きななる男性などいないため、話を断った

このような噂はヴォバン侯の元まで届いているだろう
だが、最古参の魔王は鼻で笑い、この進言を退けた

「その必要はなかるう。話したいのであれば、そやつの方から参ればよいだけだ」

……暇をもてあました魔王の気まぐれ

これが二人の神殺しと東京を巻き込む大騒動へ発展するのは、もう少し先の話である

この頃、緋狩影は以前よりも三〇分ほど早く起床する

以前なら、自分の朝食と弁当だけを用意すればいい話だが、一ヶ月ほど前から二人の同居人がいる

そのため、以前より早く起床して、三人分の朝食を用意しなければならなくなった

二人とも女性なのに、料理はからつきし駄目なのだ。おまけに二人とも朝に弱く、起床が遅い
影が起こさなければお昼に起きそうな二人だ

『キーン コーン!』

エプロンを付けたところでチャイムが鳴る

これはもういつものことだ

ドアを開けるといつものようにそこにいる、黒髪の女性

「おはようございます。アンナさん」

「おはようございます。影さん。いい朝ですね」

「ええ、そうですね」

アリアンナ・ハヤマ・アリアルディ

通称アンナさんは毎日この家に来る。影が朝忙しいのを知って、エリカを起こす役目と料理の手伝いをしてもらっている

……煮込みは絶対にさせないが

「じゃあ、アンナさんはエリカを起こして来てください。僕はアテナを起こします」

「了解しました。では、また厨房で」

アンナは一階の大きな扉へ向かう。エリカの部屋だ
影は二階へ上がり、自室の右の部屋をノックする

「アテナ。起きてますか？」

しゅん

朝は大抵こうだ。返事が返ってきたためしなど無い
影はドアを開ける

「すう〜、すう〜、すう〜」

予想通りというか、いつも通り。アテナは布団を目元までかぶって
寝ていた

可愛らしい姿だが、堪能しているわけにもいかない

「ほら、アテナ。起きてください。朝ですよ」

布団越しに体を揺さぶるが、「う〜、う〜、う〜」と言っているだ
けで起きる気配がない

実は起きていそうなのだが……

このままではらちが明かないので、影は切り札を使うことにした

「……起きないと、アテナの分の朝食、エリカに食べさせますよ」

ガバツ！

恐ろしいほどのスピードで、アテナが布団を捲り上げ飛び起きる

「それだけはやめて欲しいのだ」影。雌狐に食われる妾の朝食が可哀想なのだ」

朝のアテナはいつもこんな感じで少々、気が抜けている

まあ、自分に害がないだけマシだろう

エリカを起こしに行ったときは恐ろしかった

無理やりベッドに連れ込まれて、抱き締められた。なんと、エリカは全裸

途中でアテナが制止に来なかったら、既成事実ができていたかもしれない

そう思うと、恐ろしくなってきた

「影よ。妾を運んでくれぬか」

アテナは半分目を閉じながらよろよろと歩いてくる

……正直、危なっかしい

とりあえず、寝ぼけているアテナを背負い、食堂まで運ぶ

「うう〜。妾は幼子おんなではないのだあ〜。……………すう〜」

「寝るんかい!?!」

影は驚いて階段からずっこけそうになった

緋狩影の最近の朝はおおむねこのような感じである

二話 どうして僕が……

城楠学院高等部、二年一組

ここが影とアテナの教室である。ついでに席も隣同士だ
なぜ、こんなことになっているかというと

一ヶ月前の、朝のホームルーム

しばらく、外国にいたということを書いてから少し、時代錯誤だが
完璧な日本語による自己紹介

その後、席をどうするか、あーだ、こーだ言っていると

「妾はまだ日本には慣れておらぬ。故に、兄である影の隣に座りた
いのだが？」

アテナは女神の威圧感を出し、クラスの皆に有無を言わせなかった
そして、影の隣に座っていた生徒も席をアテナに譲った

「これで片時も離れずに妾と共にいられるぞ」

アテナは妙に嬉しそうだった

まあ、催眠術じゃなくて威圧感に負けたのだから、これはクラスの
生徒の責任だろう。……そう思っていた自分が今となっては呪いた
い……

昼休みを告げるチャイムが鳴ると少し経ってから、教室のドアが開かれ、エリカが入ってくる

「影、来たわよ。さ、わたしたちもお昼にしましょ。今日は影がどんなものを作ってくれたのか楽しみだわ」

エリカは楽しげに言った。その直後、クラス中のおびただしい殺気に影の全身は貫かれた

緋狩のヤツ、またかよ！毎日見せつけやがって！

くそッ、おれたちのエリカちゃんは、なんであんなヤツ

と！

アテナちゃんという可愛すぎる妹がいながら！

どうやら、ヤツには地獄すら生ぬるいようだな……

「わ、わかりましたから、早く出ましよう？アテナも、ほらっ！」

エリカの手とアテナの手を掴み教室のドアへ向かう

「あら、影つたら。もう、今日は普段よりも積極的なのね」

「おお、あなたは見かけによらず大胆なのだな」

二人は顔を赤くしながらつぶやいた。瞬間
クラス中の嫉妬、憎しみ、嫌悪、殺意、敵意が一気に膨れ上がった
影はそれから逃げ出すように走り出す

「あっ！影さん。待って下さい！」

護堂はどうやら、教室の外で待っていたらしく後ろから声が聞こえる
トトトトトトトトトトトトトトトトトトトトトトトトトトトトトト

ん？なんですかこの地震のような音は
音はどんどん近くなり、やがて地響きまで起こすようになった

「な、なんですかこれはーっ！」

目の前に見えたのは、人人人人人人人人人人人人人人人人人
人人人人人人人人人人人人人人人人人人人人人人人人人
人人人人人人人人人人人人人人人人人人人人人人人人人
人人人人人人人人人人人人人人人人人人人人人人人人人
人人人人

まさに、人でできた津波だった
そして、影の前で急停止する

「……………緋狩（先輩！）影！」「……………」

「はっ、はいッ！」

目の前の男どものあまりの気迫に思わず影は返事をしてしまった
数は、全校男子生徒ほどいるかもしれない。中には中等部の生徒も
混じっている

「……………オレ（僕）たちは傍若無人なお前（あなた）の横暴に対し緊急措置を測ることにしました！」
……………」

うわぁ〜見事にハモってますね〜こんだけ息ぴったりなら、曲芸で
もできそうですね

「……………万里谷さん！どうぞ！」
……………」

男の列が割れ、そこから裕理が悠然と歩いてくる
……………面倒なことになりそうだ

「……影兄さん。少しお時間をいただいてもよろしいでしょうか？」

「な、なんですか、裕理？」

影の声は少し震えている

さつきから、目の前の女性が夜叉にしか見えないのだ。割れた男子の列も、まるで親方に道を譲るヤクザの子分にしか見えなかった

「こういう注意をすることが、筋違いだと言う事は承知しています。私は一つ年下ですし、風紀委員と言うわけでもありませんし……。でも、この男子の方たちがあなた方をどうにかして欲しいと頼まれて、見過ごせずにやって参りました」

「そ、そうですか……。それはごくろうさまです……」

理路整然と語り出す祐理の前で、恐縮する影。昔からお説教モードに入ると、つかしこまってしまう。もはや、体質だ

「聞けばお昼休みのたびに、影兄さんはエリカさんやアテナさんとその……いちやつく、というのですか？ 慎みに欠けているような親密さでお話しされたり、遊んだりされているのですよね？ ここは学校のなかです。もっと時と場合を選ぶべきだと思いませんか？」

「ひ、否定はしませんが、別にイヤらしいことをした覚えはありませんよ！」

「否定しないのですね！影兄さんはそんな人だったのですか！……さつき、わたしのところにいらっしやっただ方がおっしやっっていました。『緋狩くんは僕たちカノジョのいない男子をバカにするように、毎日エリカさんやアテナさんといちゃついています。僕たちがいくら注意しても、ちつとも改めてくれません』と、涙ながらに訴えてましたよ！兄さんのこと信じてたのに……」

僕は注意された覚えは全くありませんけどね！

義憤に燃える祐理がお説教する、その背後

男子たちは、追い込まれていく影を見てニヤニヤと人の悪い笑顔で見ていた。その邪悪な表情が、彼らの想いを言外に告げていた

ククク、計画通り。緋狩め、やはり万里谷さんのような清楚でしっかりとした人に弱いようだな

でも、あんな猿芝居に騙されるなんて……。万里谷さんも緋狩のことを！？

それに、さつき万里谷さんが緋狩のこと「影兄さん」って！
くそつ、許せねえ。何であいつばかり、いい目に遭うんだ

よ！？

うらやましいッ。『男子なんて興味ありません』な万里谷さんにオレもあんな風と呼ばれてえ！お説教せれてえ！

おいっ！エリカちゃんとアテナちゃんが何か言うみたいだぞ！

「裕理……羨ましいなら、素直に言えばいいのに。そうすれば入れてやらないこともないのに」

「それについては雌狐に同感だ。人は素直が一番だからの」

この二人はなんで、場を掻きまわすような言葉しか言わないのでしようね……

「なっ！別に羨ましくなんかありません！私はただ、男子の皆さんに頼まれたからであって……とにかく、羨ましくなんかありません！それに私は……」

「おお、愛人と実妹対義妹の頂上決戦だ！」「これで緋狩も年貢の納め時だぜ！」「それにしても緋狩のヤツ、いつから万里谷さんと仲良かったんだ」「バカ、決まってるだろ。ふたりはな幼なじみなんだよッ！」「あれか？万里谷さんが緋狩のことを兄として意識しつつも男として意識していたが、自分の思いに気づいていなかったところに、イタリアから来たエリカちゃんと外国から帰って来た実妹のアテナちゃんが割り込んできたのか！？」「何ということだ……くそッ！アテナちゃんに「お兄ちゃん」って呼ばれたい！」「日本の幼馴染にして義妹である万里谷さんと、金髪愛人のエリカ様と、華よりも可憐な実妹のアテナちゃんの三択……まさに究極の選択だな」

なんか凄い誤解を生んでいますし……
けど、裕理が幼馴染とはよくわかったものだ。あっ、兄さんと呼んでいたからか。納得

「……なんだか騒がしいですね」

「……言いたいことが山ほどあるのは分かりましたから、場所を変えませんか？例えば屋上とか」

この場で落ち着いてい話をすることは不可能だろう。エリカとアナに目配せすると、二人ともすぐに飲み込んでくれたキョトンとしている裕理の手を引き、屋上への道に行く。「え？」と驚きながら引っ張られていく裕理。そこへ早足で続くエリカとアナ

「……最近は何だか騒がしい。おちおち昼飯も食べられません ついでに固まっていた護堂も引っ張っていき、階段を上った」

一話 どうして僕が……（後書き）

裕理はたぶん護堂になりそうですね……恵那はどうしようか……？
ご意見などありましたら。よろしく願います

三話 屋上にて

昼休みの屋上はそれなりに混んでいた。

数人のグループが何組かおり、お弁当を食べていたり、ボール遊びをしていたりと結構にぎわっている。ただ、さっきとは打って変わって影たちに注目が集まらない。

「最初から、こっちに来ればよかったのかもしれないね。ここなら、落ち着けそうです」

「影兄さんは普通にお昼を食べていれば、いつでも落ち着けるはずですよ。他人のせいにしてはいけませんよ」

適当な場所を選んで腰を下ろす影に、相変わらず祐理は厳しい。ちなみに彼女の弁当も途中六組に寄って取って来た。

「でも今日は天気もいいし、やっぱり外は気持ちいいわね。かえって良かったんじゃない？」

大らかに言いながら、エリカが弁当の蓋を開けた。それを見たアテナも自分の弁当を開く。

中身は二人とも同じで、チキンライスに目玉焼き、竜田揚げなど覚めてもおいしいものだ。目玉焼きはまだしも竜田揚げは見たことないらしく、興味深げに見ていた。

「……ところで、影兄さんや草薙さん、それにエリカさんとアテナさんは普段どのように食事をされているのですか？」

裕理の弁当はちいさく女の子らしいものだった。

……こんなことを言うのは失礼だが、意外と大食いなエリカとは真逆だ。そのため作る側も少々時間がかかる。

「僕は……まあ、いつもこのメンバーで食事してますよね？」

「そうなのですか？」

裕理が意外そうに聞く。

当然だろう。護堂やエリカと知り合う前はいつも一人で昼食をとっていたのだから。

「そうだな。俺も、影さんと知り合ってから、一緒に飯食べる時が多かったし」

「わたしはここ最近はずっと一緒に食べてるけどね」

「それはお主だけではないだろうに。妾も一緒だ」

皆が口々に言う。

やはり、ひとりで食べるよりも多人数で食べたほうがおいしいというのは本当だ。エリカやアテナに作った弁当の感想を聞くのも楽しみだし。

「影兄さん……よかったですね」

裕理が微笑みながら影の方を見て言う。

かつての影の状態を知っている、彼女だからこそ言えた言葉だろう。ここまで心配してくれていた裕理には本当に感謝している。

292

「ええ、僕は救われましたよ」

影は少々、昔を思い出すように言った。

手作り弁当を食べていたアテナがふと、何かを思い出したように言う。

「そういえば影。あなたの左目から出てきた怪物はなんなの？ 皆も疑問であるっ」

ついに来たかこの時が
予測していただろうことに、影は心を決め口を開く。

「始めに言っておきます。あれは、怪物でも悪魔でもありません」

「じゃあ、権能なの？」

「いいえ、あれは剣です」

「「剣!？」」

思わぬ言葉にエリカとアテナが声を上げる。しかし、その反応は普通だ。なにせ、どう見ても化け物でさらに人の左目から出現する剣なんて普通信じられないだろう。

「ちょっと待って!あんな魔剣見たことも聞いたこともないわよ!」

エリカが言う。少し叫び声のようだったが、幸い周囲には聞こえていない。

「……ダインスレイヴ」

「え？」

突如アテナがなにかの名前のような言葉を口にする。そして、それを聞いていた護堂が疑問の声を上げた。護堂には聞いたこともない言葉だったからだ。

エリカはその名を聞いて納得したらしく、護堂が疑問に思ったことの説明を始めた。

「北欧に伝わる魔剣の代表格ね。デンマークの王だったホグニが所有し、英雄シグルドがファープニルという竜を退治した時に得た財宝のひとつとも言われている。そして、鞘から抜き放たれると相手の血を吸い尽くすまで収まらず、かすり傷でも負えばけっして癒えることはない。そうでしょう、影？」

「ええ、その通りです。僕の左目にあるのは確かにそのダイインスレイヴの……なれの果て、です。そして、貴方達を襲ったのも……」

「やはりか……随分厄介なものを背負い込んでいるようだな、影よ……」

アテナは納得すると同時にはあ、とため息を吐いた。影に対して同情と哀切の混じった、重いため息だった。

「あの、話を聞いてる限りだと……その、影兄さんの左目と同化している剣……？が物凄く危険なものだと思うのですが？」

さっきまで黙って話を聞いていた裕理が言う。一方、護堂は話を聞いていたにも関わらず、さっぱりわからない。といった顔をしていた。

神話の知識が元々薄かった護堂には一回だけ言って、その存在を分からせるのは少々難しかったらしい。

「まあ、危険でしょうね……。本当に傷を負わなくてよかったわ……はむ、はむ。これ、おいしいわね」

エリカはあの時のことを思い出して、裕理に言葉を返しながら竜田揚げを食べている。西洋人は東洋の食べ物に初めの頃は慣れないと聞いていたため、口に合うか心配だったが気鬱に終わってよかった。アンナさんのおかげでもあるだろう。

影はそう思いながら隣にいるアテナにも弁当の感想を聞こうとしたが、

「……ほとんど残ってませんね」

今まで気付かなかったが、アテナの弁当の中身はほとんど残っていなかった。おかずは全てなし、元の八分の一くらい残ったチキンライスだけ。

「それじゃあね、影。帰りは玄関で待ってるわ」

「影さん。……頑張ってください」

「それでは失礼ます」

教室の前で三人と別れ、アテナと教室に入る。視線が痛いながらもはやり気にしては負けだ。

「む？影よ、平気か？顔色が悪いと思うのだが……」

クラス中の殺気に当てられ、少々顔が青ざめていたらしくアテナが心配そうに顔を覗き込む。直後、殺気の濃度が明らかに増す。

比喩でも何でもなくて、体が痛い。空気もすごく悪く感じるし完全に汚染しているレベルにまで達しているとは思えない……。

授業中にも当てられる嫉妬や怨念の視線に、影は早く学校が終わりますようにと、祈り続けることしかできなかつた。

四話 魔王の天敵は……

ある日の夜六時頃。

影は家の近くにある商店街に来ていた。夕飯の食材を購入するためだ。

まずは野菜を揃えるために最寄りの八百屋へと入る。

「おつ、影ちゃん。今日もいらっしやい。なにが欲しいんだい？安くしておくよ」

店の中から恰幅の良さそうな声が聞こえてくる。いつも通り、八百屋のご夫人である。

「こんばんわ。今日はトマトを5個に馬鈴薯は……ベニアカリを3個ほど頂けますか？あつ、男爵もひとつ追加で。選択はご夫人にお任せします」

選択というのは良質な野菜を選んでもらうことだ。昔は自分で選んでいたが、最近はお任せしている。これも長年続いてきた信頼関係がなせることだろう。

「はいよ」と一言だけ言うと、八百屋のご夫人はトマトを手で取ったり、見たりして良いものを選別する。そして、良いものを見つけるとビニール袋へ詰めていく。馬鈴薯にも同じ行動をする。

「はい。完熟トマト5個にベニアカリ3個と男爵1個ね。男爵はおやつ用のコロツケかい？」

「はい、そうです。しかし、見抜かれるとは……さすがです」

「何言ってるんだい。もう何年も買い物見てるんだ、客がどんな風に使つかくらいわからないとね」

八百屋のご夫人は少し威張ったように笑顔で言う。

本当にこの人は凄い。と改めて感心させられる。伊達に長年商売しているわけではないということだろう。

「ありがとうございます。これはお代です」

トマトと馬鈴薯の入ったビニール袋を受け取ると、代金を渡す。

しかし、代金を受け取ったご夫人はすぐさま中から百円玉ひとつを摘むと強制的に影の右手へと握らせた。

代金を丁度払ったはずなのに、おつりが来たことに影は「え、え？」と、戸惑いを隠せない。

そんな影に八百屋のご夫人は衝撃的なことを言った。

「影ちゃん。最近どうやら彼女ができたらしいじゃないか」

「……………は？」

ご夫人の口から飛び出した言葉に、影は耳を疑った。そして、直ぐにあることを思い出した。家に居候しているエリカ、アテナの二人のことだ。

しかし、なぜそんな情報を知っているのだ？正直誰にも言った覚えはないし、商店街に住んでいる学園生はいないはず……
そんな事を思う影の様子を見てご夫人は嬉しそうに笑い、

「一郎さんが言ってたわよ。「影の屋敷にとても綺麗な女性ふたりが入って行った。もしかしたら、彼女かもしれないね」って。今、商店街一の噂よ」

と言った。

ご夫人の言葉を聞き、影は納得がいった。あの女たらし老人ならそんなことを言っても全くおかしくない。

影はご夫人に一礼をして、その人物の元へと向かった。

護堂の家では夕食準備の最中であつた。今日は護堂が招待した裕理もいる。

「で、うちのバカ兄貴と万里谷さんはどんな関係なんですか？」

何故兄が、学園一ともいわれる美少女
万里谷裕理を連れてきたのか理解できなかった妹。草薙静花は二人を皮肉っぽく眺めながら言った。

「え！？ただのお友達……ですよ？それ以上でも、それ以下でも

」

まさか神殺しの魔王と、日本の呪術師を代表する姫巫女とは説明できない。

まじめ一辺倒の裕理に、そこをごまかすアドリブはやはり無理だっ

た。

「ふうん。そうなんだ。二人ともおじいちゃんと死んだおばあちゃんみたいな感じで、いい雰囲気みたいなんだけどな」

「な！？何をおっしゃるのですか、静花さん！」

「い、言うことに欠いて、じいちゃんと一緒にするなよ……」

妙にやさぐれた感じの静花に言われて、裕理は狼狽し護堂は顔をかめた。

『ピーン、ポーン！』

不意に草薙家のチャイムが鳴る。

「ふむ、こんな時間に誰だろうね？静花、すまないが出てくれるかい？」

一郎がそう言うと静花はしびしびといった様子で玄関に向かい、途中護堂に「逃げないでよ」という視線を送った。

「はい。どちら様ですか……………」

静花がガラガラと扉を開けると、

「夜分にすいません。緋狩と申します。いちろ…………じゃなかった、草薙一郎さんは居ますか？」

静花のいる中等部でも噂の白髪の少年。緋狩影が買い物袋を片手に下げて、立っていた。

四話 魔王の天敵は……（後書き）

今回は短いですね。感想など頂けたら幸いです。

五話 嬉し恥ずかし(?) 草薙家での夕食

『はい、緋狩です。ええ、最近婚約しまして『バカなことを言うなこの雌狐め! 貴様と影は婚約などしておらんだろっ!』……すいません。小姑ここがつるさくて、どちらさまでしょうっか?』

影が携帯電話で自宅に連絡を入れると、こんな漫才が聞こえてきた。明らかにエリカとアテナだ。いろいろ突っ込みたいところだが、時間がないのであえて突っ込まないことにする。

「エリカ、アテナ。僕です。すいませんが、今日の夕飯は遅くなりそうなので、アンナさんに来てもらうことになりそうです」

『ちょ、なんでよ! わたし今日のご飯楽しみにしていたのよ! あっ、じゃっ!』

『その通りだぞ、妾も今夜の食事が楽しみで仕方がないというのに……どういっつとこだ!』

『理由を説明して!!』

なんだかんだ息の合っている二人。
やっぱり、この二人仲が良いだろう……と思いつつ、影は事情を

なるべく簡潔に説明する。

「知り合いの家に行つてきます。ちょっと、老人に灸を添えなければいけないのでね……ふふふ」

『……影、ちょっと怖いわよ。ついでに、そこつてどいっ』

「ああ、商店街の元古本屋。『草薙』ってことです」

『草薙？まさか……』雌狐、妾にも替わるのだ！お主ばかりずるいぞ！』わかつたから、暴れないで、ほら』

エリカが何やら意味深な言葉を言おうとしたところで、アテナに受話器を渡す。

なぜかこの二人のやり取りが姉妹の会話に聞こえるのは僕だけだろうか……？

『影よ。いい考えが思いついた。その知り合いというのは、影の友人なのであるうっ？』

「え？……まあ、そうですね？」

正直、相手は老人なので友人と言うのもおかしいので、曖昧な言葉で返す。すると、アテナは電話越しに『ならば良い』と何かを思いついたような声で言った後、エリカに替わった。

『もしもし？アテナが何やら思いついたようだから……………やるわね、あなた！名案だわ！』

電話の向こうではアテナがエリカに「ごによ、ごによ……………」と何やら囁いて、エリカが称賛の声を上げる。それに対しアテナは向こう側で『そうであろう。そうであろう』と偉そうに言っていた。電話越しにも胸を張っているような光景が目に見え、生憎と全く内容が聞き取れなかった。……………一体何なのだろうか？

『影。夕食の心配は無くなったわ。あなたはその知り合いの家に行っていていいわよ。ふふふ』

「そ、そうですか……………」

急に嬉しそうな態度に変わったエリカに対して少々戸惑いながら、影はそう返した。

アテナは一体何を吹き込んだのやら……………疑問に思いながらも、電話を切りポケットにしまった。

その後、影はとあるところまで走り出した。行く先は元古書店。そ

ここに魔王である影の天敵がいる。

天敵と言ってもお互いに嫌い合っているわけではない。むしろ、友情のようなものを築いている関係だ。しかし、あの人は老人のくせに妙な色気を商店街のご夫人方に振りまくわ、頼んでもいないのに人に色恋沙汰の指南をするなど、ハタ迷惑な老人なのだ。

奥方が亡くなつてから少しは治まると思つたが、全く変化はなかった。

そんなことを思っているうちに、目的地へと到着したので、とりあえずチャイムを鳴らす。

『ピン、ポーン！』という音が鳴つてから少ししてドアがガラガラと開き、中から中学生くらいの少女が元気な声とともに出てきた。

「はい。どちらさまですか……………」

出てきた少女

草薙静香は目の前にいる影の姿を見

ると固まつた。夜に誰が来たのだろう？と思つていたら、まさか学校一の美男子と呼ばれる男性がいるとは予想していなかったらしい。そんなことを知らない影は普通に挨拶をする。

「夜分にすいません。緋狩と申します。いちろ……………じゃなかった、草薙一郎さんは居ますか？」

危うく「一郎」と呼び捨てしてしまいそうになつてしまった……

さすがに十八歳の少年が七十越えで、孫を持つ老人を呼び捨てしていたら年齢を疑われかねない。

怪しまれるかも……。影はそう思ったが、静花はいまだに固まつた

ままでそんなことに気付いてはいなかった。

「え、えええええええつ！も、ももももしかして、緋狩影先輩ですか！？こ、こここんなうちになんの用ですか！？」

静花は目の前にいる影の姿を認めるとハツ、としてうろたえはじめた。裕理のときと同じくらいの驚き方だった。

「あ、はい。初めまして、緋狩影です。今日は一郎さんに用がありまして……。呼んでいただけませんか？」

「おじいちゃんですか？緋狩先輩が何の用だろ……。あつ、折角だから上がっていきませんか？できたらお夕飯も一緒に……」

静花は学園一の美男子とも言われる少年と親しくなるこんないい機会はない！と思い、影を誘った。

「いいんですか？なら、ご一緒させていただきます」

もちろん影は静花の心の内を知る由もなく、素直に好意に従って草薙家へと足を踏み入れた。その瞬間に静花は心の中で静かによじっ！、とガッツポーズをした。

「静花、誰だったんだい？……って、影じゃないか」

「えっ！？影さん？」

「どうして、影兄さんが……？」

影を出迎えたのは護堂の祖父、草薙一郎。それに続いて、護堂と招待されていた裕理。一郎はあまり驚いた様子はないが、思いもよらない客人に護堂と裕理は驚愕していた。

「裕理？何故ここに……？まあ、今はいいでしょう。それよりもいちろ……じゃなかった。一郎さん！」

「？どうしたんだい」

「いや、そんな涼しげな顔されても……。じゃなくて！商店街のご夫人方に変な噂流さないで下さいよ！！おかげで八百屋の さんに変な割引されてしまったじゃないですか！！」

影は真つ先に一郎へと不満をぶつけた。しかし、この老人は「はははは」と笑って、全く反省の色を見せない。
正直、イラツとくる。

「まあまあ、割引されたのはいいことだろう？結果オーライということ許してはくれないか？」

反省の色を見せるどころか、むしろ開き直ってきた。

この老いぼれ……一回記憶でもふっ飛ばしてやろうか……？影はそんなことを思ったが、実際に実行すると少々不味いので、心の内だけに留めておく。

「ねえ、さっきから話を聞いていると、緋狩先輩とおじいちゃんが凄く仲良さそうに見えるんだけど……？」

「た、確かにそうですね……。長年行動を共にした親友のように見えます」

「ていうか、じいちゃんと影さんて、どんな関係なんだよ……？」

一連の会話を聞いていた静花、裕理、護堂の三人が思ったことを口にする。

確かに十代半ばに見える少年と、七十を過ぎた老人がこんな自然に会話をしている光景はかなり不自然だった。

「僕と影の関係かい？うん。そうだね……。師匠とで「僕は貴方の

弟子になった覚えはありません!!」……冗談だよ。まあ、友人で
とこかな？」

「……そのくらいで妥協してあげます」

「厳しいなあ」

そう言うが、一郎の顔はあまり嬉しくなさそうな顔ではなかった。
むしろ口元に薄ら笑いを浮かべている。
何を考えているのやら……

影は改めてこの老人の得体の知れなさを感じた。

「さ、もつとおしゃべりは一度中断して、そろそろ夕飯の準備をは
じめようか。この後もお客さんが来るし、久しぶりに手巻き寿司で
も作ろうかと思ってね。もう、酢飯の仕込みは済んでいるんだ」

不意に、一郎が立ち上がった。

この後もお客さんが来るという部分が少し気になったが、今は正直、
腹が減っていてそこまで気には留めなかった。

「僕も野菜を持ってきたので何か作ろうと思います。台所を借りて
もよろしいですか？」

「ああ、問題ないよ。そういえば、護堂と静花はあとで魚屋の桜庭さんのところに行ってくれ。いいネタを選んでもらってる。ああ、四人分追加してもらおうのを忘れないように」

裕理に、人好きのする笑みを向けながら一郎は言う。

「君も一緒に構わないだろう？せっかく来てくださっただから、これくらいはさせてもらわないとね。もちろん、門限の時間や他に用があるなら、話はべつだ」

「わ、私は……いきなりお邪魔して、お食事までご馳走になるなんて、ご迷惑じゃ……」

「かまわないよ、じいちゃんはこのうのが好きなんだ。大勢集まって、手料理食べてもらって。そういえば、あと二人のお客さんって誰なんだ？」

護堂が裕理に声をかけるとともに、常々思っていた疑問を口にした。確かにそれは気になる。少々、イヤな予感がしなくもないのだが……

『ピーン、ピーン……』

そう思っていると、草薙家のチャイムが鳴った。

影を含めて今夜二回目。さすがに不自然だと思い、護堂と裕理、静花は疑問の表情を浮かべるが、一郎は虫を楽しそうな顔をしている。

「さて、今度は僕が出よう。影もきつと喜ぶお客さんだから、楽しみにね」

軽くウィンクして、玄関へと向かった。

そんな一郎を見送った後、影は護堂と裕理に「一体何？」と言いたげな表情を向けるが、二人とも「わかりません」といった感じだった。

ダキッ

「!?!」

何かに抱きつかれた。いや、何かではない。この横目から見える金髪は

「エリカ……ですね？」

「正解。会いたかったわよ。あ、護堂も裕理も妹さんもこんばんわ」

何故ここにいるのか？護堂と裕理はそんなことを疑問に思いながら、啞然とし、静花に至っては顔を赤らめて何かブツブツと呪文のように呟いている。

「はははは、凄いね影。モテモテじゃないか。ハーレムも夢じゃないかもしれないね」

「……草薙一郎よ。妾は少々、気が立っているのだ。あまりそのよ
うなことを申さないで欲しい」

後ろを向くと、そこには口元に薄ら笑いを浮かべている一郎と不機嫌そうな表情のアテナがいた。

「やられた。この二人の考えを先読みしておくべきだった……」

影は未だにエリカに抱き付かれたまま、自分の浅はかさを後悔した。

「さて、夕飯の準備を進めようか。ああ、今日はお酒も出そう」

「えっ！？お酒！？」

一郎の最後の一言に裕理はひどく驚いた。影と護堂は必死に止めにかかるが、

「じ、じいちゃん。万里谷がいるまえでは…ムグツ！」

「そ、そうですね！未成年は飲酒禁…ムツ！」

エリカとアテナによって口を塞がれ、阻まれた。いつもいがみ合っている二人とは思えないほど、迅速な連係プレーだった。

「あら、ありがとうございます。わたしと影の婚約祝いとして乾杯させていだたきますわ」

「もちろん影と妾の契り酒として頂こう」

エリカとアテナ。お互い好き勝手言ってるが、いつものいがみ合いは起きない。……停戦協定でも結んだのか？影と護堂は目を合わせそう思った。

「ははははは、やはり若いのはいいことだね。僕の教育のお陰かな？」

「え、影兄さんとエリカさんとアテナさんが婚約…まさか、二股！？」

「あわわわわわわわわ、緋狩先輩の周りにあんなに綺麗な人が二人も……でも、諦めないもん!！」

一郎、裕理、静花の三人は個々、勝手な反応を示して影たちを見る。そして、いつの間にかエリカとアテナの間に挟まれて座られられていた。さらに、右にエリカ、左にアテナが腕をからませてくる。

「あの……エリカもアテナもですけど……」

「ふふふ、どうしたの?」

「何か問題があるのか?」

「あ、いや……問題というか……当たってます……」

そう、当たっているのだ。もちろん二人の『アレ』だ。チラリと右腕を見ると、見事に潰れている『アレ』がある。対して左側。何も感じないと思ったたら大間違いだ。もちろんエリカと比べると確実に劣る。しかし、アテナの『アレ』も小さいながらもちゃんと感触がしているのだ。故に影にとってはかなりマズイ状況になっている。

六話 自称親友からの電話

「はい、緋狩です……」

『やあ、影。久しぶりだね、元気にしていたかい？我が親友よ！』

この声には聞き覚えのある。しかし、なるべく聞きたくはない声が受話器から届く。

何時だと思ってる、あの馬鹿。影はすぐさま受話器をおろし、電話を切った。

しかし、数秒もかからずに再度電話が鳴りだす。

正直、無視したい。しかし、無視したらこの電話が鳴りやむことは一生無いかもれない。エリカやアテナにも迷惑だし、もしかしたら激昂した二人がアイツに挑んで殺戮を始めるかもしれない。いい薬になるかもしれないが、万が一死なれたら困る。はあ、とため息をつきながら影は受話器を取った。

『いきなり電話を切るなんて、ひどいじゃないか！護堂にも同じことされたよ！日本ではそういうのが流行っているのかい？』

「それはどうも悪うございました。ええ、最近日本でこういうのが流行っているんですよ。僕もしなければ時代に乗り遅れてしまいます。……それは今は夜中の三時ですよ？貴方は馬鹿ですか？」

「ん？ああ、日本じゃそうだったね。こちらは十一時だよ」

そんなこと聞いてない……。

金髪碧眼で、長身。無駄に整った顔立ちをした。上辺は線の細い優男。だが、自分と同じ『魔王』。

影は自称『親友』の姿をまざまざと思い出した。

「貴方は何の用で電話してきたのですか？……こんな真夜中に」

影は最後の言葉を強調して言った。もちろん皮肉を込めて。

サルバトーレ・ドニ。

二十四歳のイタリア人、六人目のカンピオーネ。

南欧を中心に強い影響力を持ち、すでに四柱の神々を倒している。護堂にとっては先輩といえる人物だ。影にとっても年齢的には上である。

しかし、影も護堂もこの男相手に敬語を使う気にはなれなかった。なんとなくだが、この男は生理的に目上の者と見られない。そのためだ。

『真夜中だろうがなんだろうが親友と話をするのは良いことだろうか？』

「……いつから僕は親友になったのですか？僕は貴方を虐めて虐め

て虐めて虐めて虐めまくりましたけど？」

『そうだったね……。確かにあの時の影は悪魔のようだったよ……。けど、僕は気がついたんだ！これはまだ僕が神殺しとして未熟だったとわからせるための君の好意だったとね！』

「貴方は馬鹿ですか！？どれだけおめでたい思考回路をしてるのですか！？」

「
というわけで、僕の越えるべき壁たる君よ。

僕のことは、親愛と敬意を込めてトトと愛称を使って呼んでくれ」

サルバトーレというイタリア名の一般的な愛称は『トト』というらしい。反論など一切気にせず、サルバトーレはマイペースで呼びかけてきた。

睡魔が襲ってくる中、議論のできない相手との会話に疲れつつも、それでも影は強く言い返した。

「貴方を愛称で呼ぶなんて、絶対にゴメンです！」

『ふふふ、護堂もだが、君もシャイな男だな。僕のことをかなり意識しているくせに、そういうツレない態度を取るんだから……。知ってるよ、それが日本で言うツンデレだね？……。もしくは、ヤンデレというやつかな？』

「貴方が日本文化を物凄く誤解していることはわかりました。話がそれだけなら電話を切ります」

いい加減に眠い。眠気が限界に達した影は、電話を切ろうとした。

『まあ待ち給え、友よ。……君が気にかけていデヤンスタイル・ヴォバンが東京にいるらしい』

「何……？」

何故あの男が日本にいる？こんな東の辺境にある国に用などないはず……。まさか！？

『どうやら、思い当たる節がないわけでもないみたいだね』

影の様子の変化を感じ取ったらしく、サルバトーレは珍しく真面目になる。

確かに思い当たる節はある。しかし、それを本当にヤツが実行するつもりなら、かなり不味い。

「サルバトーレ。どうせ僕に喧嘩を売りに行つて来い。とでも言う

つもりだったのでしょうか？」

『うん。さすが、よくわかったね。その通りだよ』

「今回は貴方の思惑に乗ってあげます。……あの人の計画を止めなくてはいいけませんから」

『はははは、本当に君はあのご老人を毛嫌いしているね。なんでかな？』

「……いずれわかりますよ」

そう残して、影は受話器を置いた。
絶対にあの男の好きにはさせない。そう心に誓って、影は自分の部屋に戻った。

裕理が奇怪な幻視をかいま見た翌朝。

普段どおりに登校した万里谷祐理は、アルミボディの携帯電話を所持していた。

昨夜、甘粕から緊急の連絡用にと渡されたのだ。マナーモードだったこの携帯がヴヴヴヴヴと振動し始めたのは、ちょうど昼休みだった。

しかし、祐理には操作方法がわからなかった。

「ま、まあ、どうしましょう?」

表示された電話番号は甘粕のものだ。祐理は一瞬、躊躇ちゅうちゆした。

緊急の用件かもしれないので出た方がいいだろう。たまたま校舎の外 中庭を歩いているところだった。一目につかないように端の方へ行き、電話に出ようとする。

折りたたみの携帯をいじるのは初めてだったので、少し手間取ってしまった。

「も、もしもし、万里谷です！」

『やあ、どうも。甘粕です。そちらの首尾はどんな感じですか？昨日の提案どおり、手作り弁当なんか渡しちゃったりします？』

「そ、そんなことしていません！」冗談はおやめ下さい！」

『冗談じゃありませんって。……とにかく、今日のところは祐理さんにお任せしますから、いろいろアプローチしてみてくださいませよ。あとで本格的に作戦会議をしましょう』

「あ、甘粕さん!？」

ここで電話は切れた。

護堂と何をすれば親密になれるのか。祐理には見当もつかない。昨夜、なし崩しで引き受けてしまった任務の難しさに、憂鬱な気分になってきた。

「あれ、万里谷さん、それってまさか……携帯ですか？」

声をかけられたので振り向くと、そこには草薙静花がいた。

今話題になっていた人物の妹である静花。偶然の出会いに、祐理の胸がどきりと高鳴る。

「ど、どうしたんですか？ あれだけみんなに言われても、今まで携帯を持つとしなかったのに？ 興味とか全然なかったんですよ？」

静花がひどく驚いている。

クラスでも部活でも、携帯電話やメールアドレスを訊かれるたび、祐理は『特に必要なものとは思いませんので……』と答えてきたのだ。

「どうしても必要な理由ができてしまって、用意していただいたのです。やっぱり、必要な連絡を取り合うのに便利……みたいですし」

便利とは言い切れない自分が悲しい。やや落ち込みながら祐理は言った。

今のところ、機能が豊富すぎてまったく理解できない。自分の機械音痴が、こういうときは恨めしくなる。

「れ、連絡を取り合ったり、ですか……。誰とするのか、訊いてもいいですか？」

「ごめんなさい、くわしくお伝えすることができない事情がありま

すので、訊かないで下さると助かります。申し訳ございません」

年下の後輩ではあったが、祐理は丁寧に頭を下げた。

「ないしょ……なんですね。やっぱり、相手の人に口止めされてたり？」

「いえ、そうではないのですが……。でも、携帯電話とは、とても難しいものなのです。みなさん簡単そうに使っていらっしやるのに、私は全然さっぱりで」

正直に告白すると、いきなり静花がすまなそうに頭を下げてきた。

「すみません、万里谷さん。うちの兄のせいで、そんなご苦労をさせて」

「え、護堂さん……お兄さまはこの件には関係ない わけではないですけど、一体どうなされたんですか？」

兄 護堂のことで謝罪される理由がわからず、祐理は眼を瞬かせた。

「だって、それ以外ないじゃないですか。いきなり携帯が必要になる理由なんて、彼氏といつでも連絡を取りたいってぐらいしかありませんし。……で、万里谷さんの場合、そういう相手の最有力候補は……うちのバカ兄貴、ですよ？……もしかしたら、緋狩先輩かも……」

草薙静花は頭のいい子だと、裕理は常々思っていた。

部活動でも何かを教えればすぐに呑み込む、頭の回転の速い少女なのだ。なのに、この推測は的はずれ過ぎる。裕理は焦って反論しようとした。

「ち、ちがいますっ。これはそう　　仕事です。お仕事の関係で、必要なものなんです！」

「万里谷さんのアルバイトって巫女さんでしたよね。神社の巫女さんが緊急で連絡を取り合うなんて、聞いたことはありません。……いいんです、慣れないウソをつかなくても。あたし、わかってますから！あのバカ兄貴がぜくんぶ悪いんだって！」

ぷりぷりと怒りながら、静花は決めつける。

いや、巫女女である自分には、特にカンピオーネなどという破格の存在が身近に現れてからは、緊急の用件が結構増えてきたから。……とは告白できず、煩悶する祐理であった。

「この前の春休みから、ずっと怪しかったんですッ。しょっちゅう

外泊するようになったし、妙にコソコソしてるし！いつのまにか祐理さんとも仲良くなってるし！」

「だから護堂さんのせいではありませんから。そんなに興奮しなくても……」

「万里谷さん、さっき言いましたよね。お兄ちゃんは関係なくもない　つまり、関係あるってことでしょう？」

やはり静花は聡い。つい口を滑らせた事実をしつかりと聞き取っている。

可愛らしい顔立ちの割に、勝気で押しも強い。しかも、自分より遙かに弁が立つ。そんな相手との口論に、祐理は絶望的な不利を感じた。

「いいんです、わかります。お兄ちゃんの携帯に最近電話がよくかかってくるみたいで、昨日も何か話し込んでましたから。あれ、きっと女の人ですよ。自分の部屋に隠れてコソコソ話してました」

「えっ、そうなんですか？」

憶測による決めつけを、素直に信じてしまう祐理。

護堂が電話していたのは色恋沙汰には無縁で、男色なのか？と思わざるをえないイタリア人の青年なのだが、ふたりにわかるはずもな

かった。

「そうなんです。最近よく女の人とお兄ちゃんが一緒にいるって、聞いたことがありますから」

「え、ええ……まさか、そんな事態が起きていたなんて……」

本当のところ、護堂と一緒にいるのはエリカ、もしくは一部の人間から女性に見えてしまった影なのだが、そんなことを知らない裕理は思わぬ情報に打ちのめされた。

考えてみれば、学校外での護堂がどのような行動を取っているのか、なんて気にしたことはほとんどなかった。

最近は影の注意ばかりして、護堂に注意することが減ってしまった。しかし、それが間違いだったのか？

本当に世間知らずで浅はかな自分が恥ずかしい

（いいえ、今からでも遅くないはずです。駄目だと思ったところは、きちんと改めていかないと……他の女性よりも草薙さんと親しくなるためにも！）

祐理は口の中でつぶやき、改善を心に誓った。

成り行きとはいえ、やると約束したからには最善を尽くさなければならぬ！

「静花さん、お願いがあります」

「は、はい」

決然と顔を上げ、厳かに告げる祐理。

彼女の気迫を感じ取ったのか、怒り気味だった静花は急におとなしくなった。

「私に携帯電話の使い方をもっと通り伝授していただけませんか？電話のかけ方、受け方程度でしたら理解できるのですが、それ以外はまったく存じ上げないのです」

「そ、それぐらいでしたら、全然、かまいませんけど……」

何に気圧されたのか、やや狼狽しつつも静花は了承してくれた。

……自分が真剣になったときの迫力を自覚していない祐理は、少し不思議に思いながらもうなずいた。

「実はお兄さま　草薙さんのお電話番号も以前に教わったのですが、恥ずかしながら電話帳への登録という操作をどのようにすればよいのかわかりませんし」

「お、お兄ちゃんのヤツ、万里谷さんにちゃっかり電話番号まで……」

…」

「あと、もう一つお願いがあります。私に、男性と親しくなるためには何をすればいいのかを、詳しく教えていただけないでしょうか！」

「ええっ!?!」

驚く静花に、祐理はさらに言いつのる。

「私は訳あって、お兄さまと関係をより親密なものにしなければいけないのです。これは私や、私の周囲の人々だけでなく、お兄さまの将来のためにもなることだと思っています。でも、そのために何が必要なのか、私にはちつともわからないのです」

「そ、それは本気ですか……?」

「はい。本当はこんなことを妹である静花さんに尋ねるのもおかしいことだと重々承知しています。ですが、私には師となるべき人が必要なのです。……聡明な静花さんなら、きっと良き範を示して下さいと信じてお願いいたします。どうか、私にお力をお貸し下さい」

悩んでいても仕方ない。まずは行動は。祐理は深々と頭を下

げた。

「うう、よりにもよって、それをあたしに頼みますか？でもたしかに他の女性と付き合うよりはより万里谷さんの方が……ああ、でも、あのお兄ちゃんにこんな人、釣り合いが　　ううん……」

モゴモゴと相手がつぶやく間も、裕理は誠意を込めて頭を下げ続けた。

やがて静香は、ハアアと深いため息をついた。

「……万里谷さん、あのバカ兄貴のこと、本気なんですか？正直、緋狩先輩のほうがお似合いですよ？」

「影兄さんは兄のような存在です。それに嘘偽りなく、本気です」

ちなみに『本気で愛しているのか』という意味の問いを『本気で仲良くなるつもりか』と受け取ったやり取りだった。その齟齬そごに二人とも気づいていなかった。

「う、即答ですか。……まあ、わかりました。万里谷さんならあの二人と違って蓮お兄ちゃんと上手くやっていけそうですし、アドバイスぐらいなら協力しても……本当にちょっとでよければ……」

静花は小声で、目を合わせないように言う。
この返答に、祐理は目を輝かせた。口元がほころび、自然と笑みがこぼれてくる。

「ありがとうございます！暗闇の中で光明を見た気分です！」

「そ、そんなにまぶしい笑顔を向けないで下さい。……ちょっと応援したくなっちゃっし」

「はい？どうかしましたか、静花さん？」

「何でもありませんっ。……あ、そっだ。万里谷さん、お兄ちゃん
のメルアドとかは聞いてるんですか？」

静花が謎の単語を口にしたので、祐理はキョトンとした顔になった。

「める……あど？何なのでしょう、それは？」

「やっぱり、そっちは知らないんですね。じゃ、いいアイデアがあります。これからお兄ちゃんのところに行って、直接訊いてやりましょうよ。あのバカ兄貴に、すこしは痛い目を見せてやらな
いっし」

フフンと意地悪そうな含み笑いをして、静花が提案する。
その意図が呑み込めずに祐理は小首を傾げたが、どうやら為になる
助言らしい。まずは提案通りに行動して見ようと決心した。

七話 偶にはこんな日常

一年五組の教室で護堂とエリカは昼食を食べ始める直前だった。いつもなら影やアテナと一緒にだが、今日に限ってアテナが

「影よ、こつ……ばいぶ？とは何なのだ？興味のわく名だな」

と言つて、弁当があるにもかかわらず、購買部へ影を連れて走つて行つてしまった。エリカも「しかたないから、先に食べていませよ」といった感じであつたため、教室で昼食を食べることになつた。そんな時に限つて教室に意外な来客が現れたのだった。

「ねえ、お兄ちゃん。ちょっと用があるんだけど、いい？」

いつも家で聞いている妹の声で呼びかけられ、護堂は振り向いた。そこには中等部の制服を着た静花と、その後ろにはなぜか万里谷裕理がいた。

「あら、静花さんと裕理じゃない？ふたり揃つて来るなんて珍しいわね」

にこやかにエリカが声をかける。

それに裕理は会釈で応え、静花は「こんにちは、エリカさん」とぞ

んざいに挨拶した。

「静花、ここは高等部の教室だぞ。こんなところに来ていいのかよ？」

「よくはないだろうけど、校則で禁止されてないし、許容範囲じゃないの？それよりね、万里谷さん携帯電話持つようにしたんだって」

護堂と親しそうな中等部女子、そして裕理の登場で、こっさりねっとり聞き耳・盗み見を敢行していた五組男子たちが「何!？」と色めき立った。

万里谷さんが携帯電話を導入だと？

バカな！今時ブログも知らない最後のアナログ美

少女にIT革命が!？

まさか……万里谷さんの狙いが草薙だったとは……

……。アイツにも地獄が必要だな……。

妙な感じで火がついた様子の彼らに、護堂は不吉な予感を覚えた。ちなみに静花はにんまりと笑い、裕理は全く周囲の変化に気づいておらず、エリカは「へえー」と面白そうに静観していた。

「でさ、お兄ちゃん。万里谷さんに携帯の番号とメルアド教えてあげて。ちゃんと登録しておきたいそうだから」

「……あれ？この前、万里谷には番号教えてなかったっけ？」

護堂が気づくと、裕理は恥ずかしげにうつむきながら答えた。

「すみません草薙さん。………実は私、機会も苦手なのです。どう操作すれば登録できるのかわからないので静花さんに相談したところ、直接交換すればいいと言われまして」

「まあ、その方が確かに楽だろうから、全然構わないけど」

意外と苦手なものが多い子だよなと思いつつ、護堂は自分の携帯を引っぱりだした。

裕理もあわてて銀の携帯電話を取り出す。

「じゃ、手っ取り早く赤外線で送ろうか」

「……はい？で、電話なのに赤外線が関係するのですかっ!？」

裕理は思い切り不審そうに護堂に聞き返した。

いつの間にか二人の距離は、吐いた息が相手の顔に届きそうなほど近くなっていた。

そんな二人を教室の外から見守る人影が二つ

「いや〜。護堂にも春ですかね」

「ほう、草薙護堂にも恋人か。はむ、彼もなかなかやるではないか。はむ」

一年五組の扉に寄りかかりながら薄ら笑いを浮かべている影。

一方、空になった弁当箱を右手で持ちながら、左手でやきそばパンを小さい口で頬張っているアテナ。ついでに二つ目……。

実は二人ともついさっきからここにいたわけではなく、だいぶ前からいた。

エリカ以外は誰も気付かなかったようだが……。

「正直言つて邪魔したくありませんね。……それに、ここにいと危険な予感がします」

教室の中をのぞくと、「う、うおおおおッ！万里谷さん、おれにも携帯の番号を教えてください！」やら

「俺も万里谷さんの番号知りたいです！」「そんな重要情報をひとりで独占するなんてオレたちは絶対に認めない！」「全ての男たちに愛を！チャンスを！プリーズ！」「草薙護堂に死を！緋狩影に死

を！僕たちプロレタリアートは、不当に富を独占するブルジョワジ
ーに最後まで抵抗することを誓う！」

などの叫びに呼応して教室のあちこちで男子が絶叫している。
さりげなく「緋狩に死を！」と聞こえたのだが……。怖いな……。

「あーあ、大変だねーお兄ちゃん。モテる男はつらいよねー」

これが狙いだったらしく、静香が嫌味な口調で言った。

「し、静花……お前、なんてことを……」

「ふんだ。女の子にモテモテでいいご身分みたいだから、たまには
いい薬でしょ」

こ、怖いですね。静花ちゃんは……。

実の兄を窮地に追い込む妹の姿を見て、影は思わず顔を引き攣らせ
た。護堂も天を仰いでいる。

「皆様、申し訳ありません」

驚愕から立ち直った裕理が、毅然とした声で呼びかける。

「私は草薙さん以外の男性と電話番号を交換するつもりは、一切ございません。ですから、ここは落ち着いて、騒ぐのをおやめ下さい。お願いいたします」

言葉遣いこそ丁寧だったが、反論を許さない凜とした力があつた。一瞬で騒いでいた男子たちは沈黙し、教室内は静寂を取り戻す。しかし、ある一人の男子が疑問を口にする。

「あれ？でも、万里谷さん。緋狩先輩には電話番号教えないんですか？」

「……………え？」

不意を突かれたように裕理が硬直する。

実際、影には教えるつもりだったが、「草薙さん以外の男性と電話番号を交換するつもりは、一切ございません。」と言ってしまった手前。反論できない。

「確かにそうだな……………。草薙にも教えるのだから、幼馴染の緋狩先輩に教えないはずがない……………」。「草薙にばかり、気になって最大の敵を見失うとこだったYO」「まさか！もう教えたとか！」「探せ！緋狩影を探せ！肅清の時間だ！」

影は全速力で走りだした。
さすがに、神殺しのため身体能力は普通の人間の数段高い。砂埃が
立つほど、足は速かった。しかし、

「……………待テヤ、コラアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアア」「……………」

五メートルほど後ろには男子の大群が迫っていた。

正直、ありえない。ここにいる全員がオリンピック代表になれるほど
ど恐ろしい早さだった。それほど、執念が強いということだろうが、
今の影にはそんなことを考える暇はなかった。

「嘘だろおおおおおおおおおおおおおおお！！！」

城楠学園二年一組在籍。年齢18、性別男、緋狩影の叫びは昼休み
の間学園中に響き渡った。

そして、金髪の少女は愉しそうな笑いをし、銀髪の少女はやきそば
パンを頬張りながら、頭上にはてなマークを浮かべていた。

七話 偶にはこんな日常（後書き）

そろそろヴオバンと戦闘します。ご意見、感想、評価など頂けたら幸いです。

八話 ふたりの想い

「眠れない……」

夜中の二時頃。影は布団から体を起こしつぶやいた。
眠れない。どうしても何か嫌な予感がしてならないのだ。

「あの人が近くに居るのか……？」

思い浮かべるのは最古の神殺し。銀髪の老人、デヤンスタイル・ヴォバン。彼と影は浅からぬ因縁がある。
先日、サルバトーレから電話があった日から警戒は続けていたが、特に変わったことはなかった。身体を刺激されるような、感覚は今日が初めてだった。

ふと、何かを思い出したように影はベッド脇に置いてある棚の一段目を開けた。取り出したのは一枚の写真。

「リリイ……」

手に取った写真を見ながら、影は寂しそうに、そして愛しそうにつぶやいた。

写真に写っているのはふたりの幼い男女。少年は薄く微笑み、少女

は恥ずかしそうに少々つつむきながら、お互いに手を握り合っていた。

髪の色はふたりとも綺麗な銀髪だった。

リリアナ・クラニチャルは月を見ていた。

彼女が宿泊しているホテルの庭園の池に月がちょうど映り、幻想的な風景を作り出している。服装は日本人特有の紺色の着物姿だった。彼女は欧州人だが、その姿は月の光に反射する銀の髪もあって、お

そろしく綺麗で似合っていた。まさに妖精と呼ぶにふさわしい姿だった。だが、彼女の表情は憂いを帯びていた。

「シャッテンさま……貴方もどこかで同じ月を見ているのでしょうか？それとも………」

天の上からでしょうか……？

そう考えた直後、リリアナはぶんぶんと頭を横に振って、その考えを打ち消した。しかし、一瞬でもそう考えてしまった自分が許せなかった。

そして、懐から一枚の写真を取り出す。

写っているのはふたりの少年少女。それは影の持っていたものと全く同じものだった。

「シャッテンさま……っ！」

彼女は愛しそうにつぶやくと写真を両手で胸に抱え、抱きしめた。本物の彼を抱きしめることはできない。あくまで抱きしめているのは彼の写真。だが、彼女には彼がわずかに写っている写真の一枚でさえとても愛おしかった。

「わたしは貴方を一生愛しています……。いえ、この身が朽ちようとも貴方を愛し続けます……。だから……。っ！」

今一度、わたしに御姿をお見せください

い……！！

《青銅黒十字》所属『剣の妖精』リリアナ・クラニチャール。
魔術結社や神殺しの騎士としてではなく、一人の女として、初めて
の願いだった。

八話 ふたりの想い（後書き）

今回は短いです。次くらいにはヴォバンと戦えるかな？

九話 解き放たれる力

小降りの雨が降り出した夕暮れ時。

緋狩影とエリカ・ブランデッリ、草薙護堂は、城楠学院から下校している途中だった。アテナは今日は学校を休んだ。理由は

「嫌な兆候がある。この屋敷は妾が守る故、数日の間妾は屋敷に籠る」

らしい。全く、ありがたい人……。いや、神様か。

隣では、先日の体育でエリカは野球の 否、並み居る男どもを三振に打ち取る面白さに目覚めたというべきだろう。という話を護堂がしていた。

……枕元に野球マンガが置いてあったのはそのためか……。全く、恐ろしい人だ。

護堂の話聞いていて、影はつくづくそう思った。

「護堂つたら、せつかくの記録をふいにしてくれて……。本当に無粋な人よね。影もそう思わない？」

「九年間まじめに野球やってた俺に、あんな狼藉を見過ごせるわけないだろ？影さんならわかりますよね？」

「アハハハハ……。僕からはなんとも……」

雨の降る通学路を、三人は傘をさしながら歩く。

影は顔を少し上に向けて、曇る空を見ながら考えた。

アテナの言う通り、この頃嫌な予感がかなりする。誰か……身近の人間に被害が及ぶような……。そんな感じの予感だ。

かの有名な暴君、デヤンスタール・ヴォバン。彼が観光で東京に来ることなど絶対にない。何かロクでもない目的のためであろう。だが、彼の目的が何なのかは、はっきりとしない。嫌な予感が気鬱で終わればいいのだが……。

「急に上の空になって、どうしたの影？わたしの新しい魅力にでも気づいて、ポーツとしちゃった？」

不意に、エリカがにっこりと笑いかけてくる。

大輪の椿が花開くような、あでやかで蠱惑的な笑顔。最近、根を詰めてばかりだったためか、影にはその笑顔が嬉しかった。

「そうですね……。エリカにはいつまでも笑っていてほしい。そう思いましたよ」

「そ、そう／＼／＼あ、そうだ。いいこと思いついたわ」

一瞬、頬を染めて影を見ながら、いきなりエリカが言い出した。そ

して右手でさしていた傘を閉じ、
し折った。

両手でへ

「大変、傘が壊れちゃった。そっちに入れてくれる？」

「え、ええええええええっ!？」

傘をさしながら目の前で起きたことに驚愕している影に密着して、
エリカは雨を避けようとする。

影は控え目にエリカを押しつけようとするが、力でかなうはずがない。
まして加減している力では。よくわからない抵抗を意にも介さ
ず、エリカは影の左腕にしがみつき、耳元にささやきかける。

「ふう、恋人とふたりで、こうして雨をしのぐのもいいものね。離
れちゃダメよ？わたしが濡れてもいいの？」

「あの……。ふたりって、護堂もいますし……。それに、傘なら僕
のを貸しますので……。その……。」

「そうしたら、あなたが濡れるからダメ。いいから、ちゃんと傘を
さして。あ、わたしの肩、雨がかかっちゃってるから、もつとくっ
ついてもいい？」

いいかと訊きながらもエリカは答えを待たず、さらにグイッと密着してくる。

しなやかで温かな肢体を押しつけられて、影は顔を赤くして焦った。制服の上からでも凹凸の激しさがよくわかる。恐ろしいほど完璧なプロポーションなのだ。しかも、耳たぶに息がかかるほど唇が近い。これはマズイ……。こういう雰囲気するとき、エリカは何をするかわからない。早く離れなければ！

「お、落ち着きましたようエリカ。ここは往来のど真ん中です。他人の目もあれば護堂の目もあります。それに登下校中の高校生らしからぬ行動はつつしむべきだと思いますが……」

抵抗になっていない抵抗しかできない今、うまいことを言うしかない。影は心の中で離れますようにと必死に祈った。

「つつしむねえ……。じゃあ、あの人たちはどうなのかしら？」

そう言われ、エリカの視線の先を向くと
ひとつの

傘にふたりで入り、キスしているカップルがいた。

「ふふふ、ねえ、影。あのふたりにも「高校生らしからぬ行動はつつしむべき」って言えるかしら？言えないわよね」

当然、いい雰囲気恋人同士を邪魔する権利など影にはない。影の

顔はたちまち青ざめていく。

(何でこんないいタイミングに妙なカップルがいるんですか!!)

影は心の中で自分に不利な状況を作り出す運命を呪った。

「ねえ、雨の中でキスするのって、わたし初めて……。影もそうでしょう？そうじゃなかったら」

そうじゃなかったら先の先は影の耳に届いてはいなかった。どうしたかと思い、エリカが影を見ると、その視線は正面をじつと見ている。その先にはひとりの青年が立っていた。

「正史編纂委員会の方……ですね？」

「はい。初めまして。甘粕冬馬と申します。以後お見知りおきください」

くたびれた背びれを着て、黒い折りたたみ傘を持つ青年。眼鏡をかけ、いかにも昼行灯という風情だ。どこか人の良さそうな顔をしているが、影はその顔を刃のような眼光で睨みつけていた。

「正史編纂委員会が何の用ですか？僕たちを取り込むつもりで来たのなら
消しますよ？」

最後の言葉を発したと同時に、空気が淀む。それにより、影の放つ殺気がかなりのもだとわかり、同時に最後の言葉は本気なのだともが読み取れた。

「ま、待つてください。今回はそのような要件ではありません。あなたが我々を嫌っているのは重々承知していますが、どうか聞いてください。あなたの妹さんが大変なのです」

「妹……？」

妹という言葉に反応し、影は殺気を納める。とたんに甘粕はふう、と息をつき、焦ったような表情から真面目な表情に切り替えた。

「裕理……ですよね？」

「はい。いかにも万里谷裕理さんです。彼女が拉致されました。犯人はデヤンスタール・ヴォバン。知っていますよね？」

ああ、嫌というほど知っているよ……。あの老人のことなんて……。それにしても、あの人の狙いが裕理だったなんて……。迂闊だった

か……。
影はヴォバンへの怒りを表すとともに、自分の不甲斐なさにも腹が立った。

「ヴォバン侯爵？ちよつと信じがたい情報ね。仇敵の羅濠教主がおられる中国ならともかく、あの方が極東の島国に来るなんて、変な話じゃない？それに、裕理をさらう理由がどこにあるの？」

小馬鹿にしたような口調でエリカが言う。明らかに信用していない態度だ。

「理由に関しては「大方、あの人の娯楽に付き合わされたのでしょう？」……悪く言えばそうです。ともかく、事は一刻を争います。疑問は取りあえず脇に置いて、私たちに同行してはいただけませんか？」

「……………エリカ、護堂。行ってください」

頭を下げる甘粕に対し、影は一瞬迷ってから言った。

「ちよつ、影！こんな胡散臭い話本気で信じるの？」

「信じる信じないの話で言ったら……………いや、正史編纂委員会の方が

言っていることを信じたくはありません。しかし、真夜中にサルバトーレから電話がありました。デヤンスタール・ヴォバンが日本に来た。と。さすがにあの男も嘘はつかないでしょう?」

「そういえば、俺のところにそんな電話が来たな……」

「サルバトーレ卿が、ふたりに?」

間違いない問題のある人物であるサルバトーレ・ドニだが、虚偽を言う男ではない。

アホでバカなダメ人間の中のダメ人間。加えて、困ったらなんでもかんでも剣で真っ二つにすればいいという最低思考の持ち主なのだ。

「まあ……そういうことなら、まちがいはなさそうね。

あの方、いつの間にか復活して影にちよっかいを出してきたのね。それも深夜に……。油断ならないんだから……」

「そうだエリカ。これはおそらくカンピオーネ同士の揉め事になります。貴女はここで別れましょう」

ぶつぶつとつぶやくエリカに、影は提案した。

護堂がドニと対決する羽目になった時も、ずいぶんエリカに迷惑がかかった。

エリカは実際のところ、影に協力している関係だが、影の存在を隠

すために護堂の騎士という名目になっている。

そのため、所属する《赤銅黒十字》から護堂への協力をやめるように何度も指示された。……エリカはすべて無視したが。

事なきを得たのは、ドニとの関係が膠着状態に陥ったおかげである。下手をすれば大問題になっていた。イタリアに近いバルカン半島の魔王ともなれば、ドニほどではないにしろ《赤銅黒十字》への影響力も強いはずだ。

だが、エリカは首を横に振った。

「影。あなたは王でわたしは騎士よ？いくらあなたの命令でもそれには従えないわ。あなたとわたしは常にともにあるべきなの。それに、わたしがいなくなったら護堂が大変よ？」

「……悔しいけど、本当の事だから何も言えない……」

少し沈んだ様子の護堂を見て、手を口に付けて影は薄く笑った。愚問だったな。エリカの言うことなんて分かり切っていたのに。

「そういうことですので、ふたりを裕理のところへ連れて行ってください」

「えっ？あなたは行かないのですか？」

影はふたりと言った。つまり護堂とエリカだ。影は含まれていない。

それを甘粕は疑問に思った。

「僕は家に待たせている人がいます。その人に一言いったらすぐ行きますので」

「……なるほど、了解しました」

やはり、影は個人的に正史編纂委員会の使いである甘粕の施しを受けたくないとわかったのだろう。甘粕は深くは追求しなかった。

「……さて、準備をしますか」

エリカと護堂を乗せた車を見送った後、影は自分の家へと帰宅し、すぐさま書庫に籠った。

「カオス虚空………ガイア大地………エロース源愛………タルタロス奈落………あつた」

ぶつぶつと何かをつぶやいた後、影は高い書棚の中間くらいにあつた一冊の本を手にとった。

書物には何十にも鎖が巻かれ、嚴重に封印されていた。いかにも曰くつきの代物だということがどこからどう見ても分かる。

「我、神々の力を篡奪せし者。奪い取りしその力を今一度、我的手
中に戻さん」

バチイイイイツツ！

影が呪文を唱え終わると、書物に巻きついていていた鎖がはじけ、書物は影の身体に自然と吸い込まれていった。儀式が終わると、影はふう、と息をつき目を閉じる。自分の中に戻ってきた力を確認するために必要な行為である。

「成功……ですね」

そうつぶやくと書庫を出て、自分がついさっき入ってきた玄関へと向かった。

影の姿はいつの間にか学生服から、夜よりも深いような漆黒の騎士服に変化していた。

九話 解き放たれる力（後書き）

返信も更新も遅くなってすみません!!

十話 狩りの始まり

図書館の二階に上がった護堂たちは広い閲覧室へ足を踏み入れた。

そこには背の高い老人。

デヤンスタール・ヴ

オバンと、白衣の袴をまとう裕理がいた。

狂犬のような数々の逸話とは裏腹に、老人の顔つきは知性の鋭さに満ち、仕立ての良いスーツを着ており、非の打ちどころのない老紳士に見える。

護堂は目の前の相手にそんな印象を抱いた。

「クラニチャールよ、我が下僕を斬り捨てるとはなかなか乱暴だな」

老紳士

デヤンスタール・ヴオバンがいきなり言った。

責めていくのではなく、むしろからかうような口ぶりで、リリアナに向けて問う。

「申し訳ありません。騎士として『王』たる御方への非礼を見過ごしてはならぬと判断し、剣を振るってしまいました。後ほど、いかなる罰でもお受けいたしましょう」

「なに、あの程度のものならば、いくらでも代わりがいる。気にせずともいいえ」

冗談めかして答えてから、ヴォバンは退屈そうに護堂を眺めた。尊大で、どこ気けだるそうなまなざしである。

「ずいぶんと若いな。そういえば、私が『王』になったのも君ぐらの歳頃であった。……名乗り給え、少年。我が名は名乗らずとも知っていようが、私は君を知らぬ」

「草薙護堂だ。俺の友達を返してもらいに来た」

意識的に敬語を使わず、護堂は名乗った。

目の前の老人の逸話をさんざん聞くうちに、敬老精神を発揮する気がなくなったらしい。

ちらりと、護堂は裕理の様子をうかがう。憔悴しているが、痛めつけられた様子はない。護堂の顔を心配そうに見つめている。

「草薙さん、どうして！？ いけません、私などのためにこんなところへ来ては！ まして、影兄さんもないというのに！」

「大丈夫だ。影さんはすぐに来る。それより万里谷は大丈夫か？ 乱暴とかされてないだろうな？」

「そのような愚行はせぬよ。その巫女には役に立ってもらわねばならぬからな」

皮肉っぽく唇をゆがめながら、ヴォバンが口を挟む。

「ところで少年。さきほど、とある人物の名を口にしたな。確か……
…エイ、といったか？その者はこの国で二人目の『王』か？」

「ああ、影さんも『王』だ。それも俺なんか比べ物にならないほど強い。だから、俺と影さんでお前がやろうとすることも全部止めてやるよ！」

護堂はここへくるまでに、リリアナから事情は一通り聞いていた。ヴォバンの目的、裕理の必要性『まつろわぬ神』を呼びだす危険性、護堂には見過ごせる理由など、ひとつもない。

そして、自分が尊敬する先輩の力の強さもあり、護堂はケンカ腰で怒鳴りつけた。

それを気にも留めず、ヴォバンは退屈そうにあくびを噛み殺した。

「少年よ、私をを見くびっているのかもしれないが、私の目的はそう簡単には止まらんよ。まして脅しのような言葉などでは。『王』に何かを願うのであれば、然るべき代償を用意すべきだ。そうではないかね？」

「代償だって？」

「ああ。この娘の代わりとなる巫女でもかまわぬし、私の獲物となる神を連れてくるのもいい。そうでなくては取引にもなるまい」

つまり、この老人は話をするつもりなどない。交渉など無駄だと言いたいのだ。

護堂は舌打ちした。ヴォバンが逸話通り『カ』の信奉者なら、自分の力
古代ペルシアの軍神から奪った権能を見せる他ないようだ。

護堂が肚をくくりかけた、その直後

バリーイイイイイイイイイイインツツ！！

「！？なんだ」

何かが図書館の天井を突き破って、落下してくる。

周囲には木くずやら、砂埃やらがたちこめ、護堂たちの視界を覆い尽くす。いくら神殺しや魔術師でも、咄嗟に視界を遮るものから守ることはできない。故に、この場にいるひとりを除き、誰もが目の前の状況を確認する術を持たなかった。

「ふう……。慣れないことはするモノではありませんね……」

煙の中からそんな声が聞こえてくる。護堂とエリカ、裕理はほぼ毎日聞いている声。そして、ヴォバンとリリアナは何年か前に聞いたことのある声だった。

「お、まえは……」

煙が晴れた先

。その先にいる人物を

見てヴォバンはその表情を初めて歪ませた。

自分と同じ銀色の髪、意図的に隠された左目。そんな人物をヴォバンはこの世で一人しか知らない。

「くくくく、はははは

」

ヴォバンの口から笑いが漏れてくる。

そうか、お前がこの国で二人目の『王』だったのか。くくくく、ご丁寧に名前まで変えて、道理で従僕の目にかからないわけだ。

そう思いながら、最古の老魔王は開けた視界の先。白髪の少年を睨みつけた。

「随分久しいな。幾分か成長したようだが、すぐにわかったぞ。シヤッテン？」

「えっ!？」

声を上げたのは護堂の隣にいるリリアナだった。

目の前にいる少年が、長い年月で自分の探し求めていた人物とあれば、驚くのも当然だろう。

しかし、彼

緋狩影はそんな彼女を意にも介さず、

目の前の老人を睨んでいる。まるで、獲物を見つけた殺人鬼のよう
な………愉しそつだが、危険な瞳で。

「その名で呼ばれたのは何年ぶりでしょうか……。八年ぶり、ですかね？」

口元に笑みを浮かべながら影が挑発的な口調で言う。ここまで危険な空気を纏った彼を十八年間。誰も目にしたことはなかっただろう。甘粕のときとは比べ物にならないほど、危険で

不気味な、表情をしていた。

しかし、ヴォバンはそれに何かを感じた様子もなかった。

「さて、いつだったかな？あまりよくは覚えておらんよ。しかし、お前が『王』とはな。私としても鼻が高いぞ。なあ

「..?」
「ななです..?」

「..?」
「はあ..?」

「..?」

「嘘……………」

最後の言葉に皆が驚愕する。いや、正確には銀髪の少女、ひとりを除くが、それ以外の面々は驚きと疑問の混じった視線を目の前で笑っている『王』。

緋狩影へと向ける。

「否定はしませんよ。肯定もしませんけどね。目の前の老人が血の繋がった父親だなんて言いたくありませんから」

「くくく、連れないことを言うな。お前をしばらくの間養っていたのはこの私だぞ？父上とでも呼んでも良いだろう？」

銀髪の『王』と銀髪の『王』。父と子が、お互いに皮肉を言い合う。声こそ穏やかだが、影には明らかに憎しみのようなものが言葉に込められている。

「よかったなクラニチャ ルよ。君の求めていた男は目の前にいるぞ」

「は？クラニチャ ル？何を言って

なっ！？」

ヴオバンの言ったことを信じていないような口調で、影が言った。しかし、背後にいた人物を見て余裕をもった表情は一瞬にして驚愕へと変貌する。影の瞳に映っているのは護堂でもエリカでもなく、リリアナだけ。他には何も映ってはいない。

「シャッテンさま……」

「リリ……アナ……？」

待ちわびたように言うリリアナ。しかし、影は喜びの表情を浮かべることもなく、目を見開き困惑の表情をする。まるで、死人を見たような。そんな表情だった。

「くははははは、どうだ、息子よ。お前が殺した女を見た気分は？
くくく、ははははははははははははははははっ！！！」

「えっ、どういうことですか!？」

困惑する影を見て高笑いをする、ヴオバンに対しリリアナが疑問を言う。当然だ。自分の想い人が自分を殺したなどと、目の前で言われては疑問に思わない方が普通ではない。

しかし、ヴォバンは彼女の疑問には答えず、笑い続ける。そして、影はそのやり取りを最後に映して気を失い、足元から崩れ落ちていく

「影っ！！」

エリカがもの凄いスピードで走り出し、影の身体が地面につく一歩手前のところで抱き留める。護堂も続き、エリカに抱えられている影の身体を一目見ると、目の前で未だに高笑いを続けているヴォバンを睨みつけた。

「くくくくくく、少年よ

今私は

気分が最高にいい。貴様の願い通り、この娘は返してやる。だが、代わりに貴様とそこで眠っている小僧と娘には狩りの獲物となつてもらおう」

ヴォバンは裕理の腕を掴んで乱暴に立たせると、護堂の方へと突き飛ばした。

護堂は彼女の華奢体をあわてて抱き留める。

裕理の体は小刻みに震えていた。顔色も蒼白で、血の気がない。相当の恐怖を感じなければこんな風にはならないだろう。護堂は裕理の背を安心させるように叩く。

「三〇分やる。その娘と其奴そせじを連れて、どこにでも往ゆくがいい。三〇分後、貴様の命と娘と其奴の体を奪うために、私はここを出る。」

……どこに隠れてもかまわぬぞ。地の果てまでも追いかけて、追いつめ、狩り立てるだけだからな。これが狩りのルールだ。了解できたかね？」

事がここまで及んでは、もうこのゲームに乗るしかない。
覚悟を決めて、護堂は静かにならずいた。

十話 狩りの始まり（後書き）

大体の人がわかったと思いますが、主人公はヴォバンの息子でした。さて、これからどうなるやら……。

十一話 王は説得する

いつの間にか日は沈み、夜になっていた。

小雨はまだ降り続けている。

気絶している影を背負いながら、エリカと裕理を伴って図書館を出た護堂は、駐車場で甘粕と合流した。

「なるほど、緋狩影氏はヴォバン侯爵のご子息だったのですか……そして、あなた方は狩りの対象と……。とりあえず、ここを離れますかね。移動しながら対策を考えましょう。じっとしていても埒があきませんし」

手短に経緯を報告された甘粕は、そう言って護堂たちを促した。

結構な非常事態なのに飄々としているのは、見かけによらず豪胆なのか、それとも達観しているのか、どちらなのだろう。

護堂は甘粕の様子を見てそう思ったが、無防備な影がいることもあって、ひとまず彼の意見に従うとこにした。

「何だかいろいろと、まずい事態になったよなア……」

行く当てもないまま、首都高を港区方面に走る国産乗用車。

その助手席で、護堂はぼやいた。

運転席にはもちろん甘粕が、後部座席にはエリカと裕理。そして、ふたりに挟まれるようにして眠っている影がいる。

「それにしても、影が侯爵のご子息って……。リリイとはただならぬ関係っぽいし、それに、影が気絶する前に侯爵が言ってたことも気になるわね……」

少し疲れた声でエリカが言う。

車の揺れで裕理の方へ傾く影の体を自分の方に戻しながら。

「お前が殺した女に会った気分は……って、ヤツか。けど、リリアナは生きてるし、わけがわかんねエ……」

護堂は悩もうとするが、そんな暇はない。

ゲーム開始へのタイムリミットまでどんどん迫っているのだ。

「まあ、今悩んでも仕方ないし、今後の方針を考えよう。

あのじいさん、いろいろ権能を持ってるんだよな。全部でいくつあるんだ？」

「……七つでしたっけ？それとも八でしたか？」

「九、もしかしたら一〇以上という説もあったわね」

甘粕とエリカの回答がかなり曖昧だったので、護堂は眉をひそめた。

「はつきりしない答えだな。俺たちの能力って、どっかの魔術師たちが調査してレポートとか作ってるんじゃないかな？ 勝手に名前をつけたり」

「グリニツジ賢人議会ですね。ええ、その通りです」

ハンドルを握りながら甘粕が答える。

「でも、あそこの連中が活動を開始したのは、一九世紀の後半から
ヴォバン侯爵のように、それ以前からカンピオーネだ
った方々の情報はたいして持ちじゃないんですよ。サルバトーレ・
ドニヤ黒王子アレクといった、二〇世紀以降の『王』については、
それなりに詳しいようです。まあ、緋狩氏については何もわかって
いないようですがね」

「特にヴォバン侯爵の場合、最初に倒した神も不明なの。狼に縁を
持つ神 おそらく大地の属性を持つ神だとは言われてい
るけどね。もしかしたら、影なら知ってるかもしれないけど……」

気絶していることをいいことに、抱き枕のようにしっかりと影を抱
きしめているエリカの補足を聞いた護堂は、前に電話で教えられた
情報を思い出した。

「そういえばドニのヤツも、いろんな権能があるって言ってたな。なんか脈絡のない、全然系統立ってない感じの力ばかりだったけど」

護堂が思いついた感想を、素直につぶやく。

途端に説明をしていたふたりは黙り込み、何か言いたげな視線を護堂に向けた。

「な、何だよ？」

「いえ……あなたがそれを言ったら、おしまいじゃないですか」

「ウルスラグナの化身だって、てんでバラバラな能力ばかりよ。影のロキの権能だって、謎が多いけど」

たしかに脈絡のなさではいい勝負だろう。そして、ロキの権能が謎なのも事実。なにしろ所有者の影すら完全に掌握できていないのだから。護堂はそれ以上のコメントを差し控えた。

「じ、じゃあ、さっきの話に戻るけど、今後の方針を決めよう。あのじいさんとの対決が避けられないなら、せめて被害の出ないところへ行くのがいいと思うんだ」

「そうですねエ。裕理さんを助けるのが大前提なら、他に手はないでしょうしねー」

進行方向を見つめながら、甘粕が言った。

車道を叩く雨粒の勢いが強い。雨の降りがかなり激しくなっていた。

「ただ、裕理さんを人身御供として渡してしまうって選択肢もあります。個人的には悲しい選択だとは思いますが、公共の利益を優先させるなら十分にアリですよ」

「本人の前でバカなこと言わないでください。却下に決まってるじゃないですか」

太平楽に言う甘粕に対し、護堂は即答した。

この青年は普段、飄々としている癖になかなかひどいことを言う。

「でも、そうしたらヴォバン侯爵は満足して、すぐ東京から退散してくれるでしょう。余計な被害を出さなくて済みますから、非常に合理的です」

「理屈はわかりますが、俺は反対です」

取り合う気のない護堂に反論したのは、提案者ではなかった。

「……ですが草薙さん、甘粕さんの意見は間違っではおりません」

今までずっと黙り込んでいた、裕理の発言だった。

ずっと暗い顔つきでうつむいていたのだが、急に顔を上げて話に割り込んできた。

「このまま私を引き渡さず、侯爵が草薙さんと戦うことになれば

東京は大惨事に見舞われるでしょう。ご存知ですか？あの方が呼び寄せた大嵐で壊滅した都市や、解き放った狼の群れに蹂躪された村々の伝説を」

決意を込めて語る、裕理の凜とした声。

もう彼女はおびえてなかった。非愴とさえ言える面持ちで、静かに語る。

「侯爵が執着しているのは、私ひとりです。私ひとりをあの方に差し出して収まる話なら」

「随分自分勝手なことを言うの

ね」

え？」

「あなたは随分自分勝手。聞こえなかった？」

黙って話を聞いていたエリカが何の脈絡もなく、突然裕理の語りに割り込んだ。その声は冷静だが、冷やかな侮蔑と怒りのようなものが含まれていた。

覚悟を決めた自分になぜこんな侮蔑のような言葉が言われるのか。理不尽に感じた彼女は未だに冷やかな視線を向けているエリカに対し怒鳴る。

「な、なにが自分勝手だというのですかっ！私はこの身ひとつ捧げて自体が収まるのならそれでいいと」

「それが自分勝手なのよ！あなた聞いていなかったの？侯爵が求めているのはあなたひとりだけじゃない。侯爵は影の身体も奪うつて仰ってたわ。あなたひとりの身体ではもう収まりきらない事態なのよっ！あなたは自己満足のために兄をも犠牲にするというの！？だったら、わたしはあなたを殺すわ！」

「え、エリカ、殺すって……冗談でも性質が悪いぞ？」

「冗談じゃないわ、護堂。裕理が影と一緒に犠牲なる？ふざけるのも体外にして。あなたが私の愛する者を奪おうって言うのなら、私はあなたを本当に殺すわ」

やばい、本気だ。

若干落ち着いたものの、未だに怒りを抑えきれないエリカの言葉聞いていて護堂は冷や汗が頬を伝うのを感じた。

彼女は自分の大切な者を命に代えてでも守るという信念がある。しかも、その気持ちに向いているのは彼女が好意を持つ白き『王』の少年に対し向いている。裕理が信念を変えない限り、エリカは本当に裕理を殺しかねない！

護堂はエリカと裕理の仲裁に入ろうとしたその時

「犠牲は要りません。要るとしたら、あの白髪の老いた王さまだけですよ」

「影……？」

「影………ちゃん？」

「影………兄さん………？」

いつの間にか目を覚ました影が、最初に発した言葉だった。

怒り気味のエリカが、悲観的になっている裕理が、困惑している護堂が、そして運転席の甘粕までもが、確かに聞こえるその声に驚愕した。

「だから、自分が犠牲になるとか、あなたを殺すとか言わないでください……………。僕は誰かひとりでもいなくなってしまうたら……………悲しいですよ」

美しい。まるで聖歌隊のように透き通った声。この場にいる誰もがそう思っただろう。そんな美しくも悲痛そうな声で、影は訴え続ける。

「裕理。あなたは本当に、あの人のところへ行きたいのですか？」

「……………」

わずかにうつむきながら、黙り込む裕理。左へ向き、彼女の顔を見据える。

「ふう、護堂、すいません。続けてくれませんか？」

妹を諭すのは兄の役目だが、今は自分よりも適任者がいる。そう考えた影は護堂に自分の言葉の続きを託した。きっと、彼の方が裕理

には響く。

「影さん……。わかりました。なあ、どうせアテナのときみたいに自分が犠牲になればとか思ったんだろ？俺はあのと決めたんだ。こういうことがまたあったら、万里谷はきつと自分を犠牲にしようとするだろうから
絶対にそんなふうにはさせないって」

やはり、護堂に託して正解だった。

人間としても王としても先輩の意志を汲みとって語る護堂。未来の理解者に意志を託した影。ふたりの体がほぼ同時に熱くなる。

カンピオーネの肉体は、危地に飛び込むとき心身を勝手にベストコンディションへと近づけていく。この能力が、ふたりの王に戦う力を送り込んでくるのだ。

「しかし、あなたと影兄さんが侯爵と争えば、またひどい被害が出てしまいます！落ち着いてください！」

「落ち着いているよ、俺も影さんも。大丈夫。あつちがすごいカンピオーネでも、神様じゃないんだ。アテナみたいに闇の世界を造り出したりはできない。それに、影さんも復活したから、何とかできるはずだ」

「でも、それではおふたりが……。もっとうご自分のこともお考えください」

肩を落とし、裕理が力なくつぶやく。

「もし、それでおふたりの身に万が一のことが起これば

いえ、侯爵と戦う以上、起るに決まっています。私などのために草薙さんと影兄さんが亡くなられたりしたら、私は

」

泣いている。この儚げで気丈が少女が泣いている。

自らの危険を顧みず、民のためにアテナにさえ立ち向かった裕理が今、明らかに泣いていた。おそらく、自分のために兄と護堂が危険を冒そうとしているからだろう。

己ひとりのことだけなら、裕理はきつと涙を押し殺して我慢しようとするだろう。

昔からそうしてきたように。

これで逆に、ふたりの心は固まった。万里谷裕理は自分たちが守る。あのくそじじいのわがままは、意地でも邪魔してやる。なんとしてみ目にもものを見せてやる。

「裕理、もう諦めなさい。これは王の制定よ。あなたが何を言おうと覆ったりしないわ。……忘れていたかもしれないけど、このふたりは『王』よ。とてもわがまままで、横暴な人なの。普段がどうであれ、ね」

泣き崩れる姫巫女とは対照的に、影の隣でエリカは落ち着きを取り

戻っていた。

余裕の笑みを含ませながら問いかける。

「もちろん、あなたの身柄を要求する侯爵も『王』である以上、どちらかを選択する自由はあるわ。どうするの？侯爵と影、護堂、あなたはどちら側を選ぶのかしら？」

「ですが、草薙さんと影兄さんではヴォバン侯爵には勝てませんっ。同じカンピオーネだといっても、権能の強さも数も、全て侯爵の方が勝っています！おふたりとも樂觀しすぎです！」

裕理が涙に濡れた顔でたしなめる。

だが、影も護堂も決意は変わらない。エリカも肩をすくめてみせた。

「だそうですけど、我が君方？」

「くはははははははっ！僕を甘く見すぎですよ。あと数枚かは誰にも見せていないジョーカーを残していますので、ご安心を」

「何を今さらってヤツだよ、それは。勝てるかどうかで言えば、俺は影さんがいなければアテナにも負けていただろうし、ウルスラグナにだって負けてたはずなんだから。今さら気にしたって仕方ない」

影は正面を、護堂は運転席に座る甘粕へ向き直った。

「そういうことですので、万里谷の身柄は俺たちが預かります。あのじいさんには絶対に渡しません。あと、このまま有明の埋め立て地に向かってください。この辺で荒事になるよりは、まだマシでしょうから」

「了解です。カンピオーネ三人に続けて拉致されるとは、裕理さんも大物ですねエ。修羅場にご注意を」

「あ、甘粕さんっ、あなたまで何を!？」

ほくそ笑む甘粕を咎める裕理。

なんとなくだが、この人とは仲良くなれそうな気がする。

影がそう思っている間にも、不真面目な青年エージェントはどこ吹く風とばかりにハンドルを操る。

「残念ながら、私は正史編纂委員会の一員です。この業界の関係者としては、魔王様のご意向には逆らえないのですよ。……それに、緋狩氏の望むことは絶対に断らないように念を押されていますし。……なんだか盗んだバイクで走りだす気分と言いますか、悪事に荷担するようでワクワクしますしね」

「奇遇ですね。僕もです」

「おおつ、緋狩氏とご意見が合うとは！よければご趣味を教えてくださいませんか？」

「え、影兄さんまで、不謹慎ですよ！」

裕理がとうとう怒り出す。さっきまでの非愴感も、涙も、ついに振り切ってしまった。

そんな彼女を見て、影は目を閉じて微笑み、護堂はひっそりうなずいた。

全てが終わったら、裕理の説教とエリカの事情聴取かな……。それよりも今はリアナのが気になる……。……。彼女がもしも生きているのなら、真実を知らなくてはいけない。

ふと、エリカと視線が合う。

彼女は黙ってウインクしてくれた。全て異論はないということだ。

「すみません。迷惑に迷惑を重ねてしまって」

「謝るなって前にも言ったでしょう？あなたに剣を捧げた以上、こういうときの覚悟は決めているわ。でも、全て終わったらリィとの関係についてはじっくり聞かせてもらおうからね」

やっぱり、そうなるのか……。

影が軽いため息をつくなか、ゴロゴロと雷鳴が轟いた。

かなり近くに落ちたようだ。窓の外を見れば、夜空にぶあつい暗雲が立ちこめている。雨の勢いも、さらに強くなってきた。

「……そういえば、もう三〇分経っていますな」

灰色の影が現れたのは、甘粕が時計をちらりと見た直後だった。

十一話 王は説得する（後書き）

やっとヴォバンとバトれる……。長かった……。感想、ご意見、評価などお待ちしています。

十二話 狩る側か、狩られる側か

小説本文 走る。

激しい雷雨のなかを、灰色の影かげの群れが走る。

影かげ 否、よく見れば、それは狼の姿形をしていた。その数は三、四〇ほど。

濃いネズミ色の体毛を持つ狼たち。

だが、そのサイズが規格外だった。馬よりも大きいのではないか？
そう思うほどの巨軀なのだ。

巨大な灰色狼の一群がさまざまに速さで首都高の上を疾駆し、影たちの乗る車を後方から追跡してくる。

……おそろしいことに、徐々に差が詰まりつつある。

まだ三〇メートルほどの間隔はあるが、そう遠からぬうちに追いつかれそうだ。

「……相変わらず、嫌な『狼』共ですね。もはや哺乳類の域を超えていますよ……」

「確かに……完全に化け物だな」

「わたしは初めて見るけど……候はあんなのを何百匹も呼び出せるんだから、そりゃ街や村の一〇や二〇、簡単に滅ぼせるわよね」

後方の車窓から狼たちの狂態を見た三人は、しみじみ感想を言い合

った。

ようやく獲物を見つけた、飢えきつた獣。けだもの

そう説明されれば、すぐ納得できただろう。そして、涎を垂らしながら後ろから猛追してくる大群はまるでその飼い主の意志を表しているように、眼がぎらつき、血走っていた。

「そういえば、すこし前から追い越す車がないなって気になってたんだ。あれが原因か……」

確かにそうだ。

今日の交通量はそれほど多くはない。だが、首都高を走る自動車がゼロになるはずがないし、事実、前を行く車や併走する車、追い越しにかかる車はそれなりにあった。

なのに、つい五分ほど前から周囲の車は極端に少なくなっていた。まあ、映画に登場するような化け物狼が首都高を平然と爆走していたら、当然まともなドライバーなら啞然として道を譲る。

「甘粕さん、車を止めましょう！関係のない方々を巻き込むわけにはいきません！」

「しかし、今止めたら僕たちは獣の餌食ですよ？」

「緋狩氏に同感です。しかし、こんな場所での追いかっこは避けるべきですな」

影の意見に同意して、甘粕はハンドルを傾けた。
首都高3号線の谷町ジャンクション。

そこに設けられた一般道への出口へと、甘粕は車を走らせる。

「って街中へ出るつもりですか！？危ないでしょうが！」

「この速さで走りながら、あんな怪物に襲われたら大惨事ですよ！
どうせ追いつかれそうなんですから、地面に足をつけて逃げた方が
ましですって！」

甘粕が少しスピードを上げるが、狼は約一〇メートルほどにまで迫
っていた。

ちいつ、狼の距離が近い！

影は心の中で憎々しそうに毒づくと背後のシートへと身を乗り出し、
ロキの権能の一部『創造』を使用し、形も長さもバラバラな何十本
の剣を眼前の空中に『創造』した。
突然のことにエリカ、裕理が驚く。

「甘粕さん、バックのガラスは弁償しますので、すみません！」

「はいつ？」といった感じで、何が起きているのか分からない甘
粕に謝罪しながら、正面にあるガラスの窓を『創造』した剣で豪快
に貫く。

車のガラスを跡形もなく粉碎し、飛んでいった何本もの剣は正面に

いる獣の大群へと突き刺さった。

しかし、紅い鮮血が舞うことはなく、代わりに青黒い液体をほとばしらせて、巨狼の一部は闇へと溶け込んだ。

一部 数十匹は減らせたが、数はまだまだいる。

だが、ほんの少しの時間稼ぎはできた。

「数は少し減らしました。後は適当なところでいいので僕たちを降ろしてください。あとは何とかして見せます！」

一〇分後、一般道に出た甘粕の車は六本木界隈を走っていた。

高層ビルや高級ホテル、テレビ局、すこし離れた所には神社や寺院、大使館などもある都心のだ真ん中だ。

「……すみません、そこで止めてもらえますか」

強い雨が窓を打つため、外は見えづらいが、良さそうな場所を見つけた護堂は、甘粕に声をかけた。

交差点の角にある、小学校の前だ。なるほど、護堂も考えたな。

都心の学校なので、決して敷地も校庭も広くはない。しかし、夜なので子供もいないだろうし、暴れても周囲にそこまで被害も出ないだろう。

車を路肩に寄せてもらい、影とエリカ、護堂は車を出た。

風雨が激しく、羽織っていた裾の長い魔道士服は簡単に濡れ、靴の中にまで雨水が染み込んでいく。

「さあ、万里谷も行こう。ちょっとやな天気だけど、我慢してくれよな」

護堂が後部座席を開け、裕理に降りるように促す。

しかし、彼女は従おうとしなかった。護堂の顔をまっすぐに見つめ、真摯な瞳でゆっくり訴える。

「草薙さん、あなたもご覧になったでしょう？あの『狼』も『死せる従僕』たちもヴォバン侯爵の持つ力の一部に過ぎません。あなた方では

あの方には勝てません。それに勝てないまでも全力で戦えば、必ず周囲にひどい被害が出るはずですよ」

本当に頑固だな……。幼い頃からだ、ここまでとは……。でも、護堂がどうにかするだろう。

そう考えた影は何も言わず、口説き文句のような言葉で説得している護堂と裕理に背を向け歩き出す。

「影、私を置いていかないでくれる？さすがに酷いわよ」

エリカの声で後ろから呼びとめられた。少し拗ねたようなような声で
やはり、あのふたりは妙な空間を形成していたらしい……。

「アハハ……。すみません。それよりも準備にかかりましょう。
お願いします」

「そうね。どうせ、裕理は門を超えるなんて不可能だろうし
斬るわ」

彼女はスカート先端をつかみ、勢いよく引き裂いた。逆側にも同じことをする。もちろん、戦いで動きやすくするためだろう。

「
鋼の獅子と、紅き悪魔の盾よ。我が意志、我が言霊に応えよ！」

雨に濡れることなど気にせず、エリカは召喚の魔術を使った。その右手に現れしは、獅子の魔剣クオレ・デイ・レオーネ。その身を覆うのは、紅と黒の軍衣。ロッシネロ バンティエラ戦闘態勢を整えたエリカは、愛用の魔剣をVの字に大きく振るう。見事。この斬撃で、小学校の校門は文字通りに切り開かれた。説得が成功し、後ろから見ていた護堂と裕理はその様子に啞然とする。

「あ、私は荒事が苦手なので、ちょっと距離を置いて応援していますよ。たいしてお役に立てず、申し訳ございません。みなさんの健闘をお祈りいたします」

これは甘粕の言葉だ。

この期に及んでものんきそうに運転席に収まったままで、焦った様子もない。彼らしいといえば、彼らしいのだが……。

「ふうん。荒事が苦手ねー。とてもそうには見えないけど」

「いやだなア、エリカさんは。あなたとチャンバラしたら、三〇秒で私の惨敗ですよ」

「そう？わたしの見立てだと、三〇〇秒くらいは保ちそうな気がするわよ。いずれ機会があったら、試してみましようか？」

毒花のように微笑むエリカに対し、甘粕はとぼけた愛想笑いを浮かべた。

「勘弁してください」ディ・アウ・オロ・ロッシン『紅き悪魔』のお相手が出来ると思うほど、自惚れてはおりませんので。それではみなさん、お元気で」

本当に気が抜けてる人だな。あんな人が正史編纂委員会だなんて……。
イマイチつかみどころのない甘粕に影は複雑な表情をする。そして、四人は夜の学校へと侵入した。
目指すのは校庭。

今さら鼻の利く『狼』たちから隠れても、仕方がない。それよりも相手の姿をすぐに確認できる場所の方がいい。
校庭の中心で待つこと約五分。
ついに、あの巨大な灰色狼たちが現れ始めた。小学校を取り囲む柵や壁を、巨体に似合わぬ身軽さでひらりひらりと飛び越えて、校庭内に侵入してくる。
ゆっくりと近づいてくる『狼』の数は、影が減らしたとはいえ優に三、四〇匹はいた。

「あの連中の相手は、わたしがやるわ。まさかこんなところで神具を召喚したり、ウルスラグナの化身を使うわけにはいかないでしょうしね。権能はできれば侯爵との対決まで取っておいた方がいいわ」

「すみません。任せます」

エリカの申し出に、影は申し訳なさそうに頭を垂れながら了承した。ロキの権能の一部。神具召喚はその名の通り、神々が使用した武器や道具を召喚し、使用するもの。

今までに召喚したことのあるのは「打ち砕く雷神の魔槌」や「灼熱ミョルニル世界ヴァテインの最終剣」というふたつ。この辺りを一掃するのならどちらかを召喚し、一気に薙ぎ払うことも可能だが、加減をしないと、神々の武器を無断使用しているということもあって、反動がひどい。それに下手をしたら首都高全域を荒廃させかねない。

「いざ来たりませ、異邦人の救い主よ。処女おとめより生まれ出づる約束の主よ！」

銀の刀身を持つ愛剣へ、エリカが言霊をささやきかける。クオレ・デイ・レオーネは見えない糸に引かれるようにして、空中へ浮かびあがった。

「聖なるかな聖なるかな、万軍の天主よ。我ら神なる御身を讃えん！御名を崇め奉る！」

ひとつ、ふたつ、みつつ　クオレ・デイ・レオーネが増殖していく。この魔剣と瓜二つの形状を持つ剣が、エリカの眼前の空中に次々と現れる。

似ている。

影は自分の持つ武器などを『創造』する能力ちからとももの凄く酷似した魔

術だと感じた。増殖した数もなかなか多く、たった数十秒で、銀の魔剣とその分身は一三振りまで増えた。

「さあ、決闘の時間よ、クオレ・デイ・レオーネ！」

この言霊が引き金となった。一三の魔剣は一三の矢となり、稲妻のように飛翔する。

矢は飛びかかる好機を待ち構えていた『狼』たちの眉間に、ことごとく突き刺さった。

痛々しい啼き声をあげる灰狼たち。

やはり、その傷口から紅い鮮血が吹き出ることにはなかった。影が剣を突き刺したときと同じように青黒い液体を額からほとばしらせて、巨狼の屍は闇に溶けこみ、消滅する。

死せる従僕と同じように普通ではないので、本物の狼を殺すより断然気分がマシだ。

一気に狼の頭数を減らした一三振りのクオレ・デイ・レオーネは、宙を飛んでエリカの手中へと舞い戻った。

いつのまにか、もとの一振りにだけになっている。

「我が獵犬どもも、『ディアウオロ・ロッシン紅き悪魔』の前には役立たずか。口惜しいものだな」

自らを不快にさせる声が響く。

知性の衣で包まれた横暴の化身。古き魔王の吐き出すささやき声。

「待たせたな、小僧共。私に押しつぶされる覚悟はできておるか？」

雷鳴が轟き、風が唸りをあげる。雨が激しく大地を打つ。それらの騒音を無視して、デヤンスタール・ヴォバンの声が届く。

悠然と校庭の中心へと歩み寄ってくる魔王は、どこまでも傲岸そのものだった。

アンタのその余裕そうな鼻、へし折ってやるよ。

待ち侘びた相手との決戦に、白き魔王はその端正な顔を歪め、獰猛そうに口元から歯を出して笑っていた。

十二話 狩る側か、狩られる側か（後書き）

次はついに決戦ですね……。感想、ご意見、評価お待ちしております。

十三話 死せる者と死を贈る者

「私は嵐の夜が好きだ。風と雨と稲妻、その全てが私を猛らせる。貴様らもそうであろう？我が息子と未熟とはいえ我が同胞であるならば、きっとそのはずだな」

背広の上に漆黒のコートをはおったヴォバンは、愉しげに雨を浴びながら言った。

皮肉なことに間違っていない。影は台風の日には左目が疼くとともに、闘争本能が高ぶる体質であるし、護堂は昔から台風の日には心が浮き立つ性癖を持っている。しかし、ふたりはそこを無視して言い返した。

「だから何です？どうでもいいですね。貴方と早く決着がつけられれば」

「あんたが好きなのは嵐の夜でよかったですとも言いたいのか？」

「いや。これは私が呼び込んだものだ。気が昂ぶると、自然とこうなってしまうのだな。貴様らの趣味にも合うはずだから、べつにかまわんだらう？」

父 デヤンスタール・ヴォバンは嵐を呼ぶ。

知ってはいたが、実際に目の当たりにするのは初めてだ。影は気を

先ほどより強く気引き締める。

「勝手に決めつけるな！何の根拠があって、そんなことを言うんだよ？」

護堂が不名誉だ、と叫ぶように言い放つ。

「そもそも、お祭り好きでお調子者の資質がなければ、神と戦ったりはするまい。我が息子は少々意外だったが、カンピオーネになるような輩には、おおむね同じ傾向がある」

軽々しく我が息子とか言わないで欲しい。だが、確かにそうかもしれない。隣でもエリカと裕理が「ああ、なるほど」と得心のいった顔つきをしている。

護堂はそうかもしれないが、自分はそうではない……と、思いたい影であった。

「さて、お喋りはそろそろ終わりです。

一回戦を始めるとしましょう」

「くくく、そうだな。だが、貴様らが簡単に倒れてしまえば、第一も第二もないぞ。せいぜい手に入れた力を見せびらかし、私を楽しませる」

ヴォバンが腕を振り上げた。
途端に、闇の中から十数匹の『狼』が泡のように湧き出てきた。

「あんな調子で増産できるなら、とんでもなく鬱陶しい相手になるわね。数ばかり多い敵なんて、美しくなくてイヤな感じ」

「美しいかどうかは別として、厄介なのは同感ですね。

裕理は後ろに下がっていなさい。護堂、頼みます」

評論するエリカに意見した後、影は護堂に裕理を頼んだ。

裕理を近くに置いて、巻き込むわけにはいかない。ヴォバンが標的である彼女を傷つけることはないだろうが、万が一ということもある。だから同じカンピオーネである護堂を護衛につけ、彼女を防御させる。

この乱戦の開始直後

まずエリカが、クオレ・ディ・レオーネを宙に放り投げた。

「鋼の獅子よ、汝に使命を与える。七振りの太刀となり、囚われの王を守護せよ！歌えプロンデル、応えよ獅子心王！」
レ・レオーネ

銀の魔剣は七つの破片に砕け散り、地上に落ちてくる。しかも破片は膨張し、変形し、鋼鉄造りの獅子となった。

彼らは鋼の窮屈さを感じさせないしなやかな動きで、背後の護堂と裕理の周囲を取り囲んだ。

鋼の獅子たちがうなり、近づこうとする『狼』たちを牽制する。無限に増殖しかねないヴォバンの猟犬たちを見て、護堂の護衛を造ったのだ。

オオオウウウンンンッ！！

一斉に『狼』たちが躍りかかってくる。

影は一瞬で『創造』を開始。二本の大太刀を呼び出し、向かってくる『狼』を長いリーチを生かした乱舞のような斬撃の嵐で恐れることなく迎え撃つ。

エリカも珍しくクオレ・デイ・レオーネではない、いかにも重そうな分厚い剣を手に『狼』たちを切り裂いていく。

縦横無尽、そして華麗なる剣舞。

次々と湧き出てくる『狼』どもを、ふたりは次々と切り裂き、蹴散らす。馬のような巨躯を持つ猟犬たちも『王』とその『騎士』の敵ではなかった。

影は一太刀で斜め、横と一気に切り裂き、エリカは一刀か二刀で輪切り、もしくは串刺しにした。

だが、このふたりだけではさすがに限界がある。

圧倒的な数で勝る以上、『狼』たちはひたすらに攻撃を繰り返せばいい。もちろん、このふたりほど手強くない、彼らの連れに対して

！

取り逃がした『狼』たちは真っ直ぐに護堂と裕理を狙っていく。しかし、影はあくまでもその場で迎撃を続ける。なぜなら、ふたりを守る頼もしい護衛がいるからだ。

それが、クオレ・デイ・レオーネから生まれた獅子たちである。鋼鉄の体躯と牙、そして爪で、灰色狼を引き裂き、打ちのめす。鋼の獅子の戦闘力は、『狼』たちを凌駕していた。危うげなく勝利を積み重ねていく。

それでも取りこぼしが出るのは、物量差のためだ。一部の『狼』が鋼の獅子たちをすり抜けてくる。影はその様子に少し焦り感じた。が、気鬱に終わったようだ。

「我は最強にして、全ての勝利を掴む者なり！人と悪魔
全ての敵と、全ての敵意を挫く者なり！」

ウルスラグナ十の化身の一つ『雄牛』を使用した護堂は矢のような勢いで突進してくる『狼』の鼻面を強く蹴り飛ばした。ふたりに近づくと『狼』は全て同じ目に遭う。

「ふう、そろそろか……。エリカ、このまま押し切れますか？」

「とりあえずは平気そうだわ！ん
？」

「む？」

エリカとヴォバンは変化に気づき、空を食い入るようで見ている。嵐の夜だというのに、暁の曙光が差す明け方のように、東の空から太陽が昇ろうとしている。

「太陽

天の焰、だと……？」

当然、齡三〇〇の魔王が重ねてきた悪行は数えきれない。故に民衆を苦しめ大罪人にのみ使える裁きの力、『白馬』の対象には充分になる。

天より降る白いフレア。

鋼鉄さえドロドロに融解・蒸発させる超々高熱の固まりが地上に迫る。さすがにすさまじい威力だ。温度だけなら『灼熱^レ世界^{ヴァテイン}の最終剣』を凌ぐ。

この瞬間、四人と獅子たちを悩ませていた『狼』の群れが消えた。

「な

」！

エリカが驚愕し、影も正面をじつ、と睨む。

ヴォバンの姿形が変化した。人の形から、銀の体毛を持つ直立歩行する狼

人狼へ、そして完全なる狼の姿へと。

銀の狼に化身したヴォバンの体は、一気に膨れ上がった。

体長三〇メートル前後。正直、ありえない……。

オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

巨大な咆哮が、嵐の中に響き渡る。

太陽のフレアが濃縮された巨大な白き焰に、銀の巨狼は一気に躍りかかった。牙をむき、その巨大な顎で焰にかぶりつく。

「……はあっ、まさかここまでとは……」

あまりにも信じがたい光景に影は呆れながら、護堂と裕理の傍へと歩いた。

さすがに巨大な狼とはいえ、狼だ。普通、太陽のフレアを呑み込んだりはしない。しかし、それが目の前で行われている。

「まさか『白馬』の焰を吸収……いえ、喰らってしまうだなんて、
どういう化け物なの？」

同じく護堂たちの傍にやってきたエリカも呆れ、感嘆している。

戦う相手を失った獅子たちはすでに再結合し、元の愛剣

クオレ・ディ・レオーネへと戻っていた。

「そんな、どうして？」

裕理が茫然とつぶやく、目の前の光景がよほど信じがたいのだろう。

「あのアテナでさえ防ぎきれなかった焔を呑み込むなんて、無茶にも程があります」

「大地と闇の神格としては、最高ランクのアテナを苦しめた攻撃が通用しない……一体、どういう属性の神から奪った権能なの、あの『狼』は

！？」

本人には通用しなかったが、狼は消えた。これだけで十分と考えるべきだろう。啞然とする少女たちの傍らで、影と護堂は気を取り直した。

「ク、ハハハハハハハ！これがサルバトーレと渡り合い、アテナほどの女神に勝利した器量の片鱗か！堪能したぞ！堪能させてもらったぞ！」

オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オンンンツツツ！

巨狼の咆哮と同時に、ヴォバンの声が響く。なんとも器用な真似ができるものだ。

『せっかくの馳走に返礼を喰らわせてやりたいところではあるがな。下手をすれば、貴様らごとく巫女を叩きつぶしてしまう。息子もいるしな。』
『されば、我が従僕どもを遣わしてやる』

来たか！ 『死せる従僕たち』
闇の中から魔性の者たちが湧き出てくる。

『狼』ではなく、人の形をした、死せる騎士たち。これらと会ったのは初めてではない。死人たちが、次々と闇の中から姿を見せる。彼らが手にしているのは剣や槍、斧といった古典的武器。彼らがまとっているのは鎖帷子や、騎士団の紋章を刻み入れた装身具の数々。

四〇人前後はいるだろうか。その誰もが、五、六世紀ほど過去から呼び出されたとは思えない時代錯誤な衣装である。

『我が死せる従僕どものなかでも、特に選りすぐった勇士たちだ。獵犬どものようには片づけられまい』

オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

魔王の哄笑と猛々しい咆哮は、やはり同時だった。

そして押し寄せてくる。死せる騎士たちの集団が一斉に地を蹴り、それぞれの武具を構え、突撃を敢行してくる！
顔こそ死んでいるが、その動きは俊敏で力強い。まさに凶猛な歴戦の騎士団そのものだった。

「ふたりとも、あの方々には気をつけて。おそらく、生前は大騎士ともかく、正直、今までのように護堂たちを守り切る自信はないわ！」

死せる騎士たちへ向けるエリカの目は、雑魚を相手にしている時とは違う。

全く油断がない。かなり警戒している。

「図書館でもあの女の子
 リアナ、だっけか？
彼女が何か言ってたよな。あの連中は一体何なんだ？ただのゾンビ
つてわけじゃないのか？」

「護堂、あの『死せる従僕』たちはかつて、あの男に殺された人々の成れの果てなのですよ」

影が護堂の疑問に答える。

「自らの手で殺めた者を、ほぼ永久的に忠実無比な下僕として操る力
あの男がエジプトの神オシリスから篡奪した権能です。目の前にいる騎士たちはエリカの言う通り、生前かなりの豪傑だったようですから、狼より数倍も厄介な相手ですね……」

「つまり、わたしたちもあなるかもしれないの。そういう意味でも要注意よ!」

エリカも口添えする。
死せる騎士たちの境遇に頭にきた護堂は眉をひそめる。

「なんて趣味の悪いことしやがるんだ……。あのくそじじい、影さんが毛嫌いするのも納得できるよ。やっぱりどうにかして痛い目に遭わせてやらないとな」

「もちろんですよ。殺してもいいくらいです」

ふたりは大巨狼となった老魔王の偉容を見上げる。
ここまで大きくなると、激しい雨にも風にも風にもびくともしないが、ふてぶてしく、そして憎々しい姿だった。

直後、死せる騎士たちが殺到してきた。
エリカが迎撃しようとする前に出るが、影の左手で制される。

「ちょっと！どうしたのよ？わたしが行かなきゃ護堂たちが

」

「……ここは任せてください。大丈夫です。このと

きのために隠し持っていた『ワイルドカード切り札』を使いますので」

大丈夫なの？と心配げなエリカに、微笑み返しながら影は三人の前に立ち、死せる騎士たちと正面から向かい合った。

417

「はぁー、ふう〜。

かの英雄は申した。冥

府で亡者どもの王となるより、奴隷の身分でもいいから生きていた
い

深く深呼吸をしてから影は静かに聖句を唱え始める。この場の誰も

聞いたことのない、影がこの時のために隠し持っていた第二の権能を発現させるための聖句。

だが、死を逃れることは罪。罪には罰を、贖つぐなわぬ者には苦しみを。我が心臓は鉄くろがね、心は青銅、捕らえた獲物は決して放さぬ」

鎌。鎌。鎌。鎌。鎌。鎌。

計六つの人の首なんて簡単に刎ねてしまえそんな鋭利な刃を持つ大鎌が影の周囲に出現する。エリカや護堂は『創造』による力だと思っただが、次の瞬間
それは全く違つと理解した。

六つの大鎌。その全ての柄の部分に何かが見える。

骨だ。

模型などで見るような白き手の骨。そして、護堂たちが目を凝らしで見ると、白骨の身体を持った骸骨が鎌を握りしめている。

やがて、白骨の前身はローブのようなものに纏われ、その身体を黒く染めた。

「安らぎを」

その一言が合図だった。

死神のようになった白骨の六体は死せる騎士たちにその鋭利な大鎌の刃を向けて、滑るように突進していった。

騎士たちは目の前の敵を排除しようと、攻撃を開始する。さすが、ヴオバンが選りすぐった死せる騎士たち。常人には到底見えないであろう、大鎌の一線を躲して見せた。

死せる騎士は賺すかさず反撃に出る。自らの剣を振りかざし、見事。黒き姿をした白骨の処刑人を切り裂いた

と思った。

なぜなら、次の瞬間に身体を切られていたのは切り裂いた側の死せる騎士だったのだ。

切られた騎士は口の中から白い煙のようなものを出して、灰のようになり崩れ落ちていく。

そして、黒き処刑人は次々と死せる騎士たちを同じように切り裂いていく。その身体には刃がいくら通ろうと、動きを止めず、傷ついた様子もなかった。

「……凄い。これが影の隠していた権能……」

「ああ、そうだな……まるで死神だ……」

「そうですね……」

三人は迫ってくる騎士たちを忘れるほど、目の前の光景に見入っていた。

死神。まさにそうだ。黒き処刑人は剣や斧のすさまじい一撃を受けても全く意に介さず……：……。それどころか、身体をすり抜けているだけで、全く効いた様子もない。抵抗する相手にいとも容易く、死を贈る。相手は元々死んでいる騎士たちで魂を囚われている身だが、もう二度と蘇ることはない。

口の名から出てきた白き煙は魂。ヴォバンが縛っている魂を檻の中から解放し、冥府へと送ったのだ。そう、これが影の隠し持っていた権能のひとつ。

憎むべき父親の持つ『死せる従僕の檻』に対抗すべく、ギリシヤ神話の非情な死神　　タナトスから奪い取った。

あらゆるものの『命』を刈り取り、死してなお現世魂を囚われ続ける哀れな者に安らぎを与える力。この六人の死神の前では既に死んでいる騎士たちなど、無意味に等しい。

「護堂！今のうちに裕理を連れて遠くへ！」

前線で死神を指揮している影が叫ぶ。ここにはいはずれか、危害が及ぶ可能性がある。さらに、数でいえばこちらに圧倒的に部が悪い。いくら死せる者に対し、最強の死神がいても一気に数を減らせるわけがない。それを危惧しても命令だった。

影の指示に護堂はひとつうなずくと、迫ってきた死せる騎士の攻撃を『鳳』の化身を使用し、ギリギリでそれを躲す。そして、そのまま裕理の手を引っつかみ、有無を言わずに抱きかかえる。

校舎を覆う壁を跳躍し、安々と飛び越え、追ってくる追跡者を引き離さないよう逃走した。

「行きましたか……さて、エリカ。正念場ですよ」

「ええ、そうね。あなたの因縁にも決着をつけなくちゃ」

アイコンタクトをしながら、影とエリカは死神と死せる騎士の戦う戦場へと、互いの武器を構え走りだした。

十三話 死せる者と死を贈る者（後書き）

ふう……これで三十話……。長かったような、短かったような……。影の隠し持ってた権能も出たし、次はエリカVSあの人です。

十四話 白き魔王と剣の妖精

緋狩影は純粹なる身体能力。エリカ・ブランデッリには『跳躍』の術がある。

エリカの術は人間離れした跳躍力と身軽さを自らに与える術だ。これを使えば、彼女が愛してやまない香港製武侠映画のワイヤーアクションじみた動きさえ可能になる。

ひとりは純粹なる身体能力で、もうひとりは術を駆使した逃避行の真っ最中だった。

風雨にさらされた夜の都心。

立ち並ぶ家屋の屋根から屋根へと飛び移り、猫や猿でもなければ追走できないようなルートを使ってふたりは逃げ回る。

エリカはどうやら『跳躍』の術が得意らしく、カンピオーネとなる前から体を鍛えていた影でさえ、ついていくのがやっとのほどだった。

だが、死せる騎士の中には三人、ふたりについてくる者がいた。同じ『跳躍』の術を駆使して、死神の影の^{かげ}ように追いつがる。死神といえは影^{えい}が操っていた死神たちは消えている。もちろん影の意志で消したためだ。

「あの人たちはさっきの騎士たちと比べても段違いですね」

「そうね。さすがに手強い」

「

ふたりは同調するよつにつぶやく。

激しい雨の中で体を揺さぶられ、雨で視界は悪く、しかも夜。あらゆる場所が濡れており、気を抜けば足がすべりそうになる。

そんな悪条件をもともせず、ふたりは逃げ回ってきた。

そろそろ潮時だろう。完全に振り切るのはおそらく無理だろう。ならばここで逆襲に転じてみるのも悪くないかもしれない。

影はエリカに目配せする。すると、どうやら彼女も同じ考えなのだ
と理解できた。ふたりはとある雑居ビルの屋上に飛び移り、わざと
スピードを緩めた。

追いかけてくる騎士は三人。

こちらがふたりに対して、あちらはひとり多い。最初の一撃で確実にひとり減らしておきたいものだ。

エリカは右手の魔剣に『変形』の魔術をかけながら、振り返る。細身の長剣だったクオレ・デイ・レオーネは、一瞬で投槍ジャベリンへと姿を変えた。

それを見ると、影も新たななる権能を行使するために聖句を唱え始める。

「我が従えし王は風を制し者。荒れ狂う災いを巻き起こし、かの地を荒廃させる暴風の支配者である其方そなたに命を下す。神々さえ忌み嫌う絶望と災厄をこの地へと顕せ！」

エリカが振り向きざまに、重い投擲用の槍を鋭く放る。槍はエリカの手を離れるや否や、同じ姿と質量を持つ分身をふたつ、影かげのように生み出した。

そして、ふたりの横を暴風が通り抜ける。これは影の権能により、発生した暴風だ。暴ぶる風は三体の死せる騎士たちへと真つ直ぐに飛んでいく投槍と同化し、目に見えないほどの速さと、回転を槍に与えた。

音速の螺旋槍トリスルと化した投槍の刃は彼らの胸を肉を散らしながら豪快に刺し貫き、鎖帷子におおわれた心臓をあやまたず抉る。生ける亡者たちは塵となって崩れ去った。

おそらく、死せる騎士たちは判断力

思考す

る力が生前よりも弱まっている。行動の切り替えがいまひとつ遅い。それでも『暴風』と融合し、音速と回転を得た投槍を躲せたかどうかは不明だが。

君は僕の前に立ちほだかるのか？

未だに権能が発動中で、自分の周囲に小規模な竜巻を纏っている影はとある少女を思い浮かべた。

かつて自らの手で殺してしまった彼女が生きている

それは信じられないことだった。しかも、敵であるヴ

オバンの騎士として。

「こんなところまで逃げてくるとは、貴方様も随分慎重になったようですね」

雨の夜に声が響く。

優美、そして可憐でありながら、しなやかな強さを秘めている。かつて自分の最も大切だった少女の声。

「お久しぶりです。シャッテンさま

いえ、

緋狩影」

「……………ええ、久しぶりですね。リリアナ・クラニチャール」

リリアナ・クラニチャール。

嵐の中、ずぶ濡れになりながら青と黒のケープをまとう妖精じみた美貌の少女へ、影は少し悲しげに言った。やはり、彼女は敵として自分の前に立ちはだかるようだ。

「貴方様も随分愚かな人になってしまったようだ。力弱き王と行動をともし、おまけに雌狐を愛人として侍らせているなんて……………」

「リリイ、訂正させてもらつと愛人じゃなくて妻だわ。ついでに聞くとおなたたちってどんな関係だったのよ？」

「そんなこと今は関係ない！」

我が翼、幻

影の刃を成す鋼よ。

イル・マエストロ、我に力を！」

リリアナが天に手をかかけ、愛剣を高らかに呼ばれる。

銀色の長い刀身を持つサーベルが現れた瞬間、リリアナは地を蹴った。

「エリカツ！下がってる！！」

突然のことに影はいつもの丁寧語ではなく、乱暴な言葉使いでエリカに言い放ち、いつの間にか『創造』した大太刀で向かってくるリリアナを迎え撃つ。

エリカほどではないが、リリアナも力が強い。影の大太刀とリリアナのサーベル
イル・マエストロがぶつかり合い、
金属同士が軋みを上げる。

「腕を上げましたねッ！」

全力の一太刀で、魔剣ごと軽量のリリアナを吹っ飛ばす。

「くっ！？あなたさまこそ、行方を晦ましていた間遊んでいたわけではないようですねっ！」

イル・マエストロの一撃を大太刀が受け止める。片刃のサーベルと片刃の大太刀が渾身の一撃をのせ、ぶつかり合う。やがて、鏝迫り合いになった。

「何故です！なぜ先ほどから貴方様はわたしを狙わずに剣ばかりを狙うのですか！」

リリアナの言うことは間違っていない。影が手に持つのは長さ二メートルほどのかなり長い日本刀。その長さゆえにリーチがかなり長い。故に懐に入られる勝負は苦手だ。しかし、あえて影はそれをし

ている。つい先ほど、リリアナを吹っ飛ばしたときに、追撃をかけたければほぼ確実に仕留まっただろう。

お互いの距離が近い中、鏢迫り合いを続けながら、影は叫ぶ。

「僕に貴女を傷つけることなんてできません！今更何を！わたしを捨ててどこかへ去って行ってしまったくせに！」……くっ！？」

「別にわたしは候に何か言われたわけでもない。ただ、貴方様が許せないだけだ！」

影にも負けないほど強き力で斬撃を繰り出してくる。普段の彼女ではここまでの威力は出まい。

やはり、あの時のことが許せないのだろう。おそらく、殺したのは顔を変え、ヴォバンが自分を狙わせた従僕だったのだろう。だが、彼女の顔をした相手を殺してしまったのは事実。相手がいい思いをするはずがないか……。

罪悪感に吞まれそうな影を見て、リリアナは続ける。

「わたしはこの八年間の間、一日も貴方様のことを忘れた日などなかったのに……。それなのに貴方様は何ですか！？いつの間にかこのわたしを差し置いて、あ、新しい女を作るなんて……」

「……………はい？」

は？え、つと？どつという意味だ？

リアナの口から出てきた言葉の意味を理解しかねた影は思わず驚倒した声が口から出てきてしまう。

一旦距離を取った、目の前の少女はなぜかほんのりと頬を赤く染めて、こちらをさつきとはまるで違う、まるで拗ねたような顔で見ている。

「ねえ、さつきから黙って聞いているとリリイ？あなた、まるで影の元恋人みたいな言いぶりじゃないかしら？」

ふたりの戦いの邪魔をせずにただ見守っていたエリカが、隣に来ていた。

厄介なことになりそうな予感が……。

そんなことを思ったが、もう遅い。女たちの口論は幕を開けてしまった。

「元」とか言うな！大体、まだ約束が無くなったということはないのだ。シャッテンさまが亡くなっていなかった以上、わたしたちは許婚のままだ！」

「許婚？ああ、影とリリイはそんな関係だったの。でもね、リリイ。影がもう昔の名を名乗っていない以上、あなたと影は許婚ではないわ。あなたが愛しているのは幻想の王子様。ここにいる王様はわたしのものだわ」

「減らず口をっ！あなたは彼のことをどのくらい知っている！ふん、どうせ知り合って間もないくらいだろうから……ね、寝屋を共にしたこともないのだろう？」

「え、そのくらいあるわよ。ねえ？」

エリカがこちらを向いて問いかけてくる。

決戦の場だというのに、その表情は護堂や自分を虐めるときとまったく変わらない。毒花のような怪しい笑みを浮かべていた。

……もしかして、リリアナもエリカに苦労していた人なのか……？

「……………」

「ほらね？何も言わないということは本当なのよ」

「「なっ！？」」

声を上げたのは影とリリアナのふたりだった。

影は勝手に肯定の解釈にするな！と、リリアナは……かなり失望したような色のない瞳をこちらへ向けている。

「そうかです……幼き頃に寝屋を共にしたとき優しく囁いてくださったのに……」僕は貴女のことを愛している「、と……酷いです。

わたしはこんなにも貴方様を愛しているのに他の女、ましてや雌狐と共に寝るなんて

！！！」

まるでオペラなどに登場する悲劇の女主人公ヒロインのように高らかに彼女は悲痛を訴える。ついにはその眼に涙を浮かべ、少しこぼれてきている。

「いやいやいやいや！僕は肯定した覚えはありませんよ！？というより、愛人でも妻でも恋人でもありませんし……ああっ、もうなんていうか！」

さすがにこの『王』も女子おんなの涙には弱い。かなり狼狽した様子で今にも泣き出しそうな彼女へ必死に弁解をする。
元凶であるエリカは………口元を押さえて今にも大笑いしそうなのをこらえている。

「この雌狐め……やはり、あなたが全て悪いのだな！おのれ……今日という今日は斬り捨ててくれる！」

「あら、あなたにできるかしら？」

行くわ

よー」

憎々しい感情を表に出したりリアナが地を蹴り、閃光の速さでエリカに突進する。

エリカも勝るとも劣らない速さで横に動く。剣術というより舞踏
フラメンコにも似た躍動的なステップで、
仇敵の接近を避けようとする。

それを追うリリアナの足さばきは、すべるような摺り足。
氷上をスケートで走るような滑らかで、エリカの軽やかなステップ
に追いつがる。

「あなたの鈍足で、わたしから逃げられると思うな！」

「それもそうね。だったら、力づくで突き放してあげる！」

エリカはクオレ・デイ・レオーネをまっすぐに突き出し、リリアナ
の心臓を狙う。

単発ではない。一息に三つの突きを放つ、必殺の三段突き。

それをイル・マエストロが、楽器の調べにも似た美しい金属音を立
てながらリズムカルに打ち落としていく。

美しく、的確で見事な剣さばきだが、影は目の前でなぜか発生して
しまった女騎士ふたりの争いに複雑な表情を浮かべながら、どうし
てこうなってしまったのだろうか……と未だ、悩んでいるため、全
く称賛の感情など抱く暇がなかった。

「はあっ……………僕が原因なのか…………？」

目の前ではエリカの重い武器による、重厚な攻撃を打ちこみ、リリ
アナが操る匠の魔剣で軽やかにはじく、もしくは受け流す。という

一連の動きが行われている。

剣撃では埒が明かないと考えたのか、エリカが剣ではなく、足を出す。狙いはリアナの足の甲。そこをかかとで踏み砕こうと、エリカは思い切り足を踏み下ろした！

「ちい、あいかわらず足癖が悪い！」

「リリイ。あなた、興奮すると口汚くなる癖が直ってないわよ。あなたの愛する王子様にそんなと見られていいのかしら？」

「~~~~~っ！」

恥じらいと怒りで赤くなるリアナに、エリカは優雅に微笑んだ。斬り合い、打ち合いを続けていけば、互いの間合いは自然と詰まっ ていく。そうなれば組み打ち、足がらみを仕掛けるのは剣術の基本だ。

そのまま、真正面から斬り込むエリカ。

獅子の魔剣をイル・マエストロが受け止め、影と同じように鍔迫り 合いになる。しかし、力勝負ではエリカの方に部がある。エリカは 体当たりの要領で踏み込み、リアナを後方へと飛ばす。

「このバカ力め！わたしには妙なことを言っておいて、自分はすぐ 馬車馬みたいな力業に走るのか！」

「影はありのままのわたしが好きなのよ！それに、獅子のように雄々しくと表現してちょうだい！」

悪態をつくりリアナにエリカは笑顔で言い返した。

いや、確かにありのままの貴女は好きですけど……。まだ、女性としてとは……。

そんなことを思っていると、リアナは、鼻で笑って大きく跳びさる。得意の飛翔術を駆使するための予備動作。鳥のごとく高みを舞うために、十分な距離を取ったのだ。

「なら、わたしは隼のように高く飛ぶ。覚悟はいいな。……ふん、もう追いついてきたか」

リアナが不意に舌打ちした。

影にもエリカにも理由はわかっていた。ガシャリガシャリと鎖帷子あるいは鋼の武具を鳴らして数人の騎士たちが『跳躍』してきたのだ。

もちろんヴォバンの命で影とエリカを追ってきた死せる騎士たちである。

その数は四騎。

彼らはひとところにまと

まず、ふたりの少女が刃を交え、ひとりの少年が見守っているビルを取り囲むように位置取りした。

周囲に立つ雑居ビルの屋上、家屋の上に散らばり、包囲網を作る。

「……ちっ、侯爵め、余計なことを。不本意だが、わたしは引き下からせてもらうぞ。シャ……緋狩影もいることだろうし、切り抜け

ることは可能だろう。その時に改めて決着をつけるとしよう」

エリカへと向いていたイル・マエストロの切っ先をおろして、リリアナは渋々といった様子で言った。

「一騎討ちを邪魔されることで興を削がれたのだろう。昔からリリアナはあくまで、騎士としての一騎討ちを望む。そんな性格だった。相手を出し抜くような真似は自らが許さない。」

……そんなところも変わっていないようですね。

正直、影の未だに隠している権能を酷使せずとも、死せる騎士を倒すのは可能だ。しかし、それでは肝心のヴォバンの戦いに支障が出るかもしれない。それを悟っていたエリカは目で「わたしに打開策がある」と影に伝え、影が持つ太刀の刃をおろさせた。

良からぬことを考えているようにも見えるが、今はそんなことを気にしている場合でないことくらい承知している。影もエリカに「頼みます」と目で伝え、エリカは満足げに頷いた。

「ねえリリイ、あなたに折り入ってお話があるのだけれど……」

とっておきの猫撫で声で、エリカは呼びかけた。

「結構だ。あなたの話とやらに、ろくなものがあつた例はない。そんなことよりも自分と主の危険に目を向けたほうがよいのではないか？」

リリアナの返答はにべもない。

しかし、これくらいエリカも想定内だろう。エリカは包容力に満ちあふれた貴婦人の微笑を浮かべた。

「そんな冷たいこと言わないで。あなたにとつても悪い話じゃないの。むしろいい話よ？」

リリー、あなたこのままヴォバン侯爵の命に従って、候にお仕えするつもり？」

「まさか。わたしはただ、騎士として『王』への義務を果たしているだけだ」

なんだかんだ言いつつ、性格のためか、律義に答えを返すリリアナ。死せる騎士は、飛び込む機会を狙っているのか、まだ仕掛けてくる様子はない。いまのうちに『策』とやらを成功させてもらわなければ！

「そう……。だったら、影の元に戻る気はない？ 候に従う理由がその程度なら、何も問題ないしあなたも影の傍にいられて好都合じゃない？」

「……………今更、そちらへ寝返れと言いたいのか・」

少々、眉をひそめるリリアナに、エリカは姉のように、年上の親友のように語りかける。

「ええ。その方が気持ちよく戦えるし、さつきも言ったように影の傍にもいられるわよ。」

リリイ、あなたは本心から候の意に添おうとして、東京までやってきたの？わたしはリリイのことを良く知っているわ。だから不思議なの。候の横暴な為さりように唯々諾々と従うなんて、あなたらしくもない。弱みでも握られているの？」

「それもこれも、貴方様のせいですよッ。シャッテンさまッ！」

いきなり声を上げられて驚いたのはエリカだけではない。いきなり、矛先を向けられた影も軽く驚いていた。

「え？え〜と、思い当たる節が多すぎて……すいません。なぜでしょうか？」

「貴方様が急に失踪してから、わたしは侯爵に貴方様の搜索を何年も頼みこんでいたのに……今の貴方様はなんなのですかッ！草薙護堂の愛人とされていたエリカ・ブランデッリと……な、仲睦まじくなっているわ、許婚であるわたしを死人扱いするわ、貴方様への怒りの気持ちが抑えきれないのですよ！」

……大体事情は把握した。

どうやら全面的に自分が悪いらしい。流石に、あの老人に何年も搜索を頼みこんでいたのはかなり意外だったが……。

「……………しかし、それでもわたしは貴方様のことをお慕い申したい
ます
それなのに、雌狐と親しくしている
貴方様を見て、わたしは刃を向けてしまいました……。本来仕える
べき主に。わたしは貴方様に嫌われてしまった以上、貴方様のお傍
にいたいことなど……………敵いません」

先ほどまでの気迫は影もなく、彼女はしゅんと沈んだ様子になる。
これがエリカの策なのか？いろいろと勘違いして、沈んでいる彼女
にここで優しい言葉をかければ彼女はおそらく、こちら側へと来る
だろう。

だが、いいのか？純粹に自分を想ってくれている彼女の気持ちを利
用するようなことをして……………？いや、作戦でも何でも彼女に自分
の本心を伝えるべきだろう。

なぜかって？

大切な人だから

だよ

「……………そんな顔をしないでください」

「え……………?」

影は濡れ、滑りやすくなったビルの屋上をゆっくりと歩き、リリアナの前で止まった。そして、彼女の頬を優しく、壊れ物を扱うように撫でる。雨に濡れてすこし冷たくなっているが、その頬はほんのり上気し、熱を帯びていた。

「僕は……………あの時、ある『もの』を殺して、逃げました。……………怖か

つたんです。初めて斬ったのが、貴女の顔だったから……。逃げた
かったんです。自分が守るべき、大切な人間を亡き者にしてしまっ
たという事実から……。っ」

「しかし、それは

反論しようとするリリアナの言葉を遮り、影はあの時から自分の心
の奥底にずっと幽閉していた感情を彼女へと吐きだす。

「わかっています！それが本物の貴女ではないということも、あの
人が僕の右眼を目覚めさせるために貴女の顔に似せた従僕だという
ことも！……だけど、あの時の僕は確かに貴女を殺したんです、貴
女という『存在』を！むしろ、僕なんかが貴女みたいな方の傍にい
られる資格なんか

「やめてくださいっ！！」

胸に衝撃が伝わる。あまり肉つきがなく、比
較的軽量の彼女の重みによってだ。

影は理解するのに数秒を有したが、確実に気が付いた。
彼女に抱きつかれている。さっきまでエリカと激戦を繰り広げてい
た体が、こんなに華奢で、慎ましい女性の身体だったのだ。何年も
この身体に悲しみと苦しみを受け入れ続けたのだろうか？強くなり、
自分をひとりで探すためにどこまで修練によってこの身体を痛めつ
けたのだろうか？影は彼女の身体を抱きしめ返した。

不意に彼の頬を滴が伝う。

無感情に降り注ぐ空からの滴ではない。

ずっと重

く、さまざまなものが詰まった『涙』という感情の塊。

それは影の両目から止めどなくあふれ出る。影だけでない。胸の辺りにも同じ暖かさを感じた。自分を抱きしめている彼女も、同じく『涙』を流しているのだ。

八年間という長き時、彼女が求めていた『彼』がそこにいる。ゼロともいえる距離で自分を抱きしめてくれている。彼女が涙を流す理由はそれだけで充分だった。

難しい理由は要らない。ただ、傍に要られれば今はそれでいい。

再開した恋人のようにきつく抱きしめ合うふたりの心は同調していた。

「シャッテンさま……いえ、影さま」

「?なんですか」

「この戦いに一区切りが付いたら……お話聞かせていただきます。……特にエリカ・ブランデッリとの関係を」

「うっ、わ、わかりました……」

耳元でささやき合ったふたりはほぼ同時にお互いの身体を離す。よくよく考えれば戦場でやることではないし、凄く照れくさい。影もリリアナも顔を真っ赤にして、お互いの顔を見ないようにしている。

「はいはい、ごちそうさま。いい雰囲気なのにすまないけど、敵はもう臨戦態勢よ？気を引き締めてね」

ふたりの様子に呆れたエリカの言葉によりふたりは先ほどまでの様子を完全に消し、気を引き締める。

四人の死せる騎士はいい加減に痺れを切らした様子で、こちらに飛びかかるタイミングを今か？今か？と武器を構え待ちわびている。

「それにしても随分見せつけてくれたわね。影、後でたっぷり可愛がってあげるから、覚悟しなさい」

「……アハハハハ。お手柔らかに……」

この瞬間、ついに死せる騎士たちが動きをみせた。同時に三人もそれぞれの武器を構え、地を蹴り騎士へと突進し迎撃する。

白き神殺しの少年は『失くし

たもの『を取り戻した。残る父と子、因縁の決着まで、あと数時間

十四話 白き魔王と剣の妖精（後書き）

なんかおかしな点があるかもしれないが……。まあ、これでリリアナは影の側へつきました。感想、ご意見、評価お待ちしております。

十五話 前座は終わりを告げる

嵐吹く夜、東京タワーの程近く
まともな神経の持ち主であれば、外を出歩くなんて思いつきもしない悪天候。

いや、重要な要件のある者でも、今夜は外出を見送るだろう。それほど風の風、雨、雷鳴であった。

そのなかに、嬉々としてたたずむ黒コートの老人がいる。

「ハハハハッ、捜せ、狩り出せ！今宵はいい夜だ！我が獵犬どもよ、私の獲物を見つけ出してこい！」

老魔王

デヤンスタール・ヴォバンが吠える。

彼の背後の闇からは十数匹の『狼』が形を取り、夜の市街を疾駆していく。彼が笑声をあげるたびに風は強まり、稲妻が走る。

もはやこの街は風の唸りと雷鳴。そして豪雨が激しく大地を打つ音によって支配されていた。

人の姿はなく、道を走る車もついに消え去った。

無人の都と化したこの街で、傲慢に吠えるヴォバンはまさに廃墟の王だった。

「いや、もうノリノリですな。本当に楽しそうだ」

感心したようにも呆れたようにもとれる声でつぶやいたのは、甘粕冬馬。

そのそばにはリリアナ・クラニチャールがいる。一応は貴人と言われるが、あまりの様に呆れたように、そしてどこか不機嫌そうな面持ちをしながら、主の父親を盗み見ている。

「特に趣味もない方のようだからな。ひさしぶりに娯楽を見つけて大喜びなのだろう。……それにしても、エリカ・ブランデッリはシヤ……じゃなかった。影さまとどこまでいったのだろうか……」

戦場だというのにリリアナは自らの主の女性関係の心配をしていた。普段の彼女ならこんなことは絶対に考えないだろうが、八年ぶりに再会したことで心が舞い上がっている。同時に危惧もしている。当然、仇敵である女騎士が自分の主についての間にか仕えていて、『妻』と申した。

あの雌狐だけには
いや、誰にも渡すわけにはいかない！

リリアナは心の中で今までの何よりも強く誓った。

「あの〜、リリイ？起きてますか？」

「ダメよ、影。完全にあっちへ行っちゃっているわ。大方考えていることは予想できるけど……」

はっ、と彼女が振り返ると困ったような表情をしている影とリリアナを見てクスクスと厭らしい笑みをしているエリカがいた。いつの間にか影の呼び方が昔に戻っていることに感激しながらも、

彼女はあくまで、影に対し謝罪する。

「す、すいません、影さま。戦場で不謹慎でした……」

港区、芝公園の近辺。

老魔王を発見した影たちは、とあるビルの物陰で様子見の最中だった。

三〇分ほど前、リリアナを自らの陣営に引き込んだ影とエリカは、リリアナがどれほど影を心配していたかなど、こつぴどく聞かされながらヴォバンの搜索を開始した。

占術に卓越しているリリアナに占ってもらい、奴の居場所を探る。卦の示す方向へ移動する三人の前に現れたのは、なぜか甘粕だった。

「やあ、どうも。侯爵の行方をお捜しなら、私に当てがありますよ」

影がふたりの少女を連れ歩いていると、不意に車道に停まっていた車のドアが開き、彼が姿を見せたのだ。

豪雨の降る中で、黒い傘をさしながらこちらへと歩いてくる。

しかし、暴風によって傘はすぐに吹き飛ばされてしまった。「やれやれ」といった感じの甘粕に少しだけ笑ってしまったのは仕方ないだろう。

彼は諦めて背広が雨で濡れるのにまかせながら申し出た。

「ここであなただ方を見つけたのも何かの縁、いっしょに参りましょう。……ところで、緋狩氏？あなたのハーレム要員が増えたようですが、ご紹介いただけますか？リリアナ・クラニチャ　ル卿とお見受けいたしましたか？」

「は、ハーレム？……影さまっ！」

「違いますよっ！」

このような一幕があった結果、四人は連れ立っているのである。

「ところで甘粕さん、ひとつ訊いてもいい？」

「かまいませんとも、シニヨリナ。ただし、スリーサイズと体重は極秘事項ですよ？」

誰も聞かないでしょ……そんなこと……。

影は相変わらずな正史編纂委員に呆れる。しかし、甘粕のとぼけた態度をエリカは気にもしないように皮肉な視線を投げかけた。

「実は、さつきから気になっていたのよね。あなたが……いえ、あなたたちが影と護堂に今回の件をゆだねた理由」

犯人を追いつめる探偵のように、辛めの口調で質問するエリカ。だが、甘粕はとぼけた笑みと緊張感のない口調を崩すことはなかった。

「そりゃ私たちだつて裕理さんが心配でしたから。いちばんどうにかできそうな方々に相談するのは、普通でしょう?」

「そうかもしれないわね。けど、あなたたちは影や護堂が身近な人間が危険にさらされたとき、どう動くか見極めておきたいのではないかしら?……それに、あなたたちにとって影は特別な存在らしいわね」

ピクリと、本当に一瞬だが甘粕の眉が動く。しかし、エリカもそれに気付くことはなかった。

「緋狩氏は王、カンピオーネ。特別視するのは当然だと思いますが?」

「そうね。確かに特別視することはおかしいことではないわ。けどね、入れ込み方が違いすぎるのよ。あなたたちは。少し前に車に乗った時も「緋狩氏の望んだことは断らないよう念を押されている」

と言っていたでしょう？まるで影を全面的に支援している魔術結社みたいに」

「……あはははは、凄いですねエリカさんは。すいませんが、この件は私の口からは何とも。しかし、これだけは言っておきましょうか、正史編纂委員会は緋狩氏に恩義がある。」と

なんだそれは？別に恩を売るようなことをした覚えはないし、逆に委員会の方々を痛めつけて追いついていた筈なのだが……。
甘粕の言う『恩義』とやらを考えてみるが、全く見つからない。
悩む影を少し心配しながら、リリアナはつぶやいた。

「キツネとコウモリの世間話みたいなやりとりは、余所でやってほしいぞ。影さまの頭を変に悩ませるな。それに、これからどうする？草薙護堂はこちらに向かっているんだらう？」

「向かっている、というか、こちらが呼び出すようなものですが」

そう、さっき電話で護堂にあとでこちらから呼び出す、と言っていた。『風』を使えば一瞬でこちらまでくることが出来る。かなり高率のいい方法だ。

電話での裕理との様子が少し気になったが、まあ、何か進展があったのだらう。と、深くは考えなかった。

「ねえ、影。この戦いが終わったら結婚しない？そしたら、子供作って」

「死亡フラグみたいなこと言わないでくださいよ！確かに僕は一八なので結婚はできますけど、まだ家庭を持つつもりはありません！」

「そうだ！誰があなたみたいな雌狐と結婚なんてするものか。影さまはわたしと結婚するのだ」

「いや、それもどうかと……」

「子供はふたりがいいかしら？ひとりは女の子で私似なの。それでね、もうひとりは男の子でもちろん影に似るの。きつと可愛くて格好いいのね。今からでも想像できるわ」

き、聞こえてない……。

途中でリリアナが口を挟むも、全く気にせず淡々と人生設計を語るエリカにふたりは思わずうなだれた。

「あの、そろそろ着きますが……大丈夫ですか？」

甘粕の声によって三人は頭を振って、集中した。向かう先では、老いたる魔王が風雨雷鳴を呼び、哄笑している。

甘粕はひとりだけ残り、のんきに見送っていたが、正解だろう。腕に覚えがあつても大騎士クラスでないとカンピオーネ相手では足手まといだ。

激しい雷雨のもと、ひとりの王とその騎士ふたりはついに因縁の老王と対峙した。

「おお、ようやく隠れ家から出てきたか。遅かったぞ息子よ。

おやクラニチャ　ル、君はやはりそちらにつくのだな？」

隣に立つ少女へ、ヴォバンが予想していたように言う。

影が見つければ一頓着はあるものの、影の側へつくことは完全に見抜いていたらしい。確信とひねくれたユーモアに満ちた目つきだった。

「おそれながら申し上げます。リアナ・クラニチャ　ル、ただいまを以て影さまの騎士としての任を執行させていただきます。わたしの仕えるべき主はこの方以外にはおりませぬ故、ご容赦を」

「くくくく、構わんよ。元々、基奴の騎士だったのだからな。横暴な王に逆らうのは愚かだが、騎士の鏡とも言えよう」

ヴォバンは鷹揚に微笑んだ。

「このうえは我が手にかかり、『死せる従僕』どもの列へ加わるがいい。無論、その『ディアウウォロ・ロッシン紅き悪魔』もいつしよだ。息子とともにはいられなくなるがな」

「さつきから、勝手なことばかり言わないでくれますか？残念ながら僕はあなたにエリカもリリアナも差し上げるつもりはありませんし、僕もあなたのものになるつもりもありません」

さぞかし不愉快そうに影が言った。

ヴォバンの背後の闇からは古めかしい戦装束で身を固めた武人たちが、闇から生まれ出ていた。

「そういえば、貴様はどうやって『死せる従僕』を解放したのだ？倒された騎士は一度は塵になるが、支配から解放されることはないはず。……お前の権能か？」

「答える義務は

無い。エリカ

ッ！」

「了解したわ！
たし給え！」

草薙護堂！今こそ来たり、王の責務を果

エリカが一礼し、声高らかにもうひとりの王の名を呼ぶ。

エリカのすぐ目の前、影の隣で風が渦巻く。

横溢する呪力に、そばにいたリリアナが瞠目した直後。

風の渦の中心に、草薙護堂と巫女装束の万里谷裕理が忽然と現れた。

「どつやら護堂もあなたにお怒りなので、ふたりでその顔、ぶん殴らせていただきます」

「そういつことだ。覚悟はいいか？」

「ふむ。まあ、いいだろう。できることなら私の顔を殴ってみるがいい、小僧ども！」

軽薄そうな言葉とは違って違う殺気を放つ影と不遜な闘志をあらわにする護堂。をあくまで、ふたりの王を前にしても尊大な態度を崩さないヴォバン。

役者 三人の王が、ついに揃った。今までは前座に過ぎない。本当の舞台はここから始まる。

十五話 前座は終わりを告げる（後書き）

次から本格的にVSヴォバンです。主人公が隠していた権能も一気に出ることになると思います。感想・ご意見・評価お待ちしております。

十六話 神を縛る鎖と終焉の大剣と死神の鎌

「裕理は後方へ下がっていなさい。ここからはかなり危険です。まあ、何かあったら護堂がどうにかするでしょうが……」

「ああ、万里谷は俺が絶対を守る。だから、今は後ろの方へいってくれ」

「はい。おふたりともどうか、ご無事で」

裕理は素直にうなづく。

そして、護堂とつないだ手を、彼女は名残惜しげにキュッと握りしめてから身を離す。

やっぱりこのふたり何かあったな……。

護堂と裕理の様子が最後に会った時と明らかに違うことに気付いた影は確信する。

一方護堂は小走りに駆けていく裕理の先、エリカともうひとりの存在に気が付いた。

「あれ？君はさっきの……」

「リリアナ・クラニチャールです。草薙護堂、つい先ほどより影さまの護衛としての任に復帰いたしました。この雌狐と主を同じくするのは全く忌々しい限りですが、これも影さまの第一騎士としての

務めだとしてご認識ください」

古なじみであり、いろいろな意味で仇敵なエリカを憎々しげに見やりながら、リリアナは口早に告げた。

その視線を軽やかに無視したエリカは、どこか挑発的な笑顔で言い放つ。

「言ってくれるわね。そういえば、誰かさんのノートには白い王子様が」

「黙れッ。……くそっ、いつか本当に、悪行の報いを下してやる」

さぞかし忌々しそうなしかめ面で言うリリアナ。

誰かさんのノート……もの凄く気になるのはなぜだろうか……？

「俺たちに付いてもいいことはないんじゃないか。無理に付き合わなくとも大丈夫だけど……」

「勘違いしないでいただきたい。わたしはあくまで『影さま』に忠誠を誓っている身。あなたにご心配いただく謂われはありませんので」

「そ、そうか……じゃあよろしく頼む」

あまりにもきつぱりと言い切るリリアナに護堂は若干引き気味な様子になる。同時に、この少女の影に対する思い入れの深さが感じられた。

「アハハハハハッ！光栄ですよ、リリイ。いままでこき使われたぶん、キツチリとお返ししてくださいね」

「了解しました。ご期待に添えるように全力で奮闘いたします」

お互いに顔を見合わせ微笑むふたり。

その姿はまさに長年連れ添った王とその騎士の姿だった。

「待たせましたね。では

始めましょ

うか」

「本当だな。折角の逢瀬なのはわかるが、ここは戦場だ。敵と対したときに為す振る舞いではないな。未熟者め」

毒を吐く老人を、影は肩をすくめて挑発する。

「未熟者？結構結構。その代わりに仲間がいますから。あなたは狼や死人を無駄に侍らせているだけでひとりでしょう？孤高が格好い

いとも思っているのですか？」

「餓鬼のくせによく吠える。ならば、威勢だけで終わらせるなよ！
？」

ヴオバンが腕を振り下ろす。

すると、背後で控えていた死せる騎士たちが一斉に動き出した。それぞれの武器をかまえ、影と護堂めがけて殺到する！それを迎え撃ったのは、それぞれ魔剣を呼び出した紅と青の騎士ふたりだった。

「リリイ、死せる騎士の方々を無理に討ち取る必要はないわ。わたしたちふたりで影と護堂を守りきる。それが最優先目標よ！」

「策があるのか？承知！」

護堂の右横にエリカが、影の左横にリリアナが陣取る。

クオレ・デイ・レオーネル・マエストロ
獅子心王と妖精王

二振りの魔剣が、立て続けに華麗な軌跡を描き、死せる騎士から『王』ふたりを守る防壁となる。

死せる騎士の中には中世の騎士めいた武者もいれば、マスケット銃にサーベルで装備した兵もいる。

ローブと覆面ふくめんで身を包み、戦斧せんぶを振り回す死人。二〇世紀の前半辺りのものか、やけに年代物らしいライフルを持つ軍服の死人。もつと現代風の、背広やアーミーシャツを着た死人もいる。

時代も国も人種もバラバラな『死せる騎士』たち。

多勢に無勢

しかし、エリ

カとリリアナは全く退かなかつた。
エリカは再度クオレ・デイ・レオーネを一三振りに分け、猛禽のよ
うに魔剣を『死せる従僕』たちに斬撃を見舞い続ける。手強い騎士
には、エリカ自身が相手をした。
対して、リリアナはほとんど地上に立つことなく戦っていた。
死人たちの頭、肩、ときには武器を足場にして跳躍し、上方から、
魔剣を次々と振り下ろし、敵の戦闘力を奪っていく。

「全く、頼もしい限りですよ……」

ふたりの戦いを見ていた影が思わず自嘲気味につぶやいた。
徹底していて、かつローリスク。

まさにそう形容すべき戦い方だった。エリカは護堂のそばを離れず、
影につくりリアナは突出しすぎない。

あくまで王の守護を最優先。かなり困難な戦闘方だが、ふたりの実
力と判断力がそれを可能にしている。

だが、大騎士とはいえ女性だ。そのふたりに守られている自分がど
うしても情けなく感じてしまう。

影は皮肉げな笑みを浮かべる。

本当なら自分もタナトスの権能で死神を召喚し、ふたりを少しでも
楽にしてあげるべきなのかもしれないが、エリカとリリアナの視線
が『切り札はこんな相手に使うな!』と告げている。

現にふたりだけでも相手はできている。だから、影も切り札は本丸
に使うことにした。

「さて、ではこちらもお仕事しますかね」

『死せる騎士』を召喚し終えたヴォバンが、悠然とした足取りで近づいてくるのが見えた影と護堂は老魔王を睨みつける。

「……なあ。あんたが最初に殺した神様、覚えているか？」

『剣』を使うのか！

決然と口を開く護堂のから影は一瞬で護堂のすることを理解した。

「いきなり何だ、小僧？そのようなこと、貴様には関係あるまい？」

冷笑するヴォバン。

彼の姿が変わっていく。人から人狼じんろうへ、人狼から狼へ。

巨大な狼……だが、彼は『神殺しの魔狼』フェンリス・ヴォルフではない。そう考えた瞬間、影の頭の中から勝手に言葉が浮かび上がる。

「アイスカルズ光を失った神世界よりも、深く、暗き闇

で我は苦しみ嘆いていた

「古くはポイポス

た神だ。だが、同時に『ニクテイエオイコス夜に酷似した』なんて言葉を贈られた神でもあった。上辺と内面が大きく矛盾むじゆんした、ひねくれ者の神を、かつてのあんたは殺したんだ」

光を意味する称号で呼ばれ

頭の中から勝手に浮かび上がってくる悪神ロキの苦しみを語る影と、裕理の観た神の姿、本質を体の奥底から湧き上がってくるままに舌を動かし、言霊をつむぐ護堂。

ひとりには悪神が最終戦争へ向かうまでの苦難を顕し、もうひとりには心の目で捉えた神の形―それを思いつくまま語る。ただそれだけだった。

「憎い、あの神々が。我を幽閉し、息子を殺し、妻を苦しませる神々が！終焉へと向かう世界よ！我と愛する者に害為す神々に苦しみを！」

「鼠であり狼、光でありながら夜の属性を持つ神すなわちアポロン。月の女神アルテミスの双子、闇に閉ざされた地下で生まれた太陽神！あなたが最初に殺した神の名だ！」

オオオオオオオオオオオン！

『神力を縛りつける鎖と、斬り裂く言霊ッ。それが貴様らの切り札か、面白い！』

負けじとヴォバンが吠えた。

銀の巨狼の体毛から、無数の『狼』が誕生する。毛の一本一本が形を変え、狼の肉体へと変化して、ふたりへと躍りかかる。

だが、ロキを拘束した『鎖』は無数の狼と同じ数に増加して『狼』を一瞬で捕縛。その肉体を圧倒的な力で絞殺する。

『剣』の光球も喰らいつく『狼』たちの口腔へと逆に突進し、その精悍な肉体を両断してしまう。

幾度も繰り返される勝利の光景に、影と護堂はさらに闘志を燃やした。

「このまま、一気にとどめを刺す!!!」

影は『鎖』を操りながら、自分が出せる最強の神具を呼び出すべく、聖句を唱える。

ロキを縛りつけた『鎖』と、九つの世界を滅ぼした剣。同時に扱うのはかなりの体力を削られるが、チャンスを目の前にして切り札を使わない手はない!

「それは死界の門にて誕生せし災厄の業火。世界をも燃やし尽くすこの炎が、総ての穢れと総ての不浄を祓い清める」

「アポロンの双子の妹アルテミスは狩りの女神

とは強力な地母神の石柱だ。この兄妹の母は大地の女神レト。アポロンはもともと大地の神殿に属する神だった」

護堂が語る太陽神には、ひそかに矛盾むじゆんが多い。影は家にあつた『イリアス』の文庫本を書庫整理のときに読んだことがあるので思った。この艇驛諦の冒頭で『アポロンの姿は夜の闇のごとく』と、ホメロスは轟とどろっている。しかも、アカイア軍に綴響もたらず獅窟の神として描かれているのだ。永遠の美青年。恋多き美貌の太陽神。そのイメージと、何とも噛み合わない描写だ。そう思いながらも聖句をつむぐ。

「その証として、彼の象徴となる獣はどれも大地と深い縁を持つ。鼠、狼、白鳥　　そして蛇だ。闇に壺く小さなネズミこそが、アポロンの原型だったのかもしれない。妹アルテミスも下僕とした狼は、冥府の番犬としてのアポロンの姿だ。白鳥も大地と地底を往き来する性質の象似。そして蛇は　　多くの地母神も最大のシンボルとし、生と死の連環を示す！」

出現した天をも貫くほどの火柱が周囲に炎の形をした『終焉』を撒き散らし、護堂の言霊でさらなる力を授かり、黄金の『剣』が縦横に天かけた。

『剣』を引き裂き、噛み砕き、抗おうとした『狼』たちは、炎に当たると一瞬で蒸発する。炎から逃れた狼も『剣』の光球か、黒き鎖によって、その身を散らす。

真朱と漆黒、黄金と銀の燦きらめきが激突し、火花を散らす。妖しくも熾烈な異能同士の空中戦が、嵐の夜空のあちこちで所狭しと繰り広げられていた。

「ただ、アポロンの神話に現れる蛇は、彼の仲間でも肉親でもな

い。彼が殺した怪物
それこそが蛇だった。神々の
託宣所である聖地デルフォイを守護する大蛇ピュトンがそうだ。そ
の昔、若きアポロンはこの蛇を弓で射殺し、神託の神となった」

ウウウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
ツ！！

影の火柱と鎖、護堂の言霊を蹴散らそうと、ヴォバンが胞瞭する。

「剣』に対抗できず、敗北を重ねていくばかりの銀狼たちの姿が空
中からかき消えた。代わりに大巨狼の怪獣じみた肉体が地を蹴り、
辺り一帯の地盤を大きく揺るがせた。

その駆ける先にいるのは、もちろん影と護堂本人。

武器に勝てないのなら、操る使い手の方を片づける。合理的な判断
だ。だが、それだけに対応するのもたやすい。影と護堂は心の中で
同じことを思った。

「被いを及ぼし、穢れを流し、溶かし解放して尊きものへ。すでに
神々の黄昏は始まったゆえに、剣は汝を燃やし尽くす炎とならん！」

「ピュトンは地母祥ガイアが生み落とした大蛇だった、この蛇を殺
してデルフォイの支配者となったアポロンの巫女はピュティアと呼
ばれ、聖地を訪れる人々に神託を授けた。つまり、

アポロンは自分の同朋である大地の神霊を殺めて出世を果たした神
なんだ」

影は火柱からついに大剣、『灼熱世界の最終剣』を抜き、護堂は黄金の剣をひとつに束ね、光を収斂させた。
一直線に突っ込んでくるのなら、あなたの負けだ。このまま一太刀で葬りさる！

「地底、つまり冥府と結びつく大地は、闘の象徴。闇を追い散らすのは光
太陽の光だ。アポロンは大地から生まれた神でありながら、その母を殺めたことで光の化身となった。だから、その本質は闇でありながら光の性質も併せ持つ

ひねくれ者の神となっただ」

大剣の刃を包み込み、高層ビルほどの大きさをした巨大な炎で形成された刃を纏った影の『最終剣』と、これまでに倍する光量をした黄金の『剣』の一閃が巨大狼を薙いだ。
直後、見上げんばかりの巨体は消え失せた。縮小し、瘦せた老人へ変貌していく。その姿は先ほどより、かなり弱々しく見えた。

「……なるほど、火の巨魔が振るいし終焉の剣と我が権能を打ち破る言霊か。小瀬な奥の手を持っておるわ」

どれほどかは不明だがダメージがあるだろうに、ヴォバンは仁王のごとく立つ。

熱さと冷静さ。鋼鉄の意志と誇り。それらを併せ持つ、古強者の瞳が影と護堂を射抜く。

「局面に応じて、自らの能力を変化させる。珍しい権能だ……今も生きている『王』のなかではジョン・プルトーぐらいだな、似たような力を持つのは。そして、息子の権能は神話の武器を召喚する力と見た。これは全く知らなかったものだ。かなり珍しい……。もつとも、これほど力を有する権能は行使に際する制限を持つ。発生する代償と縛るルールさえ知れば、たやすく勝利できそうではある」

ククツ。額から血を流しながら、ヴォバンは唇をゆがめて笑う。

ふたりは気を引き締めた。あの老人の持つ力を完全に消滅させたわけではない。影も護堂も斬った時の手応えのなさから、理解していた。

『最終剣』^{レヴァティン}の持つ浄化、『終焉』の力と言霊の『剣』の性質を見極めた彼は、手遅れになる前に自ら突進をやめたのだ。

「だが安心しろ。小童ごときに、そこまではせぬ。あくまで正面から叩きのめしてくれる」

ヴォバンの言葉に応じて、『死せる従僕』たちが動きを変えた。

今まで無秩序に襲いかかるだけだったのが、急に整然と動き出す。

影たちの周囲から一旦

後退し、それから押し寄せる波のように突撃をかけてきた。

「ちっ、また厄介な真似を！」

「ま、今までが楽すぎたとも言えるけれど、たしかに面倒ね！」

リリアナとエリカがその対応に迫われ、焦り出す。

まず、従僕たちのなかでも非力なものが突撃。彼らがエリカたちの手にかかった瞬間に、大騎士級の死者たちが斬り込んでくる。

ヴオバンの見えざる意思が、『死せる従僕』たちを操っているのは明白だった。

「さて、息子よ。お前がその炎剣を振るえば愛する騎士ふたりも巻き込んでしまっただろうな。そして、小僧。貴様はさきほどアポロンの謎解きをしたな。いかにも、私が最初に葬った神はアポロン。我が狼どもは、かの神より墓奪せし聖獣の権能。さて、貴様の言霊アポロン以外の神力に果たして効くものかな？」

影の持つ炎剣は巨大な相手か、広範囲攻撃に適した武器。このまま炎を増加させて、一気に薙ぎ払えば『死せる騎士』は一瞬にして灰になるだろう。だが、確実に騎士と戦っているエリカとリリアナを巻き込んでしまう。それだけは避けなくてはならない。

護堂は死人たちを操るのはオシリス神の権能。そうと知りながら、打つ手がない。『戦士』の化身はアポロンの神力を封じるのみなのだ。

ヴオバンは『最終剣』^{レヴァティン}の力がこの状況では不利なことを知って手を変えてきたのだろう。もしかすると、大事な者を今度は本当に殺める、と。

くそっ！ふざけた真似を

！

「……護堂、僕には打つ手ナシかもしれません。悔しいですが……」

「影さん……けど、俺も『剣』はもう使えませんよ？」

影と護堂はもう打つ手がないと、考えたのか、魔剣を振るいながら奮闘しているふたりを見ながら歯がみした、そのとき

「影兄さん！護堂さん！」

背後から呼びかけられる。裕理の声だ。

「あの時操った死神を召喚してください！あれならエリカさんたちを傷つけずにあの方々を成仏させることができます！そして、護堂さん！オシリスを討つ剣をお使いなさい！あなたはもう、その条件を満たしているはずです！」

「……タナトスの権能を使えるほど体力が残っているかどうかかわからないのですが……」

「もうアポロンを封じるのに『剣』は使っているんだよね……」

答える余裕などないので、ふたりは口の中でつぶやく。

『最終剣』^{レヴァテイン}は浄化と終焉という、絶大な力を誇るが、代償は自分の魂の『炎』。つまり生命力だ。ただでさえフラフラな状態で、『想像』の物質変換によって地面を少しづつ取り込みながら回復している状態なのに権能を使用しようとすれば、ほぼ確実に意識が吹っ飛ぶだろう。

『剣』も他の化身が一日一つしか使えないのと同じように、一日一度しか使えない。そして、どの神に対して有効な『剣』を造るかは、『戦士』になる直前に決めるものだ。

「諦めてはいけません！影兄さんの権能は一日一度しか使用できないという制約は無いはずです！護堂さん、アポロンもオシリスも、元は極めて似た性質を持つ神格です。あなたのなかに眠る言霊を使つて、ここで『剣』を造り変えるのです！」

裕理も無茶なことを言う……。ふたりはともに半ば呆れつつも、戦況を見渡した。

自分たちを守るために、エリカとリアナが力を尽くしている。冥府神の権能に縛られて、十僕たちが死して尚、戦い続けている。そして、全ての元凶である老人がほくそ笑み。

……やってやるよ。ああ、やってやるうじやないか。闘う仲間に対する申し訳なさと『死せる従僕』たちへと憐憫と、何より死者を散々冒瀆しておいて余裕げな笑みを浮かべている父親もとい老いばれへの怒りが闘志となり、急速に回復速度を上げた。

「アポロンがそうであるように、オシリスもまた六坦の生んだ神だ

！」

護堂が『剣』に新たな力を吹き込むべく、アポロンとオシリス、ともに大地をルーツとする地母神の息子を語る。

護堂がそうしている間に影は地面を急速に取り込み、体力回復に努める。

「だけど、大地から生まれながら、輝く太陽神になったアポロンとはちがう。彼はあくまで純粋な大地と冥界の神 - 地母神じぼしんの血族である穀物神だ」

護堂の手に、黄金の刃を持つ長大な剣が現れる。幾度も死に、そして甦る冥府の神を滅ぼすために造り上げた神剣だった。

『死せる従僕』たちによって、十重とえはたえ二十重の包囲網がしかれて逃げ場はない。

遙か向こう十数メートル先に、戦う死者たちをオーケストラの指揮者のように無言で操る老王の姿が見える。

狙いを定めて、護堂は剣を振り上げた。

「オシリスは一度、八つ裂きにされて死んだ。そこから復活を遂とげて冥府の神になった。春に命を与え、秋に収穫し、冬に刈り取るのが地母神の役割。そして春に生まれ、秋に実り、冬に死ぬのは、大地の子である穀物神の役割だ。故に、殺す地母神と殺される穀物神は冥府神としての機能を共有するようになる」

影の回復が大方終了した。

次にすることは決まっている。死者を冒瀆せし冥府神の力を全てに
対し非情なる死神の力によって全て絶ち切る！

「かの英雄は申した。冥府で亡者どもの王となるより、奴隷の身分
でもいいから生きていたい」

これはかの英雄アキレウスの言葉として残っている。

それほど、古代ギリシア人は生を讚美した種族だった。旨い酒食、
快適な寝床、美しい自然、妙なる芸術、力比べ、知的な議論、恋人
との睦み合い　光あふれるこの地上に生きて在らねば味わえない
もろもろの楽しみを率直に愛していたからこそ、それらを根こそぎ
奪ってしまうこの死神タネトスが人々に大層嫌悪されていたことは明白であ
ったことは確かだ。

しかし、死神の役割は死者を確定し、その者を冥府へと送り出すこ
と。彼の目の前で死すべき者が魂を縛られ、現世に彷徨っているこ
となど、許せない所業だ。

「だが、死を逃れることは罪。罪には罰を、つく贖わぬ者には苦しみを。
我が心臓は鉄くろがね」

だからこそ、目の前の死者を再度殺すことによって安らぎを与え、
死神は仕事を達成する。

「心は青銅、我は人々から忌み嫌われる死神にして、哀れな魂に悠
久の安らぎを与えるべく、今宵我は裁きを下す者の代行者とならん

！」

「アポロンが失ったのは、この殺される役割だ。引き替えに、彼は太陽の神になった。それでも『夜に酷似した』と表現され、死 -

ニユクテイエオイコス

疫病を振りまく神なのは、その過去の痕跡なんだ！」

影の手元に護堂の長大な『剣』に匹敵するほど巨大な柄と凶刃を持った大鎌が出現する。その色は闇の色である漆黒。まるでその鎌自体が冥府の入り口のように、その刃を死せる騎士へと向けていた。護堂が必殺の言霊を込めた、一撃を突き出すのとほぼ同時に、影の漆黒の大鎌も振り下ろされた。

『剣』の刀身より放たれた黄金の閃光が戦場の半分を照らし、『鎌』の刃から放たれし冥府への闇がもう半分を覆い尽くす。

黄金の閃光と冥府の闇へと呑み込まれた死せる従僕は一瞬で消滅するが、エリカとリリアナに対し害を成すことはなかった。

影は地面を蹴り、従僕の後方、影たちの前方でチエスのキングのように控えるヴォバンへと疾駆する。行動を起こしたのは影だけでなく、護堂も同じくヴォバンへと疾走していた。

王を庇うように、死せる騎士ナイトが我が身を盾にする。

無意味なことを。

今や自らが死神と化した影に対して、死者の防御など紙切れよりも薄い。立ち塞がる死者は何度でも冥府へと送ってやる。

影は対する王キングとそれを守護する騎士ナイトへと大鎌の刃を向け、最終決

戦を始める布告とした。

十六話 神を縛る鎖と終焉の大剣と死神の鎌（後書き）

あとで、権能紹介の回でも作ろうかな……。ホント文章が長ったらしくてすいません。

十七話 裁きの一撃はひとりではなく

いつのまにか雨がやんでいた。

しかし、嵐が去ったわけではない。まだ風は暴力的なほどに強く、天を覆う黒雲からはゴロゴロと雷の鳴る音が地上へ落ちてくる。

だが、雨だけはやんでいた。そのなかで老人の声^{たの}が愉しげに響く。

「やってくれたものだな。我が『狼』^{おおか}を斬り裂き、『死せる従僕』を解放したか。なかなか厄介な芸を持っておったではないか」

死者を完全に冥府へと送り届ける影が造り出した闇と全ての言霊^{ことだま}を注ぎ込んで放った、護堂の斬撃。

オシリスの権能を完全に無効化し、ヴォバンのなかに眠るアポロンの神力は完全に斬り裂いた。

これによってふたつの権能は数日の間は意味を為さなくなり、ヴォバンは力を大幅に失ったはずだ。

ずっと戦い続けていたエリカとリアナも魔剣をおろし、一息ついている。

影が『鎌』を護堂が『剣』を振るった直後、『死せる従僕』は完全にこの場から消滅していた。

そのときのふたりには、消えゆく従僕たちがなにかを告げていたように思えた。もしかしたら、解放された礼でも言っていたのかもかもしれない。

皮肉なことに、人々から忌み嫌われるはずの非情なる死神の力で感謝されるとは。本物のタナトスが聞いたら泣いて喜ぶかもしれないな。……震える脚でしっかりと、地面を踏みしめながら、影は自分を奮い立たせる。

呼吸が少々荒くなっている。もつとも戦えないレベルではない。思ったよりも『想像』の回復量が多かったらしい。だが、隣の護堂は、息が荒く、体に力が入らない様子であった。『剣』を二重に使う戦法は今の護堂には早かったらしい。

「小僧はもう限界のようだな。まあ、善戦したと誉めてやろう。期待にたがわぬ戦いぶりであった」

と、ヴォバンがつぶやいた直後。

風が唸り、護堂の身体を吹き飛ばした。影はなんとか地面に足を踏ん張り、耐える。吹き飛ばされることは無くても暴風なんて比べ物にならない、まるで質量をもったような、爆発的な風圧。

これはまた新しい権能！

影が睨みつけた先にいるヴォバンの背後には、三つの人影のようなものがかすかに見える。

おそらく嵐を支配していた神の姿なのだろう。その神が所有していたはずの風雨雷霆を支配する権能は、いまやこの老人のものなのだ。

「さて、息子よ。お前はまだ戦えそうだな。小僧よりは骨がある。さすがは私の血を受け継いだ男であるな」

また烈風が吹く。

今度は影に駆け寄ろうとしたエリカが、吹き飛ばされた。飛翔し、ヴォバンとの距離を一気に詰めようとしたリリアナも、同じ目に遭った。

次は雷鳴。轟音が響き、一瞬遅れて稲妻の光が天より降る。

「！！」
「ッ、」

ク

生存本能と言うべきか、影はとっさの判断で脇へと回避し頭上に落ちるはずだった稲妻を間一髪で回避する。

アスファルトの地面は稲妻によって溶け、焦げた臭いが充満する。こんなものいつまでも避けられるはずがない！対策を考えなければ……やられる！

「ふむ、しぶとい。先刻から気になっていたが、息子よ、お前はまさに昔の私だな。わけもわからぬままに『王』としての資格を得、いかなる魔術師も習得できない力と闘志を智慧まで使いこなす。それは私がかつて通った道だ」

また稲妻。もう一度、またも稲妻。

天より落ちる稲妻が直撃することはなかったが、爆風や、岩の破片に当たり体がどんどん傷ついていく。

今度は突風で体を叩かれ、固い地面に体を打ちつけられる。

「……さつきから、ベラベラと勝手なことを……」

影は固いアスファルトの地面を思い切り殴りつけ、その手を杖にして立ち上がり、目の前にいる倒すべき老人を睨みつける。

「僕をあんたと同じだとか言ってるじゃねエよ！！僕は世界一、いや、どんな数でも形容できないくらいあんたが嫌いなんだよっ！そんな人に同じとか言われて嬉しくもない。むしろ、不愉快だ！」

「影……」

「影さま……」

「影さん……」

「影兄さん……」

彼はいままでずっと心の奥底へと幽閉していた、『怒り』の感情を憎き相手、父親に対し、吐きだした。

一八年間、彼が誰にも言うことなく心の中で強大になっていった憎しみ。それは怒りと嘆きの感情を含んだ叫びとなってこの場に響き渡る。怒り、憎しみ、悲しみを糧とし、影は闘争心を最大限に燃やす。しかし、そこには負の感情だけでない。誰かを守りたい。この男の好きにさせてはならない。という、自らが一心に思うものも含まれていた。

「主

最強の戦神にして雷神の力を恐れぬものはな

い。その力は山を砕き、巨なる者を地へと平伏させ、死を確かなものへとする。その力は裁きの紫電を纏いし、清めの剛。今こそその力を振るい、勝利を齎す時！！」

ヴォバンが呼び出した嵐が上書きされるように、さらなる暗雲が立ち込める！空には幾つもの紫電が走り、地上を轟かせるように鳴り響く。

瞬間

ヴォバンが稲妻を放った。

天より降る閃光。だが影は、それを天へとかかげた右腕で掴み取った。

右手を握りしめ、掴み取った稲妻を砕くようにして、閃光を分散させる。弾けた光は周囲へと飛び散り、煌びやかな光の粒子となって消え去った。

そして、粒子が落ちた地面に青き閃光が迸り、一直線にヴォバンへと向かう。

「何？」

さすがに相手も風雨雷霆の支配者。

老王に直撃するはずだった閃光は、轟音と共に彼の脇へ逸れ、駆け抜けていった。

「それも貴様の力か！まだ、隠し玉を持っていたとはな……！！」

闘争の喜悦で、ヴォバンの表情が輝きを放つ。

暗雲立ち込める空の紫電はその轟音を増し、やがて地へと降り注ぎ大地を焦がす。

ああ、聞こえる。

この場において冥府へと旅立った魂の叫び。

ただ、一心に緋狩影という人間の勝利を願い、そのために自分の武勇のすべてをかけた少女の気高き心の祈り。

長き時を経て再会できた主の無事な生還を願
い、強大な王にも反逆してみせた少女の一途な心の祈り。

動くことのできない自分の代わりに大切な人
を傷つけた報いを与えて欲しいと願う王の少年の頼み。

全てを救ってほしいと願う、真に心優しき少
女の願い。

「人々の祈り、願い、総てを受け入れよう！！そして、勝利を以てしてその心に報いてみせよう！！」

影は叫び、天へと手をかざした。

暗雲が渦を巻き、轟音とともに中心がこの場を照らすように光り輝く閃光を放つ。

『雷神の魔槌』を今回は加減などせず、最大限の威力をもった状態で召喚しているのだ。

柄が極端に短く、歪な形状をしたその武器は北欧の雷神トールが最強の名を語る要因となった巨人殺しの魔槌。ロキが造らせた神具の中でも主神オーディンが最高の道具だと称したものだ。

雷神トールはその槌を天へと掲げることによって、恐るべき稲妻を呼び出したという。その力を影は今使用しているのだ！

その様子を見たヴォバンも自身の権能を行使。紫電のほとばしる空を介して、親子であり、ふたりの『王』は稲妻の強さを競いあう。

「ガハツ……ッ！」

老魔王としてのぎを削っていた影が急に紅き血を吐き出し、その体をよくけさせる。今日だけで権能を何回も行使している、さらに一日に二回も神具召喚はやり過ぎた。

神の扱った武器を呼び出し、操るということは常人では絶対に不可能。王である影でさえ、その強大な力を扱うのに体にかなりの負担をかける。いくら、ロキの権能によって回復していたとはいえその負担ははかりしれない。当然といえば当然の症状だった。

「息子よ、今こそ貴様に感謝しよう。よくここまで戦ってくれた。我が倦怠と無聊の日々を今日、思わぬ再会によって、慰めてくれた。あとわずかではあるが、この一時を堪能させてもらおう」

ヴォバンが微笑する。

大げさな言い回しで、己の勝利を確信し、宣言している。

いつしか、均衡していたはずの天空の稲妻たちはヴォバンの側の方が光輝き、自らの方が強いと主張していた。焦りが影の心を掻きまわす。

もはや敗北は決定的となってしまった。

召喚しかかっている『雷神の魔槌』は叙々にその力を失っていき、不完全に終わってしまう。

そして、ただでさえ状態のマズイ体で、何もできないままヴォバン

の稲妻を浴びて無事なはずがない。

影は策を模索し続けるが、一方に思いつかない。諦めかけたその時

「影。わたしのこと、忘れてないでしょうね。あなたの騎士であるエリカ・ブランデッリにも活躍の場を与えなさい。わたしはあなたの剣、あなたの楯。どこまでも共に戦うわ」

影の右隣に、紅と黒の衣をまとった騎士が現れる。

クオレ・デイ・レオーネを手に、エリカ・ブランデッリが並び立つ。

「影さま。わたしはあなたさまと何時如何なる時もお供いたしますと誓いました。わたしたちは一蓮托生でございます。……それに、エリカばかりいいところを見せるわけには参りませんので」

左隣に、青と黒の衣をまとった騎士が現れる。

イル・マエストロを手に、リリアナ・クラニチャールが並び立つ。

「女の子ふたり行かせて俺が行かないってのも情けないしなア……影さん、親子喧嘩に加わらせてもらいますよ」

ぼろぼろの護堂までやってきた。幾分か体力は回復したようだが、まだ足取りは重い。しかし、無理に笑顔を作っていた。

「…………なにやってるんですかッ………… 本当に貴方達はバカですよ！…
…今まで知らない大バカ者たちですッ…………」

言葉ではそう言っているが、不覚にも涙が出そうなくらい嬉しい。
ここまで仲間のありがたさを感じたのは本当に初めてだ。
影は目に浮かぶ涙を払い落とし、エリカたちに向き直った。

「…………すんつ。で、何か策があるんですか？…………すんつ」

払い落とし損ねた涙が、一滴流れ出るとそれに続き濁流のように涙が
こぼれ落ちる。その様子をエリカ、リリアナ、護堂は困った様子で
見ていた。

「ああ、もう影ったら。子供みたいに泣いちゃって…………。ちゃんと
策はあるわよ。ねえ、リリイ、護堂？」

「はい。あなたさまの呪力を助ける形でわたしとエリカが結界を作
れば、侯爵の全力にも耐えきれるかもしれません。誠に申し訳あり
ませんが、今は賭けに出るべき時かと」

「もしも耐えられたらその間に影さんが回復。そして、俺が『山羊』
を使って影さんが召喚する神具の力を助ける。こんなもんかな」

三人は全く退く気配を見せない
全く、本当にいい友人たちを持ちましたよ……。
ため息を一度つき、微笑む。意地張って自分ひとりで決着付けよう
としたのがバカみたいだ。自分は独りではない。そして、独りだけ
の力では、到底あの老人にはかなわない。だったら

！

「……これでもし失敗したら、責任とって貴方達を幸せにしますよ」

「そういうのは成功したときにしてくれないかしら？失敗したら責
任取るもないわよ？」

「そうですよ。しかし、もし失敗してもわたしはあなたさまと共に
往きますので、来世でも一緒に過ごします」

まったく、嬉しい限りですよ。よくこんな自分にこんないい女がふ
たりも集まってくれたものだ。

影は心の中で、エリカとリリアナ。自分の生涯で、ふたりの少女に
出会えたことに感謝した。

「護堂は生きてくださいね。もしも死んで、裕理を泣かせたら……
幽霊になっても虐めますからね」

「ちよっ！影さんだと洒落になりませんからっ！……まあ、生き残るように頑張ります」

護堂に憎たらしく微笑む影。ふたりの会話を聞いていた裕理は顔を赤く染め、この場で誰が命を落とすことが無いように、強く願った。その様子を見ながら、裕理もこの戦いが終わったら学校でも護堂とさらに仲良くなっているかな？と想像する。そして、影は改めて父親をにらみつける。

老魔王は天に腕をかざし、振り下ろすところだった。

また、雨が降り始める。

それと同時に来た。雷雲よりほとばしり、空を裂き、地上へと落ちる極太の閃光。今日見たなかでも、最大強度の雷であることは疑いようのない一撃。

その力は裁きの紫電を纏いし、清めの剛。
今こそその力を振るい、勝利を齎す時！！

我は最強にして最多の勝利を掴む者。人と悪魔の敵意を挫く者なり！

影が雷神の魔槌の力を、護堂はウルスラグナの神力を最大限に燃やし、頭上に迫る雷を逸らせようと念じる。

そこにエリカが、そしてリリアナが結界の魔術で見えざる防御陣を敷き、この念を助けようと呪力を合わせる。だが、

足りない。

満を持して放たれた最強の雷撃を押し返すには、四人の力ではまだ

足りない。
勝利を確信し、老カンピオーネが喚笑する。
そして影も、護堂も強く願う。

我に力を。僕（俺）たちに力を貸してくれ！！

応。

答えを聞き、ふたりはうなずいた。
ふたりでも、四人だけでもない。この場に集まったヴォバンの敵全てが、自分たちに力を貸してくれる。
これで負けられるか！

体は土となり、塵となった『死せる従僕』たちの魂が冥府より、肉体を新たに得て、地上へ舞い戻ってくる。

「何！従僕ども、だと！？」

ヴォバンが驚愕で目を睜^{みほ}る。

天に向けて、影と護堂は言霊をささやく。

「その剛腕を天へと掲げよ！我はいかなる障害も打ち砕きし最強の戦神。我に仇なす愚かな諸悪を討つべく、我に力を貸したまえ、天よ！」

「稲妻よ、稲妻よ！我は百の打撃を以て千を、千の打撃を以て万を、万の打撃を以て幾万を討つ者なり。義によりて立つ我のために、今こそ光り輝き、助力せよ！」

雷雲が喰^{うな}りをもって、ふたりの呼びかけに応えた。

ゴゴゴゴゴゴゴッー。

不気味な轟音が天空より降ってくる。最大級の雷電が解き放たれる寸前の、天を震わせ地を揺るがせる神界の音が響き渡る。

本来であれば、ここまでの雷撃を操る力は今の影にはなく、護堂にはない。

だが、影が召喚した暗雲とヴォバンが集めた雷雲があれば、そして彼の気が緩んだ一瞬の隙を突くことができれば、話はべつだった。

老王が放った一撃をどうにか凌いだ直後、影と護堂は全ての呪力を振り絞った。

上空にわだかまる雷雲の支配権を奪取し、ひとり是最強の破壊力を誇る槌を呼び出すため、もうひとりは掌握するために言霊を吐く。

『雷神の魔槌』がその姿を現し、『山羊』の化身が持つ全能力を傾ける。

（この瞬間、『山羊』の力により、東京タワーから半径一キロ以内にいる人々はすくなくからぬ生命力を奪われ、貧血匹似た昏倒こんとうを起したのだが、それをふたりが知るのもっと先の話である）

全力の攻撃を仕掛けたヴォバンが、一瞬とはいえ集中力を落としたからこそ可能だった。

「くっ、小僧どもめ！盗人のような真似をする！」

奪われた雷雲の支配権を取り返すべく、ヴォバンも上空に意識を向ける。

だが、もう遅い。その前に影と護堂が攻撃の意思を発すれば、もう間に合わない。

「今宵の我は絶対なる破壊者。その一撃は閃光となって全てを破壊する神々の怒りとなる！」

「人と悪魔

全ての敵と敵意を打ち砕

く。それこそ我なり！」

ふたつの強大な黄金の稲光が、再び地上へと降る。

それは、数十秒前にヴォバンが落とした雷莖を遥かに上回る烈しさであった。

十七話 裁きの一撃はひとりではなく

(後書き)

次で二章はラストになります。感想、評価、ご意見など、本当にください！！

終話 勝利は更なる闘争への狼煙

極大の稲妻が生んだ閃光は消え、轟音も途絶えた。

老カンピオーネの周囲を覆っていた白煙も、ついに霧散した。

影と護堂が渾身の力で叩きつけたふたつの雷撃の複合技でも、ヴォバンに打ち勝つことはできなかった。

やはり、自分が生まれる百年以前から王になっていたというキャリアの差は伊達ではない。

だが、疲弊の極みにまで追い込むことはできなかった。

あの稲妻を受けて尚、老人はギリギリのところまで防いでいた。『疾シユト風怒濤』
風雨雷霆を支配する権能の全力を傾けて、押し寄せる雷を我が身から逸らさせようとしていたのだ。

そこへエリカとリリアナが、それぞれの魔剣を投槍のごとく撃ち込んだ。
老王はこの凶刃を飛びのいてかわし、そして集中を乱した。津波のように襲い来る雷撃に呑み込まれ、あえなく灼き尽くされてしまった。

しかし、そのあと。

さきほどまでヴォバンが立っていた場所にいつのまにか積もっていた砂
いや、塵が巻き上がり、いきなり人の形

を作り、知的な風貌を持つ老侯爵の姿となったのだ。

やはり復活の術を有していたか……。

自分が『想像』の一次的急速回復で死を逃れ、護堂が『雄羊』で死から復活するように、彼もこの権能を避けられない死神の手を回避

する術としていた。影は気を引き締める。

「これから始まるのは第三ラウンドということではよいか、小僧ども？」

「あなたが倒れた時が試合終了ですよ。いつでもどうぞ」

今の復活劇は、ヴォバンにとってもかなりの負担だったらしい。激しく息を荒らげている。呪力も明らかに大きく目減りしている。それを直感した影は魔槌本体を召喚しようとし、護堂は、疲れた体に鞭打って稲妻を呼ぼうとした。

今なら、勝てる可能性は十分にある。勝負はまだわからない！

対峙するひとりとふたりのカンピオーネの背後で、東京タワーが豪侠に燃えさかっていた。

さつき影と護堂が繰り出した雷撃はヴォバンだけでなく、この鉄塔にまでとどめを刺した。全高三〇〇メートル余の鉄筋建築が、たいまつか何かのように大きく炎上している。

波乱の夜はまだ終わっていないのだ。どこまで被害が増すのだろうか？

ふたりが気を引き締めた、その瞬間だった。

「……いいかげんになさいませ！ 侯爵さま、もし御身が戦いをおやめにならないのであれば、私もろともおふたりとこの方々を吹き飛ばせばよいでしょう！」

にらみ合う『王』たちに、祐理が怒鳴りつけた。
なぜか彼女も衰弱すいじやくしているらしい。エリカに抱えられるようにして、
雨で濡れそぼった媛巫女はここまでやってきた。

「私がいなくなれば、御身が戦い続ける理由もなくなります。どうぞ、ご決断を」

馬鹿なことを言うな！

凍とした表情でささやく祐理を制止させようと、影は叫びかけた。
だが、その前にヴォバンがフンと吐き捨てた。

「本気かね、巫女よ。ここで息子と共に私に蹴散けちらされてもかまわないと申すのか？」

「はい。私のために街の方々が危険にさらされるのであれば、致し方ないことでしょう。しかし、影兄さんは諦めていただきたく存じます」

凜然りんぜんと言う祐理の顔を見て、ヴォバンは軽く舌打ちした。

「ちつ。狩りの愉しみも知らぬ小娘が、興のないことを言う。……いいだろう、そこまで申すのであれば、デヤンスタール・ヴォバン

の名にかけて宣言してやる」

ヴォバンの瀦鵬一彪の鯉げ似た琳躰が燃えた。

鋼えきれない懸と、たぎる激情のためだ。いよいよ戦闘再開かと、影は身がまえた。

「小僧ども！ 緋狩影、草薙護堂よ、貴様らに勝利をくれてやる！ この勝負、貴様らの勝ちだ！」

実に忌々しそうに宣告するヴォバンの言葉が信じられない様子の影。そんな中護堂が茫然とつぶやく。

「俺たちの勝ち、だって？」

「この狩りが始まる前に、私は言った。貴様を殺し、娘と我が息子を奪うのが狩りのルールだと。だが、私は貴様と息子の力を見誤った。ここまで追い込まれ、疲弊してしまった。……このまま貴様との戦いを続ければ、その娘の安全を確保する余裕はなくなるだろう。だから、貴様らの勝ちなのだ」

苛立たしげにヴォバンが吐き捨てる。

そんなことを言っていたのか？ この老人には、今までの死闘もゲームの一種だったということか？ と影は少々気が抜けた。

「自ら決めたルールを守れないのであれば、それは私の敗北だ！貴様らの力を見くびった、私の甘さが呼び込んだ敗北なのだ！……私も竈砥したものだ。成長した息子と目の前の小僧がどれほど曲者か、初見で見抜くこともできぬとはな」

緑に燃えるカンピオーネの邪眼に見据えられ、影と護堂も不遜ににらみ返した。

このまま戦い続けても負ける気はしない。だが、この辺りで終わりにするというのなら、べつにかまわない。たしかにそろそろ潮時だとは思う。

「勘違いはするなよ。貴様がここまで私を追い込めたのは息子の助力があつてこそだ。いつまでも基奴が貴様の味方とは限らないぞ。次こそは全力で狩り捕ってやる。今のままの貴様でかなうほど、本気のヴォバンは甘い敵ではないぞ」

影たちに背を向けて、父親

老カンピオー

ネは歩き出す。

焰に照らされて燈だいたに染まる路傍から、風雨渦巻く闇の奥へと突き進んでいく。

「覚えておくがいい。我ら『王』同士は互いを無視し合うか、不戦の盟約を結ぶか、終生の敵と決めて戦い抜くかいずれかだ。今より貴様は、我が敵のひとりとなる！息子よ、貴様とて例外ではないぞ」

それがヴォバンの遺した言葉だった。

彼の姿が見えなくなると、ふたたび肉体を取り戻した『死せる従僕』たちもパラパラと塵となり、今度こそ冥府へと旅立っていく。

もう二度と彼らが冒瀆されるようなことがないように

そう祈りながら、影は護堂とともにへたりこんだ。さすがに疲れていたのだ。

今回は勝利を得ることが出来た。しかし、未来にまた勝利できるかは不明だ。

「あの塔、派手に燃えてるわねー。滅多に見られない絶景よね」

「あいかわらず悪魔みたいなことを言うな。あなたらしくて、実に嘆かわしい」

「……なんかデジャヴですか、これ？また工事の人に祈らなきゃ……」

地面に大の字で背を付けている影の隣で、エリカとリリアナも同じことをする。

彼女たちも相当限界だったらしい。円のようにして寝ころび、四人で赤と白の東京タワーが派手に炎上する様子を、ぼんやりと眺めている。

その高さは三三三二・六メートル。

電波塔として建造され、その後はむしろ観光施設として有名になった東京のシンボル。竣工から五〇年もの歳月が経過した、都民だけでなく、日本国民になじみ深いランドマークだった。

「そういえば、万里谷も大丈夫か？……どうしたんだよ、すごく疲れているみたいけど」

やはりへたりこんでいた祐理に、護堂は訊ねる。

精神的にはともかく、肉体的にはそれほど重労働をしていなかったよなど不思議に思ったのだ。すると、ひとりの少年と三人の少女たちは一斉にため息をついた。

「どうやら、全く何をしていたのかわからなかったらしい。」

「護堂、あなた自分が何をしていたのか、気づいていなかったのね。」

エリカが言い、そして祐理やリアナが『山羊』の化身が与える恐るべき副作用について口々に説明した。

自分が近隣一帯の生命力まで吸い取っていたと聞き、護堂の背を冷や汗が伝う。

「だ、誰か命に別状があったりはするかな？なんてヤバイ化身なんだ……！」

「責任問題ですね」

「影兄さん！おそらく、そこまでの事態にはなっていないと思われる。体力のない私でも、貧血で倒れる程度で済みましたので。…一応ご報告しておきますが、影兄さんと護堂さんが最後の稲妻を撃ったとき、私、意識が遠くなって倒れてしまいました」

「ただだ、大丈夫か、万里谷？他の人たちも無事だといいんだけど

」

慌てる様子の護堂を影とエリカは可笑しそうに、リリアナは呆れたように見る。

そして、目の前では護堂と裕理が見つめ合っているという展開になっていた。

「ねえ、影。わたし、なんか体が火照ってきちゃった。冷ましてくれないかしら？」

「い!？」

いつの間にかほぼゼロ距離の地点に妙な色気を纏ったエリカがいることに気が付いた影は脚を立たせ、逃げようとしたが、腕に身体を捕らえられた。

獲物を捕らえた獣となったエリカは両手でやさしく、ひどくやさし

く影の頬やあご、首筋を撫でさすっている。どことなく秘め事めいた、なまめかしい手つきだった。

だが、なぜか妙に不安を感じるのはなぜだろうか？

影がその不安に気が付いた時にはもう遅く、リリアナがこちらを見てひどく苛立ったような顔をしていた。

「影さま……雌狐にそのようなことをさせておいて、わたしがしてよろしくないということはありませんかっ！！！」

左側に抱きついていたエリカと反対に、リリアナは影の右側から首に手を回し抱きついてきた。

おまけに、頬へと口づけをする。

負けじとエリカも同じ動作をし、ついに唇へと吸いついてきた！

「~~~~~！！！」

その様子を見て顔を赤くするリリアナだったが、彼女もこんなところで負けたままで終わるような性格ではない。

未だにエリカが吸いついている影の唇に、自分の唇を押しあて、対抗する。

ふたりの美少女に同時にキスされる少年。健全な男子なら喜ぶべきだが、影はこの状態をかなり危険と感じていた。

もちろん性的な意味でもあるが、……呼吸が出来ない。

ふたりを退けようと思っても疲弊のせいで腕に力が入らず、為すがままにされ、ふたりは唇を離すことなく、ついには舌まで使い、勝負を続ける。

「いやー、みなさんお疲れ様でした。取りあえず、消火活動その他の後始末はわれわれにおまかせください。雨で体も冷えたでしょう？今日のところはゆっくり休んでーって、おや、緋狩氏はどこへ？」

唐突に現れた甘粕の声が聞こえる。これはチャンスだ！
影はとりあえず今できる最大の救難信号

手を地面へと叩きつけることによって甘粕に気付いてもらおうとした。

だが、生憎助けは来ない。影はそのまま意識を手放し、眠りについた。

後から聞いた話だと、護堂と裕理はなにやら甘い空間を形成し、それどころではなく、甘粕はニヤニヤしながらずっとこちらを見ていたという。

その後、甘粕は満面の笑みを浮かべた白い悪魔に『O H A N A
S H I しましょっよ？』と言われ、

「「遠慮しまww」

ギヤアアアアアアアアアアアアアアアアツツ!!」

という事態になったらしい。なにが起こったかはご想像次第で。

「ははは、そうかそうか。影と護堂があのじいさまを懲らしめてくれたか。そうか。こりやめでたいね、ほんとに。実に喜ばしい話じ

やないか、すばらしい！それにしても影が息子だったとは……全然似てないなあ！」

イタリア、トスカーナ州。

ゴシック様式の建築美で知られる小都市シエナの郊外で、その『謁見』は行われていた。
初夏の緑に覆おほわれた、なだらかな丘陵が見渡す限り続いている。
おおむね美しい緑の野と言ってよいのだが、ところどころに土がむき出しになった荒地地が散在する。南トスカーナ独特の風景だった。そんな丘陵を流れる小川のほとりで、その『王』はノホホンと釣り竿など握っていた。

「もしかしたら、勝つんじゃないかとは思っていたけどね。しまつたな、いくらか賭かけておけばよかったよ。さすがは僕のライバルと超えるべき壁だ……永遠の好敵手と目指すべき者だ！」

やや興奮気味につぶやきながら、のんびりと糸を垂れるのはやめな
い。

長身だが線の細い、金髪の美男子。

その鞭のようになやかな肉体を包むのは、ラフなシャツとストラッ
クス。

川辺に腰を下ろす彼のそばには、幾重いくえにも布を巻き付けた長い棒が
置かれている。

リアナ・クラニチャールは知っている。この布の中身が鋼鉄を鍛
えた『剣』である事

実を。イタリアの誇る『王』サルバトーレ・ドニは、いかなるとき
でも剣を手放さない。

それが彼の衿持であり、自己主張であり、特権なのだ。

「勝ったと言っても、おふたりの力を合わせてやっと、といったところですよ。とても美しい勝利とは呼べない内容でしたし……」

「美しくなろうがゴミ溜めから拾おうが、勝ちも勝ちさ」

リアナの指摘に、ドニは片目をつぶってみせた。

こういう仕草のひとつひとつが絵になる。人なつっこく、茶目っ気にあふれた青年なのだ。

「そうそう。君のところのおじいさんと《青銅黒十字》には、僕から連絡を入れておくよ。僕のお気に入りの騎士をあのクソじいに差し出すなんて、絶対に許さんって」

「お、お気に入りに入り！？わたしが、卿の、ですか？」

リアナは驚いて聞き返した。一体いつ、そうなったのだ！？

エリカ・ブランデッリから忠告を受けたのは、日本から帰国する前である。影の傍を離れることを悔^くみながらもミラノに帰参する前に一度ドニのもとへ顔を出した方がよい、と。

今回リアナが取った行動に、自国の『王』のお墨^{すみ}付きをもらおう。

《魔術結社青銅黒十字》の重鎮である祖父の手前、たしかにそれくらの根回しはしておきたいところだった。

かくして、東京でふたりの『王』が対決した日から三日後。

ドニが本拠地とするシエナを、謁見と報告のためリアナは訪れた

のだが

「そういふふうにしておこうってだけだよ。この方が話がわかりやすく、いいだろう？それに影の恋人を奪ったということになったら……うつつ、寒気がするよ。ま、本当は僕が女の子を気に入ることってまずないんだけどね。ウソも方便」

影の恋人。その響きは嬉しかったが、最後。聞き捨てならないつづやきが、『王』の口から洩れて^もいる。

これは聞かなかったことにしよう。そう決意しながら、リリアナは頭を垂れた。

「いま僕が夢中なのは、やっぱり護堂だしね。あの坊やがどれだけの速さで成長するか、本当楽しみにしているんだ。あと二年。いや一年？半年じゃさすがに無理かな？彼がウルスラグナの権能を掌握しきったときこそ、僕たちがふたたび戦うべきときだ。その日がいまから待ち遠しくてたまらないよ、本当に……！」

来たるべき祝福の日を待ち受けるように、剣のカンピオーネはつづやいている。

リリアナは身震いした。

もしかすると、サルバトーレ・ドニが草薙護堂の盟友というのは誤りではないのか。デヤンタール・ヴォバンを凌駕する熱さで再戦を望む、おそるべき大敵なのではないか。そんな想いに駆られたのだ。

「それに、僕も影を超えるくらいに強くないと。……ん？影がデヤンスタール・ヴォバンに勝った……もしかして、僕はあのじいさまより弱いということなのか!？」

急に叫び始めたドニにリリアナはビクツと体を一瞬震わせて驚いた。そんな彼女の様子を気にも留めない彼は、こうしてはいられない!といった様子でせつせと釣り道具を片付け、走り去ってしまった。

そんな彼を残されたリリアナは茫然とした様子で、呼び止める暇もなくただ、見送るしかなかった。

終話 勝利は更なる闘争への狼煙（後書き）

二章終了！長かった……。更新が遅くなるかもしれませんが、二章もよろしくお願ひします。感想、ご意見、評価など頂けたら行幸です。

一話 始まりは日常

夏休み、七月下旬。まさに夏の真っ盛り。

南イタリアは、五月あたりから半袖で過ごすほど温暖な気候である。これが真夏ともなれば、その暑さと日差したるや激烈なほどだ。だが、その代わりにマリナー

リゾートには持ってこいの日ばかりとなる。

みごとに晴れ渡ったサルデーニヤ島の青空。

そして、美しい砂浜と紺碧こんへきの海が目の前には広がっている。

ここへ来たのは「影よ、妾と旅に出ないか？」と言うアテナの一言がきっかけとなり、エリカやアリアンナを巻き込み発展していき、結局影、エリカ、アテナ、アリアンナ、護堂、裕理の大人数で旅行へ行くことになった。島の北西部、廃坑はいこうになつた銀山に程近いビーチであった。

空港のあるアルゲロ市の近所なのだが、ガイドブックにも載らない穴場だという。

「影、君はもう少し私にかまってくれてもいいだろう？一時は共に暮らしていた仲だ。……それとも、やはり私のような老いぼれた女には興味の欠片もないのか？」

「他人に言われるのは嫌なのに、自分で言う分にはいいんですね…

…」

こんな会話をしているのは、影とルクレチア。

心底疲れたように溜息をつく、緋狩影は今まさに賢者のように無の

心。

対して、ルクレチアは、砂浜に敷いたシートの上に寝そべり、優雅に日焼け止めを影に塗らせていた。

影は黒いサーフパンツと素肌の上から灰色のパーカーをはおっている格好で、ルクレチアの方はビキニだったが、上を外して、いわゆるトップレスの格好をしていた。

彼女のむき出しの背中にオイルを塗る影は隠れていない方の目をつむり、少々険しい表情をしている。

「質問の答えになっていないぞ。そういえば『剣の妖精』は君の許婚だったそうじゃないか」

「……………えっ?」

なんで知っているんだ!?

全く話した覚えもないのに事実をルクレチアが知っていたことに驚愕するが、よくよく考えれば予想はつく。

「エリカ……………ですよね?」

「お見事。正解だ。全く、君は本気でハーレムでも作るつもりか? しかもその中に神様までいるとは……………な?」

影がルクレチアノ視線を辿ってみると、そこには美しい銀の髪をも

つ少女

もちろんアテナがいた。

どうやら泳ぎ方をアンナに教わっているらしく、浮き輪で浮かびながら説明を聞いて、いろいろしている。

なんとも微笑ましい光景だと言いたいが、神様がメイドに泳ぎを教わっていると思うと……なんともシニールだ。

「ハーレムねえ……。もしもその方法で彼女たちが不幸にならないならばその方法をとりますよ」

「幸せじゃなくて不幸か……。なんとも君らしい考え方だな。ある種尊敬に値するよ。で、そのハーレムに私も入れてくれるのだろうか？」

ルクレチアはそう言うのと全身を影の方向に向けようと反転させようとした

が、上半身裸の状態を晒すにはい

かず、影が力づくで押しとどめた。

ちいつ、舌打ちが聞こえたが、気にしないようにしよう……。

「ねえルクレチア、少しサービスされ過ぎじゃないかしら。次はわたしの番なのだけど？」

少し不機嫌そうなトップレス美女に、エリカが愉しそうに声をかけた。

黒地に紅で模様を描いたスポーティーなビキニがなんともそのグラマーな肢体を強調し、瑞々しい素肌を惜しげもなくさらしている。

「『緋狩影を一定時間好きにできる権利（本人の意思は尊重しない）はわたしにもあるのよ。それにわたしの次はアテナが控えてるし、時間が惜しいのよ』」

「あゝ、そうだな。では、あと少しの間だけ楽しませてもらう」

勝手に会話を進める二人だが、こうなったのはもちろん理由がある。そう、あれは空港に到着した直後だった。

「そういえば……エリカ、アテナ。なにか願い事がありますか？」

「願い事？」

「なぜいきなりそのようなことを……？」

いきなりの質問に首をかしげるふたり。この場には影、エリカ、アテナしかいない。なぜなら護堂と裕理、アテナはどうやら買い物らしい。

（……アテナの表情が何かを企んでいた顔をしていたとは影は知ら

ない。」

「いきなりというか、前々から決めていたんですけど、なかなか言い出せなくて……まあ、日ごろのお礼です。エリカは僕のために散々戦ってくれましたし、アテナもヴォバンとの戦いときは家を守ってくれましたし」

そうなのだ。ヴォバンとの決戦の日、アテナは影の屋敷に特殊な闇の結界を張って、家を守っていた。加えて一郎と静花も屋敷に避難させて匿ってくれたらしい。おそらく自分の関わった人間が傷つくのは嫌だったのだろう。

次の日には護堂から散々お礼を言われていた。エリカはもちろん、自分と何度も死地を共にしてくれたもはや相手とも呼べる存在。感謝してもしきれないが、今はただ個人的に感謝の気持ちを受け取って欲しい。

「そうね……じゃあ『緋狩影を一定時間好きにできる権利（本人の意思は尊重しない）』を所望するわ」

「……………はいつ!？」

『緋狩影を一定時間好きにできる権利（本人の意思は尊重しない）』
？なんだそれは!？

「……ふむ。それは名案だな。妾もそれにするとしよう」

「え……ちょっと……」

結局、当人の意志は完全に無視され、悪ノリをしたルクレチアが追加。何か勝負事でもしたのだろうか？影の施しを受ける順番はいつの間にか決まっていたらしい。

「では、行ってくる。留守は任せた」

「……はいはい。頑張ってくださいね」

「ゆっくりしていいわよー！」

ビーチサッカー大会が参加人数不足のため急遽、ビーチフットサル大会に変更され、それに参加を表明したルクレチアたちを見送る影とエリカ。

優勝賞品の全自動洗濯機につられて参加を表明したらしい。

この護堂、ルクレチア、アテナ、裕理、アンナのチームを見送っているふたりはチームから外れたふたりだ。チーム決めは……なぜか公平だろう。ということじゃんけん。

「（このチーム……勝てるのか……？）」

影はコートに立つ五人の背中を見て少々複雑な表情だった。

正直のところ、運動音痴の裕理にアリアンナ、身体能力は高そうなのに怠惰なルクレチア。この三人は完全に戦力外。

残るは護堂とアテナ。……アテナは神力でも使っているのか、残像すら見える妙に素早い動きでボールを奪って……ゴール。

護堂はひたすら走り、ボールを奪ったらパスを回す作業しか行うことができなかった。

ただ、そんな作業と個人プレーがいつまでも通用するはずもなく、準決勝で敗退。大会をリタイヤした。

「ねえ、影い……」

「ん？……なあっ!？」

真夏の太陽にでもやられたのか。そう思って妙に艶めかしい声で名前を呼ばれた影がエリカの方へ振り向くと

押し倒された。エリカに。

「今はわたしへご奉仕する時間よね？他の女を見るなんて失礼じゃないかしら」

「す、すみません。わかりましたから、あの、さすがにちょっとこの体制はマズイので退いてくれませんか？」

そこまで多くはないが、確かに人はいる。影が横目で見るとこちらを見ている人間はそこそこいた。「熱いねえ」と煽る人間や、異性の連れがいるくせに嫉妬の眼差しで見る人間。中には、パシヤリ。写メールだろう。撮っている人間もいた。

顔と顔の距離約一？。そんな状態でエリカの顔を直視できない影はうつすら頬を紅く染め、きよろきよろと視線を彷徨わせる。

そんな影を見て悪戯心に火がついたのか、エリカは腕の力をゆるめ、押し倒している状態になっている影の身体に倒れ込んだ！

「ひゃあっ!？」

体を刺激されたような女性の声を上げたのはエリカではない。

影だ。

パーカーをはおっているとはいえ、布地は薄い。つまりエリカの肢体の柔らかさがほぼダイレクトに体に伝わる。

エリカからのやり過ぎスキンシップには慣れたつもりでも、男性である以上これに反応しないのは異常だ。

「……ねえ、こんなにいい雰囲気なのにあまり色気のない話は控えたいのだけど……」

「？　どうかしましたか」

急に態度を変えたエリカに影も相応の態度で応じる。

エリカがこんな態度を取るのはやはりカンピオーネ関係の話なのだろう。

「賢人議会があなたのレポートを作成したらしいわ」

賢人議会が？レポートを作成できるほど情報を漏らした覚えはないのだが……？

そんな影の心中を察したのか、エリカが言う。

「そこまで詳しい情報なんて載っていないわ。記載されていたのはあなたの容姿、特徴、推定年齢、そしてロキの権能についてくらい……そういえばロキの権能を『死を唄い導くもの』と名付けたらしいわ」

「『シンキング・デス・サリンガー死を唄い導くもの』……………なんか酷く物騒な名前ですね。まあ、間違ってはいませんが……………好きにはなれませんよ」

「いいじゃない。いかにも恐ろしげな名前で、威圧できるわよ？名前に見合った能力も有しているし」

怪しげに微笑むエリカ。本気で言っているのか、不明だが確かに恐ろしい名前だと思う。ロキの権能としてもふさわしい名前かもしれない。

あれ？だんだん悪くないかも……………そう思い始めた矢先

「おいおい、エリカ嬢。少々サービスされ過ぎじゃないかね？私にはそんなおいしいシチュエーションはなかつたぞ」

不機嫌そうなるルクレチアが腕を組みながらふたりの横で仁王立ちしていた。その背後には疲れた様子の護堂と裕理、アンナ。そしてアテナは見ないようにしているのか、あさっての方向を向いていた。

「別にいいじゃないの。今は私が何しようが問題ないでしょう？それとも私と影が愛し合っているのが悔しかった？嫉妬だなんて、ルクレチアも可愛いところがあるのね」

「いや、別に愛し会った覚えは……………」

「ふむ。わたしはいつも可愛いと自負しているが？……………しかし、確かに嫉妬していたのかもしれないな。では次の機会にはそれ以上のことをしてみよう」

人の話を聞かないふたりに影は、はあ、と息を吐き「自分が休める機会は当分来なそうだ」と、高確率で当たる予測をしていた。

は来ない。

普通の夏なんて神殺しに

一話 始まりは日常（後書き）

今回はルクレチアの出番多めです。リアルが結構多忙だったせいで更新ができませんでした。待っていてくれた人がいたならすいません。

二話 左眼に宿した魔剣と記憶

皆が寝静まったであろう深夜。

潮風が肌をなぞる様にして吹く砂浜で、宿泊していた貸別荘を出た緋狩影はひとり佇んでいた。

少々痛いくらいが心地いい潮風が前髪を乱れさせ、隠された瞳を外部へ晒す。その瞳にはまるで何かの紋章の様な……禍々しい、黒色が浮かび上がり、映すものは皆無。

その黒色は

蠢蠢いていた。

西洋の魔術結社の紋章とも、東洋の陰陽道の紋様とも全く別のただ、禍々しい。そうとしか言い表わすことのできない黒色は這いずり回る蛇のように蠢蠢いていた。

模様がが変形し、顎アギトへ。竜のような荒々しい顎アギトのように変形した黒色はその形を留め、動きを止めた。

「神が………近い」

左眼から血を流し、そこに存在する魔剣ダインスレイヴの疼きを感じ取った影は予感する。仇敵との決戦が迫っていることを

北欧神話に登場する供犠神官ニヨルズの娘フレイヤは、アイズガルズ神世界の王
主神オーデインの愛人だったが、四人の侏儒ドヴェルグ、つまりドワーフのアールヴリッグ、ドヴァリン、ベルリング、グレイルが造った黄金の首飾りを手に入れるために、彼らと一人一晩ずつ、四晩を共にする。

これを聞きつけたオーデインの部下であり義兄弟のロキは、オーデインにその事実を伝える。そしてオーデインはロキに首飾りを手に入れるよう命じる。ロキは夜のうちに八エに姿を変えてフレイヤの館に侵入し、見事首飾りを入手、オーデインへ渡す。翌朝、フレイヤがオージンに首飾りを返すように要求する。その条件としてオーデインはこのような事を申したらしい

「今から申することをお前ができれば首飾りを返してやる。それはそれぞれに20人の王が仕える2人の王が不仲になり、その王たちが闘って、倒れるのと同時にまた起ちあがって戦闘するという呪いと魔力をかけられて戦い、そしてその者にその主人のたいへん大きな好運が付き従って、その王たちの戦いに加わってこの連中を武器で殺すだけの勇気をもつ者が現れるまで続けさせる」

この申し出を承諾したフレイヤは首飾りを受け取り、様々な手段を有して二人の王へジンとホグニに呪いをかけることに成功する。

殺しても殺しても呪いにより、翌朝にはふたりの王の軍団は蘇ラゲナロクってしまう。このようなことは最終戦争まで続いたらしい。

このふたりの王のひとり、ホグニが所有していた剣が魔剣ダイインスレイヴである。

一度鞘から抜き放たれたら人の血を吸い尽くすまで収まらず、かすり傷でも負えばその傷が癒えることはない。そのように伝えられているダイインスレイヴは魔剣の中でも魔剣といえるだろう。

だが、影の左眼に宿した魔剣中の魔剣は元来のモノよりも遙かに禍々しく、強大になっていた。

恐ろしくも美しいと云われていたその剣の刀身はまるで悪魔のような牙の顎と血管のような紅い筋、直視するものを震えさせる邪眼。

剣よりも怪物の方が近いそれはただ、それは恐ろしく、禍々しい。美しさの欠片も存在しない物体と化していた。

おまけに王の神への怨念が宿ったのか、まだ見ぬ神が近いとそれに反応し、左眼に激痛を奔^はらせる。

神殺しにとつては便利かもしれないが、かなり厄介なモノだ。しかし、抜き放たれると厄介どころでは済まされない。

人の王との戦う王の記憶……………何千何万の人間と那由他にもう一
殺戮。

初めて神と会合した数時間後……………

シエノサイド
殺戮。

た瞬間

.....
ジエノサイド
殺戮。

そして彼女の存在(ニセモノ)を危険だと感じ

「

ッ！！」

おびただ
夥しい限りの血に埋め尽くされた記憶。それがフラッシュユバツクする！最悪の気分だ……吐き気までしてくる。

「ガアッ

ハア……ハアッ

ザクツ、砂の地に倒れるようにして影は砂浜に膝をつく。ひどい頭痛と吐き気によって立っていることなどできなかつた。手で押さえられている口から胃液が漏れてくる。

「……そうか、あなたも何かを感じ取ったのか」

影の背後、貸別荘の方向からサク、サクッ、と小気味のいい音を立てて歩いてくるのは少女。夜の闇の中で浮かび上がる銀色の髪を風で揺らしながら、歩み寄ってきた少女は苦しむ影を抱き締めるようにして寄り添う。

「ア……………テ……………ナ……………」

「む、妾ではないかと思ったか？他の者は既に夢の中、妾意外にはあなたしか……………いや、草薙護堂が起きていたか」

口調も雰囲気もいつもと変わらないアテナ。だが、不思議とアテナの小さな腕に抱かれている影の苦しみは退いていた。血の記憶がフラッシュバックすることもない。安らかな……………まさに安息だった。

「気分は良くなったか？ならば……………参ろうぞ」

「……………神のところへ、ですね。わかりました……………」

アテナの意図を一瞬で理解した影はアテナの腕を優しくほどき、眼前に広がる夜の海原を見据える。そして、聖句を紡ぐ。

二話 左眼に宿した魔剣と記憶（後書き）

最後に使った風の権能はヴォバンの従僕に使い、エリカの槍をドリルにしたアレと同じやつです。後々紹介します。

三話 ふたつの目覚め

剣の王

サルバトーレ・ドニとリリアナ

を初めとする面々がヘライオンの石柱と会合した夜。

リリアナは侍女のカレンとナポリ在住の《青銅黒十字》ナポリ支部のリーダー格の魔女で、リリアナの魔女術の師匠でもある。ディアナ・ミリートの家泊まる。それで今日は終了
と
なる予定だったのだが……………。

深夜0時過ぎ。リリアナは夜のナポリを歩いていた。

昼間にも訪れたサンタ・ルチア地区、海沿いの大通り。

夏の欧州、特にこういう大きな都市では決して遅すぎる時間帯ではないため、入通りは結構

多かった。夜はまだこれからという遊び入たちが出歩いているせいだ。

ナポリはあまり治安のよくない街だが、この辺りは比較的安全なエリアである（これが旧市街の方なら、スリ団や強盗たちと遭遇しても文句を言えないところだが）。とはいえ、リリアナには夜遊びの習慣はない。

腕に覚えもあるため身の危険を感じたりはしなかったが、どうも居心地が悪い。

……落ち着かない気分のまま彼女は深夜営業中のカフェパールに入り、サンドイッチで腹ごしらえをし、濃いエスプレッソで眠気を覚まして店を出た。

足早に歩き、道を急ぐ。早く定位置に戻らなくては。

それにしても
。若い女性と時折すれちがう
たび、リリアナは眉をひそめなくなった。

この街の女性たちは、いささか露出度が高くはないだろうか？

キャミソールやタンクトップを着るのはいい。だが、いくら夏とはいえ大胆におへソまで出

したり、ブラジャーのひもを見せたりするのはどうかと思うのだ。

(……しかし、ああいった格好の方が影さまは喜ばれるのであろうか？)

そんなことを思うリリアナの方はといえば、当然おとなしめの格好である。

五分袖のゆったりとしたシルエットの青いブラウスに黒のスキニーパンツ。これはこれで清潔感のある優美なファッションなのだが、どうも気後れを感じてしまう。

(いや、きつとあの方ならありのままの私が好きはず！)

自らの思い人の顔を思い浮かべながら勝手に自己完結して、妄想しながら顔を紅くしたりするリリアナ。そんな道中を終えて、彼女は宵の口から貼りついてる定位置に戻ってきた。

あの太った魔女が店番をしていた古着屋のそばだった。ある不安を感じたため、今夜はここを見張ることに決めたのだ。

（あー。あの方ならたしかに、そういう真似もしちゃいそうですねー）

（そうですねー。やっぱり万一のときに備えた方がよさそうですねー）

リリアナが不安の内容を口にすると、こんな答えが仲間たちから返ってきた。

人間同士の信用は、やはり普段の行いから育まれるもの。その教訓を噛みしめながら、リリアナはビューっと口笛を吹いた。

すぐに物陰から、やせた野良猫のねこがのそのそと歩み出てくる。

食事へ行く前にこの猫をつかまえて、即席の使い魔にする魔術をかけたのだ。白分の代わりに見張りをさせ、異状の有無を報告させるためである。

毛並みの悪い野良猫の頭に手のひらを乗せ、留守の間の情報を得る。

「……ここまで予想通りだと、本当に頭が痛くなってくるな」

悪い予想が現実になったと知り、リリアナは古着屋に向かった。

店のドアは古い木製ののだが、ノブの鍵が器用にこじ開けられている。彼に『解錠』の魔術が使えるはずはないから、手先の技でどうにかしたのだろう。

「あの方は何で、こんな怪しい特技を身につけておられるんだ！」

腹立ちまぎれに怒鳴りながら、ドアを開け放つ。
店内では見覚えのある太ったおばさんが気を失い、倒れていた。
急いで地下へと向かう。軽快に走ることに数分。地下遺跡の深奥、へ
ライオンの石柱の前で機嫌良さそうにしている彼の姿をついに見つ
けた。

「ん？ クラニチャ ルか？ どうして君がここに！？」

ばれていないとでも思ったのか、妙な驚き様を見せる青年。

もちろんのこと

剣の王こと魔王サルバ

トーレ・ドニである。

サンタ・ルチア港の埠頭。

多くの船が並び、ナポリ湾を見渡すことのできるその港に一迅の風が吹き抜ける。

先ほどまではほぼ無風といっても過言でない埠頭に一瞬で台風のような風が吹き荒れ、やがてその風は渦を巻き、竜巻を形成する。人がいたならすぐさま逃げ出してしまうであろうその竜巻はその勢いで船を揺らし、周囲の物質を吹き飛ばしていた。やがて風が

止む。

「　　　　　つと、海に転移しなくてよか

った……平気ですか、アテナ？」

「問題ない。それにしても、あなたは便利な権能を得たものだな」

いやいや、実は結構使い勝手悪いんですよー？

軽い調子で受け答えをするのは、闇に映える銀色に近い白髪の男。その左眼は伸びた前髪によって隠されて見えない。その男、名を緋狩影という。

魔王カンピオーネに対し、数々の記録をしているグリニツジ賢人議会でさえそのほとんどを掴めていない。何番目に魔王になったかすら本人にしかわからない、だが真に神々を殺し、その力を篡奪した。真正正銘の

神殺し

カシオペア
魔王である。

「ふふふ、強大な気配を感じるぞ……！中々面白いことになりそう
だ」

白の神殺しとなりで感情を高ぶらせているのは銀色の髪の少女。
出会ってしまったら振り向かざるを得ないであろう美しさと可憐さ
を兼ね備えたその少女はとなりの男、緋狩影という存在と対極の位
置にあたる存在
つまりは”神”である。

真名はアテナ。ゼウスの娘、戦いの女神、永遠の処女神

など数多くの異名を持つ女神であり、現在は影と行動を
共にしている。変わり者……いや、変わった神様というべきだろう
か。

「しかし……気配はするものの、形として現れてくれなければ解ら
ないのですが
！！」

直後、港を見渡していた影は強大な強大な生命力を感じ取る。
地と水と風と火の精気が集合し、結合していく。その生命の誕生と
もいえるような膨大な力の奔流はひとつの巨大な姿を形作った。

大蛇。

神話には怪物として多くの大蛇が登場しているため、由縁は深い。しかし、それはあくまで基本であって真の姿ではない。

大蛇の背に翼が生まれる。それは蝙蝠のそれに似たまがまがしくも巨大なもの。

胴には四肢が生まれ、その姿を蜥蜴トカゲと近くする。

頭部は爬虫類の中ではワニに最も近い。大きく裂けた口に剣のごとく鋭い牙が列をなす。その姿、威容、巨大さ。全てを兼ね備えた頂点に君臨する存在

竜の誕生だ。

今や海辺の都の上空では、巨大な竜が翼をはためかせ悠々と旋回している。まるで何かを確かめるように、大きく大きく翼を広げ。その様を影とアテナがじっくりと、倒すべき敵を見定めるように見つめている、と影が右横の大理石の地に何か降り立つような音を感じた。不意に首を右横に向けると、

「
も、もうお終いかと思った……って、
影さま!？」

……どんな出会い方だ。つくづく有り得ない……
影は心の中でため息をついた。そんな視線の先には白銀の髪で長い髪を後ろで一つに縛った少女。偶然か必然か、全く予期せぬ再開を『剣の妖精』、リリアナ・クラニチャルと『白の魔王』緋狩影は全くもって芳かんばしくない状況で果たした。

三話 ふたつの目覚め（後書き）

テストやら他の更新やらでだいぶ更新が滞ってしまった作者にございます……

需要があるかどうか知りませんが、なるべく更新を滞らせないよう
に努力していきたいと思います。

感想、評価、ご意見などお待ちしてます。

四話 妻なんです！

サンタ・ルチア地区。聖ルチアという意味を持つ名を冠した街の波打つ海辺には三つの影^{かけ}。

三人とも闇夜に映える銀色の髪をしているが、その中の二人は女性であり、髪を後ろで束ねた少女とネコの耳のようなものがついた藍色の帽子をかぶった少女。

最後の一人は少年。年齢^{よわい}十八なのだがその年齢にしては若干背が低く、左眼を少々伸びた前髪で意図的に隠している。

「……………あの、……………」

後ろ髪を結んだ少女、リリアナ・クラニチャ　ルがばつの悪そうな表情で口を開いた。

リリアナは崩壊した地下の聖域から『飛翔』の魔術で飛び、偶然、一見兄妹のように見えなくもない二人組、緋狩影とアテナの前へと来たのである。

元々の許婚という関係であり、現在進行形で恋の対称である影がいるところへ飛んだのをリリアナは偶然を神の定めた運命のようだと、感じ心の中で歓喜した。のだが…………、

（影さまっ！　その隣の女は誰なのですか！？）

「あの、……すみません、影さま。あの竜は……」

「

「うん。たぶん僕があのかの柱、ヘライオンを真つ二つにしたから生まれたんだろうね」。いやー、ビックリだね、影」

影へのリリアナの言動を遮り、のんきな声が続いた。

何故、こうも貴様は厄介事を起こすのが大好きなんだ……

影は重く、鉛でも押し出すかのようなため息を吐いた。こんな状況で平然としていられ、尚且つこの状況を愉しめる男。そんな人間は自らと同じ魔王^{カンレオーネ}だけ。そしてひどく影の気に障る行動ばかりする人間、もちろんそれは『剣の王』を冠する者。

「またアンタか……ハア、もう少し他人に迷惑をかけない行動というものをとれないのか？」

サルバトーレ・ドニ

普段の敬語さえ忘れて、影はのんきに歩いてくる男、サルバトーレ・ドニを睨みつけた。

自らも大概だと自覚はあるが、この男は別格だ。本物のうつけ者と違ってまったく差し支えない。

魔王^{カンレオーネ}のあるべき姿と言ってしまうえばお終いなのだが、まさしくこの男は戦闘狂。強者との戦いを望み、求め、それに勝利することを最高の^{エンジョイ}快楽としている。

そんな男が目の前の”神”を見て、何も行動を起こさないことなど

無かった。

ダッ！ 一瞬の疾風がリリアナの横を駆け抜け、考え込むように竜を見るアテナの元へと向かった。それは情人が認識できるものではなく、音速を超えたかもしれない。が、それは一筋の光によって遮られる。百八十はあろう諸刃の野太刀の輝きである。

「彼女に手を出すなら容赦はしません。肩書が何であれ、その頸を切り裂きます」

「へえ……『剣の王』である僕が認識できないほどの速さで正確に首を狙ったのか……感で止まっていなかったら本当に死んでいたよ」

サルバトーレの首には野太刀の刃が後一センチにも満たないところで静止していた。影が『死を唄い導くもの』と賢人議会に名付けられたロキの権能により文字通り、それは”創り出された”野太刀を使って、アテナの元へと向かったサルバトーレを遮ったのだ。

元々神殺しである魔王カンレオーネと神は合間見れぬ存在同士。神であるアテナに神殺しであるサルバトーレが向かっていけない筈がない。いや、サルバトーレでなくとも向かっていけない筈がないだろう。緋狩影という存在自体が異端中の異端なのだ。

しばらくの睨み合いが続く。『剣の王』は一步も動かず、『無の王』も獲物を一ミリたりとも動かすことはない。そんな硬直した状態が続くと、影の背後でアテナがあきれたようなため息を吐いた。

「……ハア、影よ。妾を気遣ってくれるのは誠にうれしいが

状況を見る」

……へ？ 硬直していた影が海の上で下界を見下ろすようにしている
龍の方向を向くと、龍はいきなりというか……咆哮していた。

グアアアアアアアアアツッ！怒り猛り狂ったような龍のすさま
じい咆哮は轟音となり、海辺だけでなく深夜のナポリを激しく震撼
させた。

「まずいつ……！」

何かを感じ取ったりリアナが叫んだ。直後、海に異変が生じた。ざ
ざざざざ、と段々近づいてくるようなそれは 波だ。

サーファーが喜んで突っ込んでいきそうな高波だった。

埠頭に打ちつけられる波は音を高くし、リズムを上げている。

今まで静かな夜に心地のいいさざ波だったものがもやは荒波となっ
て押し寄せてきている。

「え、ちよっ！ まさかとは思いますが、こちらさんを沈めようと
しているのでしょうか……？」

「どう考えてもそうだろうな。……しかし、ふむ。その巫女と妾
に敵意は無いようだ。 案ずるな影は妾が守る」

「何を勝手に話を進めているのですか！　そもそもあなたは誰なのですか！？　影さまと何やら親しげにして……影さまは私わたくしがお守りいたしますのでご安心ください！」

「む。たかが巫女程度が生意気な……。そもそもあなたこそ何者なのだ？　先ほどから影さま影さまと、まるで妻ではないかっ！」

「……妻。ええ、妻です。そう妻なんです！　生まれた時からわたしは影さまの妻なんですっ！」

「生意気な小娘が……！　影の妻は妾なのだ。貴様にもあの女にもやらん！」

不毛な言い争いを続けるリリアナとアテナを見て、影は何度か仲裁に入るうかとしたが、火に油を注ぐだけだ。余計に厄介になる。と考えて辞めた。

それよりもどうしたものか……もう眼前に迫っている雪崩ビッグウェーブのような大津波を。

「ふん、しょうがない。影ができなそうだから僕がこんな波くらいつて、しまった！　さっき地下で落っこしたんだ！　ちょ、ちよっと待った！　こんなので……！」

いろいろと突っ込みどころ満載だが、がくりとうなだれるサルバト

「レをさておき、影は必死に大津波から逃れる手段を模索していた。ここから転移する唯一の手段はもう既に使用してしまったため不可能だ。こんなところで死神を召喚しても意味はないし、大量の武器もまったくもってその役割を果たさない。だったら……、

「……………結局、流れに身を任せることになるんですね

……………ハア、」

未だに言い争いをしている二人と押し寄せてくる波に呆れながらため息を吐いた影は逃れられるはずもなく、瞳を閉じたまま荒波に呑み込まれていった。

四話 妻なんです！（後書き）

嗚呼、一か月。構想は練られても文章にすることはやはり難しいですね。

感想、評価、ご意見などお待ちしております。

四話 誰にも渡したくないから

(嗚呼、夜の黒い空なんて見上げてても全く面白くないのに……………)

波に押し流され、空を見上げる形で海面にぶかぶかと浮かぶ影はこんな状況にも関わらずなかなか能天気な事を思いながら、さてこれからどうしたものかと考えた。

……特に触れはしなかったがアテナは何故か腕にくっついて一緒に浮いてるし、サルバトーレは……ま、生きていればいいか。これぐらいで死んだらあの男ではない。

上空には大空を制するようなその翼を大きく広げて、その威厳を見せつけるかのように飛翔する巨大な神話獣である竜がいる。

「で、いつまでくっ付いているんですか？ 貴女は僕のペットか何かですか？」

「別によいだろう。あの巫女は竜に助けられたようだから妾は影に助けられるのだ」

いや、正直言つて意味不明なんですけど……………。

影はそう言いたいところだったが、この神様が聞く耳を持つはずがない。早々に諦めるとアテナの言葉から得たりリアナは無事ということを確認し、安堵した。

竜の動向を見守っていると、どんどん海岸へと近づいていく。親切

にも彼女を陸まで送り届けようとしているのだ。一番近場で最も目立つのは通商『卵城』と呼ばれる石造りの城塞。正式名称はデローヴォ城というのだが、とある伝承からその名前が呼ばれている。さて、無事にリリアナは卵城の上へと降り立った。その事は影にとつて大変嬉しいことであつたが、その顔は一切の喜びが無い。むしろ逆だ。怨敵を見つけたような睨みつける瞳が確かにそれを物語っている。

「アテナ、僕たちが感じた気配はあの竜ではなく……、」

「ああ、そうだ。まさしく”まつろわぬ神”だ!!」

歓喜するようなアテナの叫びと同時に稲妻が走った。

天空から招来した雷いかづちではない。ナポリの東方に存在する火山、ヴェスヴィオ火山からそれは迸っていた。

自然界では有り得ない現象。人為的なものでもない。神が為せる所業だ。

轟音を響かせ、天翔けた稲妻はやがてその形を顕す。……人の形だ。

山吹色の輝く巻き毛に、秀麗でありながらも欠片も弱さを見せない美貌を持つ長身の男。

古代ヨーロッパ人の服装のような白い衣とマントは伊達や酔狂ではないだろう。

アア、待ち侘びたぞ。その血を、肉を……!

影は左眼の痛みとともに響く悪意の声を理性で黙らせると、リリ

アナに近づく『まつろわぬ神』の方向へと視線を向けた。

それはやはり神としての威圧を依然と放ち、甲斐甲斐しく頭を垂れるリリアナを満足げに見下ろしていた。

に入らない。

気

太陽のごとく輝くその神が影には気に入らなかった。何故、彼女は貴様に跪いている？ 会合して一時間も経たない貴様が神という肩書だけで彼女を自らの所有物のような目で視るな！

それは本人も気づかなかった。緋狩影という人間は人に悪意というモノを抱いたのは”父親”だけであり、普段の生活でどれほどのことをされても笑って見逃せる。そんな極力嫌悪感というモノを抱かない人間だ。

だが、この神はどうしても許せない。未だ刃も交えていないというのに影は自分自身でも何故、こんなにも気分が悪いのだろう。と自問してみても答えは返ってこない。内側には悪意の痛みと声が響くだけである。緋狩影は”嫉妬”という感情を全く知らなかったのである。

「影、今のあなたはとても良き表情をしている。甘さを捨て、向かう敵を全て薙ぎ倒す『王』に相応しき表情だと思う。しかし……」

アテナは一旦言葉を切った。自らを敗北させるも、最後まで『貴女のため』という感情を捨てなかった緋狩影がここまで恐ろしい表情をできるのか？

影は判明しているだけでも三柱の神を殺している実力者だ。言うまでもない影の象徴である北欧の悪神、ロキの権能は一番初めに篡奪したものであり、最高神に戦争を挑んだ。キリストでいえばサタンのような存在を生身の人間の状態で殺したというのだから元々の実力も相当だ。ただ、影自身がそれを隠していただけでアテナの感じ

ている威圧感が本来のモノなのかもしれない。
が、やはりアテナは神であり、敵であった自らにも優しく、他人を
慈しんだ『王』が好きだった。だから一言、それだけでいい。伝え
よう。

「
」ソレ”は影には『似合わない』と思うぞ

笑顔を言いきったアテナの表情はまさしく女神に相応しい、綺麗な
がらも可愛いものだった。
影は一瞬、きよとんとアテナを見つめると、自らの頭を一度叩いて
微笑んだ。

「……アハハ、そうですね。『似合わない』ですね。……全く、僕
らしくない」

そうだ笑ってればいいんだ。怒った顔なんて似合わないことなんて
とっくの前に自覚していたのに。
だけど、やはり気に入らない。自らを好いてくれる乙女を自分のモ
ノのように扱うのは。
だからもう一度振り向かせよう。あの容姿端麗な神のものではなく、
この『神殺し』に。
ずっと行方を晦ましてすまないとは思ってる。だが、想いは増えて
もやはり君への想いは変わることにはなかった。少々クサイ台詞セリフにな
るけど。

君は綺麗だ。自分では足りないかもしれないけど、誰にも渡したくはないから。

影はいつの間にか竜と戦闘している神を見据える。聞き間違いでなければ神は自らを『ペルセウス』と名乗っていた。それは軍神であり、英雄である。だが、関係無い。主神だろうが軍神だろうが、英雄だろうが『まつろわぬ神』となって神殺しの前に悠々と現れたことを後悔させるまで。

「我が従えし王は西方を担いし者なりて、母なる生の奔流と無垢を流し清める海原の支配者。召喚に応じ、狩人の御膳にて警笛を吹き鳴らせ

！」

詠唱が終わる。

直後、影を中心に取り囲むように海

面に巨大な渦潮が発生した。

その渦潮は周囲を飲み込むかのように規模を拡大させ、やがて竜をも呑み込めそうな大きさになるまで広がり続ける。

それはいと容易く大型の船でさえ、沈めてしまっだろう。そしてそれは全てを食い尽す大口を開けた怪物の様であった。

「
ほっ……」

竜の頸部を断つた半神の英雄ペルセウスは眼下に広がる光景に感嘆をもらした。

強大な気配は女神かと思えば、あの少年だったかと。

四話 誰にも渡したくないから（後書き）

嫉妬です。ええ、嫉妬です。物凄く嫉妬です。

あまり表には出しませんが影はリアナ大好きですので……ああ、
こういう文は書いていて少々恥ずかしくなってきました。

感想、評価、ご意見などお待ちしています。

五話 初めての告白

暗雲立ち込めるナポリの上空でふたつの閃光が交差する。

金の閃光、ギリシヤの半神の英雄ペルセウスは豪刀を振るい対する存在を断ち切ろうと渾身の一撃を放つ。

対する銀の閃光、白銀の王緋狩影はその手に持つ180cmはあるう野太刀による横薙ぎの斬撃が豪刀の刃を逸らし、英雄の頸へと刃を走らせた。

「……………ほう、……………」

迫りくる白刃をかわし、ペルセウスは感嘆の声を吐いた。

撃ち合って間もないというのにペルセウスは対する王

緋狩影の技量を完全に把握していた。

元々背があまり高くない影にとって、野太刀というのは恐ろしく扱
いの難しい武器である。

野太刀の重さは普通の刀と比べると格段に重い。刀身の長さが比べ
物にならないからである。しかもその長さゆえに持ち手は腕力が無
いと直ぐに腕の筋肉を痛め、状態を不安定にしてしまう。たとえ豪
傑といえどもそう易々と震える得物ではないのだ。

それを空中とはいえ軽々と振るい、なお隙を見せない影はペルセウ
スにとって称賛に値する戦士だった。

「ア、……フ……」

短い呼吸音とともに影の手に握られし、得物が一閃。ペルセウスを斜めに一直線に切りつけた。

一見、単調に見える攻撃だが本質は全く違う。

剣を盾にしたペルセウスに襲った衝撃は一度ではない。計六回、平にした剣で斬撃を防御したペルセウスに襲いかかった衝撃の回数である。

もちろんのこと、半神の英雄は一瞬顔をゆがめると、一撃、二撃を剣の盾で受け止め、残る四撃は高速で、しかも力を込め振るった剣撃の一振りによってその四回攻撃を弾き飛ばした。

そして、ふたりは一度距離をとり、影はデローヴォ城に立つリリアナの眼前にまで降り立ち、守護するように降り立つとほぼ同時に空を飛ぶペルセウスへと刃を突き付けた。

直後、閃光が天より降り注ぐ。暗雲を引き裂いて視界を覆い尽くす閃光。影が開けた視界で見たもの、それはまさに”神獣”だった。

「さすがの私も空を駆ける術は身体からだに有しているわけではないのでね。文句の一つでもあるかな？ 神殺しよ」

「別にどうでもいいですよ。相手が空を飛べようが飛べまいが、そんなことは今関係ありません。」

ただ、倒すのみです」

抑えて叫ぶ影にリリアナは心配して近づこうとするが、突き出された左腕によって制される。

（私は……無力な、存在だな……）

愛する存在が目の前で苦しみつつも自らのために戦っている。それを止めたいと思いつつもリリアナは止められずにいる自分を嫌悪した。このまま影を止めてしまえばこれまで戦ってきた全てを彼女が否定してしまうような、そんな気がしたからである。

次々と暗雲の立ち込める空に具現化されていく剣や槍、斧や短剣などの武器の軍隊。それは姿を現すと同時にペルセウスとペガサスへと降り注ぐ。

武器の軍を指揮する影に近づこうにも鉄と木で出来た軍隊がそれを完全に阻害する。

「チイツ！ まるで止まぬ雷ではないか

！」

ペルセウスは初めて舌打ちをした。

剣雨によって翼の巨大なペガサスはまともに飛行することはできず、自ら本体に振る武器は打ち落としてもキリがない。狙うべく王は武器の雨で形成された壁によって姿を垣間見ることできず、叫びのみがその耳を貫いている。

ペガサスの翼をはためかせ、死の雨の降る地から離れようにも雨的確にペルセウスを狙って降り注ぐ。武器の一振りにかすりでもしたら傷を癒すのに長い時間を費やすだろうと知っているからだ。な

ぜなら武器の一つ一つから発される魔力、それは武器の全てが神話上の神具を劣化させているものであることを証明していた。

ペルセウスが死の雨に苦戦している時、アテナはリリアナのすぐそばまでやってきていた。リリアナも気配に気づき、アテナの方向へと振り返る。

「あなたは……」神”だったのですね……？」

「ふん。今頃気づいたか。まあ、いた仕方ないかもしれないが、それよりもだ」

アテナはリリアナを見上げる形で睨みつけた。

見た目は少女ながらもその魔力、感じる威圧は強大。一介の魔術師であるリリアナが到底太刀打ちできるはずもない。見た目にそぐわぬ威圧を感じ、リリアナは背筋を振るわせた。この女神に睨まれただけでそのまま永遠の眠りになってしまう。

そんな気さえしていた。ヴォバン侯爵の『バロールの魔眼』を恐ろしいと思うが、この女神はそれを越していた。何もかも枯れていくような冷たい輝きを放つ瞳だった。

「何故だ。何故影を止めない？ あのままでは影は脳を破裂させ、運が悪ければ……死ぬぞ？」

アテナの怒りが混じった言葉に、リリアナはアテナから目を逸らし影の方向を見た。

足元にはまだ少しだが、赤い血の溜まりができ、現在進行で瞳から耳から歯を食いしばる様子の見て取れる口から、紅い鮮血がそれぞれ地へと向かって一筋流れていた。

リリアナは思わず絶叫すると一歩手前だった。自らが目を離れた隙にここまでひどくなっているとは予想できなかったのである。

降り注ぐ武器の軍を無限に指揮することはできない。音楽の指揮者もその手を振るうことに限界と終わりがあるように永遠の指揮を続けることなど不可能なのだ。

「
ツァー!? あと、少し……、あと少し耐える……!」

影が吐血する。そして自己暗示のように耐える、耐えろと繰り返す。眩く。

どうしてだ。どうしてあなたの苦しむ姿を見てばかりなのか……

リリアナは涙を流した。リリアナはカンピオーネではない。ましてや影の権能を有しているわけでもない。同じ痛みを、苦しみを共有することなど不可能なのだ。

愛する人間の苦しみは伝わってこない。想いだけになにもできない自分が情けなくて、苦しみをわかつていけない自分が壊したいほど嫌でそんな自分だけど胸が苦しくて涙が止まらない。

リリアナは一歩踏み出そうとするが、やはり止まってしまふ。ほとんど降りてしまっているが、影の左腕はリリアナの身体を押し留めるかのように突き出されていた。

この大馬鹿ふたりが……。アテナは心の中でため息を吐いた。結局、想いが通じているのに男は本当に愛する存在を自らに振り向かせるため苦しみ、女は苦しむ男の姿を見たくない想いが強いものにも関わらず男の覚悟を無駄にしてしまうのではないかと、無駄な心配で一步踏み出せずにいる。

滑稽だ。ああ、喜劇にもならないほど滑稽だ。だが、それが故に悲劇へと変えてしまうことは惜しい。

影、この借りは直ぐに返してもらおうぞ。

アテナは大きく息を吸い込んだ。なれない事だが、仕方ない。未来の夫たる存在の大切な存在ならそれなりの敬意を表して妾が後押ししてやる。感謝するがいい。

「この大馬鹿者がっ！ さっさと影を連れてどこかへと行ってしまえ！ ここは妾がなんとかするゆえ、絶対に影を死なすなよ！ もしも死なせたらあなたを石に変えてやるっ！」

アテナの叱咤。それは目を伏せて泣いていたリリアナの顔を上げさせた。

リリアナは一目アテナを見ると、行って来いとでも言うのか、うなづくアテナがいた。リリアナは心で一礼すると、叫びを上げる影へと一直線に走りだす。

左腕は未だにリリアナを阻んでいたが、それはもうリリアナの視界には存在していなかった。

影のすぐ横へと位置すると、影がリリアナを見た。前髪で隠れている瞳からも血涙が流れ、綺麗な銀色の髪は若干赤黒く染まっていた。それを痛ましく思ったが、リリアナは直ぐに影の手をきつく握りしめた。その後、影へとしっかり寄り添い、瞳を閉じた。血の匂いと

それに濡れる感触が頬に感じるが、それさえとても愛おしい。

「影さま、あなたを愛しているが故に愚かな行動を取るわたしをどうか恨んでください。わたしにはこんなことしかできないのです。」

アルテミスの翼よ、夜を渡り、天の道を往く飛翔の特権を我に授け給え！」

呪文が終わる。影がリリアナが何をしたのか気付くのは空高く上昇している時だった。

飛翔の呪文。リリアナが得意とする魔術である。眼下に広がるナポリとどんどん小さくなるアテナとペルセウスを見ると影は若干のかすれ声でリリアナに語りかけた。

「あのさ……キミはこんな情けない男だけど、これからも好きでいてくれるかな……？」

返答は先ほどまでとは違う、笑顔での、涙を流している表情での頷きだった。

「……ありがとう。……ごめん。心配掛け過ぎで、本当に。恥ずかしいけど、ここで言わないといけない気がするから……ね。僕も

好きだよ。これからもずっと。単純でい

めん……」

それは約八年。行く時を経てやっと伝えられた緋狩影の告白であった。

五話 初めての告白（後書き）

今回はリリアナが主役です。影くん最後以外マジ空気……

感想、評価、ご意見などお待ちしています。

六話 誓いと懇願

デローヴォ城から影とリリアナはナポリの地上へと降り立った。

欧州は歴史的建造物を残すために高層ビルなどが比較的少ない。だが、大都市であるナポリは例外であり、遅い時間にもかかわらず街にはにぎわい、食堂からバー、雑貨店などの灯が消えることは無い。行きかう人々もかなり多く、安全なこの地域では若い男女の二人組がとりわけ目立つ。その中でも全身を血で汚した少年とその血で自らも濡れた少女はかなり目立った。

だが、そんなことを気にしている余裕は影に無かった。全身から出血しているのは解っているし、手足の感覚もあまりはつきりとしていないものではない。

……何故ロキの権能で創造を繰り返すところまでなるのか？

所有者である影でさえもそんなことは未だに解らない。篡奪した権能が身体にここまでの負担をかけること自体おかしいのだ。まだ何か知らない事でもあるのか……？

直後、影の身体がぐらりと揺らいだ。ぴったりと傍に寄り添うリリアナによって上体を支えられ、なんとか倒れずには済んだが、息遣いは荒い。

「影さま、しっかりしてくださいっ！！ あと少しで……カレン、ここだっ！」

「リリアナ様、ここにおいででしたか……って、その方はっ！？」

リリアナの叫びによって、様々な男女の入り乱れる人ごみの中から小柄の少女が駆け寄って呼応した。あまり歳のいかない半袖メイド服の少女はリリアナの支える血塗れの影を見て、絶句した。

「今は何も聞くなっ！ とにかくこの御方を早く！」

リリアナが若干のヒステリック気味に叫ぶ。

もちろんのこと影のことなど知らない少女は何が何だか不明で頭がおかしくなりそうだったが、リリアナが必死な表情で支える血まみれの男を救おうとしていることはいくらなんでも解った。

「わかりました。今は何も聞きません。では、近くの青銅黒十字支部へと向かいましょう」

「ああ、よろしく頼む……っ！」

意識がはつきりしない影はおぼろげな中でリリアナとカレンと呼ばれた少女の会話を聞き取った。

……ああ、どうやらそろそろ限界らしい。血が足りてないのか、思考することができない。わずかに開いた瞳は閉じられ、脳も一時的にその機能を停止させるその前に誰かが掌をきつく包み込む感触を影は感じた。

青銅黒十字支部。

いかにも欧州風な館であるその宿泊部屋で頭や腕に包帯を巻かれた緋狩影は寝かされていた。

元より白い肌のため、顔色が変わっているとはあまり分からないが、目を閉じて眠るその表情はあまり気持ちのいい表情ではなかった。

死に際に瀕した病人だったらこのような顔をするのだろうか……と、リリアナは両手で影の右掌を握りしめて悲観した。

青銅黒十字の支部に運ばれたのはいいものの、まともな治療をすることなどできなかつた。

カレンが初めに治癒の魔術を影の身体にかけるが、それは影の肉体から拒絶されるように弾かれ、効果を発揮するどころか魔術をかけることすら不可能だった。

リリアナはその光景を見て、はつとした。失念していたのだ。彼、カンピオーネ緋狩影という少年は自分たちとは全く異なった存在、神殺しだということを。

啞然として、もう一度治療をかけようとするカレンをリリアナは制止した。コレ異常やっても無駄だと、彼の身体を癒すことなど絶対に不可能なのだ。

「……カレン、包帯と消毒液をある限り持つてきてくれ」

え？ きよとんとするカレンにリリアナは力なく言い放った。それしか手がない。魔術などを一切受け付けない鋼の身体には人為的な治療しか方法がない。

早く、とまたも力なく催促するリリアナ。カレンはこんな彼女など見たことがない。普段は堂々としていて、生真面目。覇気が有った筈のリリアナには今それが存在していなかった。

なるほど、その方が”王子さま”でしたか……
理解したカレンはリリアナの後ろ姿に一礼すると、ドアを開けて道具を取りに行くべくして部屋の外へと姿を消した。

「……………くっ、…！」

ガンツ！ 石を強く叩くような音が室内に響き、ランプや鏡などの小物を若干揺らした。

部屋の壁は大理石できていて。その壁にリリアナの拳が突き刺さって、あまり堅くは無い鉱物へとヒビを入れていた。リリアナが壁を力一杯に殴りつけたのである。

「どっしてこうも毎回……こうなってしまうんだ……っ」

八年前は自らの姿を投影させた存在を殺害してしまったためにかつての”緋狩影”は行方を晦まし、出会えたその時には敵となって立ちただかり、そして今回は自らのために重傷を負った。

よくよく考えてみれば緋狩影が精神的にも肉体的にも傷つくのは全て自分の存在が有るせいではないか。私が彼を好きになってしまったから、彼と約束された関係になってしまったから、私を殺してしまつた罪悪感で未だに身を犠牲にしてまで守ろうとするのだらう……

違いますって、好きだからだよ。

突然、声が聞こえた気がした。それも影の声だ。

リリアナは影が起き上つたのかと思い、眼下を見る。だが、生憎とその瞳は閉じられたままで口元も動いた様子は無い。幻聴か……？ ああ、きつと幻聴なのだらう。彼は起きていないし、テレパシーを使える超能力者ではない。

リリアナは自らの精神状態のせいで引き起こされた幻聴だと確信する。妄想によって影が自らを好きだということが具現化されてしまつたのだらう。直後。

だから、妄想でも無くて僕はあなたの事が好きだつて……もう今日だけで二回も言ったのにしかもついきさつき。あんまり何回も言わせないでくれませんかねえ……恥ずかしいのですか……

「……………え？」

「またも聞こえる声。やはり影は口を開いてなどいない。だが、今度の声はリリアナにとって妙なくらいにはつきりと聞き取ることができた。まるで本人が耳の傍で囁くような……そのような感じと似ている。」

呆れてその後、恥じらう。尊大ではないが控えめではない。リリアナの中で現在の影はそのような感じで、あまりこんな印象は無かったが、優しい。

優しい、とリリアナは感じた。八年前に過ごした時と限りなく似ている。あまり活発ではなかったが故に細かい気遣いを絶やさず、笑顔だった。

「そう、ですね……………」

瞳を閉じるとリリアナは目元をぬぐった。袖に小さなシミが残る。涙が溜まっていたことの証だ。

いつまでも悲劇のヒロインを気取っているのだ私は……阿呆か。大体、影さまの言葉を忘れるとは何事だ。我ながら最悪の女だ。

心で自嘲するとリリアナは影の顔を覗き込む。軽い安定したリズムを寝息が耳に聞こえた。錯覚かもしれないが、その表情はどこか安らかで微笑んでいるようにも見える。リリアナは影の手を再度とると、額へと当て両手で祈るような体制で地へと膝をついた。

「影さま、自意識過剰かもしれませんがあなたのせいですよ？ わたしはあなたのことが好きです。あなたもおそらくは同じ気持ちだ

と思っています。……たとえわたしだけに向けられたものでなくても、構いません」

脳裏に金髪の少女と自らと同じ銀色の髪を持った少女の姿をした神の姿がよぎる。リアナは一瞬だけそのふたりに対し微笑んだ。妬みではない対等の相手として、同じ想い人を持つ相手として。

「……ただ、わたしは守られるだけの弱い女になんてたどえこの身が朽ちようともなりたくはありません。あなたを守ることができない強き女になることを約束させてください。だから

「
ぎゅ、と握った掌をさらに強くしていく。目の前の王に誓う約束はさらに強い。

「あなた様の隣に居る権利をわたしにください

「
誓いと懇願が終わる。握っていた右手を優しくベッドに戻すとリアナは影の口元へと顔を寄せる。
そして一瞬のためらいの後、影の唇に自らの唇を落とした。

六話 誓いと懇願（後書き）

うっわ恥ずかしい。うん……背中がムズ痒くなってくるような感じ
です。

そろそろ護堂とエリカを登場させたいと思っています。

ふう、いつの間にか十二時を過ぎていました……深夜の更新です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6227r/>

Wei? und schw?rzt

2011年12月9日00時48分発行